青森県埋蔵文化財調査報告書　第237集

隈無(1)遺跡・隈無(2)遺跡
隈無(6)遺跡

―国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告―

1998年3月

青森県教育委員会

序

津軽平野に位置する五所川原市には、観音林遺跡や前田野目の須恵器窯跡をはじめ数多くの埋蔵文化財が包蔵されております。青森県教育委員会では、国道101号浪岡五所川原道路（津軽自動車道）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を平成７年度から実施しております。

この度、平成８年度に発掘調査した五所川原市隈無（１）・隈無（２）・隈無（６）遺跡の報告書がまとまり、これを刊行することになりました。

調査の結果によると、縄文時代から近世までの各時代の遺構の検出や遺物の出土をみるなど、長い時代にわたって人々が生活した遺跡であることが判明いたしました。

この調査成果が広く文化財の保護と研究に活用され、また地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後に、平素より埋蔵文化財の保護に対してご理解を賜っている建設省青森工事事務所並びに五所川原市教育委員会と、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力を賜った関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

青森県教育委員会
教育長　**松　森　永　祐**

例　　言

1　本報告書は、青森県教育委員会が平成7・8年度に実施した国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う隈無（1）・（2）・（6）遺跡の発掘調査報告書である。

2　これらの遺跡は、平成4年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に、それぞれ遺跡番号05073・05074・05078として登録されている。

3　本報告書は、青森県教育委員会が編集作成した。執筆者名は、依頼原稿については文頭に記し、その他は文末に付した。

4　石器の石質鑑定は、青森県立板柳高等学校教諭　山口義伸氏に依頼した。

5　本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を複写して使用した。

6　挿図及び遺物写真の縮尺は、各図・写真ごとにスケール等を付した。

7　堆積土層等の色調観察には、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄　1993）を用いた。

8　挿図に付した北の方位は、すべて座標北である。

9　挿図で使用したスクリーントーン等については、原則としてそれぞれ挿図中に示している。

10　縄文時代の土器、石器については、次のように分類して記載した。

［土器］

Ⅰ群（早期）	1類	貝殻文系の土器
	2類	早稲田５類土器
Ⅱ群（前期）	1類	円筒下層ａ・ｂ式
	2類	円筒下層ｃ・ｄ式
Ⅲ群（中期）	1類	円筒上層ａ～ｃ式
	2類	円筒上層ｄ・ｅ式
	3類	後半の大木系土器
Ⅳ群（後期）	1類	初頭の土器
	2類	十腰内Ⅰ式
	3類	十腰内Ⅲ式以降
Ⅴ群（晩期）	1類	大洞Ｂ・BC式
	2類	大洞C1・C2 式
	3類	大洞Ａ・Ａ´式

［石器］

Ⅰ群（磨製石器）	1類	磨製石斧
Ⅱ群（剥片石器）	1類	石鏃
	2類	石錐
	3類	石匙
	4類	石篦
	5類	非定形的な石器
	6類	Ｒ・Ｕフレイクの類
Ⅲ群（礫石器）	1類	半円状扁平打製石器の類
	2類	石冠の類
	3類	すり石・敲石・凹石の類
	4類	石皿・台石の類

11　文中で引用した文献については、著者名、刊行年度、書名等を各文末に記した。

12　発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

13　発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の方々からご協力を得た（敬称略、順不同）。

工藤清泰、大沼忠春、種市幸生、田才雅彦、石本省三、横山英介、竹花和晴、長谷部一弘、本田泰貴、原川英二、安保たえ子、渡辺理賀、花田千穂

目　次

序
例　言

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査要項 …… 1
　第２節　調査方法 …… 2
　第３節　調査経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 7
　第１節　遺跡の位置 …… 7
　第２節　遺跡周辺の地形 …… 8
第Ⅲ章　隈無（1）遺跡 …… 14
　第１節　基本層序 …… 14
　第２節　検出遺構 …… 15
　　1　竪穴住居跡 …… 15
　　2　土坑 …… 21
　　3　屋外炉 …… 43
　　4　埋設土器 …… 44
　第３節　出土遺物 …… 45
　　1　縄文時代の遺物 …… 45
　　2　続縄文時代の遺物 …… 72
　　3　平安時代の遺物 …… 75
　　4　近世以降の遺物 …… 76
第Ⅳ章　隈無（2）遺跡 …… 81
　第１節　基本層序 …… 81
　第２節　検出遺構 …… 81
　　1　竪穴住居跡 …… 83
　　2　土坑 …… 90
　　3　溝 …… 94
　　4　火葬場跡 …… 94
　　5　柱穴状ピット群 …… 98
　第３節　出土遺物 …… 100
　　1　縄文時代の遺物 …… 100
　　2　平安時代の遺物 …… 106
　　3　近世以降の遺物 …… 108
第Ⅴ章　隈無（6）遺跡 …… 111
　第１節　基本層序 …… 111
　第２節　検出遺構 …… 112
　　1　竪穴住居跡 …… 112
　　2　土坑 …… 117
　　3　焼土 …… 121
　第３節　出土遺物 …… 123
　　1　縄文時代の遺物 …… 123
　　2　平安時代の遺物 …… 149
　　3　中・近世以降の遺物 …… 152
写真図版 …… 155
報告書抄録 …… 171

図1　遺跡位置図

第Ⅰ章　　調査の概要

第1節　調査要項

1　調査目的

国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する隈無（1）・（2）・（6）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存し、地域社会の文化財活用に資する。

2　調査期間

平成7年9月14日から同年11月2日まで　　隈無（2）遺跡

平成8年5月8日から同年10月30日まで　　隈無（1）・（2）・（6）遺跡

3　遺跡名及び所在地

隈無（1）遺跡（青森県遺跡番号05073）　五所川原市大字羽野木沢字隈無55

隈無（2）遺跡（青森県遺跡番号05074）　五所川原市大字羽野木沢字隈無109

隈無（6）遺跡（青森県遺跡番号05078）　五所川原市大字持子沢字隠川55-79

4　調査面積

隈無（1）遺跡　8.200平方メートル

隈無（2）遺跡　6.200平方メートル（平成7年度3.200　平成8年度3.000平方メートル）

隈無（6）遺跡　2.800平方メートル

5　調査委託者

建設省東北地方建設局青森工事事務所

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

五所川原市教育委員会、西北教育事務所

9　調査参加者

調査指導員　村越　　潔　　青森大学教授（考古学）

調査協力員　釜萢　　裕　　五所川原市教育委員会教育長

調　査　員　佐藤　　仁　　弘前市文化財審議委員（歴史学）

高島　成侑　　八戸工業大学教授（建築学）

赤平　智尚　　青森県立柏木農業高等学校教諭（考古学）

葛西　　励　　青森短期大学助教授（考古学）

山口　義伸　　青森県立板柳高等学校教諭（地質学）

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

（平成7年度）副参事兼調査第一課長事務取扱
北林　八洲晴（平成8年3月退職）
主　　事　木村　　高
主　　事　坂本　真弓
調査補助員　吉田　睦明　竹内　隆行　本多　顕子　斉藤　昭子
（平成８年度）調査第四課長　木村　鐵次郎
主　　幹　工藤　　大
主　　事　中村　博文
調査補助員　成田　昭美　高田　麻紀子　藤谷　麻美　野呂　清和
（工藤）

第２節　調査方法

1　グリッドの設定（図４～６）

平成7・8年度の隈無（2）遺跡の調査では、隈無（4）遺跡で設定したグリッドをそのまま延長して使用した。隈無（4）遺跡では、道路建設用幅杭No.252とNo.254を結ぶ線をグリッド設定の基準線（座標北から西に50度）とし、このライン（北西-南東方向）に4m単位でアルファベット、これと直交するラインに算用数字を付け、その組合せ（南隅の交点）で4×4mの各グリッドを表示した。平成8年度の隈無（1）遺跡及び隈無（6）遺跡の調査では、道路建設用幅杭No.234とNo.235を結ぶ線をグリッド設定の基準線（座標北から西に50度）としたが、グリッドの大きさ、呼称等については隈無（4）遺跡の場合と同様である。

2　遺構の調査

検出遺構は、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。セクションベルトは確認した遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には四分割ないし二分割で設定したが、付属施設等を検出した場合には必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて基本土層（ローマ数字）と区別した。遺構の実測図は、簡易遣り方測量及び一部平板測量によって、原則として縮尺20分の1で作成したが、付属施設等については主に縮尺10分の1で作成した。測量用のレベル原点は、工事用の測量原点から移動して、調査区域内の適当な位置に設置した。

3　遺物の調査

遺構内外の出土遺物については、必要に応じて縮尺20分の1ないし10分の1で実測図を作成したが、その他の遺物は、遺構又はグリッド単位で種類別に一括して取り上げた。

4　写真撮影

35ミリのモノクローム、リバーサル2種類のフィルムを使用し、作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況等について記録撮影した。（工藤）

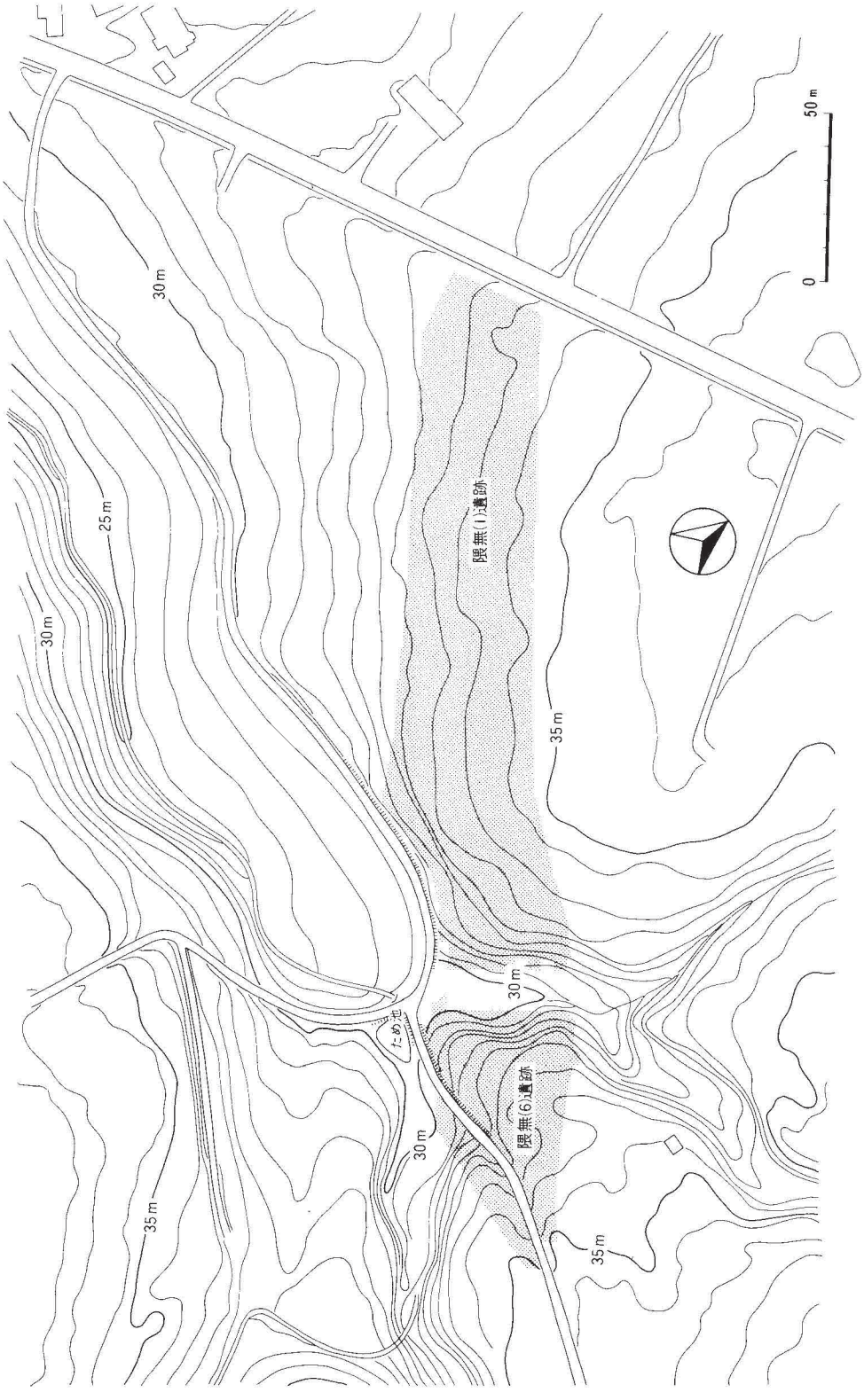


図２　隈無(1)・(6)遺跡調査区

第３節　調査経過

1　平成7年度

隈無（4）遺跡の調査（平成8年度に報告書を刊行）が終了に近づいた9月14日から、隈無（2）遺跡の調査を開始した。調査区域の南東側3.200㎡の調査と北西側の試掘を行ったが、竪穴住居跡、土坑、溝等の遺構を検出した。11月2日には調査を終了し、調査器材・出土遺物等を搬出した。

2　平成8年度

5月8日、調査器材等を現地に搬入し、環境整備後、隈無（2）遺跡から調査を開始した。粗掘り作業は調査区域の北西側から南東側に向かって進め、遺構を検出しなかった区域を順次土捨て場とした。検出遺構は火葬場跡、土坑等少数だったので、6月下旬には調査を終了した。隈無（1）遺跡の調査は、隈無（2）遺跡の調査と並行して6月からグリッド設定を始めた。粗掘り作業は調査区域の北西側からグリッドの間を空けて進め、調査区域全体に試掘を行うような方法を採った。7月中旬には、主として調査区域の南東側に、竪穴住居跡、土坑等遺構の分布することが分かった。そこでこの区域から全面的に粗掘りし、検出した遺構の精査を行った。8月中旬には遺構精査のめどがついたので、8月19日から隈無（6）遺跡の調査も開始した。隈無（1）遺跡の主要部分の調査は9月上旬で終了し、9月中旬～10月は隈無（6）遺跡で検出した竪穴住居跡、土坑等の精査と、隈無（1）遺跡の残存部分の粗掘りと遺構確認を並行して行った。10月30日には調査器材・出土遺物等を搬出し、予定通り3遺跡の調査を終了した。（工藤）

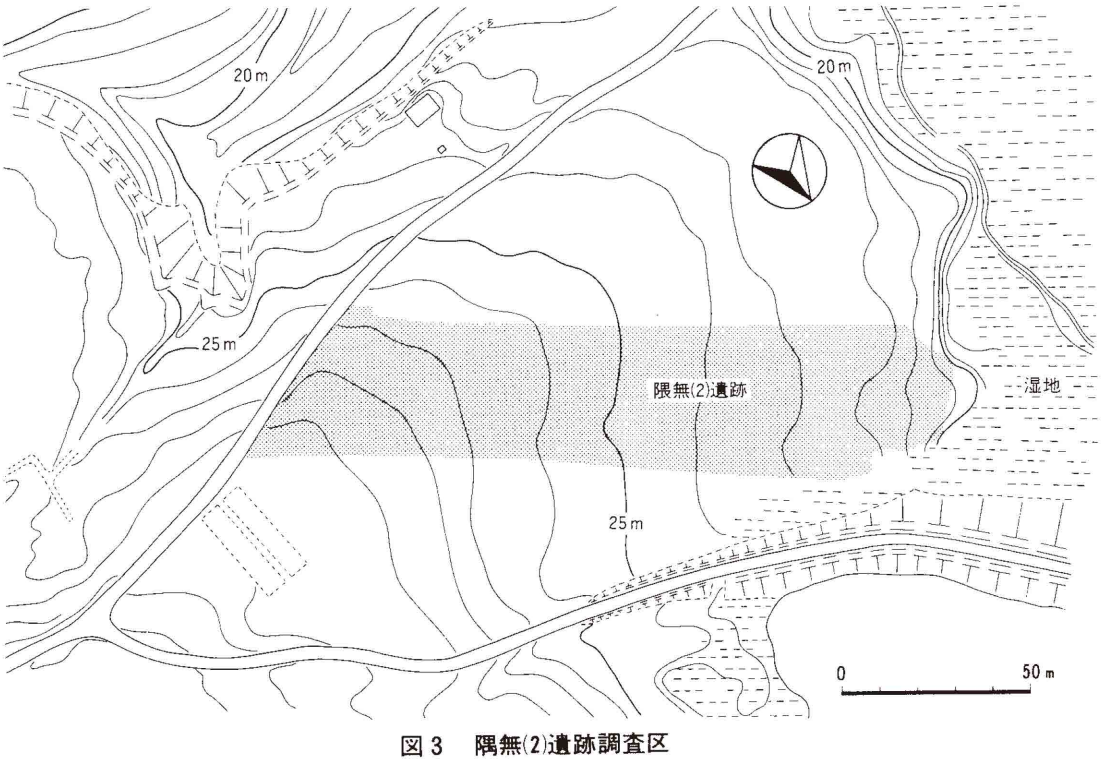


図３　隈無(2)遺跡調査区

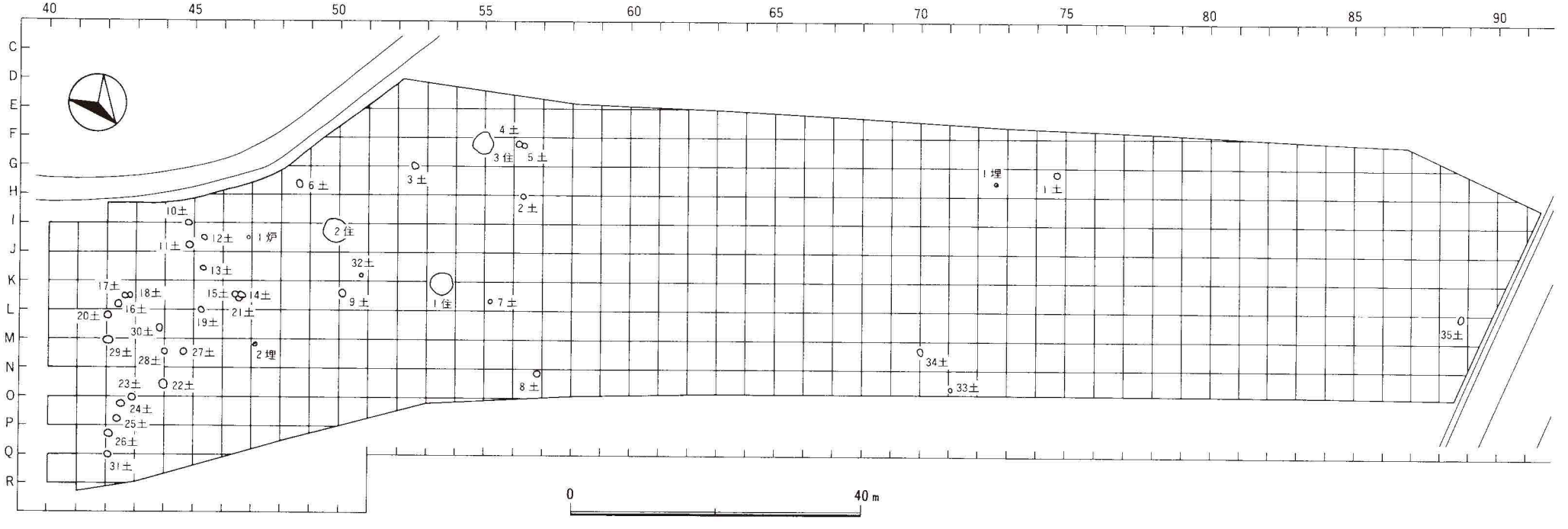


図4　隅無(1)遺跡グリッド配置図

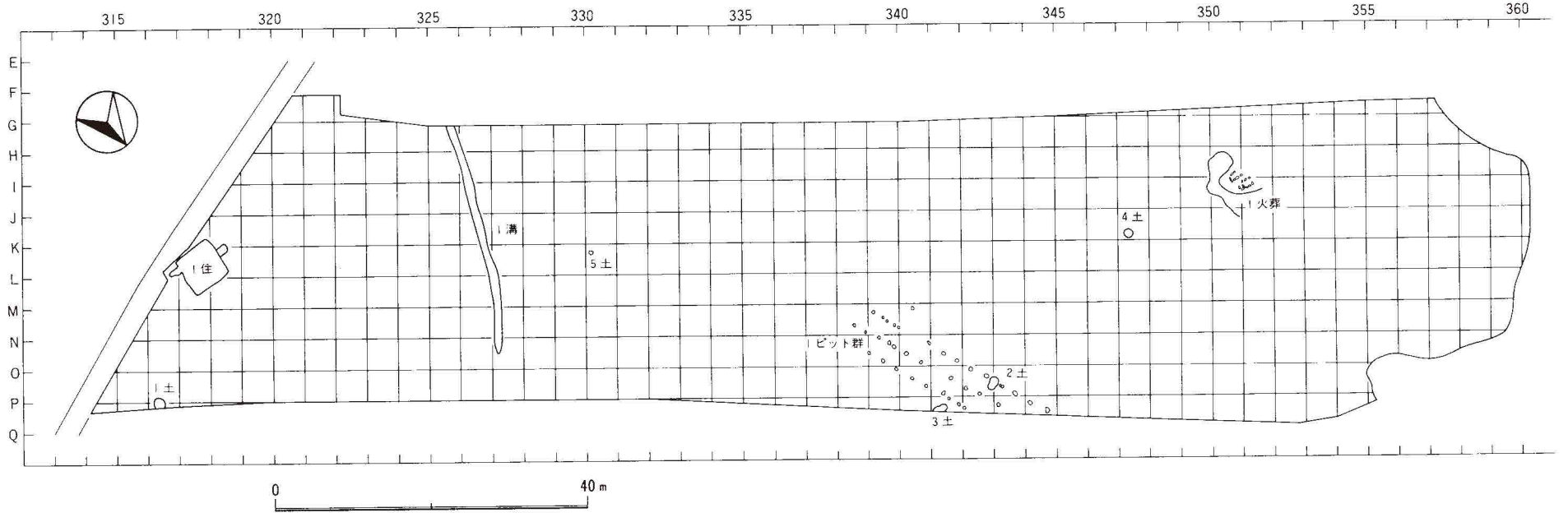


図5　隅無(2)遺跡グリッド配置図

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置（図１～３）

隈無（1）遺跡は、五所川原市街の南西部で岩木川に合流する十川の中流右岸から、東に約1ｋｍ入った広い丘陵上に位置している。市道を隔てて北西側に隣接する隈無（4）遺跡とは同一丘陵上にあり、標高は約35～30ｍである。今回の調査区域は全体として緩く南に傾斜しているが、南東側は十川から延びる小さな沢に向って、やや急な斜面となっている。隈無（2）遺跡は、隈無（1）遺跡から隈無（4）遺跡を挟んで、北西に約0.7ｋｍ離れた丘陵上にある。この狭い丘陵は緩く西に延びており、標高は約27～20ｍである。調査区域の中央部はほぼ平坦であるが、北西側は十川から続く湿地帯に面して北西に傾斜し、南東側は隈無（4）遺跡との間にある小さな沢に向かって南東に傾斜している。隈無（6）遺跡は、沢を挟んで隈無（1）遺跡の南東側に隣接する、標高約35～30ｍの小丘陵上にある。今回の調査区域は西に傾斜する丘陵の端部にあたり、南西側も沢に面してかなり傾斜している。

（工藤）

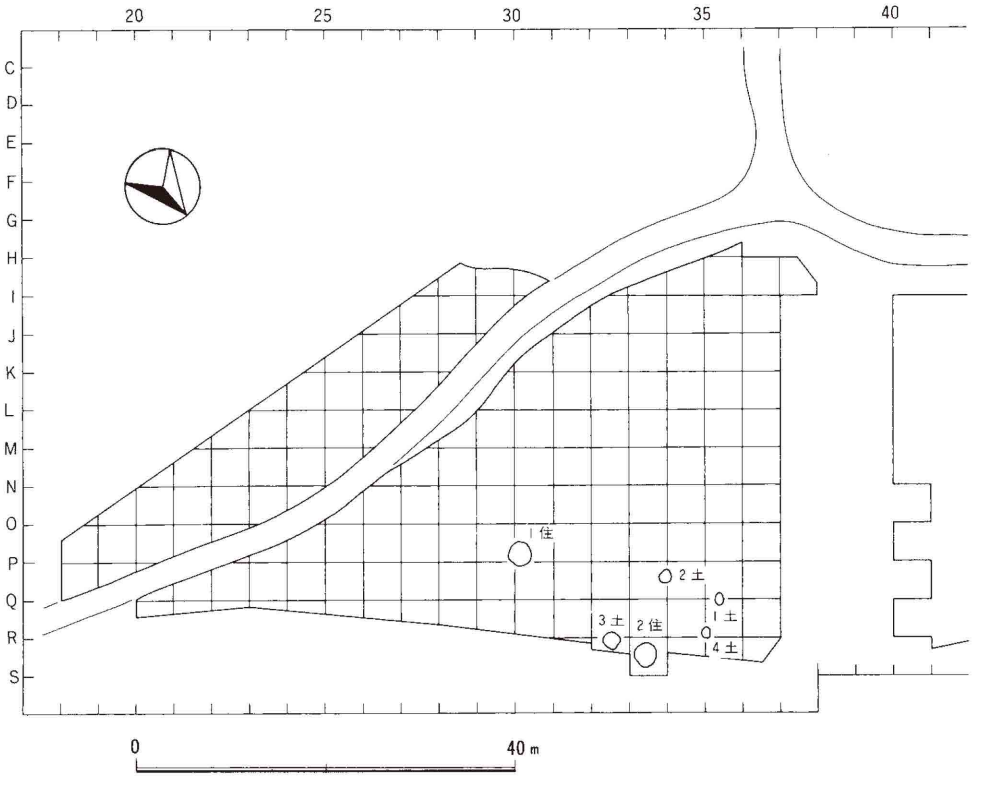


図６　隅無(6)遺跡グリッド配置図

第２節　遺跡周辺の地形と地質

青森県立板柳高等学校教諭　山　口　義　伸

１　遺跡周辺の地形

隈無（1）・（2）遺跡は五所川原市大字羽野木沢字隈無に、隈無（6）遺跡は五所川原市大字持子沢字隠川に所在し、津軽山地南端の梵珠山地西縁に分布する低位段丘上に立地する。

津軽半島中央部を南北に縦走する津軽山地は津軽平野と陸奥湾に面した青森平野とを2分する脊梁をなしている。この半島脊梁部には、玉清水山（479m）・袴腰岳（628m）・赤倉岳（559m）・大倉岳（677m）・源八森（353m）・馬ノ神山（549m）・梵珠山（468m）などの山稜が連なっている。特に、袴腰岳および馬ノ神山の両山稜周辺は、地形的にも地質学的にもドーム状の構造をなしていることが明瞭に把握できる。

半島脊梁部南端の馬ノ神山ドームから南方には、緩やかに南傾斜する梵珠山地および大釈迦丘陵地が展開し、山地内には標高の低い梵珠山（468m）・鐘撞堂山（313m）などの山稜が存在する。標高200m以高の等高線はその間隔が狭く大きく入り組んでいて、浸食谷による開析で起伏の大きい山地の様相を呈している。標高70m以高は等高線の間隔がやや粗く稜線部に平坦

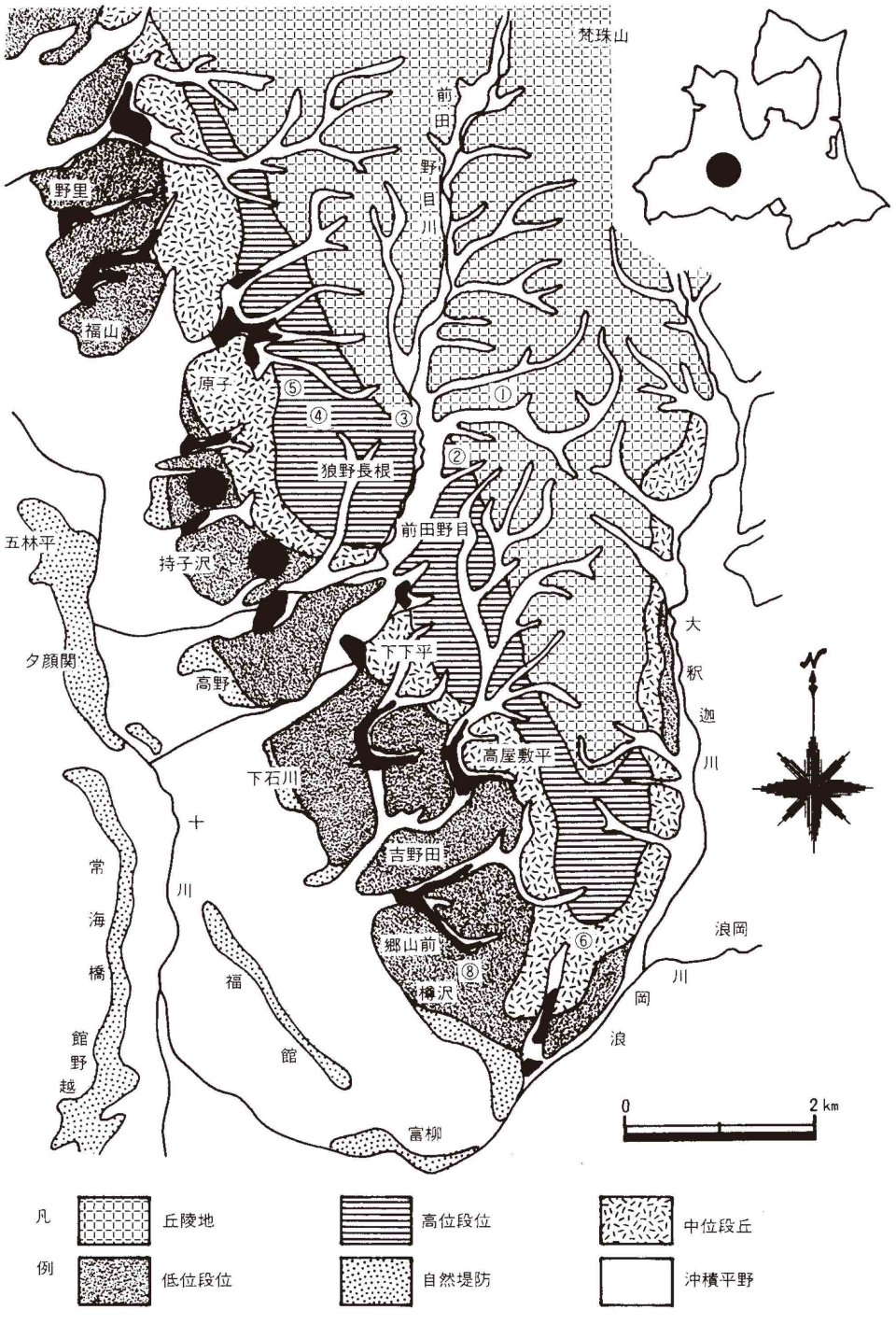


図７　遺跡周辺の地形分類図

面が認められる。これは鶴ヶ坂層（村岡・長谷1989の八甲田第１期火砕流堆積物に相当）からなる火砕流台地を示すもので、開析の進んだ平頂な大釈迦丘陵地として山地外縁部に展開している。そして、丘陵地周縁部には３段の段丘群からなる前田野目台地が分布している。概ね標高20～60m、一部は100mにも及ぶ台地の等高線は平野部にほぼ平行する配置をなし、そして平野部との境界部には数mの急傾斜面が認められる。高位段丘面として、前田野目付近では標高60～100m（標高107mの三角点を含む）の狼ノ長根が相当する。狼ノ長根は開析により起伏がやや大きいが、全体的に頂部が平滑であり、かつ緩やかな南傾斜面となっている。その他は標高50～60mの、丘陵地に連続する起伏に富む平頂な面として分布している。

中位段丘面は標高40～50mあり、等高線の配置は平野部にほぼ平行している。五所川原市境山から豊成東方にかけては100分の４と勾配のある傾斜面として、浪岡町花岡付近では100分の２の緩傾斜面として分布している。低位段丘面は標高20～35mであり、平野縁辺部に１～２km幅で分布している。五所川原市野里～豊成付近では標高20～25m、勾配100分の１と平坦であり、浪岡町郷山前～吉野田付近では標高25～35mとやや高く100分の２と勾配も認められる（図７）。

津軽山地南端部の水系として大釈迦川および前田野目川があげられる。大釈迦川は梵珠山を発源とし梵珠山地東縁をほぼ南流し、前田野目川は梵珠山北方に位置する馬ノ神山を発源とし同山地内を開析しながらほぼ南流している。大釈迦川は南津軽郡浪岡町で浪岡川と合流し、梵珠山地周縁の前田野目台地を大きく迂回して津軽平野へと流れ十川と合流する。前田野目川は前田野目台地で西流し、平野内を北流する十川と合流する。なお前田野目台地内には、原子溜め池、姥溜め池、三太溜め池、吉野田新溜め池、熊沢溜め池などがみられるが、これらの溜め池は梵珠山地を流れる浸食谷内にあって、平野部への出口付近を堰き止めて灌漑用水用として利用されている。

本遺跡は標高25mの、前田野目川北岸の低位段丘上に立地している。段丘面はほとんど起伏することなく概ね100分の２程度の勾配で平野部側に緩傾斜している。なお、調査区域の南北両端には低位段丘面に谷頭を有する小谷があり、谷底とは比高５～６ｍの急傾斜面で臨んでいる。調査区域はりんご園として土地利用され、台地縁辺部には羽野木沢、持子沢および高野などの集落が点在している。

2　遺跡周辺の地質

津軽半島の地質については、藤井1966・1981に詳しく記載されている。これに基づいて遺跡周辺の地質について記述していく。なお、層序表は付表に、地質概略は図８に示した。

津軽半島は、新第三紀の緑色凝灰岩類および堆積岩が広く分布し、東北地方のいわゆるグリーンタフ地域に属する。半島の地層の堆積状況をみると、半島脊梁部を南北に走る津軽断層を境としてその東部と西部とでは中新世（2370～530万年前）後期から鮮新世（530～170万年前）にかけての岩相および層厚が著しく異なる。すなわち、東部は沈降帯の、西部は隆起帯の構造を示し、津軽断層は各構造帯の生成および発展過程と密接に関係する。なお、この津軽断層は津軽海峡に面した三厩湾から青森市西部の大釈迦に抜ける延長50ｋｍに及ぶ大断層で、西方に傾斜した衝上性逆断層である。

東部沈降帯は津軽断層に並行する褶曲群および断層群で特徴づけられる。津軽断層に接近した地層は急傾斜し擾乱しているが、地層全体をみると東側へ緩く傾斜する。堆積する地層は下位から、中新世後期の不動滝層、鮮新世の白滝橋層・六枚橋川層・沢内沢層・立山層からなる。津軽断層の生成に伴い、その東側に生じた大沈降帯は砂岩を主体とした浅海性の白滝橋層・六枚橋川層・沢内沢層の

各層の堆積によって埋積された。

一方、西部隆起帯は、北部の袴腰岳ドームと南部の馬ノ神山ドームで特徴づけられるようにドーム構造をもち、この構造運動に伴って地層に褶曲構造がわずかに認められる。全体として、ドームの西翼部の地層はうねりながら西方へ緩傾斜するが、断層に接近した東縁部の地層は東側に急傾斜する。堆積する地層は下位から、中新世の長根層・馬ノ神山層・源八森層・不動滝層、鮮新世の味噌ヶ沢層および立山層からなる。馬ノ神山層および源八森層の堆積時期には、津軽半島全般にわたり沈降運動が進み、同時に大規模な火山活動が発生した。源八森層の堆積後期ないし直後に袴腰岳・馬ノ神山の両ドームの隆起運動が開始する。そして、味噌ヶ沢層が不動滝層を不整合に覆うように、西部堆積盆が次第に西方へと移動していく。西部地域ではドーム構造に象徴されるように横圧力による隆起運動が盛んなのに対して、東部地域では大沈降帯が形成されていた。

図９には遺跡周辺における露頭の模式柱状図を示した。平頂な大釈迦丘陵地は鶴ヶ坂層（村岡・長谷1989の八甲田第１期火砕流堆積物に相当）からなる火砕流台地を示すものである。高位段丘面は大釈迦丘陵地にほぼ連続する平滑な面であり、狼ノ長根付近での露頭観察では成層した軽石質砂・細粒軽石質シルト・粘土の互層からなる前

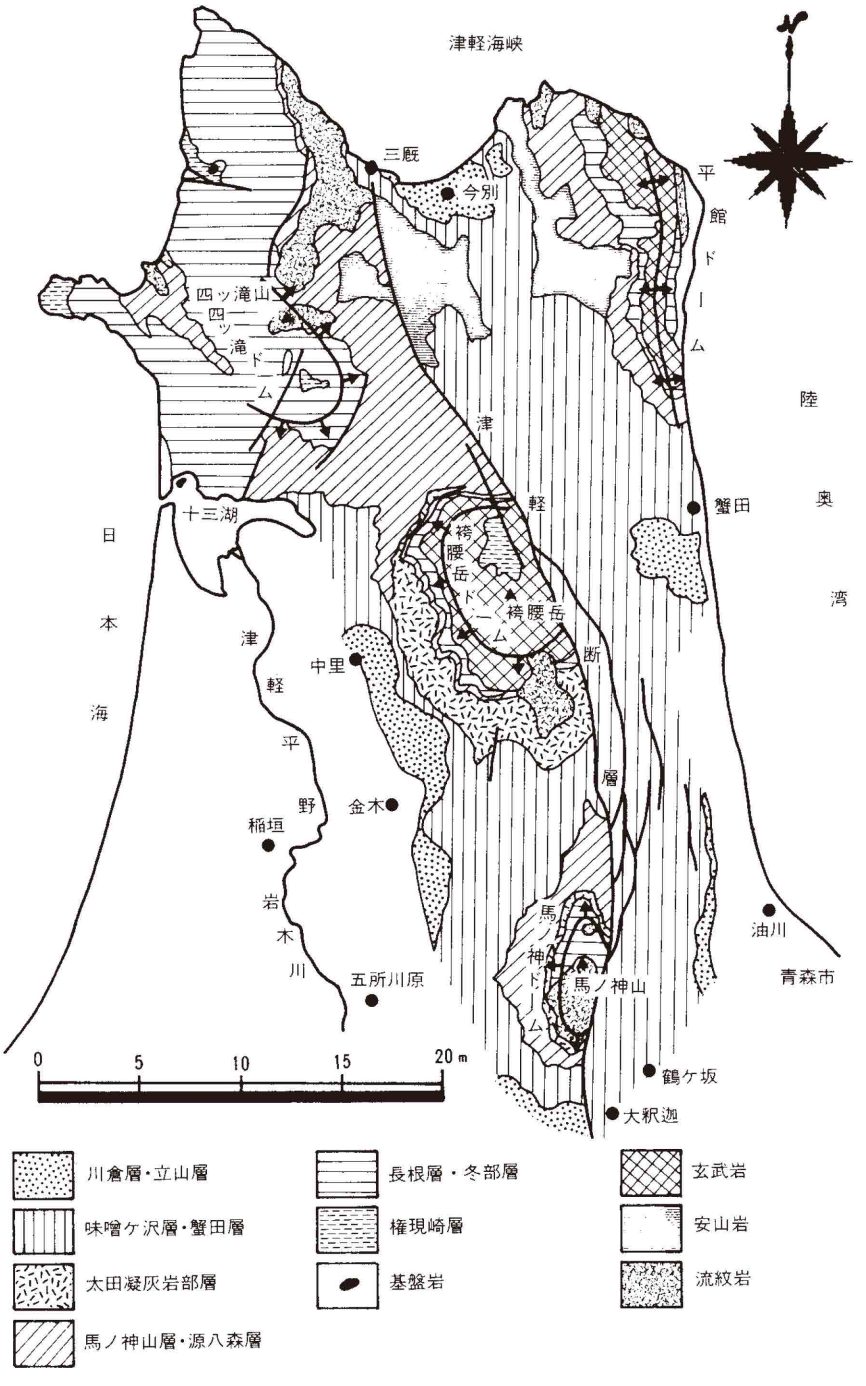


図８　津軽半島の地質概略図（藤井1981による）

田野目層で構成されている。また、平野寄りに分布する中位段丘は成層した細粒砂・シルトなどを構成層とし、低位段丘は細礫混じりの粗砂・腐植質粘土（シルト）などを構成層としている。

ところで、本遺跡の調査区域からは縄文時代の遺物が多数出土しているが、石器の素材となる石材（付表）と周辺地域の地質との関連性について若干述べたい。

石鏃・石錐・石篦などの剥片石器の石材としては珪質頁岩が多用され、ほかに玉髄質珪質頁岩、玉髄などがある。これらの石材は半島脊梁部に分布する馬ノ神山層および源八森層中の硬質頁岩・黒色頁岩に求めることができる。ただ、続成作用によって固結し縞模様をなす頁岩は層理面に沿って薄く剥がれやすく、剥片石器の製作過程で意図的な剥離調整は不可能である。ただ、火成岩の貫入で熱変成を受けた頁岩はより緻密であり意図的な剥離調整が容易であることを露頭観察で確認している。また、黒曜石製の石錐およびフレイクも出土している。黒曜石の産出については日本海に面した出来島海岸および深浦海岸などが知られている。最近、馬ノ神山ドームを構成する酸性凝灰岩中にも黒曜石が包含されることを確認している。鯵ヶ沢町の杢沢遺跡での発掘調査では前出の黒曜石は気泡が多く格子状に割れやすいた

時代（×百万年）		地層名	層厚	岩質
第四期	完新世 0.01	沖積層		砂・礫・粘土
	更新世	段丘堆積物		砂・礫・粘土
	1.7	岡町層	100m	砂岩・礫岩
第三紀	鮮新世	立山層	100m	中－粗粒砂岩
		鶴ヶ坂凝灰岩部層	0－100m	酸性軽石凝灰岩
		味噌ヶ沢層	50m	中粒砂岩
		沢内沢層	100-400m	細－中粒砂岩
		六枚橋川層	500m	中－粗粒砂岩
		白滝橋層	400-600m	粗粒砂岩・中粒砂岩
	5.3	上部二本松凝灰岩部層	100－200m	酸性軽石凝灰岩
	中新世	金木川異常堆積層	10-20m	砂岩・泥岩
		下部二本松凝灰岩部層	0-200m	酸性火山礫凝灰岩
		不動滝層	200－500m	珪藻質泥岩・凝灰質砂岩・細粒凝灰岩
		源八森層	0－400m	黒色頁岩・硬軟互層・細粒凝灰岩
		馬ノ神山層		硬質頁岩・縞状頁岩
		太田凝灰岩部層	100－750m	酸性軽石凝灰角礫岩
			200－250m	細粒凝灰岩
	23.7	長根層	500m＋	粗粒凝灰質砂岩・泥岩・凝灰角礫岩

付表　層序表

め同産出の黒曜石のチップが多く定形石器は確認されていない。なお、馬ノ神山ドーム産出の黒曜石については詳細な分析結果がない。

半円状偏平打製石器・擦り石・石皿などの礫石器の石材としては安山岩、凝灰岩、流紋岩、石英安山岩、閃緑岩などがあり、特に安山岩が多用されている。安山岩は津軽平野を蛇行する岩木川、半島脊梁部を発源とする浸食谷の各流域内で河床礫として普遍的に採取できる石材である。凝灰岩、流紋岩、石英安山岩なども同様に採取できると考えられるが安山岩ほどではない。ただ、閃緑岩はきわめて異質な材質であり、岩木川流域および半島脊梁部を流れる小谷で採取できるか不明である。また、磨製石斧の石材である緑色細粒凝灰岩も異質な石材であり、グリーンタフ地域に属する津軽半島脊梁部で産出するのか、今後詳細な調査が必要である。

次に、本遺跡調査区域内の基本層序を図10・82・105に示した。これに基づいて各層の概略を述べることにする。なお、本調査区域内は耕作による撹乱および削平を受け、基本層序第Ⅰ層の下位には第Ⅳ層あるいは第Ⅴ層が位置することが多い。

Ⅰａ層　黒灰色土　粘性および湿性がない。耕作によるかたさはあるが締まりに欠け脆く崩れやすい。乾くと灰白色に変色し、格子状の割れが目立ちボソボソとした感じである。

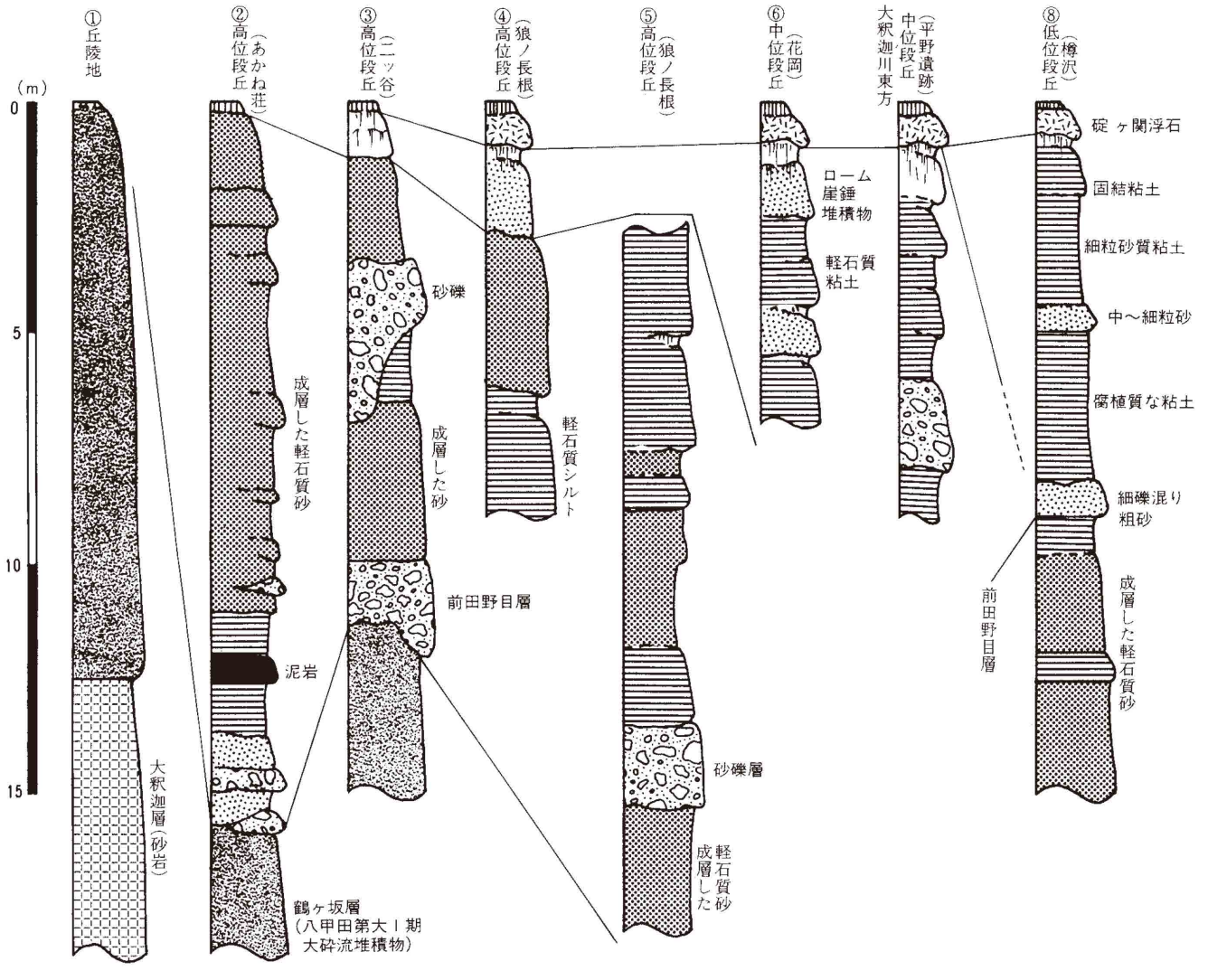


図９　遺跡周辺における露頭の模式柱状図（図７の○を付した番号と符号する）

Ⅰb層　黒色土　耕作区域外における表土である。粘性･湿性に乏しく、かたさはあるが締まりに欠ける。全体的に均質かつシルト質～細粒であり、乾くとサラサラしてソフトな感じである。

Ⅱ　層　黒褐色土　粘性・湿性がややあり、かたさ締まりも認められる。層全体がシルト質～細粒砂質で軽石粒および粘土粒の混入が目立つ。なお局部的ではあるが、本層上部に白頭山起源の苫小牧火山灰（B－Tm）のブロック状の堆積が認められ、28ライン付近の埋没谷では厚さ２～３cmの薄層状の堆積を確認している。

Ⅲ　層　黒色腐植質土　多少粘土質であり、かたく締まっているが全体的にはソフトな感じがする。乾くとクラックが発達し格子状に割れやすい。軽石粒および粘土流が多少混入している。

Ⅳ　層　暗褐色土　漸移層である。粘性・湿性がややあり、またかたさおよび締まりも認められる。下位層の軽石粒や軽石質粘土粒の混入が目立ち、層全体としてソフトな感じがする。なお、本層は軽石粒や粘土粒の混入状況により２層に細分される。上部のⅣa 層は 粒子状の混入物が目立ち、全体的にやや腐植質で暗い色調を呈する。下部のⅣb 層はブロック状の混入物が目立ち、全体的に黄褐色と色調が明るく粘土質でソフトな感じがする。

Ⅴ　層　明黄灰色軽石層　緻密堅固な降下相のラピリ質細粒軽石層であるが、本遺跡調査区域では陸水の影響を受けて灰白色軽石質粘土に層相変化している。千曳浮石（東北地方第四紀研究グループ1969)、碇ヶ関浮石（山口1993）に対比される。

Ⅵ　層　灰褐色凝灰質粘土層　背後の丘陵地および高位段丘を構成する鶴ヶ坂層の再堆積相と考えられる。本遺跡の立地する低位段丘面を被覆する湿地性の環境下で堆積したものと思われる。層相により３層に細分される。最上部のⅣa 層は塊状で細粒軽石質層であり、Ⅴ層との境界面には時間間隙を示す暗色帯が認められ、乾くとクラックが発達している。中部のⅥb 層は灰褐色細粒軽石質砂質と黄灰色軽石質粘土との互層からなっている。なお、砂層中には多少淘汰不良の砂礫層のレンズあるいは薄層が認められる。そして、下部のⅥc層はやや酸化の染みがみられる赤橙色砂層であって局部的な堆積を示している。側方変化も顕著で、同砂層と青灰色粘土との互層からなる堆積を示す部分もみられる。Ⅶc 層を欠如する箇所では下位のⅦ層が凸状の堆積を示している。

Ⅶ　層　淡青灰色粘土層　Ｎ値が15を示す固結した粘土層で、本遺跡・隠川遺跡および浪岡町樽沢でのボーリング試料でも確認しているが、津軽平野周縁に発達する低位段丘の構成層をなすものと考えられる。固結粘土の下位には、Ｎ値が３～７の軟らかいシルト層～粘土層の堆積（厚さ約５～６ｍ）が確認されている。

［引用・参考文献］
藤井敬三　1966：５万分の１地質図幅及び同説明書「金木」　（青森－第14号）　地質調査所
東北地方第四紀研究グループ　1969：東北地方における第四紀海水準変化　地学団体研究会専報　No.15
中川久夫　1972：青森県の第四系　青森県の地質第二部　青森県
藤井敬三　1981：油川地域の地質　地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）　地質調査所
村岡洋文・長谷紘和　1989：黒石地域の地質　地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）
青森県教育委員会　1990：杢沢遺跡　青森県埋蔵文化財調査報告書第130集
中里町・中里町教育委員会　1993：中里城跡環境整備基本構想　中里町文化財調査報告書第８集
山口義伸　1993：平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について　年報　市史ひろさき　No.2　弘前市
青森県教育委員会　1996：野尻（４）遺跡　青森県埋蔵文化財調査報告書第186集

第Ⅲ章　　隈無（1）遺跡

第１節　基本層序（図10）

本遺跡調査区の原地形はほとんどが平坦地で東側は旧沢地となっていた。そこで土層観察用に調査区中央部のＧ～Ｈ－65グリッドにトレンチ、Ｋラインと52ラインにはベルトを設定した。Ｇ～Ｈ－65グリッドのトレンチでは堆積状況を把握するため深堀りを行った。東壁の状況は以下の通りである。

第Ｉｂ層(黒褐色土・10ＹＲ2/3)表土層。シルト質黒褐色土が主体を占める。堅さはあるが粘性、保湿性に欠ける。木の根等多量に混入する。

第Ⅲ 層(黒色土・10YR2/1)シルト質黒色土が主体を占める。黒色腐植土。やや堅さ、しまりがあり、粘性、保湿性がある。軽石、粘土粒が混入する。

第Ⅳａ層(黒褐色土・10YR3/1と 明黄褐色土・10YR6/8の互層)漸移層。腐植土質でＶ層軽石粒、Ⅵ層粘土粒が混入する。

第Ⅴ 層(明黄褐色土・10YR6/8)明黄褐色軽石層。浮石質。粒子が緻密で堅さがある。水の影響で灰白色凝灰質粘土に移化している部分もある。

第Ⅵａ層(にぶい黄橙色粘土・10YR6/3)黄灰色粘土層。砂層が所々に混入し塊状に広がる。

以上第Ｉｂ～第Ⅵａ層に区分された。また、Ｋラインでは第Ｉ層と第Ⅲ層間にＧ～Ｈ－65グリッドのトレンチでは確認されなかった層があり第Ⅱ層とした。

第Ⅱ 層(暗褐色土・10YR3/4)シルト質黒褐色土が主体を占める。やや堅さ、しまりがはある。ブロック状に苫小牧火山灰を含むこともあり、この部分は細粒砂質である。また、部分的にみられる漸移層下位を第Ⅳｂ層として区分した所もある。

第Ⅳｂ層(黒褐色土・10YR3/1と 明黄褐色土・10YR6/8の互層)漸移層。色調が明るく第Ⅳａ層と比較しＶ層軽石粒、Ⅵ層粘土粒が混入が多い。

平坦地ではほぼ基本層序通り第Ｉ～第Ⅵａ層までほぼ同様な堆積状況を示した。旧沢地では第Ⅱ層が最厚約30ｃｍでみられ、苫小牧火山灰が確認された。また、第Ｖ層は水の影響で灰白色凝灰質粘土に移化している部分が多くみられた。Ｋ－49グリッドより北西側の平坦面では第Ｉ層～第Ｖ層面までおおむね50ｃｍで、第Ⅱ層、第Ⅲ層が後世の撹乱により欠層している部分が多い。　　（中村）

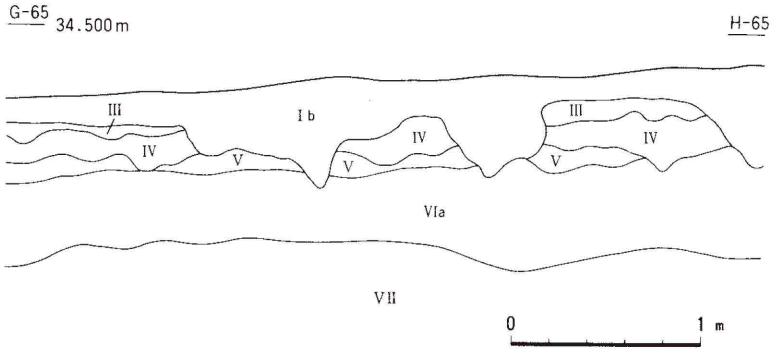


図10　隈無(1)遺跡基本土層

第２節　検出遺構

隈無（１）遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡３軒のほか、土坑35基、屋外炉１基、埋設土器２基を検出した。

１　竪穴住居跡

第１号住居跡（図11、表１）

［位置・確認］Ｊ・Ｋ－53グリッドに位置する。第Ｖ層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］南西壁の一部は後世の撹乱を受けているが、平面形は確認面、床面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径3.33m、短径3.16m、床面で長径3.12m、短径2.84mである。遺構は基本土層の第Ｖ層を掘り込んで作られ、同層を直接床面としている。確認面からの壁高は28～18cmで、全体に壁面の崩れが目立ち、壁の傾斜が緩くなっている。床面には凹凸があり、全体として北西に傾斜しているが、貼床等の痕跡は認められない。床面積は約6.94㎡である。

［柱穴等］床面の東側で柱穴状の小ピットを２個検出したが、どちらも浅い掘り込みである。この他に柱穴は認められないので、主柱穴の配置等についてははっきりしない。

［付属施設］床面のほぼ中央に、土器埋設炉が設けられている。直径30cmほどの小ピットを、２個連結したような形態で約20～10cm掘り込み、北東側のピットに口頸部と底部を欠いた深鉢形土器を正立状態で埋設したものである。埋設された土器は二次加熱を受けているが、土器内部の堆積土には焼土等が含まれていない。しかし南西側のピットと連結部の掘り込みには焼土が入っていた。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ｖ層）が多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものと考えられ、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］炉跡から、埋設されたⅢ－１類（円筒上層ｃ式）の深鉢形土器胴部１個体（Ｐ－１）が出土した。覆土からは、Ⅲ－１類土器（円筒上層ｃ式ほか）が７片（約70ｇ）、珪質頁岩の剥片が１点出土した。炉跡から出土した土器は、口頸部文様帯の下半部まで地文（縄文）が施文されており、円筒上層ｄ式に近い型式とみられる。覆土から出土した土器は、炉跡出土土器の同一個体片が多い。

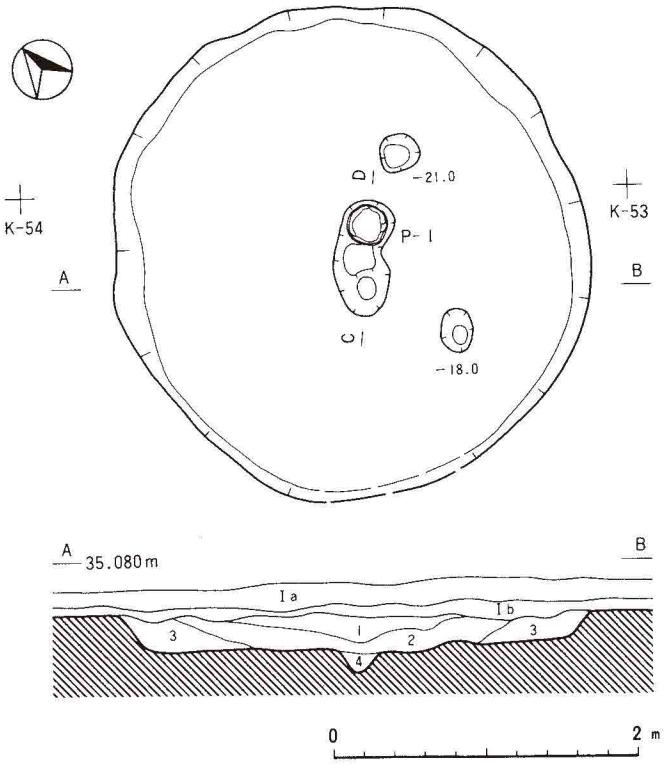
表１　第１号住居跡出土土器観察表

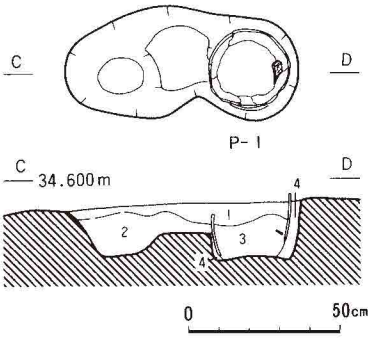
図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
11－１	Ⅲ－１・円筒上層Ｃ	炉埋設	深鉢・胴部	隆線（刻目）・刺突・縄文（LR）横位	復元土器
11－２	Ⅲ－１	フク土	深鉢・口縁部	口端部に縄側面圧痕（RL）・絡条体圧痕（R）	

第２号住居跡（図12～14、表２・３）

［位置・確認］Ｈ・Ｉ－49・50グリッドに位置する。第Ｖ層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］掘り込みの浅い南側（斜面下方）の壁は一部はっきりしないが、平面形は確認面、床面とも不整な円形ないし楕円形となっている。大きさは確認面で長径3.50m、短径3.21m、床面で長径3.34m、短径2.80mである。遺構は基本土層の第Ｖ層を掘り込んで作られ、同層を直接床面としている。確認面からの壁高は、比較的遺存状態の良い北西側（斜面上方）の壁でも約16cmほどである。貼床等の痕跡は認められなかったが、中央部から南西側にかけての床面は、上面が堅く締まっている（スクリーントーンの範囲）。床面には緩い凹凸があり、全体として南に傾斜している。床面積は約7.83㎡である。





第１号住居跡
土層注記（住居跡）

1	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質	明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	明黄褐色軽石を少量含む。
3	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質	明黄褐色軽石を多量に含む。（壁の崩落土）
4	層	暗褐色土	7.5YR3/4	シルト質	明黄褐色軽石を少量含む。焼土を含む。

第１号住居跡
土層注記（炉）

1	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質	明黄褐色軽石を少量含む。
2	層	極暗赤褐色土	5YR2/4	シルト質	明黄褐色軽石、焼土を含む。
3	層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質	明黄褐色軽石を含む。
4	層	褐色土	10YR4/4	浮石質	明黄褐色軽石主体。黒褐色土を含む。（埋土）

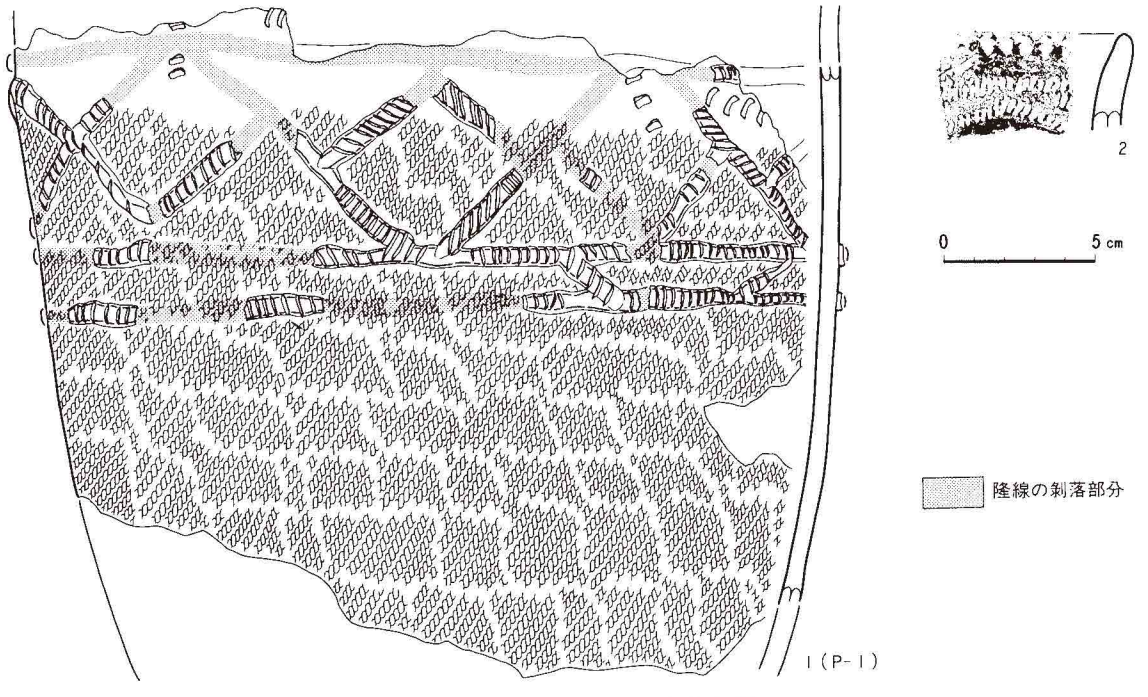


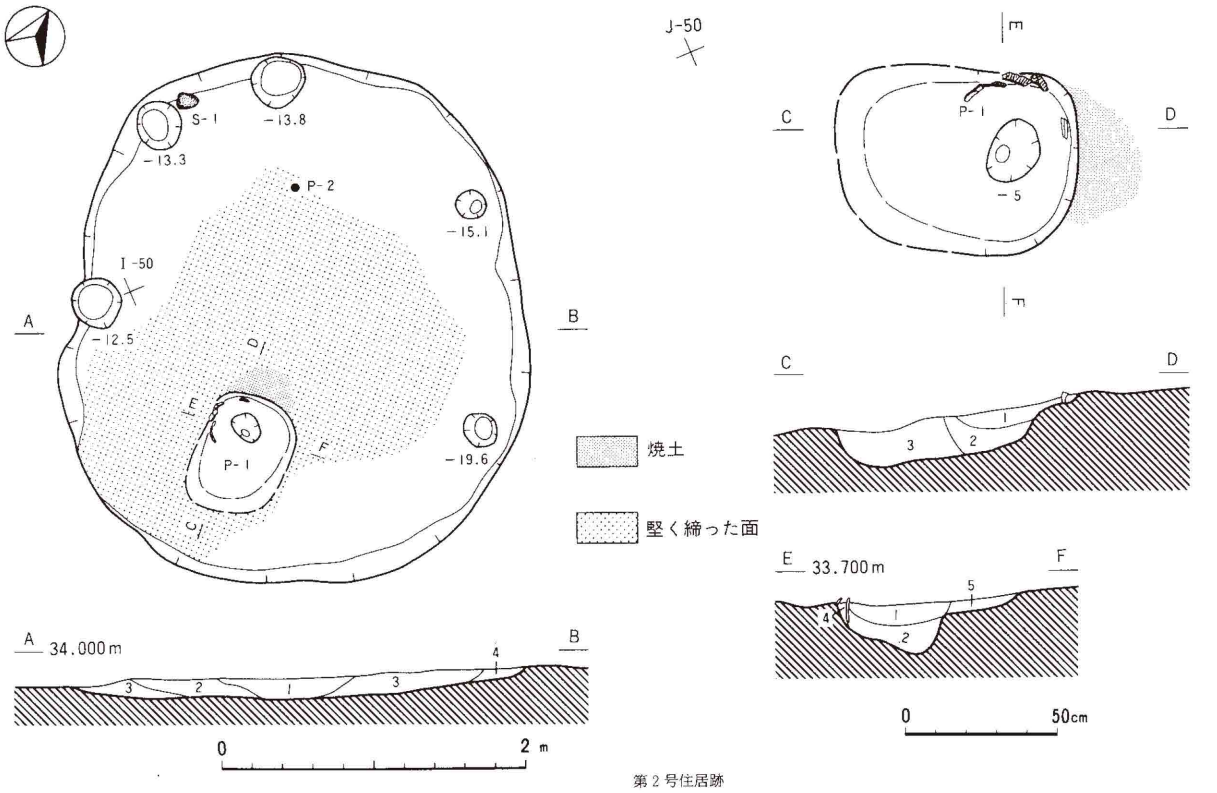
図11　第１号住居跡・出土土器

［柱穴等］南側を除く壁寄りの床面で、柱穴状の小ピットを５個検出した。いずれも20～13cmほどの深さに掘り込まれ、約1.50～0.90ｍの間隔で壁際に並んでいる。これらの小ピットは壁柱穴とみられるものであるが、この他に柱穴は認められなかった。

［付属施設］床面の中央から南壁寄りに、土器埋設炉とみられる炉が設けられている。炉跡は（木根等の撹乱によって南側の掘り方ははっきりしないが）、長径約80cm、短径約60cmの隅丸長方形ないし楕円形に15cmほど掘り込まれ、掘り込みの北側上部から外側にかけて焼土が拡がっている（スクリーントーン部分）。この炉は人為的に壊されたらしく、掘り込みの北から西側には、埋設されていたと考えられる深鉢形土器の胴部片が、一部直立に近い状態で残っている。また、ちょうど土器が埋設されていたとみられる北側の底面には、土器の設置痕かと思われる５cmほどの凹みがある。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、特に北東壁側では明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が多く混入している。南西側には明黄褐色軽石をブロック混じりで含む層（２層）もみられるが、全体的に堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］炉跡から、埋設されたⅢ－３～Ⅳ－１類土器の残片（Ｐ－１）、北西側の床面から、Ⅲ－１～２類土器の胴部片（Ｐ－２）、北西壁際から、凝灰岩のⅢ－４類石器（脚付石皿）の欠損品（Ｓ－１）が１点出土した。覆土からはⅢ－１～２類土器（円筒上層ｄ式ほか）、Ⅲ－３類土器（大木10式併行ほか）、Ⅲ－３～Ⅳ－１類土器、Ⅳ－２類土器などが136片（約1,460ｇ）、珪質頁岩のⅡ－６



第２号住居跡
土層注記（住居跡）

1	層	黒褐色土	10YR1/3	シルト質	明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	明黄褐色軽石をブロック混じりで含む。
3	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質	明黄褐色軽石を含む。
4	層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質	明黄褐色軽石を多量に含む。

第２号住居跡
土層注記（炉）

1	層	暗赤褐色土	5YR3/4	やや粘土質	焼土を多量に含む。
2	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質	明黄褐色軽石を含む。
3	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。
4	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質	明黄褐色軽石を少量含む。
5	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	明黄褐色軽石を含む。

図12　第２号住居跡

類石器（Rフレイク・Uフレイク）が６点、珪質頁岩の剥片３点、頁岩のⅢ－３類石器（すり石）が１点出土した。出土土器の大半はⅢ－１～２類及びⅢ－３～Ⅳ－１類土器である。

表２　第２号住居跡出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
13－１	Ⅲ－３～Ⅳ－１	炉跡内	深鉢・口縁～底部	単軸絡条体第１類(R)縦位・底面に編代痕	
13－２	Ⅲ－１～２	床面	深鉢・胴部	縄文(LR)横位	
13－３	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・底部	単軸絡条体第１類(R)縦位	
13－４	Ⅲ－２・円筒上層ｄ	フク土	深鉢・胴部	隆線・縄文(RL)横位	
13－５	Ⅲ－２・円筒上層ｄ	フク土	深鉢・胴部	隆線(縄文RL)・縄文(RL)横位	
13－６	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
13－７	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	結束第１種羽状縄文(LR＋RL)横位	
13－８	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・底辺部	単軸絡条体第１類(R)縦位	
13－９	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・口縁部	単軸絡条体第１類(R)縦位	
13－10	Ⅲ－３・大木10併行	フク土	深鉢・胴部	細沈線・縄文(RL)縦位	
13－11	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・胴部	縄文(RL)縦位	
13－12	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(LR)・縄文(LR)縦位	
13－13	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)斜位？	
13－14	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・胴部	沈線・単軸絡条体(R？)縦位	
13－15	Ⅳ－２	フク土	深鉢・口縁部	沈線文・縄文(LR)斜位？	
13－16	Ⅳ－２	フク土	深鉢・胴部	沈線・刺突	
13－17	Ⅳ－２	フク土	深鉢・胴部	沈線文	

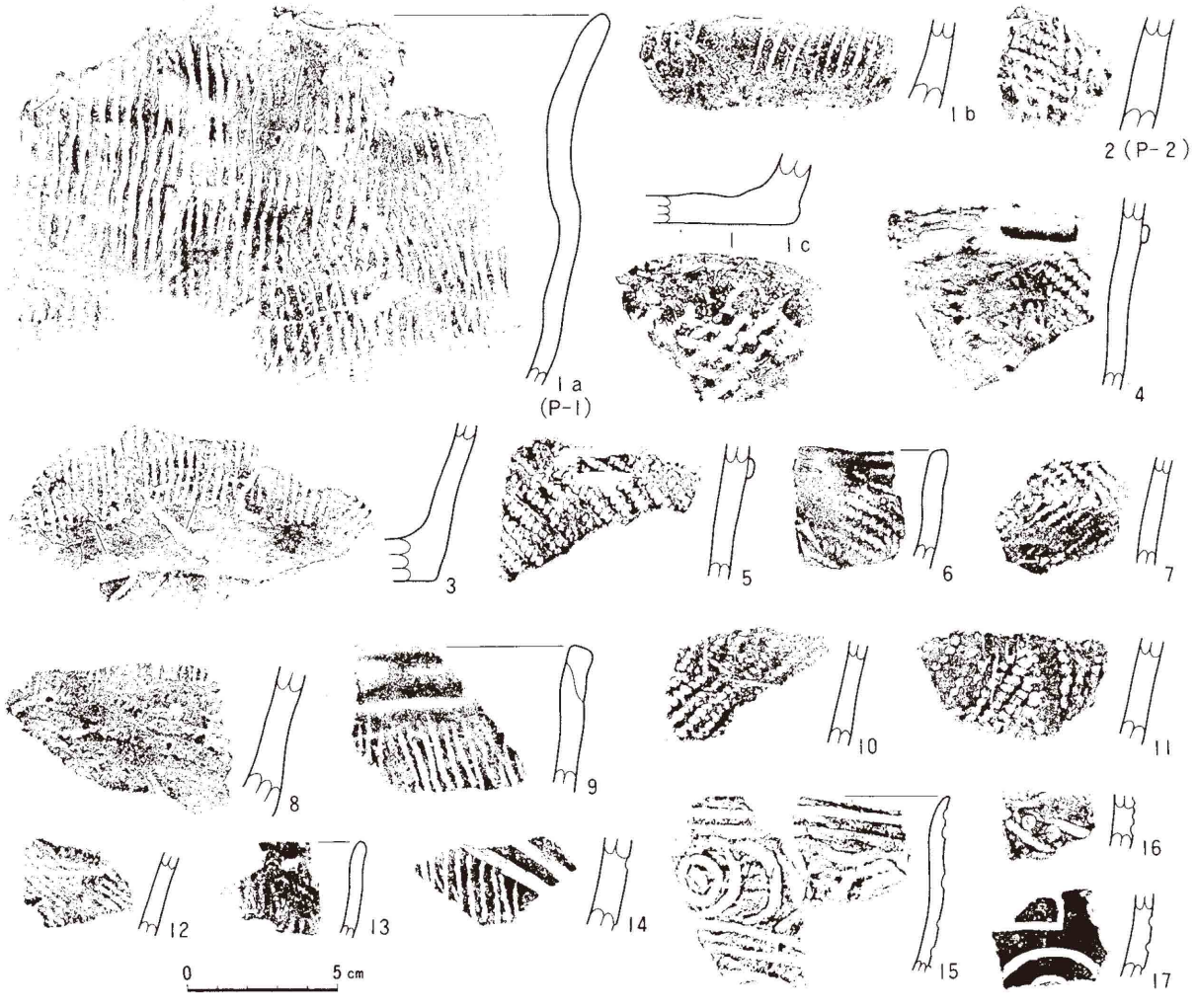


図13　第２号住居跡出土土器

表３　第２号住居跡出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
14－1	Ⅲ－4・石皿	壁際	(15.4)× 9.6 ×2.8	(455.0)	擬灰岩	欠損品
14－2	Ⅲ－3・すり石	フク土	(6.9)× 5.7 ×3.0	(139.4)	頁岩	すり面・剥離痕
14－3	Ⅱ－6・Rフレイク	フク土	3.8 × 2.7 ×0.6	4.2	珪質頁岩	
14－4	Ⅱ－6・Uフレイク	フク土	3.1 × 3.1 ×0.7	5.8	珪質頁岩	
14－5	Ⅱ－6・Rフレイク	フク土	3.8 × 2.9 ×1.0	9.1	珪質頁岩	
14－6	Ⅱ－6・Rフレイク	フク土	3.2 × 1.9 ×0.8	3.4	珪質頁岩	
14－7	Ⅱ－6・Uフレイク	フク土	(2.2)×(2.2)×0.5	(1.7)	珪質頁岩	
14－8	Ⅱ－6・Uフレイク	フク土	4.1 × 3.3 ×0.9	16.2	珪質頁岩	

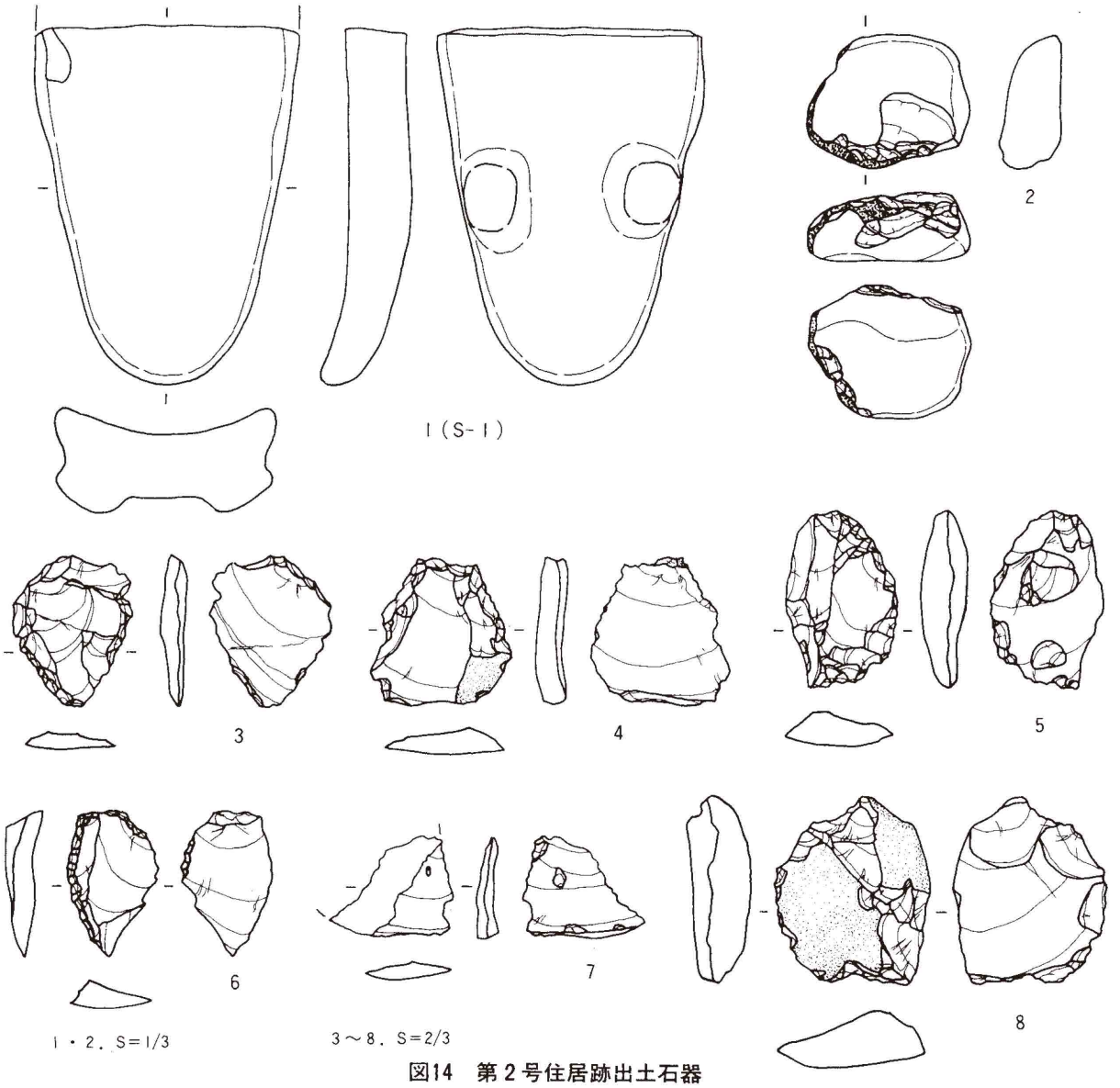


図14　第２号住居跡出土石器

第３号住居跡（図15・16、表４・５）

［位置・確認］Ｅ・Ｆ－54・55グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。はっきりした炉跡や柱穴等は検出できなかったが、他の土坑等に比べて掘り込みが浅く規模が大きいので、この遺構も住居跡として記載する。

［形態・規模］南側（斜面下方）の壁はほとんど残っていないが、平面形は確認面、床面ともかなり不整な円形となっている。大きさは確認面で長径2.96m、短径2.76m、床面で長径2.77m、短径2.60mである。遺構は基本土層の第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を直接床面としている。確認面からの壁高

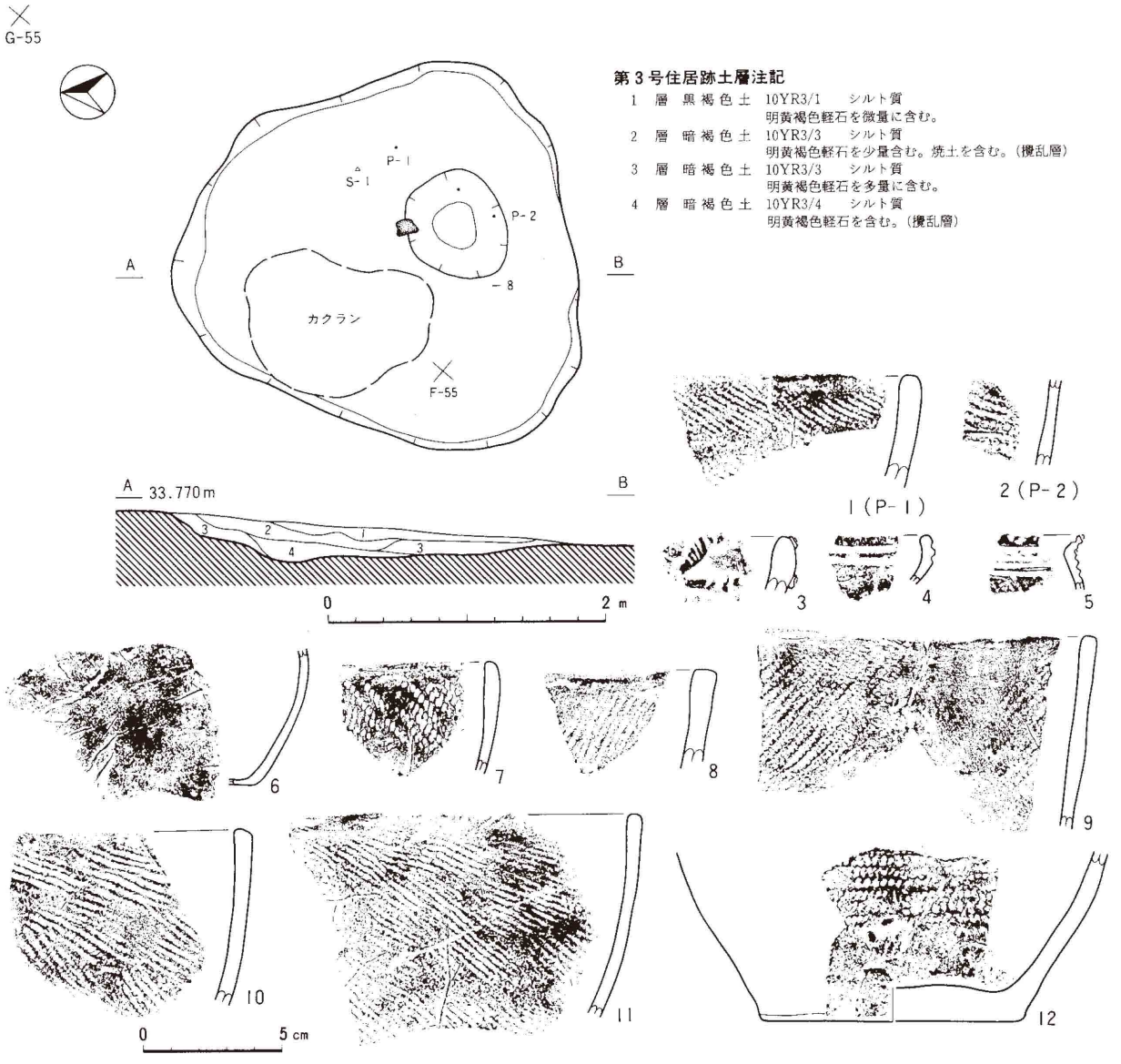


図15　第３号住居跡・出土土器

は、遺存状態の良い北壁側で20cmほどであるが、壁面はかなり崩れて緩い傾斜になっている。床面には緩い凹凸があり、全体として南西に傾斜しているが、貼床等の痕跡は認められなかった。北西側の床は部分的に大きく凹んでいるが、これは遺構廃絶後の攪乱によるとみられる。床面積は約5.61㎡である。

［柱穴等］柱穴ないしこれに類する小ピット等は、検出されなかった。

［付属施設］はっきりした炉跡は検出できなかったが、床面中央から南東壁よりには長径85cm、短径73cmの不整楕円形の掘り込みがある。深さ約8cmの浅いピットで、焼土等は入っていなかったが、位置的にはこれが炉跡であった可能性はある。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とする。壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が多く混入しているが、これは主に壁面の崩落によるものと考えられる。床面の凹んだ箇所の堆積土（２・４層）は攪乱層とみられるが、この上部を黒褐

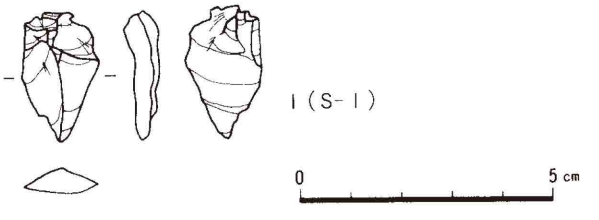


図16　第３号住居跡出土石器

色土（1層）が覆っているので、この遺構の埋没過程で倒木等による撹乱があったようである。この部分的な撹乱を除けば、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］　南東側の床面から、Ⅴ群土器（晩期）の深鉢形口縁部片（P－1）と鉢形胴部片（P－2）、珪質頁岩のⅡ－6類石器（Uフレイク、S－1）が1点、礫が1点出土した。覆土からはⅢ－2類土器、Ⅴ－2類土器及びⅤ群土器が129片（約1,040g）、珪質頁岩の剥片が5点出土した。出土土器の大半はⅤ－2類を含むⅤ群土器で、床面から出土した深鉢形土器（P－1）は、覆土から出土した同一個体の2片と接合した。

表4　第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
15－1	Ⅴ	床面	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
15－2	Ⅴ	床面	鉢類・胴部	縄文(RL)横位・朱塗り？	
15－3	Ⅲ－2・円筒上層d？	フク土	深鉢・口縁部	隆線(刻目)	
15－4	Ⅴ－2？	フク土	浅鉢・口縁部	平行沈線	
15－5	Ⅴ－2・大洞C1？	フク土	台付鉢・口縁部	連続刻目・平行沈線・縄文(RL)横位	内面に沈線
15－6	Ⅴ－2？	フク土	壷・胴～底部	無文・朱塗りの痕跡	
15－7	Ⅴ	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
15－8	Ⅴ	フク土	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
15－9	Ⅴ	フク土	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
15－10	Ⅴ	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
15－11	Ⅴ	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
15－12	Ⅴ	フク土	深鉢・底部	縄文(LR)横位	

表5　第3号住居跡出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
16－1	Ⅱ－6・Uフレイク	床面	2.6×1.5×1.7	1.6	珪質頁岩	

2　土坑

第1号土坑（図17、表6）

［位置・確認］G－74グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

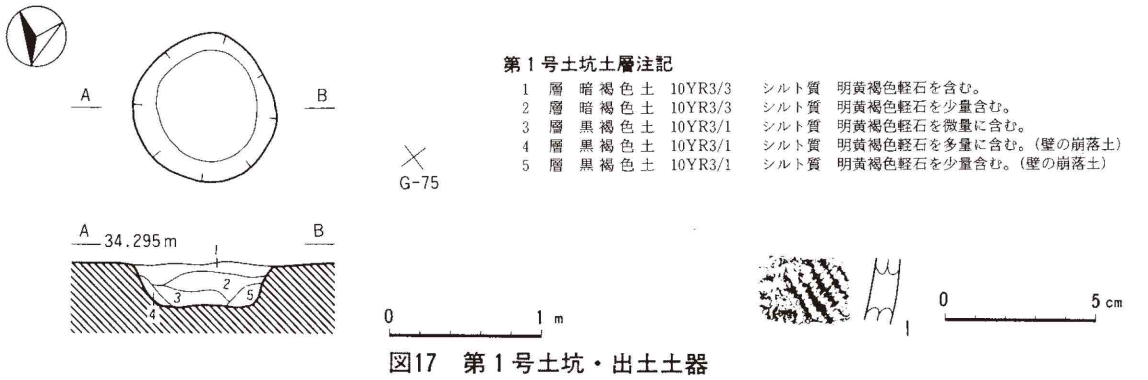
［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.98m、短径0.90m、底面で長径0.70m、短径0.65mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は28～25cmで、全体に壁面の崩れがみられ、壁の傾斜が緩くなっている。底面には多少凹凸があり、全体としてやや西に傾斜している。

［堆積土］暗褐色土と黒褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－1～2類の深鉢形土器が1片（約10g）出土した。

表6　第1号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
17－1	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	



第1号土坑土層注記

1　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石を含む。
2　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
3　層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
4　層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質　明黄褐色軽石を多量に含む。（壁の崩落土）
5　層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。（壁の崩落土）

図17　第1号土坑・出土土器

第２号土坑（図18、表７）

［位置・確認］Ｇ・Ｈ－56グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.64m、短径0.60m、底面で長径0.40m、短径0.36mである。遺構は第Ｖ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は約40cmで、壁の傾斜は部分的に緩くなっているが、壁面の崩れはあまり目立たない。底面は中央部が少し凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、下部に明黄褐色軽石（第Ｖ層）がやや多く混入している。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－１～２類ほかの深鉢形土器が３片（約20ｇ）出土した。

表７　第２号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
18－1	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	

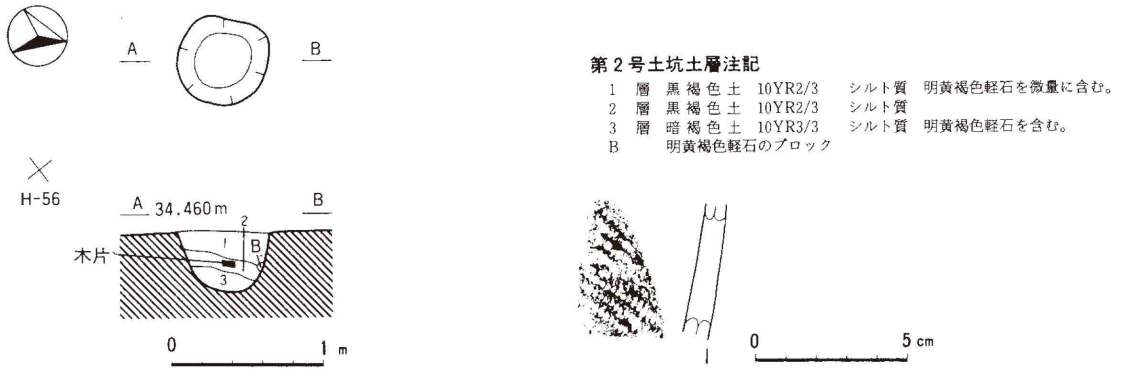


図18　第２号土坑・出土土器

第３号土坑（図19、表８）

［位置・確認］Ｆ・Ｇ－52グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともかなり不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.08m、短径0.84m、底面で長径0.82m、短径0.60mである。遺構は第Ｖ層を掘り込んで作られ、第Ｖ層を底面としている。確認面からの壁高は25～22cmで、部分的に壁面の崩れが目立ち、壁の傾斜も緩くなっている。底面はほぼ平坦であるが、全体としてやや東に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、下部に明黄褐色軽石（第Ｖ層）、南西壁寄りには水の影響により明黄褐色軽石が移化した灰黄褐色凝灰質土（第Ｖ層）が多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色凝灰質土の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－１～２類の深鉢形土器が２片（約30ｇ、同一個体）出土した。

表８　第３号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
19－1	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	縄文(LR)横位	

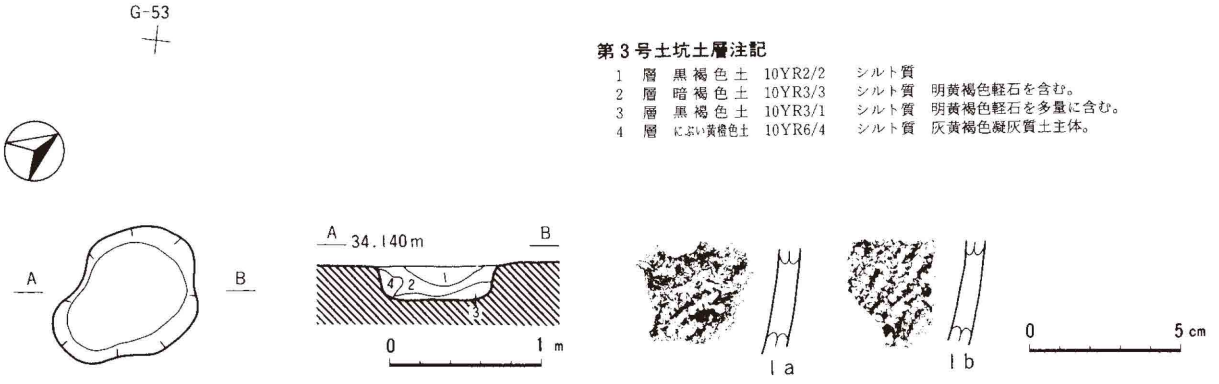


図19　第３号土坑・出土土器

第４号土坑（図20）

［位置・確認］Ｆ－56グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［重複関係］遺構の北西側を、第５号土坑によって切られている。

［形態・規模］平面形は確認面ではやや楕円形気味の円形、底面ではほぼ円形となっている。残存する部分での大きさは、確認面で長径1.01m、短径0.94m、底面で長径0.77m、短径0.76mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は15～12cmで、遺構の南側では壁の傾斜がかなり緩くなっている。底面には多少凹凸があり、全体としてやや北に傾斜している。

［堆積土］暗褐色土を主体とし、これに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が混入している。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］　出土しなかった。

第５号土坑（図20、表９）

［位置・確認］Ｆ－56グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［重複関係］第４号土坑の北西側を切っている。

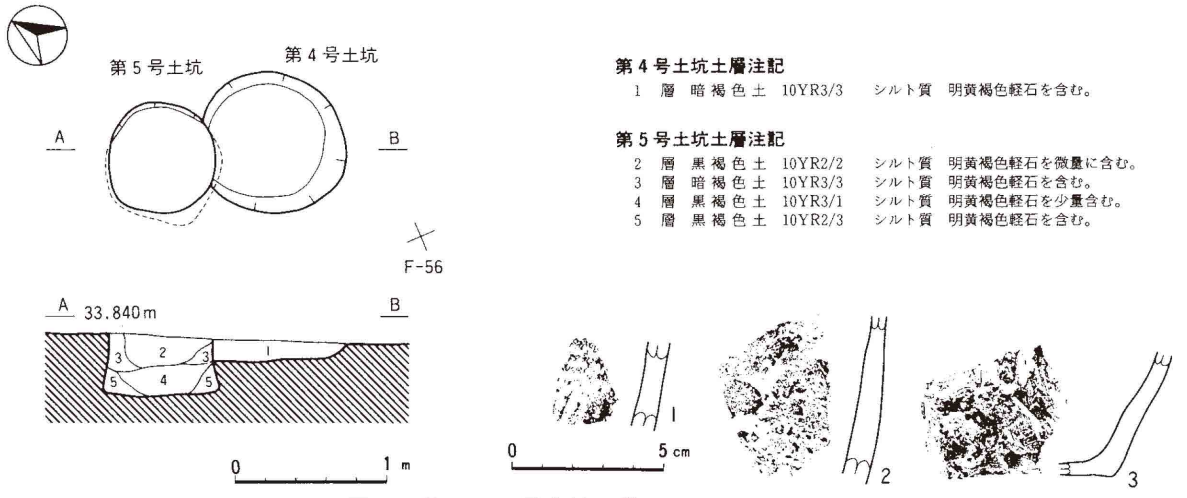
［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.76m、短径0.74m、底面で長径0.87m、短径0.77mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は40～36cmで、遺構の北東側を除いて底面が確認面よりも外側に張り出すため、この部分では壁の断面形がフラスコ状になっている。全体的に壁面の崩落が著しいので、北東側では壁の上部が崩れたものと考えられる。底面は中央部がやや凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）がやや多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものと考えられ、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］　覆土から、Ⅱ－１類とみられる深鉢形土器、Ⅲ－１～２類土器などが４片（約60ｇ）出土した。

表９　第５号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
20－１	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	結束第１種羽状縄文(LR＋RL)横位	
20－２	Ⅱ－１？	フク土	深鉢・胴部	縄文？	胎土に繊維含
20－３	Ⅴ？	フク土	鉢類・底部	無文	



第４号土坑土層注記
1　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石を含む。

第５号土坑土層注記
2　層　黒褐色土　10YR2/2　シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
3　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石を含む。
4　層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
5　層　黒褐色土　10YR2/3　シルト質　明黄褐色軽石を含む。

図20　第４・５号土坑・第５号土坑出土土器

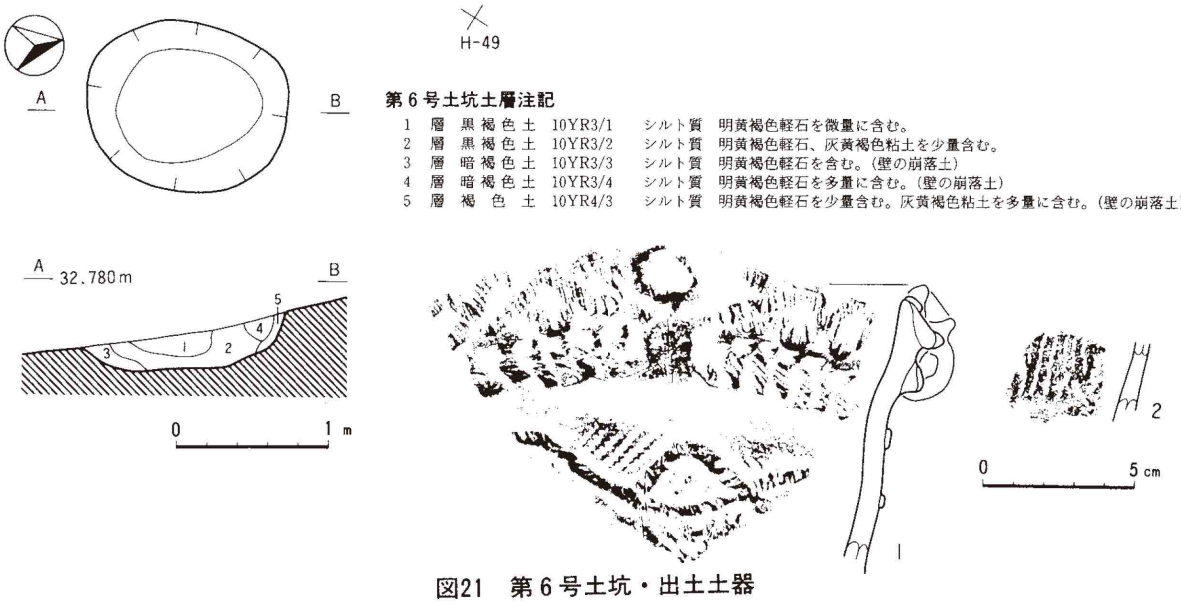
第６号土坑（図21、表10）

［位置・確認］Ｇ－48グリッドに位置する。第Ⅳ～Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.34m、短径1.10m、底面で長径0.96m、短径0.74mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は28～12cmで、全体的に壁面の崩れが著しいため、壁の傾斜も緩くなっている。底面には凹凸があり、全体として南に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）が多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－１類土器、Ⅲ－３～Ⅳ－１類土器などが７片（約200ｇ）出土した。



第６号土坑土層注記
1　層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
2　層　黒褐色土　10YR3/2　シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。
3　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石を含む。（壁の崩落土）
4　層　暗褐色土　10YR3/4　シルト質　明黄褐色軽石を多量に含む。（壁の崩落土）
5　層　褐色土　10YR4/3　シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。灰黄褐色粘土を多量に含む。（壁の崩落土）

図21　第６号土坑・出土土器

表10　第６号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
21－1	Ⅲ－1・円筒上層C	フク土	深鉢・口縁部	口端～口頸部に隆線(縄側面圧痕L)・円形、把手状貼付・刺突・縄文(LR)横位	
21－2	Ⅲ－3～Ⅳ－1	フク土	深鉢・胴部	単軸絡条第１類(R)縦位	

第７号土坑（図22）

［位置・確認］Ｋ－55グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.76m、短径0.62m、底面で長径0.65m、短径0.56mである。遺構は第Ｖ層を掘り込んで作られ、第Ｖ層上面を底面としている。確認面からの壁高は34～28cmで、全体的に壁はかなり急角度で掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土と黒色土を主体とし、南東壁寄りに明黄褐色軽石の移化した灰黄褐色粘土（第Ｖ層）が多く混入している。また、遺構の中央部にも明黄褐色軽石（第Ｖ層）のブロックがみられる。４、５層は壁面の崩落土とは考えられず人為堆積の状況を示すとみられる。

［出土遺物］出土しなかった。

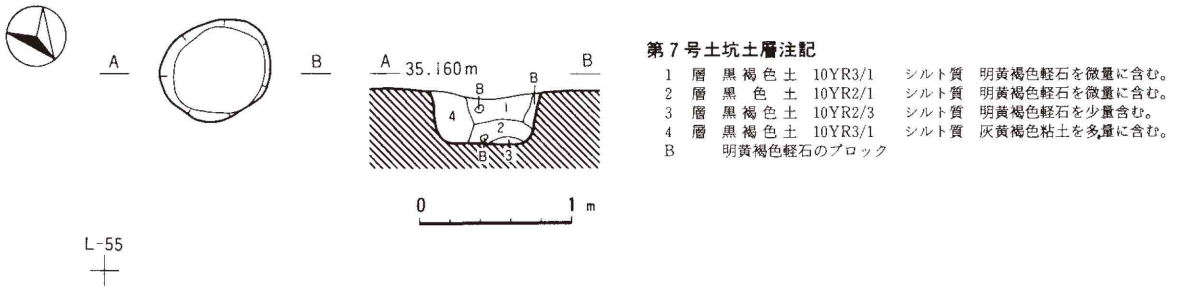


図22　第７号土坑

第８号土坑（図23、表11）

［位置・確認］Ｎ－56グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともかなり不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.31m、短径1.15m、底面で長径1.00m、短径0.76mである。遺構は第Ｖ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は33～27cmで、全体的に壁面の崩れが目立ち、壁の傾斜も緩くなっている。底面には緩い凹凸があり、全体として北に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ｖ層）が多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅳ－２類かと思われる深鉢形土器などが２片（約20ｇ）出土した。

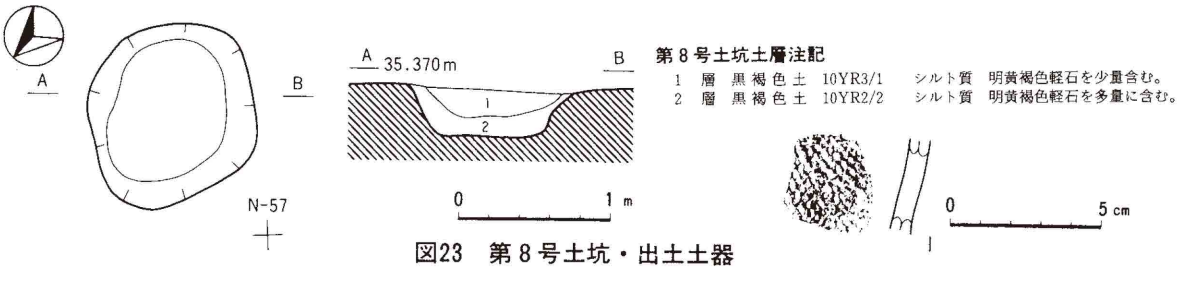


図23　第８号土坑・出土土器

表11　第８号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
23－１	Ⅳ－２？	フク土	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	

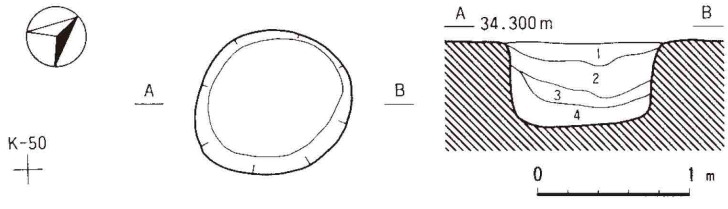
第９号土坑（図24）

［位置・確認］Ｋ－49・50グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.09m、短径0.97m、底面で長径0.90m、短径0.77mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は53～49cmで、壁は全体的に垂直に近い角度で掘り込まれている。底面は中央部がやや凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とする。互層的に増減するように明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が混入しており、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］覆土から、時期不明の土器細片が９片（約20ｇ）出土した。



第９号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を含む。
3	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
4	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を含む。

図24　第９号土坑

第10号土坑（図25、表12）

［位置・確認］Ｈ・Ｉ－44グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

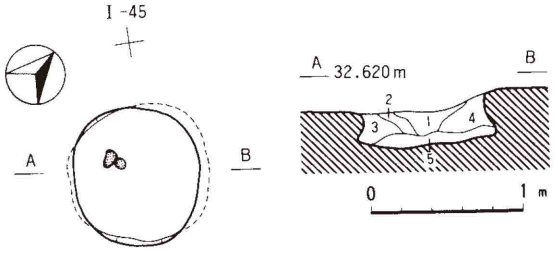
［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.93m、短径0.90m、底面で長径0.98m、短径0.90mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は30～18cmで、遺構の大部分では底面が確認面よりも外側に張り出すため、壁の断面形がフラスコ状になっている。底面には大きな凹凸があり、全体として南に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）がやや多く混入している。底面直上には、炭化物を含む黒褐色土層（５層）が堆積している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、底面直上層を除いて、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－２類（円筒上層ｄ式）の小型深鉢形土器が１個体（破片を接合、復元）出土したほか、Ⅲ－１類土器（円筒下層ｃ式）、Ⅲ－２類土器などが18片（約240ｇ）、礫が２点出土した。

表12　第10号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
25－1	Ⅲ－2・円筒上層d	フク土	深鉢・口縁～底部	隆線(縄文RL)・結束第1種羽状縄文？	復元土器
25－2	Ⅲ－1・円筒上層c	フク土	深鉢・口縁～胴部	扇状突起・隆線・刺突	
25－3	Ⅲ－2	フク土	深鉢・突起部	扇状突起(孔付)・縄文(LR)横位	
25－4	Ⅲ－1・円筒上層c	フク土	深鉢・突起部	扇状突起・把手状貼付・隆線(縄文RL)・刺突	
25－5	Ⅴ？	フク土	深鉢・口縁部	小波状口縁・縄文(RL)横位	



第10号土坑土層注記

1　層　黒褐色土　10YR2/2　シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
2　層　黒褐色土　10YR3/2　シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。焼土を少量含む。
3　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。
4　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土をブロック状で含む。
5　層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。炭化物を含む。

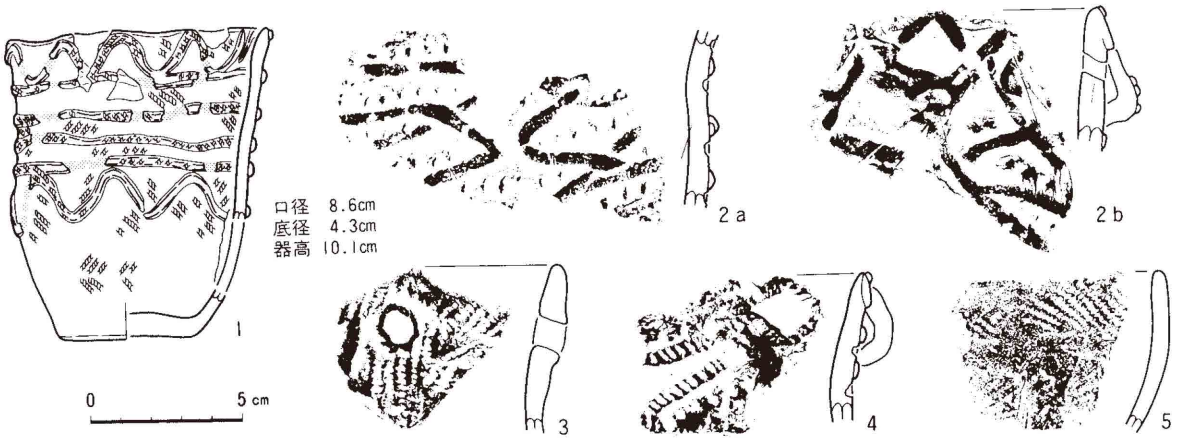


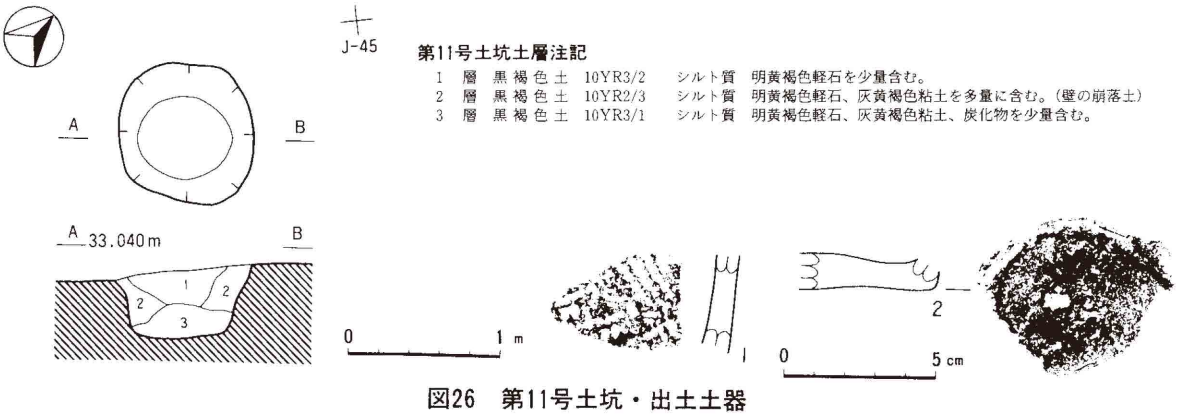
図25　第10号土坑・出土土器

第11号土坑（図26、表13）

［位置・確認］Ⅰ－44グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.00m、短径0.94m、底面で長径0.62m、短径0.54mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は48～35cmで、全体的に壁面の崩れが著しく、壁の傾斜も緩くなっている。底面は、中央部がやや凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）が多く



第11号土坑土層注記

1　層　黒褐色土　10YR3/2　シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
2　層　黒褐色土　10YR2/3　シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。（壁の崩落土）
3　層　黒褐色土　10YR3/1　シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土、炭化物を少量含む。

図26　第11号土坑・出土土器

混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－１～２類ほかの深鉢形土器が16片（約130ｇ）出土した。

表13　第11号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
26－１	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	結束第１種羽状縄文(LR＋RL)横位	
26－２	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・底部	底面に編物状の圧痕？	

第12号土坑（図27・28、表14・15）

［位置・確認］Ⅰ－45グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土と黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.91m、短径0.88m、底面で長径0.68m、短径0.66mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は38～20cmで、部分的に壁面の崩れがみられ、壁の傾斜も緩くなっている。底面には緩い凹凸があり、全体として少し東に傾斜している。

［堆積土］暗褐色土と黒褐色土を主体とし、遺構の上部と壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）とそのブロック、灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）等が多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入状態は、全体としてやや不自然な状態とみなされる。遺物の出土状態とも考えあわせると、この遺構は人為的に

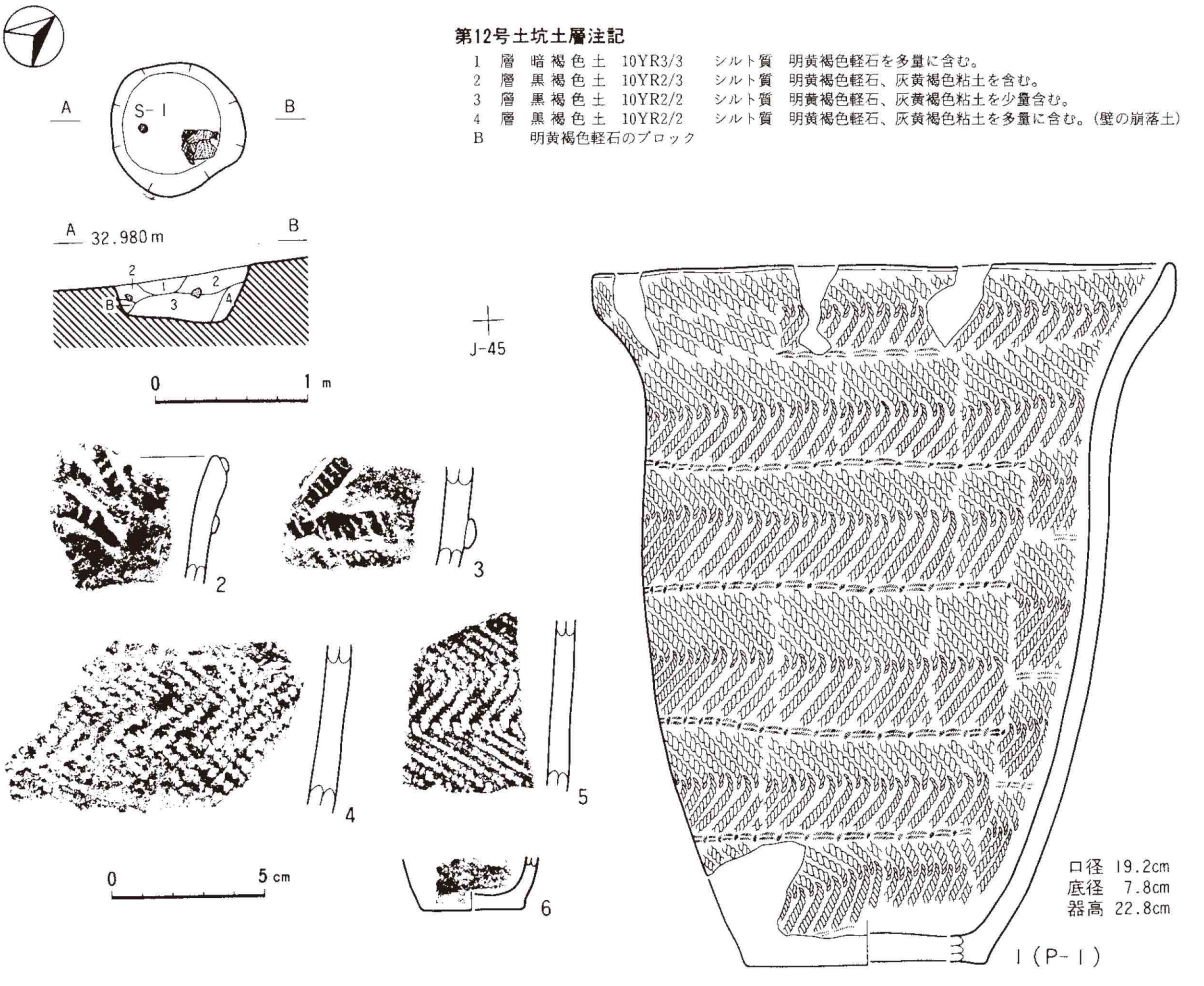


図27　第12号土坑・出土土器

埋められたようである。

［出土遺物］東壁際の底面から、略完形のⅢ－１～２類深鉢形土器（Ｐ－１）が、横転し潰れた状態で出土した。また南西壁寄りの底面から、安山岩のⅢ－３類石器（すり石）欠損品（Ｓ－１）が１点出土した。覆土からは、Ⅲ－１～２類土器などが24片（約260ｇ）、珪質頁岩のⅡ－６類石器（Ｕフレイク）が１点、珪質頁岩の剥片が１点出土した。

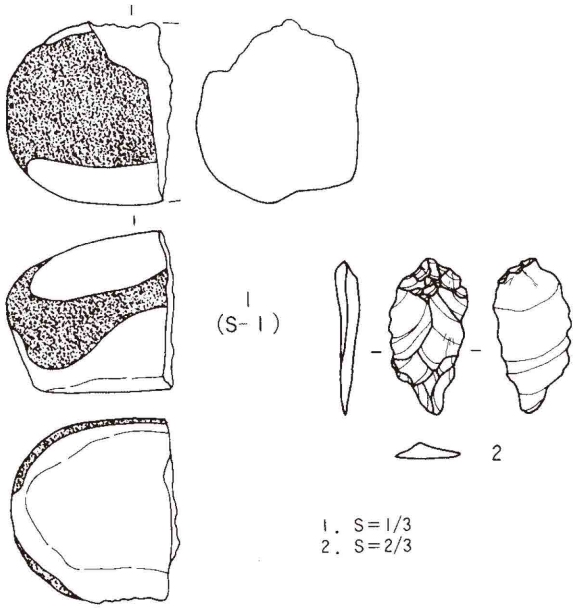


図28　第12号土坑出土石器

表14　第12号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
27－1	Ⅲ－1～2	床面	深鉢・略完形	結束第1種羽状縄文(LR+RL、結節付)横位	復元土器
27－2	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・口縁部	口端－口頸部に隆線(刻目)・縄文？	
27－3	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	隆線(刻目)	
27－4	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	結束第1種羽状縄文(LR+RL)横位	
27－5	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	結束第1種羽状縄文(LR+RL)横位	
27－6	Ⅴ？	フク土	鉢類・底部	縄文(LR？)	

表15　第12号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
28－1	Ⅲ－3・すり石	床面	(6.4)×7.3×6.4	(442.0)	安山岩	すり面・欠損品
28－1	Ⅱ－6・Uフレイク	フク土	3.1 ×1.6×0.5	1.1	珪質頁岩	

第13号土坑（図29、表16）

［位置・確認］Ｊ－45グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

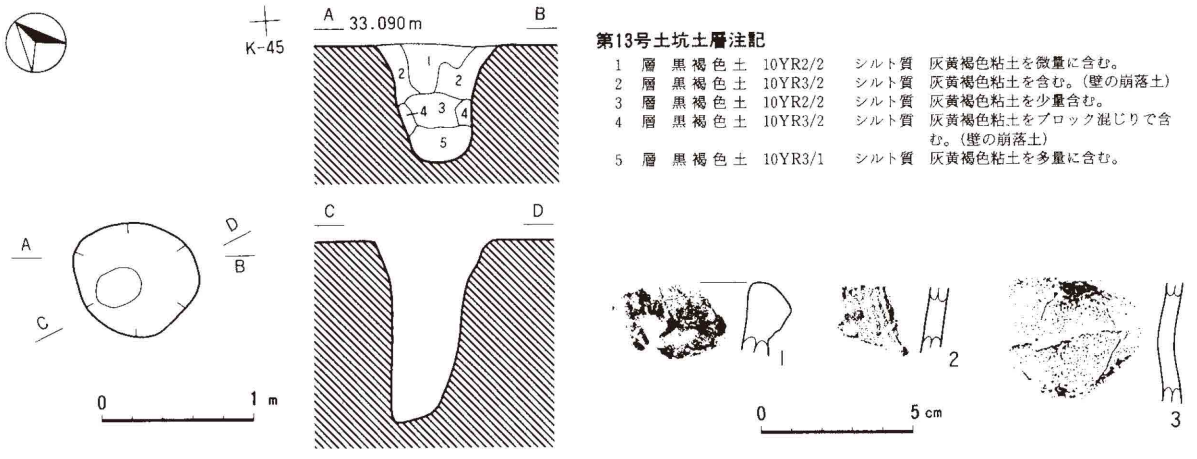
［形態・規模］平面形は確認面でかなり不整な円形、底面では小さな楕円形となっている。大きさは確認面で長径0.80m、短径0.78m、底面で長径0.32m、短径0.24mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は1.20m～1.16mで、かなり深く掘り込まれたものである。遺構の上部は壁面の崩れが著しく、底面に比べて上部の壁が大きく開いている。底面は、西に傾斜している。

［堆積土］最初に設定したセクション図の位置が底面とずれてしまったので、堆積土を最下部まで図化できなかった。黒褐色土を主体とし、壁寄りから下部に灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）とそのブロックが多く混入している。灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－３～Ⅳ－１類土器などが９片（約50ｇ）出土した。

表16　第13号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
29－1	Ⅲ？	フク土	鉢類・突起部	折返し状山形突起	
29－2	Ⅲ－3・Ⅳ－1	フク土	深鉢・胴部	単軸絡状体第1類(L?)縦位	
29－3	Ⅳ－2？	フク土	深鉢・突起部	山形突起・無文	



第13号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	灰黄褐色粘土を微量に含む。
2	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質	灰黄褐色粘土を含む。（壁の崩落土）
3	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	灰黄褐色粘土を少量含む。
4	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質	灰黄褐色粘土をブロック混じりで含む。（壁の崩落土）
5	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質	灰黄褐色粘土を多量に含む。

図29　第13号土坑・出土土器

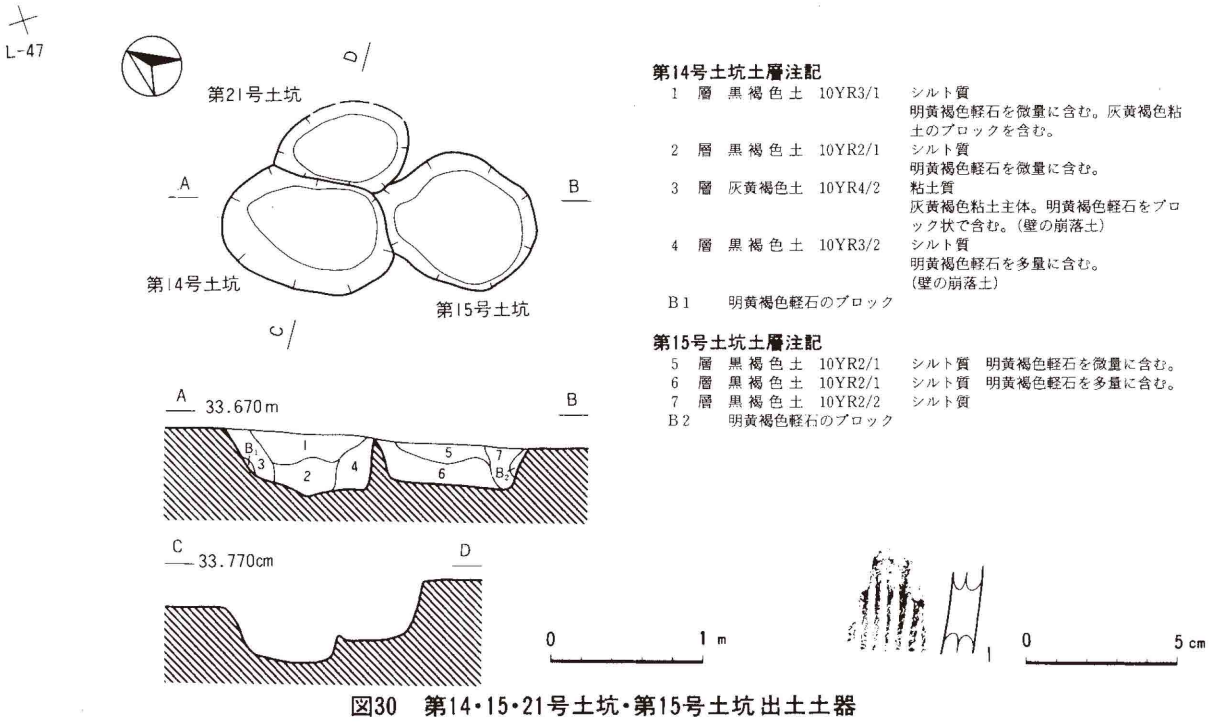
第14号土坑（図30）

［位置・確認］K－46グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［重複関係］遺構の南東側で第15号土坑と、北東側では第21号土坑と接するように重複しているが、これらの新旧関係についてははっきりしない。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともにかなり不整な楕円形となっている。大きさ（現存値）は確認面で長径1.15m、短径0.73m、底面で長径0.86m、短径0.53mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、主に第Ⅴ、一部第Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は35～26cmで、全体に壁面の崩れが著しく、壁の傾斜が緩くなっている。底面は、中央部が凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りに黒色腐食土（第Ⅲ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）の混合土が混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。



第14号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質 明黄褐色軽石を微量に含む。灰黄褐色粘土のブロックを含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/1	シルト質 明黄褐色軽石を微量に含む。
3	層	灰黄褐色土	10YR4/2	粘土質 灰黄褐色粘土主体。明黄褐色軽石をブロック状で含む。（壁の崩落土）
4	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質 明黄褐色軽石を多量に含む。（壁の崩落土）
B1		明黄褐色軽石のブロック		

第15号土坑土層注記

5	層	黒褐色土	10YR2/1	シルト質	明黄褐色軽石を微量に含む。
6	層	黒褐色土	10YR2/1	シルト質	明黄褐色軽石を多量に含む。
7	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	
B2		明黄褐色軽石のブロック			

図30　第14・15・21号土坑・第15号土坑出土土器

［出土遺物］出土しなかった。

第15号土坑（図30、表17）

［位置・確認］K－46グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［重複関係］遺構の北西側で第14号土坑と、北側では第21号土坑と接するように重複しているが、これらの新旧関係は不明である。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともにかなり不整な楕円形となっている。大きさ（現存値）は確認面で長径1.10m、短径0.85m、底面で長径0.85m、短径0.67mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は27～15cmで、全体に壁面の崩れがみられ、壁の傾斜もやや緩くなっている。底面はほぼ平坦であるが、全体として南東に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）とそのブロックが多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－３～Ⅳ－１類の深鉢形土器が１片（約20ｇ）出土した。

表17　第15号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
30－1	Ⅲ－3～Ⅳ－1	フク土	深鉢・胴部	単軸絡状体第1類(R)縦位	

第16号土坑（図31、表18）

［位置・確認］K－42グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.11m、短径1.00m、底面で長径0.98m、短径0.92mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は35～23cmで、全体に壁面の崩れが著しい。遺構の北西側では底面が確認面よりも外側に張り出すため、壁の断面形がフラスコ状になっているが、この他の壁は（壁面の崩落によって）上部が開いている。底面は、中央部が凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）灰黄褐色・黄灰色粘土（第Ⅵ層）が多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色・黄灰色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－１～２類の深鉢形土器などが３片（40ｇ）出土した。

表18　第16号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
31－1	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	縄文(RL)斜位	

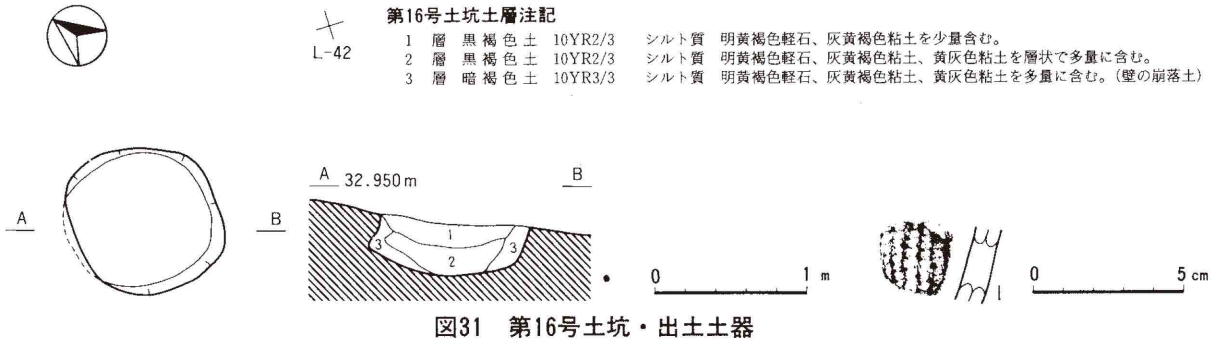


図31　第16号土坑・出土土器

第17号土坑（図32・33、表19・20）

［位置・確認］K－42グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［重複関係］遺構の北西側を、第18号土坑によって切られている。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともかなり不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.94m、短径0.93m、底面で長径1.02m、短径0.94mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は31～20cmで、遺構の西側は壁上部の崩れが著しい。南西側を除いて、底面が確認面よりも外側に張り出すため、壁の断面形がフラスコ状になっている。底

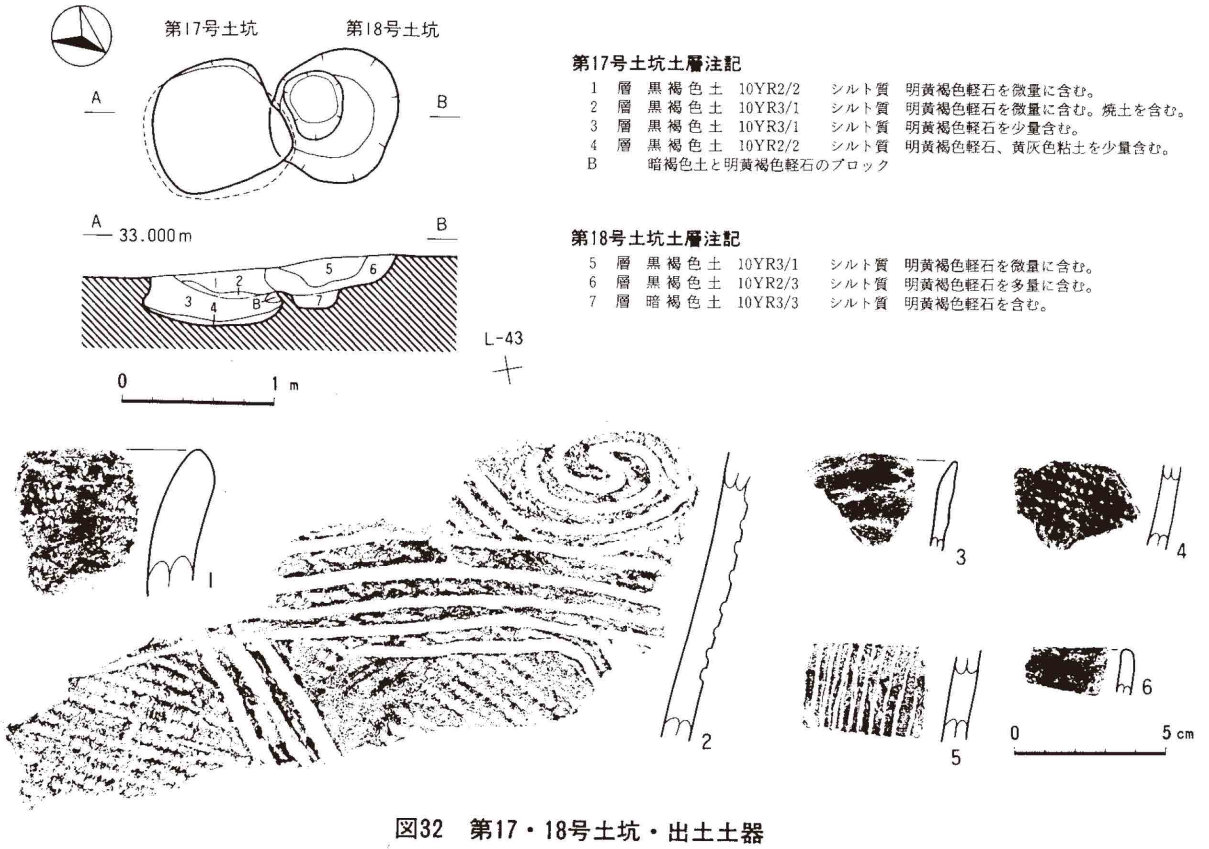


図32　第17・18号土坑・出土土器

面は中央部が大きく凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）とそのブロックが少し混入している。全体的に堆積土は自然堆積の状態を示すと思われるが、中ほどには焼土を含む薄い層（２層）がみられる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－２類（円筒上層ｅ式）ほかの深鉢形土器が23片（約310ｇ）、安山岩のⅢ－３類石器（すり石）が１点出土した。

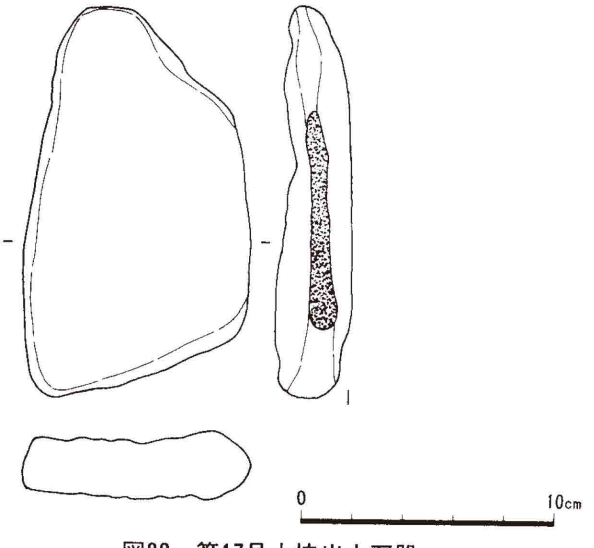


図33　第17号土坑出土石器

表19　第17号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
32－1	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	隆線剥離？
32－2	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)横位	
32－3	Ⅳ？	フク土	深鉢・口縁部	無文	
32－4	Ⅳ？	フク土	深鉢・胴部	縄文(RL？)	

表20　第17号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
33－1	Ⅲ－3・すり石	フク土	15.4×8.9×3.0	452.0	安山岩	すり面

第18号土坑（図32、表21）

［位置・確認］K－42グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［重複関係］第17号土坑の北西側を切っている。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさ（現存値）は確認面で長径0.89m、短径0.83m、底面で長径0.63m、短径0.54mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は25～13cmで、残存部分の壁は傾斜が緩く開いている。底面は全体として南東に傾斜し、底面の南側には長径45cm、短径39cm、深さ13cmの小ピットが作られている。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

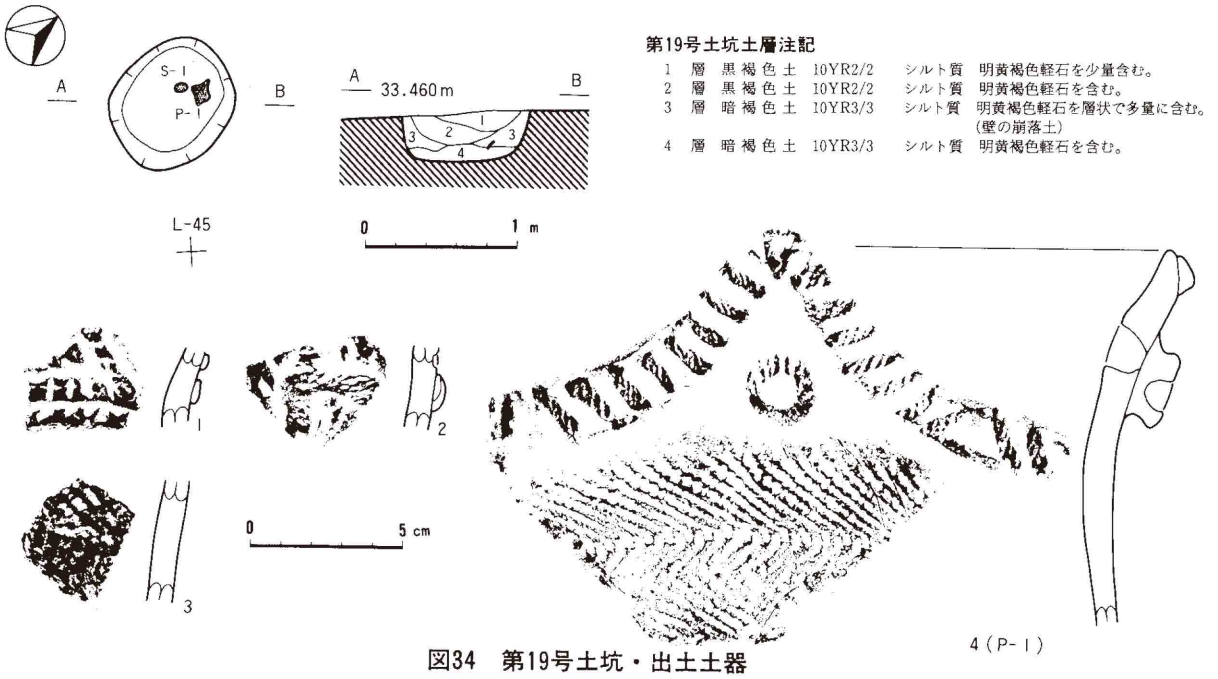
［出土遺物］覆土から、Ⅲ－3～Ⅳ－1類ほかの深鉢形土器が6片（約40g）出土した。

表21　第18号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
32－5	Ⅲ－3～Ⅳ－1	フク土	深鉢・胴部	単軸絡状体第1類(L？)縦位	
32－6	Ⅳ	フク土	深鉢・口縁部	無文	

第19号土坑（図34・35、表22・23）

［位置・確認］K・L－45グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整



第19号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を含む。
3	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を層状で多量に含む。（壁の崩落土）
4	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を含む。

図34　第19号土坑・出土土器

楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径0.92m、短径0.76m、底面で長径0.70m、短径0.55mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は29～25cmで、壁面の崩落によって壁の傾斜が少し緩くなっている。底面には少し凹凸があり、全体として南に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

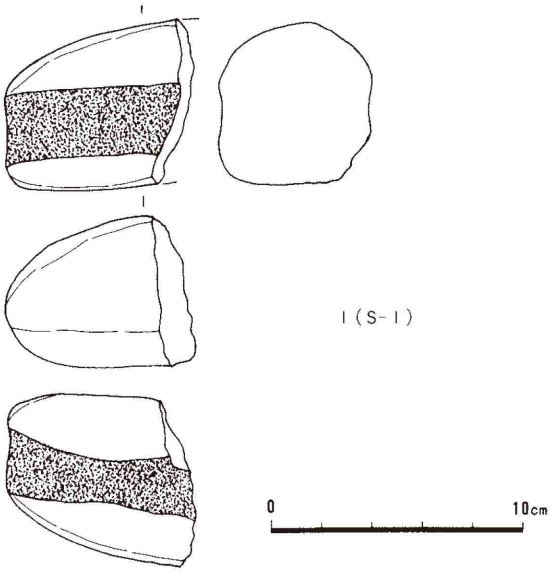


図35　第19号土坑出土石器

［出土遺物］やや北寄りの底面から、安山岩のⅢ－２類石器（石冠？）欠損品（Ｓ－１）が出土した。覆土からは、Ⅲ－１～２類土器（円筒上層ｃ式ほか）が14片（約320ｇ）出土した。

表22　第19号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
34－1	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕L)・縄文(RL？)横位	
34－2	Ⅲ－1・円筒上層c	フク土	深鉢・胴部	隆線(縄文？)・刺突	
34－3	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	結束第1種羽状縄文？	
34－4	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・口縁部	山形突起・口端に隆線(縄側面圧痕L)・円形貼付・盲孔・結束第1種羽状縄文	

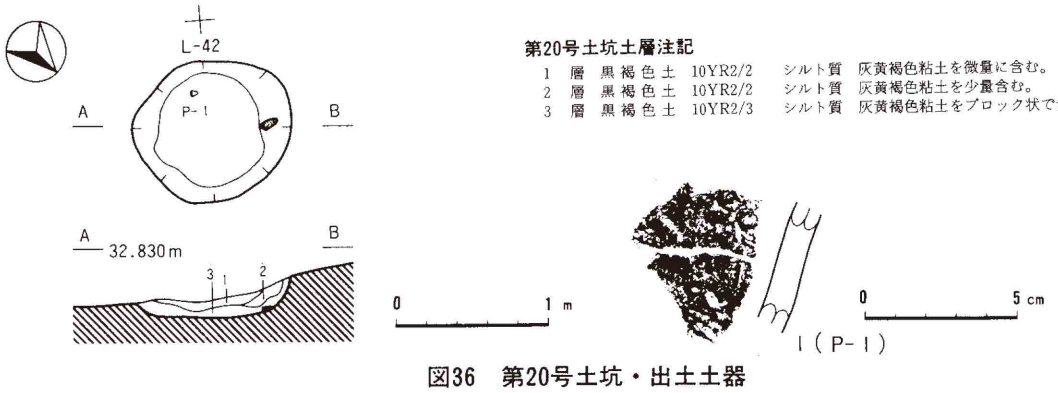
表23　第19号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
35－1	Ⅲ－2・石冠？	床面	(7.5)×6.8×6.0	(413.5)	安山岩	すり痕・欠損品

第20号土坑（図36、表24）

［位置・確認］Ｌ－41・42グリッドに位置する。第Ⅴ～Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面で不整楕円形、底面ではかなり不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.10m、短径0.94m、底面で長径0.74m、短径0.73mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は22～8cmで、壁面の崩落によって壁の傾斜が緩くなっている。底面には少し凹凸がある。



第20号土坑土層注記

1　層　黒褐色土　10YR2/2　シルト質　灰黄褐色粘土を微量に含む。
2　層　黒褐色土　10YR2/2　シルト質　灰黄褐色粘土を少量含む。
3　層　黒褐色土　10YR2/3　シルト質　灰黄褐色粘土をブロック状で含む。

図36　第20号土坑・出土土器

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りから下部に灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）のブロックが多く混入している。灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］底面から、Ⅲ－１～２類の深鉢形土器胴部片（Ｐ－１）と礫１点が出土した。覆土からは、Ⅲ－１～２類の深鉢形土器が２片（約40ｇ）出土した。

表24　第20号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
36－1	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	縄文(LR)横位	

第21号土坑（図30）

［位置・確認］Ｋ－46グリッドに位置する。第Ｖ上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［重複関係］遺構の西側で第14号土坑と、南西側では第15号土坑と接するように重複しているが、これらの新旧関係は不明である。

［形態・規模］西壁は木根等の撹乱によりはっきりしないが、平面形は確認面、底面ともに不整な楕円形となっている。大きさ（現存推定値）は確認面で長径0.91m、短径0.64m、底面で長径0.68m、短径0.45mである。遺構は第Ｖ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は35cmほどで、全体に不明瞭な掘り方となっている。底面にはやや凹凸があり、全体として南西に傾斜している。

［堆積土］セクション図を作成しなかったが、堆積土は黒褐色土を主体とし、自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］出土しなかった。

第22号土坑（図37）

［位置・確認］Ｎ－43・44グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.21m、短径1.15m、底面で長径0.82m、短径0.76mである。遺構は第Ｖ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は32～10cmで、全体的に壁の上部が大きく開く形態となっている。底面には緩い凹凸がある。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ｖ層）が上部より多めに混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］出土しなかった。

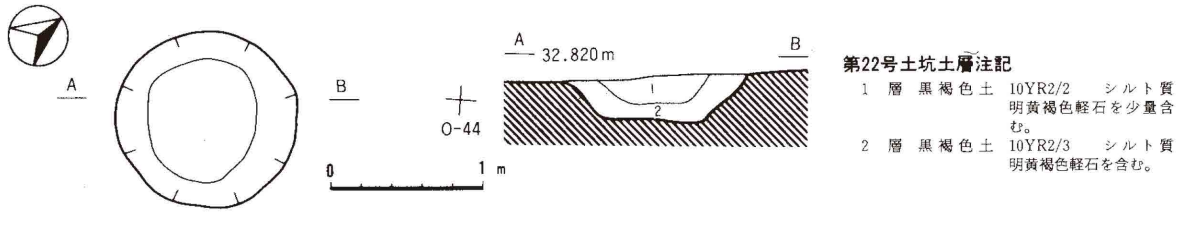


図37　第22号土坑

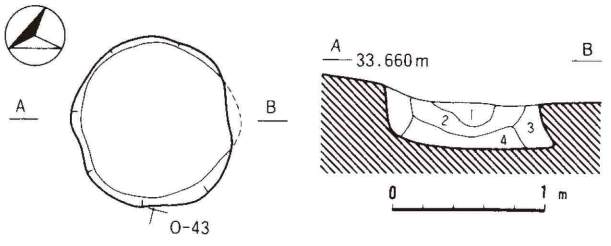
第23号土坑（図38）

［位置・確認］N・O－42、O－43グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.14m、短径1.05m、底面で長径1.04m、短径1.00mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は37～28cmで、南壁側では部分的に底面が確認面より外側に張り出すフラスコ形になっているが、他の部分では壁の上部が少し開く形態となっている。底面には緩い凹凸があり、全体として南東に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）が多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］出土しなかった。



第23号土坑土層注記

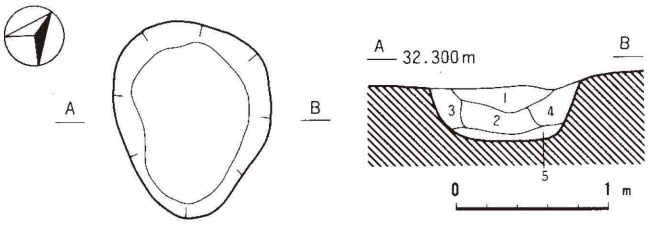
1	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
3	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。（壁の崩落土）
4	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。

図38　第23号土坑

第24号土坑（図39・40、表25）

［位置・確認］O－42グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともかなり不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.33m、短径1.04m、底面で長径1.06m、短径0.78mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は50～17cmで、部分的には壁面の崩れが目立ち、全体に壁の上部が開く形態となっている。底面は北西側が少し凹んだ状態であるが、全体としても北西に傾斜している。



第24号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
3	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を多量に含む。
4	層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質　明黄褐色軽石、炭化物を含む。
5	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質

図39　第24号土坑

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、南西側の壁寄りには明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が

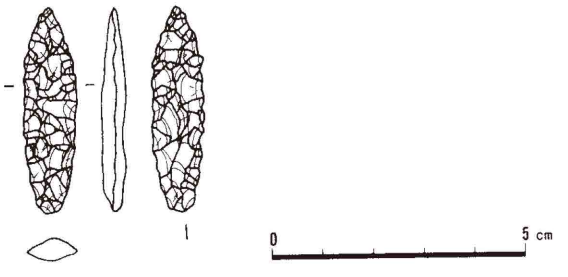


図40　第24号土坑出土石器

多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、珪質頁岩のⅡ－１類石器（石鏃）が１点出土した。

表25　第24号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
40－1	Ⅲ－1・石鏃	フク土	4.1×1.1×0.5	2.0	珪質頁岩	

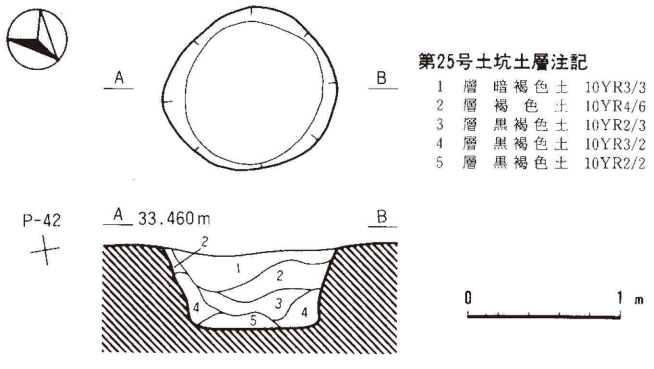
第25号土坑（図41）

［位置・確認］O－42グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.15m、短径1.04m、底面で長径0.95m、短径0.90mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は52～18cmで、壁面は上部の崩れが目立ち、全体に壁の中ほどから上部が開く形態となっている。底面はほぼ平坦である爪全体として北東に少し傾斜している。

［堆積土］上部は暗褐色土と褐色土、下部は黒褐色土を主体とし、下部よりも上部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と黄灰色粘土（第Ⅵ層）が多く含まれている。堆積土の下部は自然堆積の状態をとみられるが、上部は地山の土（第Ⅴ・Ⅵ層）で人為的に埋められたものと思われる。

［出土遺物］出土しなかった。



第25号土坑土層注記

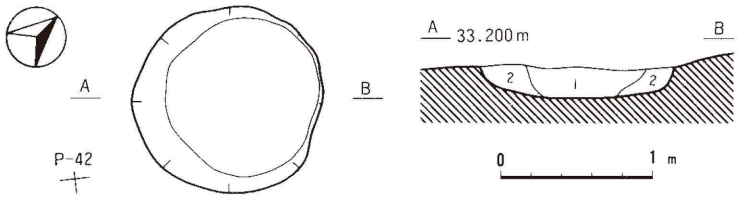
1	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石、黄灰色粘土を含む。
2	層	褐色土	10YR4/6	やや粘土質　明黄褐色軽石、黄灰色粘土主体。暗褐色土を含む。（埋め土？）
3	層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質　明黄褐色軽石、黄灰色粘土を少量含む。
4	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質　明黄褐色軽石、黄灰色粘土を少量含む。
5	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　黄灰色粘土の小ブロックを含む。

図41　第25号土坑

第26号土坑（図42）

［位置・確認］P－41・42グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.26m、短径1.24m、底面で長径1.03m、短径1.02mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ



第26号土坑土層注記

1	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
2	層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質　明黄褐色軽石、黄灰色粘土を多量に含む。（壁の崩落土）

図42　第26号土坑

層を底面としている。確認面からの壁高は26～12cmで、南西側では特に壁面の崩れが著しく、北東側に比べて壁の傾斜が緩くなっている。底面には少し凹凸があり、全体として南東に傾斜している。

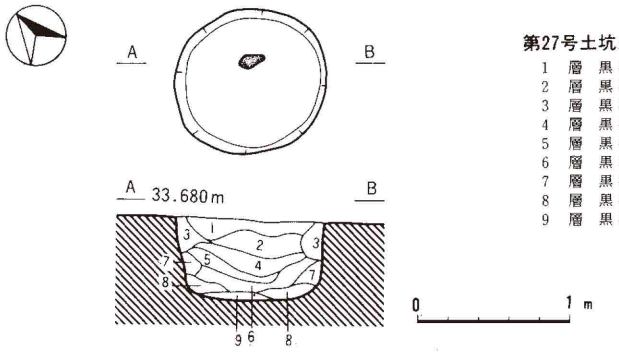
［堆積土］暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と黄灰色粘土（第Ⅵ層）が多く混入している。明黄褐色軽石と黄灰色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］出土しなかった。

第27号土坑（図43・44、表26）

［位置・確認］M－44グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともほぼ円形となっている。大きさは確認面で長径1.03m、短径0.95m、底面で長径0.91m、短径0.84mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は56～45cmで、全体に壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。底面は、中央部が少し凹んだ状態になっている。



第27号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質	明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質	明黄褐色軽石を少量含む。
3	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質	明黄褐色軽石を含む。
4	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	明黄褐色軽石を小ブロック状で多量に含む。
5	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	明黄褐色軽石を含む。
6	層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質	明黄褐色軽石を少量含む。
7	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質	明黄褐色軽石を多量に含む。
8	層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質	明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を層状に含む。
9	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質	灰黄褐色粘土、炭化物を含む。

図43　第27号土坑

［堆積土］黒褐色土を主体とし、下部では壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）が多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものと思われるが、堆積土の中ほどにも明黄褐色軽石の小ブロックを多く含む層（４層）がみられる。また底面直上には、炭化物を含む薄い黒褐色土（９層）が堆積している。

［出土遺物］やや北東寄りの底面から、礫が１点出土した。覆土からは、凝灰岩のⅢ－１類石器が１点出土した。

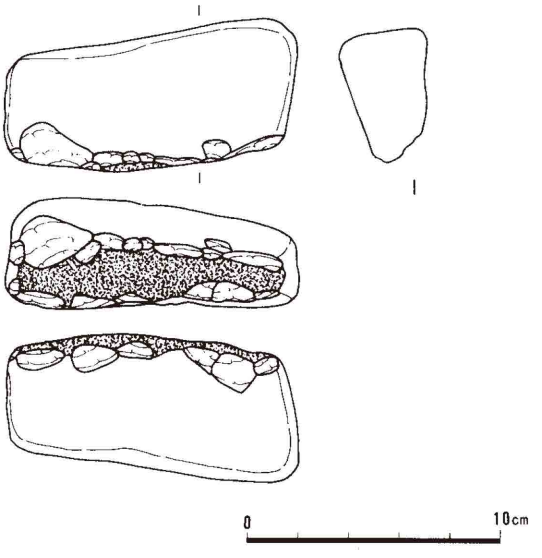


図44　第27号土坑出土石器

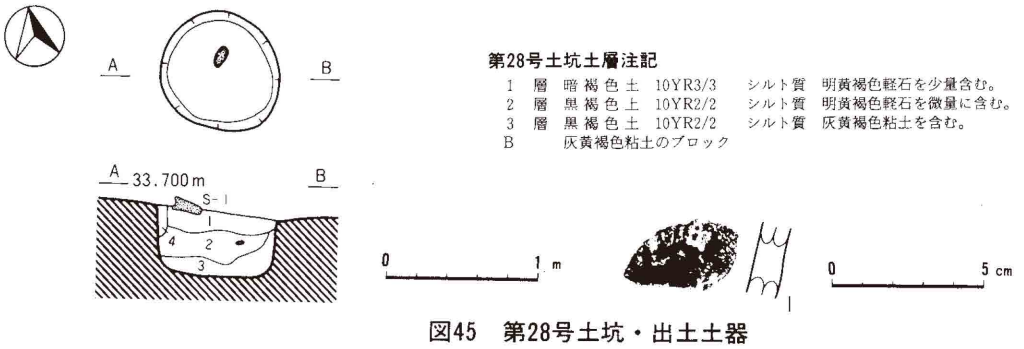
表26　第27号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
44－1	Ⅲ－1	フク土	11.6×5.9×4.4	339.6	凝灰岩	すり面・剥離痕

第28号土坑（図45・46、表27・28）

［位置・確認］M－43・44グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径0.82m、短径0.76m、底面で長径0.71m、短径0.67mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は40～35cmで、全体に壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。底面はほぼ平坦であるが全体として少し南東に傾斜している。



第28号土坑土層注記

1	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
3	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　灰黄褐色粘土を含む。
B		灰黄褐色粘土のブロック		

図45　第28号土坑・出土土器

［堆積土］暗褐色土と黒褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）がやや多めに混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］やや北寄りの底面から、礫が１点出土した。覆土からは、Ⅲ－１～２類が１片（約20ｇ）、遺構確認面で、安山岩のⅢ－４類石器（石皿）欠損品（Ｓ－１）が１点出土した。

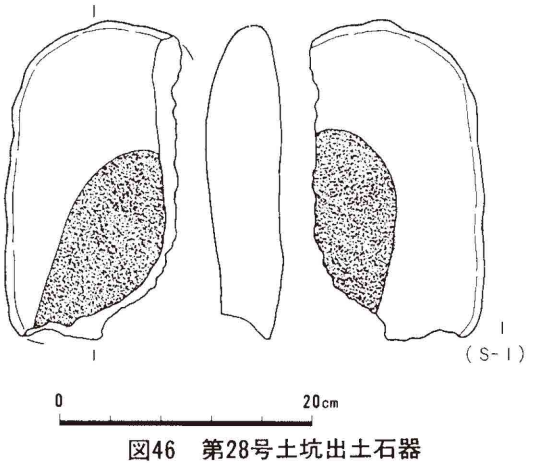


図46　第28号土坑出土石器

表27　第28号土坑出土土器観察表

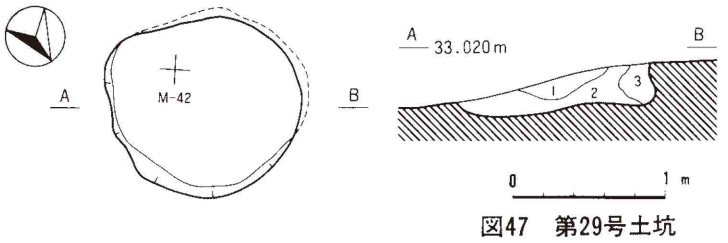
図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
45－1	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴部	縄文	

表28　第28号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
46－1	Ⅲ－4・石皿	フク土	(24.9)×(13.7)×6.1	(2,700.0)	安山岩	すり面・欠損品

第29号土坑（図47）

［位置・確認］L・M－41・42グリッドに位置する。第Ⅴ～Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整形）として確認した。



第29号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	灰黄褐色土	10YR4/2	粘土質　灰黄褐色粘土主体。明黄褐色軽石をブロック混じりで少量含む。
3	層	明黄褐色土	10YR7/6	やや粘土質　明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土主体。

図47　第29号土坑

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともかなり不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.32m、短径1.20m、底面で長径1.29m、短径1.17mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は36～7cmである。遺構の南西側では底面が確認面より少し外側に張り出すため、壁の断面形がフラスコ状になり、他の部分では壁の上部が開く形態になっている。底面には大きな凹凸があり、全体として南東に傾斜している。

［堆積土］暗褐色土と灰黄褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）がかなり多く混入している。明黄褐色軽右と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられるが、壁の大部分は削平されてはっきりしない。

［出土遺物］出土しなかった。

第30号土坑（図48・49、表29）

［位置・確認］L－43グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面では不整円形、底面ではほぼ円形となっている。大きさは確認面で長径0.97m、短径0.86m、底面で長径0.77m、短径0.74mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は46～38cmである。遺構の大部分では壁がかなり垂直に近い角度で掘り込まれているが、西側では一部壁の上部が崩れて開く形態になっている。底面は、中央部がやや凹んだ状態になっている。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）が多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は特に西壁側で著しいが、主に壁面の崩落による

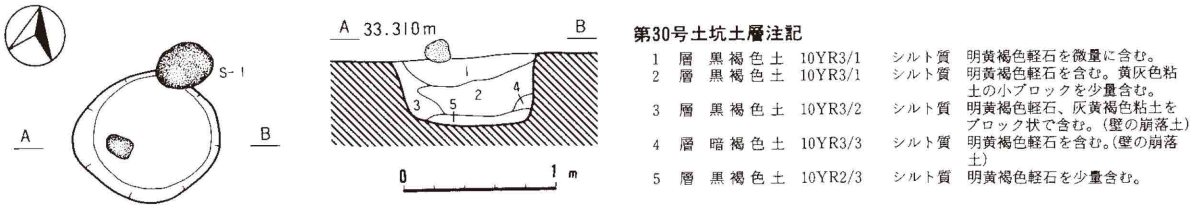


図48　第30号土坑

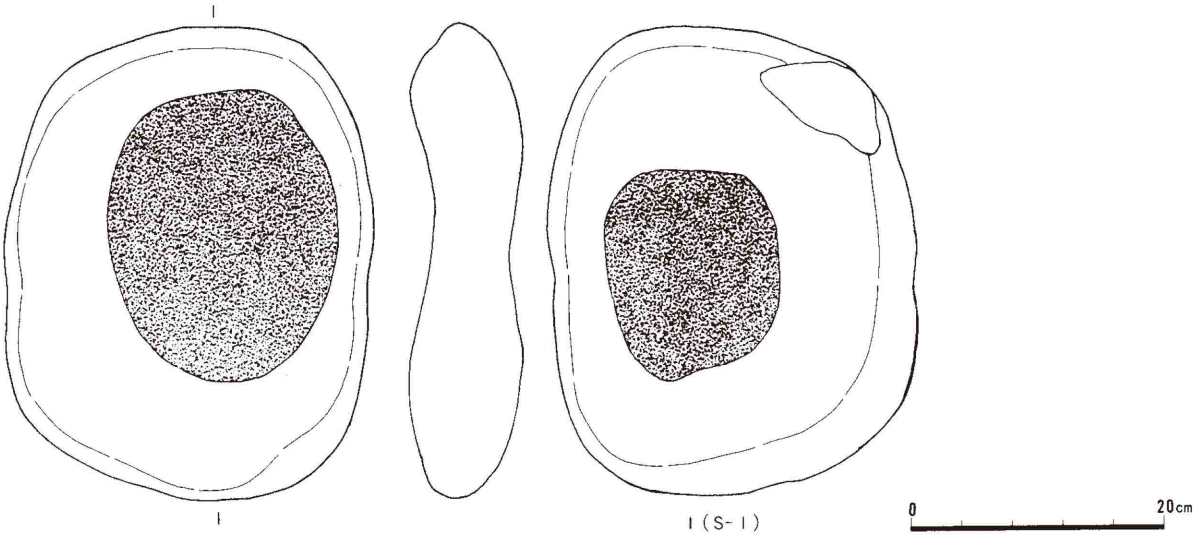


図49　第30号土坑出土石器

ものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］北壁上部の遺構確認面で、安山岩のⅢ－４類石器（石皿、Ｓ－１）が１点、また南西壁寄りの確認面で、礫が１点出土した。

表29　第30号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
49－１	Ⅲ－４・石皿	確認面	39.4×29.2×5.8	16,000.0	安山岩	すり痕

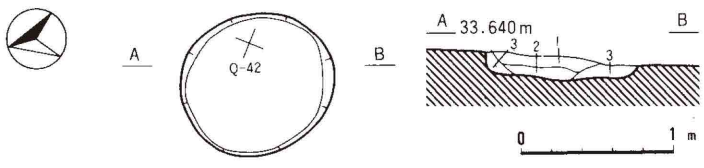
第31号土坑（図50）

［位置・確認］Ｐ・Ｑ－41・42グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.01m、短径0.92m、底面で長径0.93m、短径0.85mである。遺構は第Ｖ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ｖ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は23～4cmで、比較的遺存状態の良い東側では壁がかなり垂直に近い角度で掘り込まれている。底面には緩い凹凸がある。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ｖ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）がやや多めに混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］出土しなかった。



第31号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
3	層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。

図50　第31号土坑

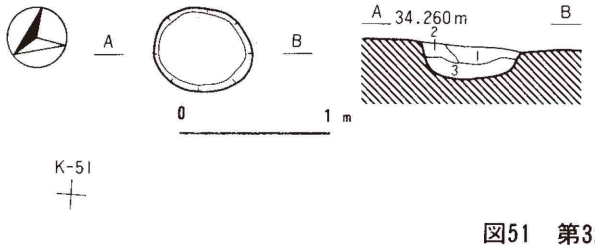
第32号土坑（図51）

［位置・確認］Ｊ－50グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土と褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともほぼ楕円形となっている。大きさは確認面で長径0.65m、短径0.54m、底面で長径0.57m、短径0.46mである。遺構は第Ｖ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は22～10cmで、全体的に壁の傾斜はやや緩くなっている。底面には凹凸があり、全体として少し南西に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とする。全体に明黄褐色軽石（第Ｖ層）が少し混入し、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］出土しなかった。



第32号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質　明黄褐色軽石、炭化物を微量に含む。
2	層	褐色土	10YR4/4	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
3	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。

図51　第32号土坑

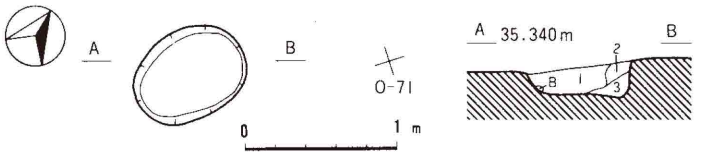
第33号土坑（図52）

［位置・確認］N－71グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともほぼ楕円形となっている。大きさは確認面で長径0.77m、短径0.59m、底面で長径0.70m、短径0.48mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は25～12cmである。遺存状態の良い北側では、壁が垂直に近い角度で掘り込まれている。底面には凹凸があり、全体としてかなり北に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とする。全体に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が少し混入し、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］出土しなかった。



第33号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
2	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
3	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。炭化物を微量に含む。
B		明黄褐色軽石のブロック		

図52　第33号土坑

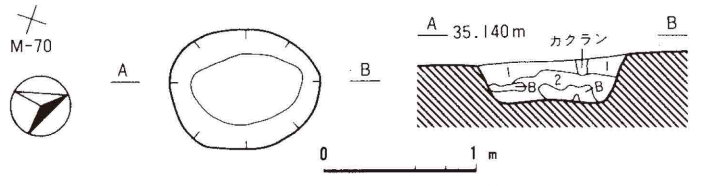
第34号土坑（図53）

［位置・確認］M－69・70グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.00m、短径0.79m、底面で長径0.75m、短径0.46mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は30～25cmで、全体的に壁の傾斜がやや緩くなっている。底面は中央部がやや高い状態になっている。

［堆積土］上部は黒褐色土、下部はにぶい黄褐色土を主体とする。下部には明黄褐色軽石（第Ⅴ層）のブロックと灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）が多く堆積し、人為的に埋められた可能性がある。

［出土遺物］出土しなかった。



第34号土坑土層注記

1	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
2	層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘土質　灰黄褐色粘土主体。明黄褐色軽石を少量含む。
B		明黄褐色軽石のブロック		

図53　第34号土坑

第35号土坑（図54）

［位置・確認］L－88グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.02m、短径0.76m、底面で長径0.74m、短径0.50mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は19～12cmで、北西側では特に壁の傾斜がかなり緩くなっている。底面には凹凸があり、全体として南東に傾斜している。

［堆積土］黒色土を主体とし、全体的に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）とそのブロックが少し混入している。堆積土は自然堆積した状態とみられる。

［出土遺物］出土しなかった。

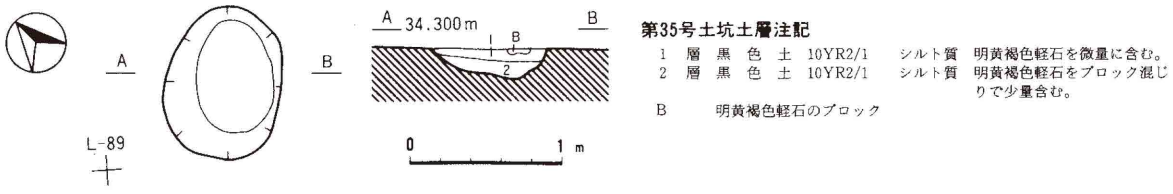


図54　第35号土坑

3　屋外炉

第１号屋外炉（図55、表30）

［位置・確認］Ⅰ－46グリッドに位置する。第Ⅳ層を掘り下げ中、炉石の一部を確認した。

［形態・規模］20～10cmほどの河原石を方形に組んだ石囲炉であるが、南側の石組は崩れている。炉石は第Ⅳ層上部に食い込んでいるが、はっきりした掘り方は認められなかった。石組の内部には、深鉢形土器の破片が少しまばらに敷き詰めたようになっている。石組から南東に約30ｃｍ離れた同一面で、この炉跡に伴うとみられる焼土（スクリーントーンの部分）を検出した。焼土は最厚８cmほどの黒褐色土に含まれ、長径37cm、短径26cmの大きさで、不整な楕円形に拡がっていた。

［堆積土］石組の内部には暗褐色土が堆積していたが、焼土等はみられなかった。

［出土遺物］石組炉の底面には、Ⅲ－３～Ⅳ－１類に含まれる深鉢形土器の同一個体片（Ｐ－１）が22片（約200ｇ）敷かれていた。また焼土の上面ないし焼土中から、Ⅲ－３～Ⅳ－１類に含まれる深鉢形土器などが21片（約180ｇ）出土した。

表30　第１号屋外炉出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
55－１	Ⅲ－３～Ⅳ－１	焼土上面	深鉢・胴部	縄文(LR)縦位	
55－２	Ⅲ－３～Ⅳ－１	炉底面	深鉢・胴～底部	縄文(LR)縦位、斜位・底面に笹葉状の圧痕	

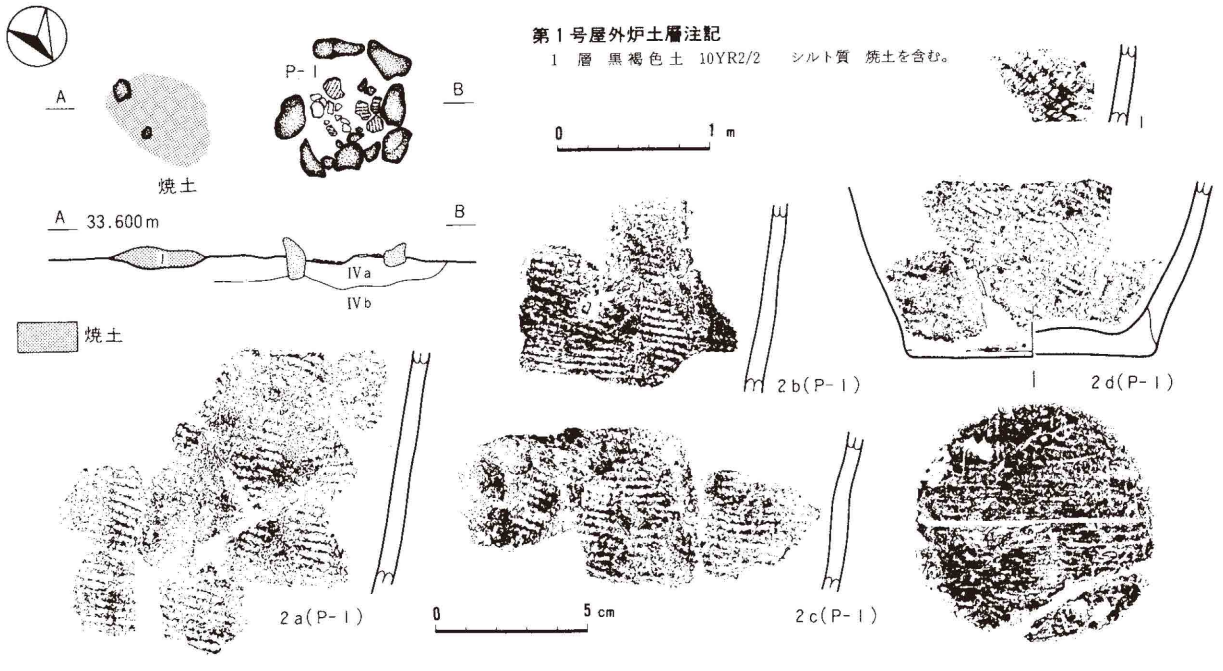


図55　第１号屋外炉・出土土器

4　埋設土器

第１号埋設土器（図56、表31）

［位置・確認］Ｇ－72グリッドに位置する。第Ⅳ層を掘り下げ中、埋設された土器の一部を確認した。

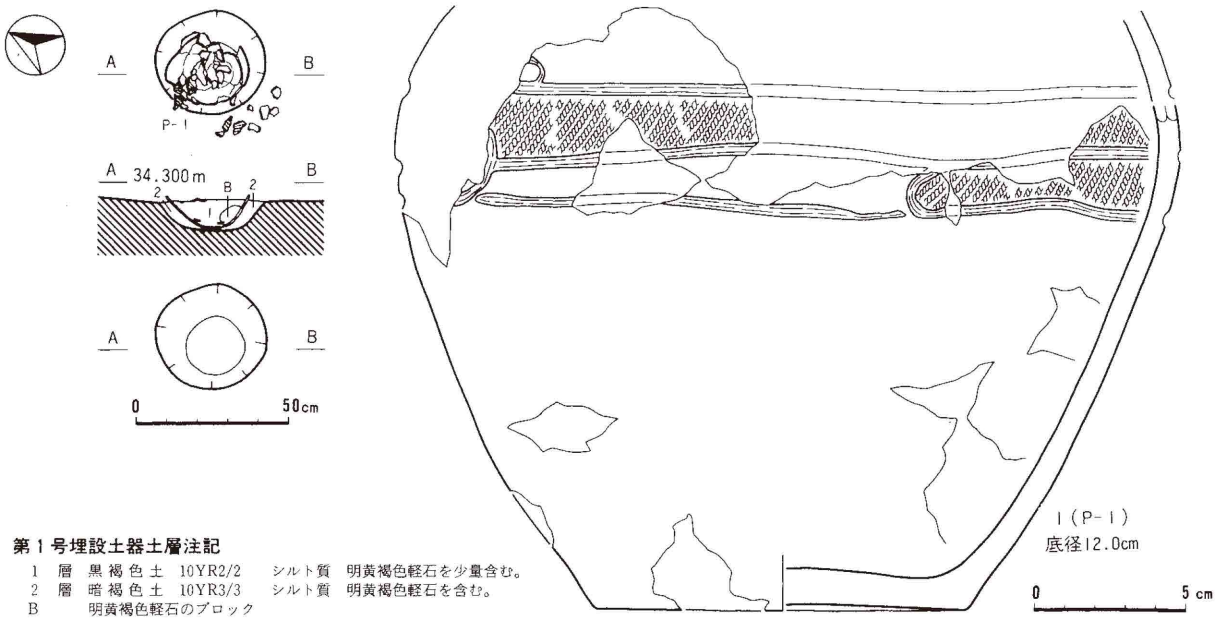
［形態・規模］第Ⅳ～Ⅴ層をやや不整な円形に掘り込み、鉢形土器を正立状態で埋設している。掘り込みの大きさは確認面で長径37cm、短径35cm、底面で長径20cm、短径19cm、確認面からの深さは約15cmである。上部が削平されているため、下半部だけ残存したもので、土器上半部の破片の一部が周囲に散乱していた。

［堆積土］埋設した土器と掘り方の間には、明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が混入した暗褐色土を埋めている。土器内部には、明黄褐色軽石のブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

［出土遺物］Ⅳ－１～２類とみられる壺形ないし鉢形土器（Ｐ－１）が、１個体埋設されていた。

表31　第１号埋設土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
56－１	Ⅳ－１～２	埋設	壺？・胴～底部	磨消縄文(LR)	



第１号埋設土器土層注記
1　層　黒褐色土　10YR2/2　シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
2　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石を含む。
B　明黄褐色軽石のブロック

図56　第１号埋設土器

第２号埋設土器（図57、表32）

［位置・確認］Ｍ－47グリッドに位置する。第Ⅳ層を掘り下げ中、埋設された土器の一部を確認した。

［形態・規模］第Ⅳ～Ⅴ層をほぼ円形に掘り込み、鉢形土器を正立状態で埋設している。掘り込みの大きさは確認面で長径32cm、短径30cm、底面で長径13cm、短径12cm、確認面からの深さは約14cmである。上部が削平されているため、下半部だけ残存したもので、土器上半部の破片の一部が上に崩れていた。

［堆積土］埋設した土器と掘り方の間及び土器内部には、明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が混入した暗褐色土が堆積していた。

［出土遺物］Ⅲ－３～Ⅳ－１類に含まれる深鉢形土器（Ｐ－１）が、１個体埋設されていた。（工藤・中村）

表32　第２号埋設土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
57－１	Ⅲ－３～Ⅳ－１	埋設	深鉢・胴～底部	縄文(LR)縦位・底部に網代痕	

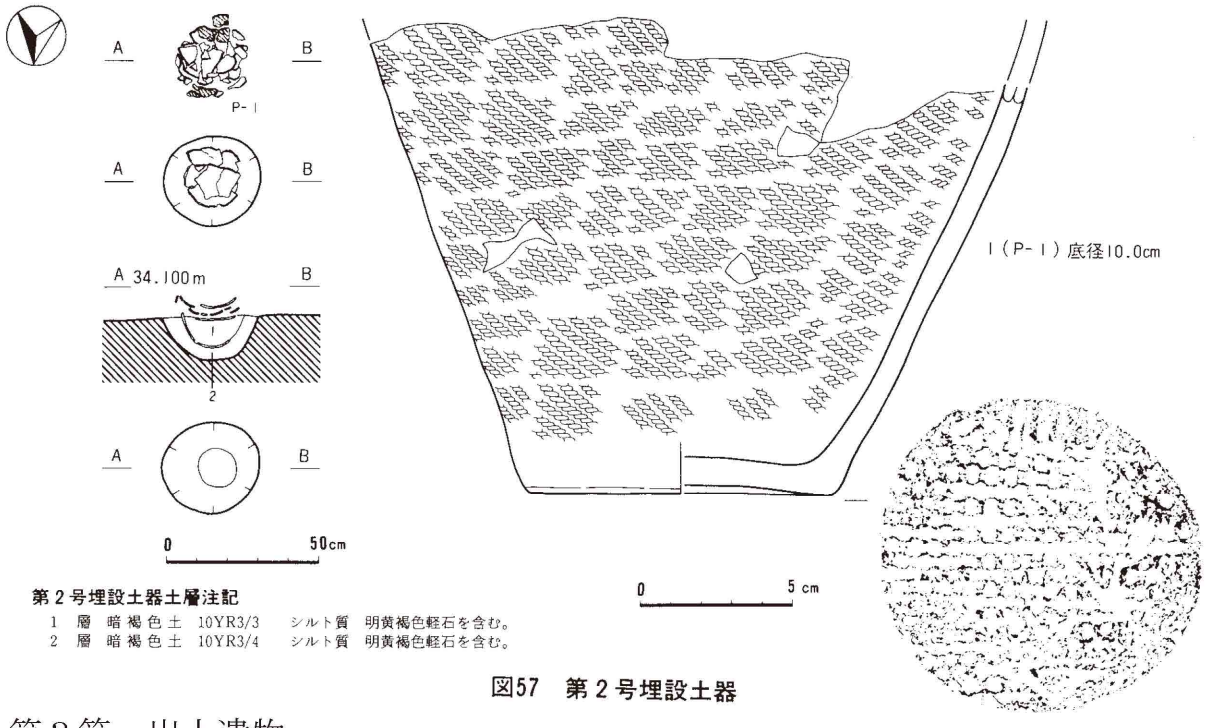


図57　第２号埋設土器

第３節　出土遺物

遺構外から、縄文土器、土製品、石器、石製品のほか、続縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、銭貨などが出土した。

１　縄文時代の遺物

縄文土器、土製品、石器、石製品などが、約30ℓの段ボールで23箱分ほど出土した。出土遺物の多くは縄文土器と石器であるが、南東側の沢に面した部分を除く、調査区域のほぼ全体がリンゴ畑として削平されているので、種類にかかわらず遺物の大半は表土（第Ⅰ層）から出土した。縄文土器と石器は、調査区域全体に（畑地の造成等により）拡散した状態で出土したが、南東～南側の沢寄りでは出土量が多くなっている。したがって本来の分布区域は、縄文時代の遺構が主に分布する調査区域の南東側であったと考えられる。

（1）縄文土器（図58～67、表33）

Ⅰ～Ⅴ群土器（早期末から晩期後半まで）が、復元土器2個体分を含めて約21,600片（約168kg）出土した。1片の平均が約8ｇとなるので、細片の多いことが分かる。出土量が最も多いのは、Ⅲ-1～2類土器で、次にⅢ-3類、Ⅳ-2類などが多く出土した。

Ⅰ-2類　早稲田5類土器（1～3）

早期末の早稲田5類土器が、ごく少量出土した。比較的粒子の細かい胎土で、植物性繊維を含む。

Ⅱ-1類　円筒下層ａ・ｂ式（4・5）

前期中頃の円筒下層ａ式土器が、ごく少量出土した。胎土に植物性繊維を含み、焼き締まりの良くない土器である。内面は平滑にナデられている。

Ⅱ-2類　円筒下層ｃ・ｄ式（6～9）

前期後半の円筒下層ｃ式ほかの土器が、ごく少量出土した。6・7は円筒下層ｃ式で、胎土に植物性繊維を含む。8・9は同一個体の円筒下層ｄ１式かと思われ、植物性繊維は含まないようである。

Ⅲ-1類　円筒上層ａ～ｃ式（10～21）

中期前半の円筒上層ｃ式ほかの土器が出土した。10～14・18・19・21は円筒上層ｃ式で、比較的焼き締まりが良く、胎土に粗砂粒の目立つものが多い。15～17・20も円筒上層ｃ式に含めてよいと思われるが、文様帯の下部には地文（縄文）がみられ、円筒上層ｄ式に近い様相をもっている。地文には、横位の斜行縄文と結束第1種羽状縄文がある。

Ⅲ-2類　円筒上層ｄ・ｅ式（27～36・42～45・49～61）

中期中頃の円筒上層ｄ式ほかの土器が、最も多量に出土した。円筒上層ｃ式に比べて胎土の砂粒が細かく、焼き締まりのあまり良くない感じの土器が多い。27～35の隆線上面には縄文や縄の側面圧痕、36・42～45の隆線上面には刻目（ないし短沈線）が加えられ、49～59の隆線は無文となっている。地文には横位の斜行縄文と結束第1種羽状縄文があり、斜行縄文（RL）が多いようである。

なお、無文の復元土器（40）、文様帯の一部にだけ刺突を加えた復元土器（41）のほか、突起部（22～26・37～39・46～48）、文様帯のない土器（180～183）、胴～底部（188・189）など、Ⅲ-1～2類の幅をもつ類ついては、出土量からみて円筒上層ｄ式に含まれるものが多いと思われる。

Ⅲ-3類　大木系の土器（62・87～101）

中期後半の大木10式併行ほかの土器が、比較的多く出土した。胎土の砂粒等は円筒上層ｄ式と大差ないが、焼き締まりは良いものが多い。62は最花式とみられるが、掲載した胴部片のみではっきりしない。87～101は大木10式併行の土器で、87・88は幅の広いきっちりした沈線であるが、その他の土器にみられる沈線はより細くやや粗雑な描き方となっている。単軸絡条体はR、縄文はRL及びLが多用されている。

なお、縦位の縄文や単軸絡条体を地文として、幅の広い沈線によって文様を加えた土器（63～86）、縄の側面圧痕を施文した土器（102・103）、縄文を地文とする沈線文の土器（104・105）、折返し状口縁の土器（185～187）、文様帯のない土器（190～194・201～214・216～218）、胴～底部（195～200・215・219～225）など、Ⅲ-3～Ⅳ-1類とみられるものの、型式のはっきりしない類がかなりある。

Ⅳ-2類　十腰内Ⅰ式（106～144）

後期前半の十腰内Ⅰ式土器は比較的多く出土したが、まとまった資料がなく細片が大半である。胎土には細砂粒が多く、概ね焼き締まりも良い。沈線は太さにかかわらず、大体きっちりと加えられている。磨消縄文にみられる縄文は、LRが多い。

Ⅴ-1類　大洞Ｂ・BC式（147）

晩期初頭の大洞Ｂ式と思われる、鉢形土器の口縁部片が1片出土しただけである。

Ⅴ-2類　大洞C1・C2式（148～163）

晩期中頃の大洞C1式ほかの土器が少量出土した。148～155は磨消縄文等が施文された精製土器、156～161は連続刻目文等が施文された半精製土器（台付鉢形）で、いずれも大洞C1式とみられる。

Ⅴ-3類　大洞Ａ・Ａ′式（169～171）

晩期後半の大洞Ａ式ほかの精製土器が、ごく少量出土した。

なお、無文のミニチュア土器（173～176）のほか、無文の鉢形土器（177～179）、縄文施文の粗製深鉢形土器（226～242）なども、概ねⅤ群に含まれるようである。

表33　遺構外出土縄文土器観察表

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文　様　等	備　考
58－1	Ⅰ－2・早稲田5類	D～E－55・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	直前段合撚(LL＋RR?)横位、斜位	胎土に繊維含む
58－2	Ⅰ－2・早稲田5類	H－59・Ⅰ	深鉢・胴部	縄側面圧痕(L)	胎土に繊維含む
58－3	Ⅰ－2・早稲田5類	F－64・Ⅰ	深鉢・胴部	単軸絡条体1類(L)？	胎土に繊維含む
58－4	Ⅱ－1・円筒下層a	I－47・Ⅰ K－48・Ⅰ	深鉢・口縁部	結節回転文(L)横位	胎土に繊維含む
58－5	Ⅱ－1・円筒下層a	J－47・Ⅰ	深鉢・胴部	縄文(RLR)斜位	胎土に繊維含む
58－6	Ⅱ－2・円筒下層c	F－71・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端～頸部に縄側面圧痕(LR)・隆帯(縄側面圧痕)	胎土に繊維含む
58－7	Ⅱ－2・円筒下層c	M－40・Ⅰ～Ⅲ	深鉢・口縁部	口端～頸部に縄側面圧痕(R)・刺突	胎土に繊維含む
58－8	Ⅱ－2	E－56・Ⅰ	深鉢・胴部	単軸絡条体圧痕(R)・刺突(竹管)・隆帯(刺突)	
58－9	Ⅱ－2	M－40・Ⅰ～Ⅲ	深鉢・口縁部	単軸絡条体圧痕(R)	
58－10	Ⅲ－1・円筒上層c	J－61・Ⅰ	深鉢・口縁部	隆線(縄側面圧痕)・縄側面圧痕(L、R)刺突	
58－11	Ⅲ－1・円筒上層c	H－52・Ⅰ I－53・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	隆線・爪形刺突	
58－12	Ⅲ－1・円筒上層c	J－51・Ⅰ	深鉢・口縁部	把手状貼付、隆線(縄側面圧痕L)	
58－13	Ⅲ－1・円筒上層c	M－48・Ⅰ	深鉢・口縁部	扇状突起(孔付)・隆線(縄側面圧痕L)・刺突	
58－14	Ⅲ－1・円筒上層c	I－44・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕L)・刺突・結節回転文(L)・縄文(RL)横位	
58－15	Ⅲ－1・円筒上層c	N－50・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(刻目)・爪形刺突・縄文	
58－16	Ⅲ－1・円筒上層c	L－45・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(刻目)・刺突・縄文（LR）横位	
58－17	Ⅲ－1・円筒上層c	I－44・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	隆線(刻目)・刺突・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)横位	
58－18	Ⅲ－1・円筒上層c	J－46・Ⅰ K－47・Ⅰ	深鉢・口縁部	隆線(刻目)・刺突	
58－19	Ⅲ－1・円筒上層c	K－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	扇状突起(孔付)・隆線(縄側面圧痕L)・刺突	
58－20	Ⅲ－1・円筒上層c	N－47・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(刻目)・爪形突刺・縄文(RL)横位	
58－21	Ⅲ－1・円筒上層c	F－69・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕L)・刺突	
59－22	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	J－47・Ⅰ	深鉢・突起部	二叉状山形突起・縄側面圧痕(L)・隆線(刻目)	
59－23	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	J－52・Ⅰ	深鉢・突起部	山形突起(盲孔付)・円形貼付・隆線(縄側面圧痕L)	
59－24	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	表採	深鉢・突起部	扇状突起(盲孔付)・隆線(縄側面圧痕L)	
59－25	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	J－41・Ⅰ	深鉢・突起部	貼付突起・円形貼付・隆線（縄側面圧痕）	
59－26	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	I－41・Ⅰ	深鉢・突起部	扇状突起・隆線・縄側面圧痕(RL)	
59－27	Ⅲ－2・円筒上層d	L－49・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端～頸部に隆線(縄側面圧痕L)・縄文	
59－28	Ⅲ－2・円筒上層d	J－51・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端～頸部に隆線(縄文RL)・縄文(RL)横位	
59－29	Ⅲ－2・円筒上層d	K－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	扇状突起？・隆線(縄文RL)・縄文(RL)横位	
59－30	Ⅲ－2・円筒上層d	I－47・Ⅰ K－49・Ⅰ	深鉢・口縁部	扇状突起・隆線(縄側面圧痕L)・縄文(LR)横位	
59－31	Ⅲ－2・円筒上層d	表採	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕L)・縄文(LR)横位	
59－32	Ⅲ－2・円筒上層d	L－51・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕L)・縄文(LR)横位	
59－33	Ⅲ－2・円筒上層d	M－44・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕L)・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)横位	
59－34	Ⅲ－2・円筒上層d	J－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端～頸部に隆線(縄側面圧痕L)・縄文(RL)横位	
59－35	Ⅲ－2・円筒上層d	J－51・Ⅰ	深鉢・口縁部	扇状突起？・隆線(縄側面圧痕L、R)・縄文(RL)横位	
59－36	Ⅲ－2・円筒上層d	I－41・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(刻目)・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)横位	
59－37	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	J－47・Ⅰ	深鉢・突起部	二叉状山形突起・隆線(刻目)・円形貼付	
59－38	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	M－44・Ⅰ	深鉢・突起部	扇状突起・隆線(爪形刻目)・円形貼付(爪形刻目)	
59－39	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	I－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起・隆線(爪形刻目)・結束第1種羽状縄文？	復元土器
60－40	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	N－48・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	二叉山形突起(孔付)・無文	復元土器
60－41	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	K－51・Ⅰ	深鉢・略完形	口頸～胴上部に隆線・刺突(一部)・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)横位	
60－42	Ⅲ－2・円筒上層d	J－46・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	隆線(刻目)・結束第1種羽状縄文？	
60－43	Ⅲ－2・円筒上層d	H－51・Ⅰ	深鉢・突起部	扇状突起(孔付)・隆線(刻目)・縄文(RL)横位	
60－44	Ⅲ－2・円筒上層d	K－46・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端部に隆線(刻目)・縄文(RL)横位	
60－45	Ⅲ－2・円筒上層d	K－47・Ⅰ	深鉢・口縁部	突起(孔付)・口端部に隆線(刻目)・縄文(RL)横位	
60－46	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	J－44・Ⅰ	深鉢・突起部	扇状突起(孔付)・把手状貼付・隆線・刺突？	
60－47	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	J－46・Ⅰ	深鉢・突起部	扇状突起(孔付)・円形貼付・隆線	
60－48	Ⅲ－1～2・円筒上層c～d	K－48・Ⅰ	深鉢・突起部	扇状突起？・隆線	
60－49	Ⅲ－2・円筒上層d	J－51・Ⅰ	深鉢・口縁部	扇状突起(孔付)・隆線・縄文(RL)横位	
60－50	Ⅲ－2・円筒上層d	O－40・Ⅰ	深鉢・突起部	二叉山形突起(孔付)・隆線・縄文(RL)横位	
60－51	Ⅲ－2・円筒上層d	K－50・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端～頸部に隆線・縄文(LR)横位	
60－52	Ⅲ－2・円筒上層d	J－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端～頸部に隆線	
60－53	Ⅲ－2・円筒上層d	K－40～41・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	隆線(一部縄文)・縄文(RL)横位	
61－54	Ⅲ－2・円筒上層d	K－41・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	突起・口端に縄側面圧痕(L)・口端～頸部に隆線・縄文(RL)横位、斜位	
61－55	Ⅲ－2・円筒上層d	J－51・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	口端～頸部に隆線・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)横位	
61－56	Ⅲ－2・円筒上層d	O－40・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	口端～頸部に隆線・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)横位	折返し状口縁
61－57	Ⅲ－2・円筒上層d	K－41・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	口端～頸部に隆線・縄文(RL)横位	折返し状口縁
61－58	Ⅲ－2・円筒上層d	O－41・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	口端～頸部に隆線・結束第1種羽状縄文	
61－59	Ⅲ－2・円筒上層d	J－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端～頸部に隆線・円形貼付？・縄文(RL)横位	折返し状口縁
61－60	Ⅲ－2	I－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端部に刻目・縄文(RL)横位	
61－61	Ⅲ－2	J－47・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)横位	
61－62	Ⅲ－3・最花	L－43・Ⅰ	深鉢・胴部	平行沈線・縄文(RL)横位	
61－63	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	二叉突起？・沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
61－64	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	二叉突起・沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
61－65	Ⅲ－3～Ⅳ－1	Q－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	二叉突起？・沈線・単軸絡条体第1類(R)縦位	
61－66	Ⅲ－3～Ⅳ－1	P－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
61－67	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－50・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
61－68	Ⅲ－3～Ⅳ－1	Q－44・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
61－69	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
61－70	Ⅲ－3～Ⅳ－1	M－49・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
62－71	Ⅲ－3～Ⅳ－1	O－40・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
62－72	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－47・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
62－73	Ⅲ－3～Ⅳ－1	M－48・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
62－74	Ⅲ－3～Ⅳ－1	M－49・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)斜位	
62－75	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－44・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)斜位	
62－76	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－54・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・単軸絡条体第2類？(R)縦位	
62－77	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－46・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・単軸絡条体第1類(R)縦位	
62－78	Ⅲ－3～Ⅳ－1	O－48・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・縄文(RL)斜位	
62－79	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	突起・沈線文	
62－80	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・縄文(LR)縦位	

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文　様　等	備　考
62－81	Ⅲ－3～Ⅳ－1	P－48・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・縄文(RL)縦位	
62－82	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・縄文(RL)横位・斜位	
62－83	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	変形山形突起・磨消縄文(RL)	
62－84	Ⅲ－3～Ⅳ－1	L－46・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(LR)縦位	
62－85	Ⅲ－3～Ⅳ－1	O－47・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)縦位	
62－86	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－49・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(LR)縦位	
62－87	Ⅲ－3・大木10併行	I－46・Ⅰ	深鉢・口縁部	磨消縄文(RL)	
62－88	Ⅲ－3・大木10併行	I－41・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・竹管刺突文(磨消刺突文)	
62－89	Ⅲ－3・大木10併行	M－88・Ⅰ	深鉢・口縁部	ヒレ状貼付・円形貼付・刺突・縄文(RL)横位	
62－90	Ⅲ－3・大木10併行	K－44・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・刺突文・縄文(L)縦位	
62－91	Ⅲ－3・大木10併行	L－43・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・刺突文・縄文	
62－92	Ⅲ－3・大木10併行	K－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・刺突文・縄文(L)縦位	
62－93	Ⅲ－3・大木10併行	I－43・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(L)縦位	
62－94	Ⅲ－3・大木10併行	K－61・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(L)縦位	
62－95	Ⅲ－3・大木10併行	H－60・Ⅰ	深鉢・胴部	縄側面圧痕(L)・縄文(L)縦位	
62－96	Ⅲ－3・大木10併行	K－44・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(L)縦位	
62－97	Ⅲ－3・大木10併行	E－63・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(LR)縦位	
62－98	Ⅲ－3・大木10併行	L－61・Ⅰ	深鉢・胴部	縄側面圧痕(L)・縄文(L)縦位	
63－99	Ⅲ－3・大木10併行	J－43・Ⅰ	壺・胴～底部	磨消縄文(LR)	
63－100	Ⅲ－3・大木10併行	H－60・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(縄端刺突？)・縄側面圧痕(L)・縄文(L)縦位	
63－101	Ⅲ－3・大木10併行	L－59・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・口端に刺突・縄側面圧痕(L)・縄文(L)縦位	
63－102	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－58・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(L)・縄文(L)縦位	
63－103	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(L)	
63－104	Ⅲ－3～Ⅳ－1	F－55・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・縄文(LR)横位	
63－105	Ⅲ－3～Ⅳ－1	F－55・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線文・縄文(LR)横位	
63－106	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	H－54・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・微隆線・沈線文	口縁部肥厚
63－107	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－47・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・沈線文	口縁部肥厚
63－108	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－49・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・沈線文	
63－109	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－49・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・沈線文	口縁部肥厚
63－110	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	M－45・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・沈線文	口縁部肥厚
63－111	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	P－41・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・沈線文	
63－112	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－41・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・沈線文	
63－113	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Q－45・Ⅰ	鉢類・口縁部	沈線文	
63－114	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－40・Ⅰ	鉢類・口縁部	沈線文	
63－115	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－47・Ⅰ	鉢類・口縁部	沈線文	
63－116	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－40・Ⅰ	鉢類・口縁部	沈線文	
63－117	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－46・Ⅰ	鉢類・口縁部	沈線文	
63－118	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－40・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・沈線	
63－119	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	N－41・Ⅰ	鉢類・口縁部	沈線文	折返し状口縁
63－120	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	P－45・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	
63－121	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－48・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文・縄文	
63－122	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	M－48・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	外面に朱塗りの痕跡
63－123	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	P－41・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	
63－124	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－40・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	
63－125	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	M－44・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	
63－126	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	P－41・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	
63－127	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－71・Ⅰ	鉢類・胴部	集合沈線	
63－128	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	M－44・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	
63－129	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－49・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文	
63－130	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－47・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・磨消縄文(LR)	口縁部肥厚
63－131	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	G－72・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・隆線・磨消縄文(RL)	
63－132	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	L－45・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・磨消縄文	口縁部肥厚
63－133	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	M－44・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・磨消縄文(LR)	口縁部肥厚
63－134	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－50・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・平行沈線・縄文(RL)横位	口縁部肥厚
66－135	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－46・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・平行沈線・単軸絡条体第1類(R)縦位	
63－136	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	L－67・Ⅰ	鉢類・口縁部	磨消縄文(RL)	
64－137	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	H－73・Ⅰ	鉢類・口縁部	磨消縄文(LR)	
64－138	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－53・Ⅰ	鉢類・口縁部	磨消縄文(LR)	
64－139	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	L－43・Ⅰ M－44・Ⅰ	鉢類・口縁部	磨消縄文(LR)	
64－140	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Q－45・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(LR)	
64－141	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	M－73・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(LR)	
64－142	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－51・Ⅰ	鉢類・胴部	沈線文・縄文(RL)横位	
64－143	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－40・Ⅰ	鉢類・口縁部	磨消縄文(LR、RL)	
64－144	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	O－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線・単軸絡条体第5類(R)縦位	
64－145	Ⅳ－2～3？	I－51・Ⅰ	鉢類・口縁部	刻目・沈線	
64－146	Ⅳ－2～3？	K－47・Ⅰ	鉢類・口縁部	複合突起・沈線・縄文	口縁部肥厚
64－147	Ⅴ－1・大胴B	I－52・Ⅰ	鉢類・口縁部	小波状口縁(刻目)・平行沈線	
64－148	Ⅴ－2・大胴C_1	L－60・Ⅰ	壺・胴部	平行沈線・x字状文	
64－149	Ⅴ－2・大胴C_1	E－69・Ⅰ	壺・胴部	平行沈線・連続刻目・磨消縄文(RL)	
64－150	Ⅴ－2・大胴C_1	G－65・Ⅰ	注口・胴部	磨消縄文(LR)	
64－151	Ⅴ－2・大胴C_1	L－59・Ⅰ	浅鉢・口縁部	連続刻目・磨消縄文(LR)	
64－152	Ⅴ－2・大胴C_1	K－48・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続突起・平行沈線・連続刻目・磨消縄文(LR)	
64－153	Ⅴ－2・大胴C_1	O－62・Ⅰ	鉢類・口縁部	平行沈線・連続刻目・磨消縄文(LR)	
64－154	Ⅴ－2・大胴C_1	K－48・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(LR)	
64－155	Ⅴ－2・大胴C_1	K－48・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(LR)	
64－156	Ⅴ－2・大胴C_1	J－40・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(LR)・縄文(LR)横位	
64－157	Ⅴ－2・大胴C_1	H－55・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続突起・連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位・内面に沈線	
64－158	Ⅴ－2・大胴C_1	K－48・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続突起・連続刻目・平行沈線・縄文(RL)横位	
64－159	Ⅴ－2・大胴C_1	K－58・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続突起・連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位・内面に沈線	
64－160	Ⅴ－2・大胴C_1	K－48・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続突起・連続刻目・平行沈線・縄文(RL)横位	
64－161	Ⅴ－2・大胴C_1	I－59・Ⅰ	鉢類・口縁部	B突起・連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位	

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文様等	備考
64－162	Ⅴ－2	F－56・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続B突起・平行沈線・縄文(LR)横位	
64－163	Ⅴ－2	H－56・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続B突起・平行沈線・縄文(LR)横位・内面に凹線	
64－164	Ⅴ－2～3	M－63・Ⅰ	鉢類・口縁部	平行沈線・縄文(RL)横位	
64－165	Ⅴ－2～3	F－54～55・Ⅰ	浅鉢・口縁部	平行沈線	
64－166	Ⅴ－2～3	G－56・Ⅰ	浅鉢・口縁部	平行沈線	
64－167	Ⅴ－2～3	K～L－50・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	平行凹線・縄文(LR)横位	
64－168	Ⅴ－2～3	O－44～45・Ⅰ	浅鉢・口縁～胴部	平行凹線	内外面朱塗り
64－169	Ⅴ－3・大胴A	J－40・Ⅰ	鉢類・口縁～胴部	突起・工字文・縄文？・内面に凹線	外面ミガキ
64－170	Ⅴ－3	J－40・Ⅰ	鉢類・口縁～胴部	口端に凹線・平行沈線・縄文(LR？)	外面ミガキ
64－171	Ⅴ－3	J－40・Ⅰ	台付鉢・台部	平行凹線	
64－172	Ⅴ－2？	F－54～55・Ⅰ	注口？・口縁部	B突起	内外面ミガキ
64－173	Ⅴ－2？	J－40・Ⅰ	台付鉢・台部	無文	ミニチュア
64－174	Ⅴ－2？	H－60・Ⅰ	台付鉢・台部	無文	ミニチュア
64－175	Ⅴ－2？	表採	鉢類・底部	無文	ミニチュア・上げ底
64－176	Ⅴ－2？	J－47・Ⅰ	浅鉢・口縁～底部	無文	ミニチュア
64－177	Ⅴ	表採	鉢類・口縁部	無文(擦痕)	
64－178	Ⅴ	G－78・Ⅰ	鉢類・口縁部	無文	
64－179	Ⅴ	J－49・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・無文	
64－180	Ⅲ－1～2	K－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
64－181	Ⅲ－1～2	J－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	結束第1種羽状縄文(O段多条LR＋RL)横位	
64－182	Ⅲ－1～2	I－44・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
64－183	Ⅲ－1～2	I－51・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
65－184	Ⅲ	I－41・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	縄文(LR)斜位	
65－185	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・縄文？	折返し状口縁
65－186	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－50・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・縄文(LR)縦位？	折返し状口縁
65－187	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－50・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・縄文(LR)縦位	折返し状口縁
65－188	Ⅲ－1～2	M－43・Ⅰ	深鉢・胴～底部	爪形刺突・縄文(LR)横位	
65－189	Ⅲ－1～2	J－43・Ⅰ	深鉢・胴～底部	縄文(RL)横位	
65－190	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・縄文(RL)横位	
65－191	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)縦位	
65－192	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)縦位	
65－193	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－40・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)縦位	
65－194	Ⅲ－3～Ⅳ－1	G－55・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)縦位	
65－195	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－48・Ⅰ	深鉢・底部	底面に網代痕	
65－196	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－41・Ⅰ	深鉢・底部	底面に網代痕	
66－197	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－45・Ⅰ	深鉢・底部	縄文(RL)縦位・底面に網代痕	
66－198	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－41・Ⅰ	深鉢・底部	縄文(LR)縦位	
66－199	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－40・Ⅰ	深鉢・底部	縄文(RL？)・底面に網代痕	
66－200	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－47・Ⅰ	深鉢・底部	底面に木葉状の圧痕	
66－201	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－48・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位・結節回転文(R)縦位?	
66－202	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－46・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に単軸絡条体第1類(R)・単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－203	Ⅲ－3～Ⅳ－1	P－44・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に単軸絡条体第1類(R)・単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－204	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－48・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・単軸絡条体第1類(R)縦位	折返し状口縁
66－205	Ⅲ－3～Ⅳ－1	L－43・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位・斜位	
66－206	Ⅲ－3～Ⅳ－1	L－43・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)斜位	
66－207	Ⅲ－3～Ⅳ－1	K－50・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－208	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－46・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(L)縦位	
66－209	Ⅲ－3～Ⅳ－1	L－43・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－210	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－211	Ⅲ－3～Ⅳ－1	P－45・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)斜位	
66－212	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－213	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－41・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－214	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－50・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－215	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－48・Ⅰ	深鉢・胴部	単軸絡条体第1類(R)斜位	
66－216	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－50・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
66－217	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－46・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)斜位	
66－218	Ⅲ－3～Ⅳ－1	N－43・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に沈線・単軸絡条体第5類(R)斜位	
67－219	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－41・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体第1類(R)縦位・底面に網代痕	
67－220	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－41・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
67－221	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
67－222	Ⅲ－3～Ⅳ－1	I－41・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体第1類(R)縦位・底面に網代痕	
67－223	Ⅲ－3～Ⅳ－1	O－47・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体第1類(R)縦位・底面に網代痕	
67－224	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－41・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
67－225	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－40・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体第1類(R)縦位・斜位	
67－226	Ⅴ	H－56・Ⅰ	深鉢・口縁部	突起・縄文(LR)横位	
67－227	Ⅴ	F－72・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－228	Ⅴ	N－63・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－229	Ⅴ	F－54～55・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
67－230	Ⅴ	H－55・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－231	Ⅴ	J－58・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－232	Ⅴ	K－64・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR、RL)横位	
67－233	Ⅴ	I－85・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
67－234	Ⅴ	L－63・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－235	Ⅴ	I－47・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－236	Ⅴ	F－54～55・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
67－237	Ⅴ	K－48・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－238	Ⅴ	J－59・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
67－239	Ⅴ	F－54～55・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR、RL)横位	
67－240	Ⅴ	J－46・Ⅰ	深鉢・底部		上げ底気味
67－241	Ⅴ	M－43・Ⅰ	深鉢・底部		
67－242	Ⅴ	J－41・Ⅰ	深鉢・底部		

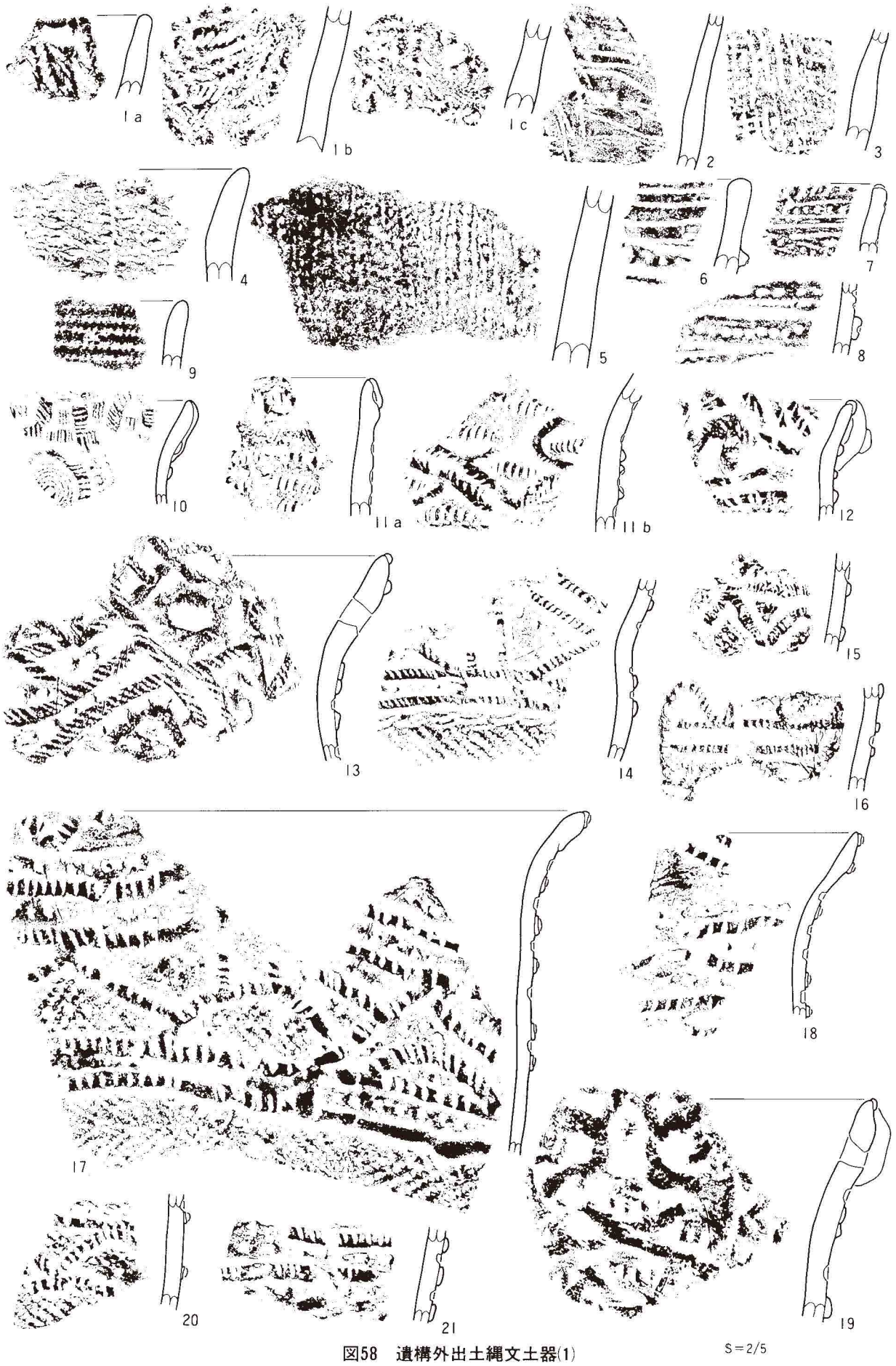


図58　遺構外出土縄文土器(1)　S＝2/5

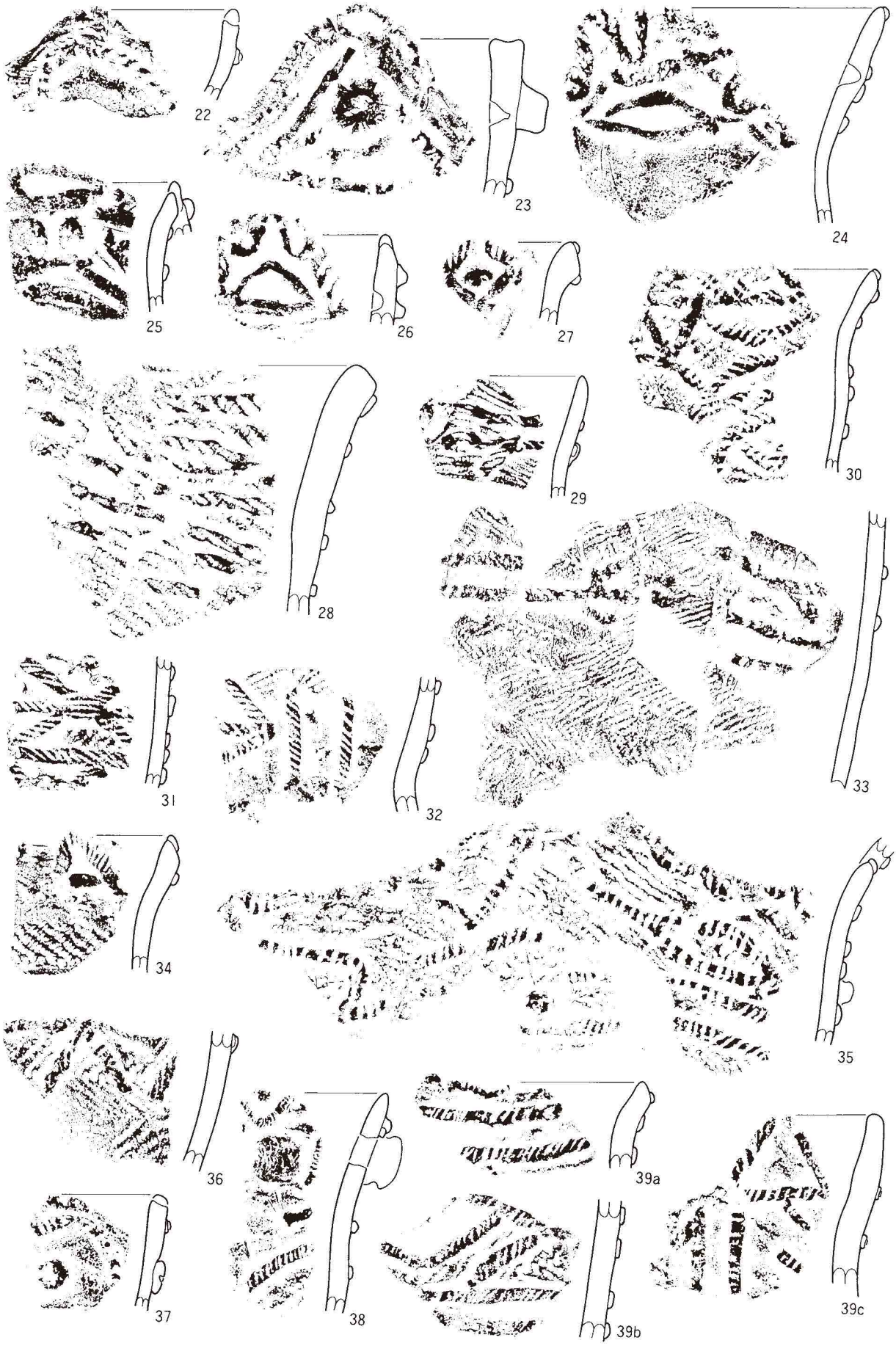


図59　遺構外出土縄文土器(2)　　S＝2/5

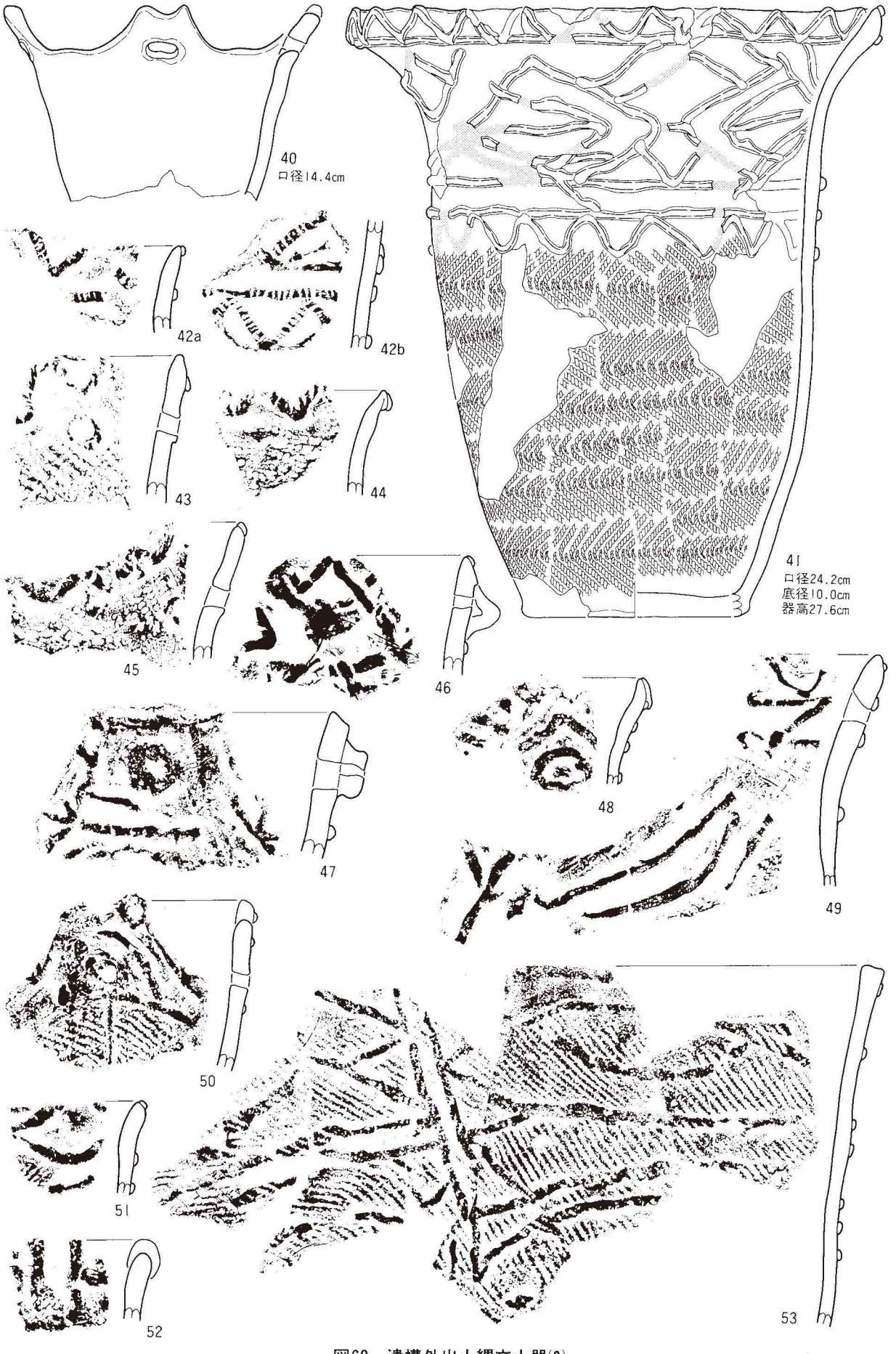


図60　遺構外出土縄文土器(3)

S＝2/5

図61　遺構外出土縄文土器(4)　　S＝2/5

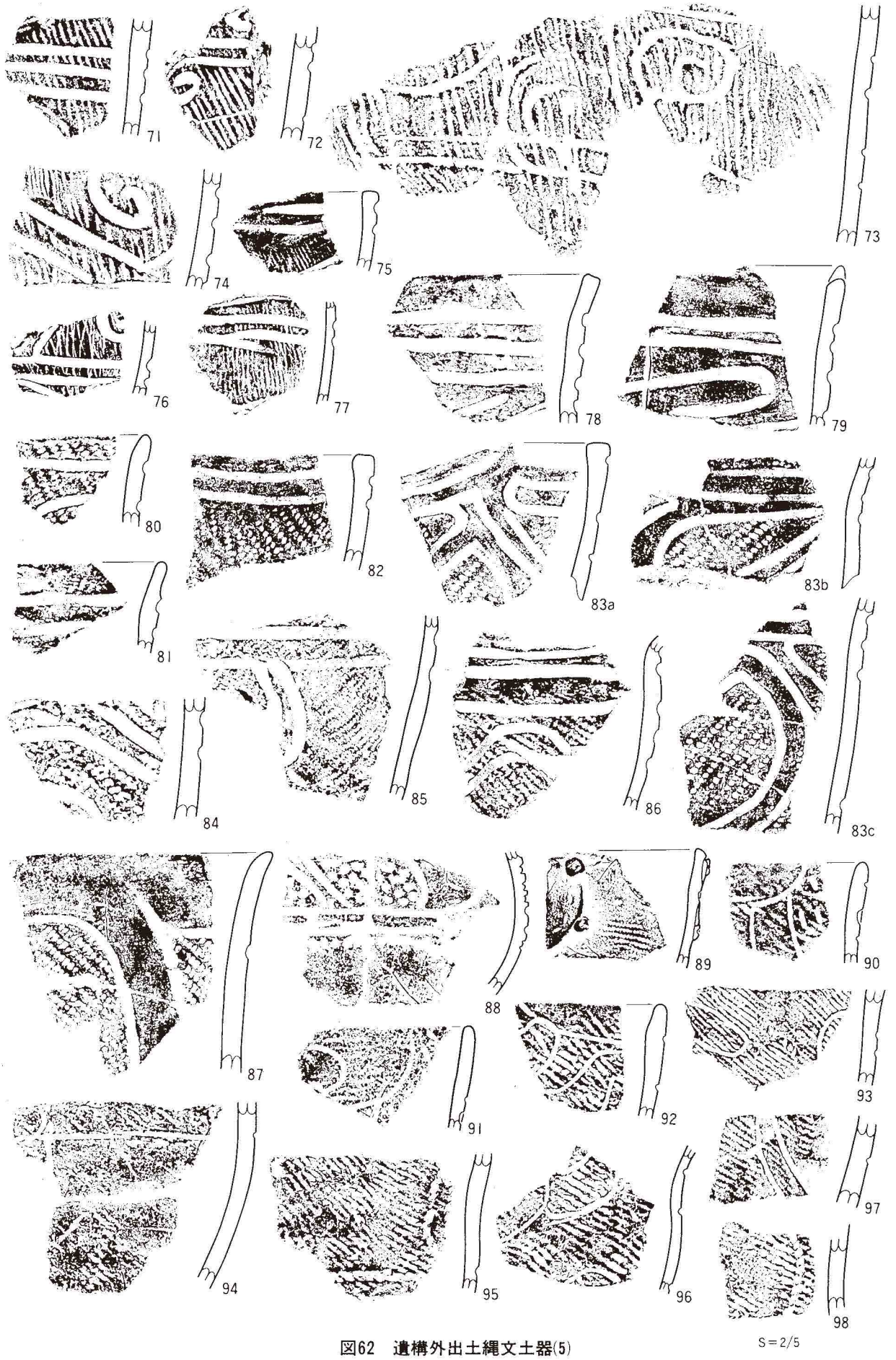


図62　遺構外出土縄文土器(5)　S＝2/5

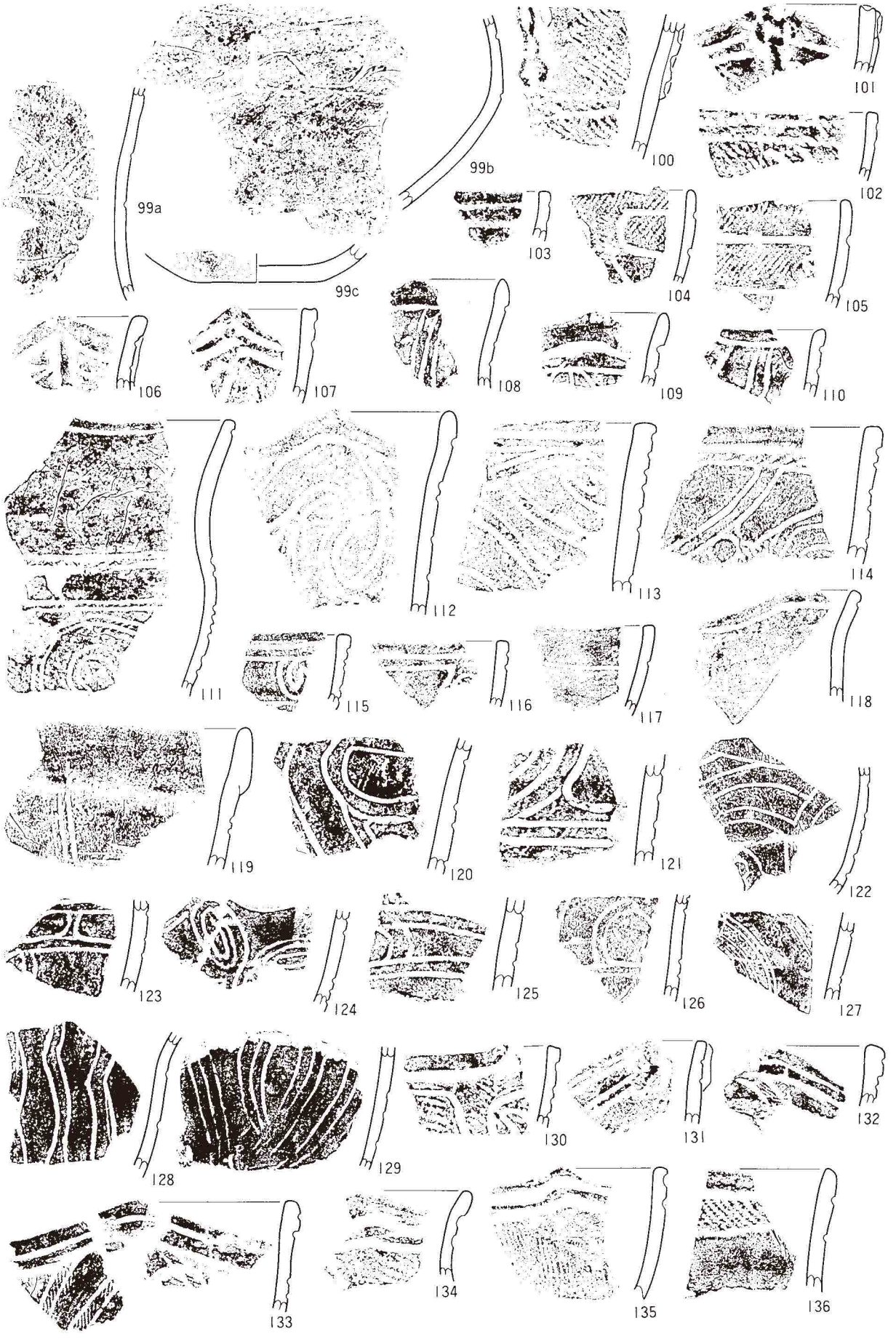


図63　遺構外出土縄文土器(6)　　S＝2/5

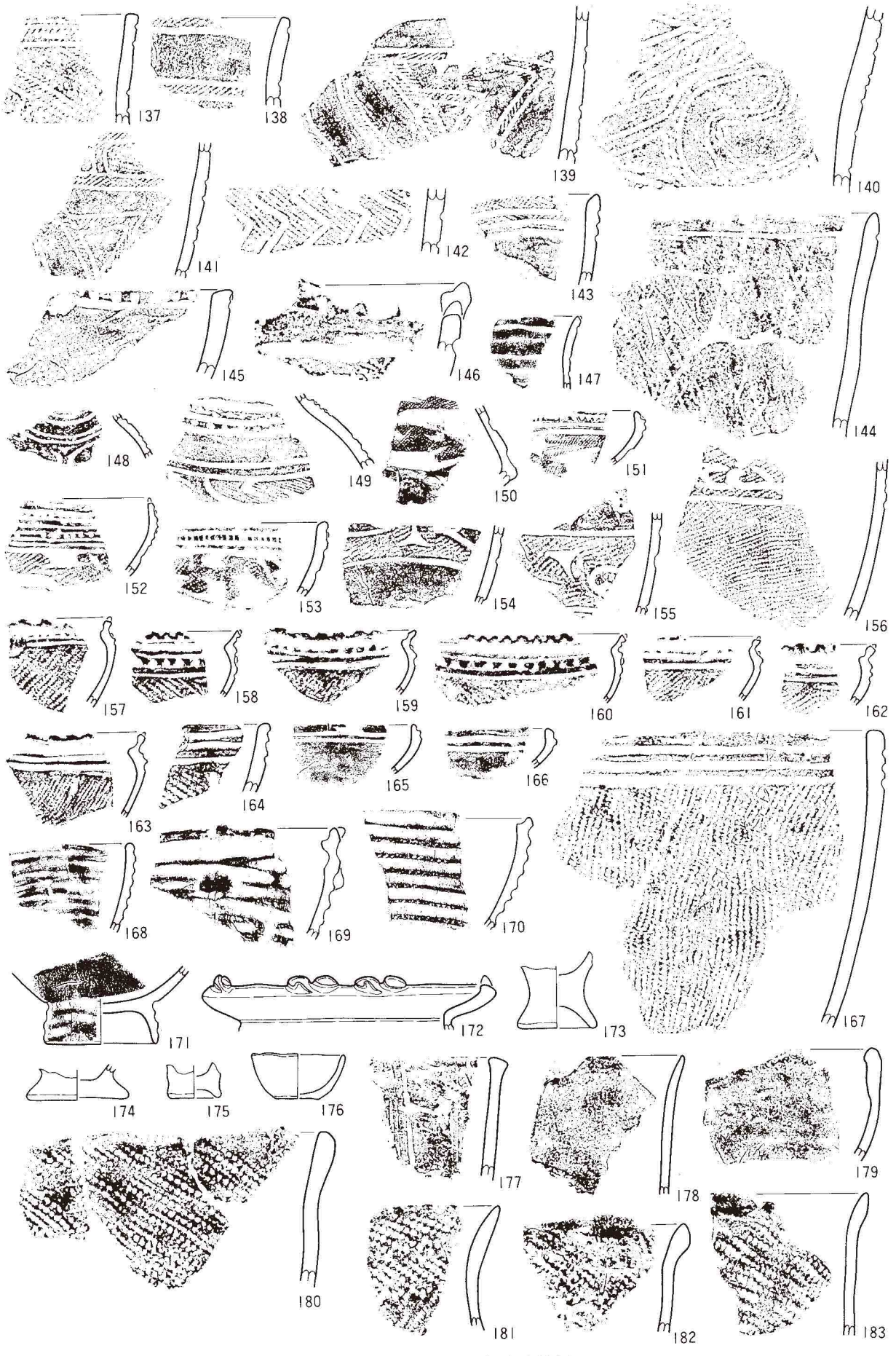


図64　遺構外出土縄文土器(7)　S＝2/5

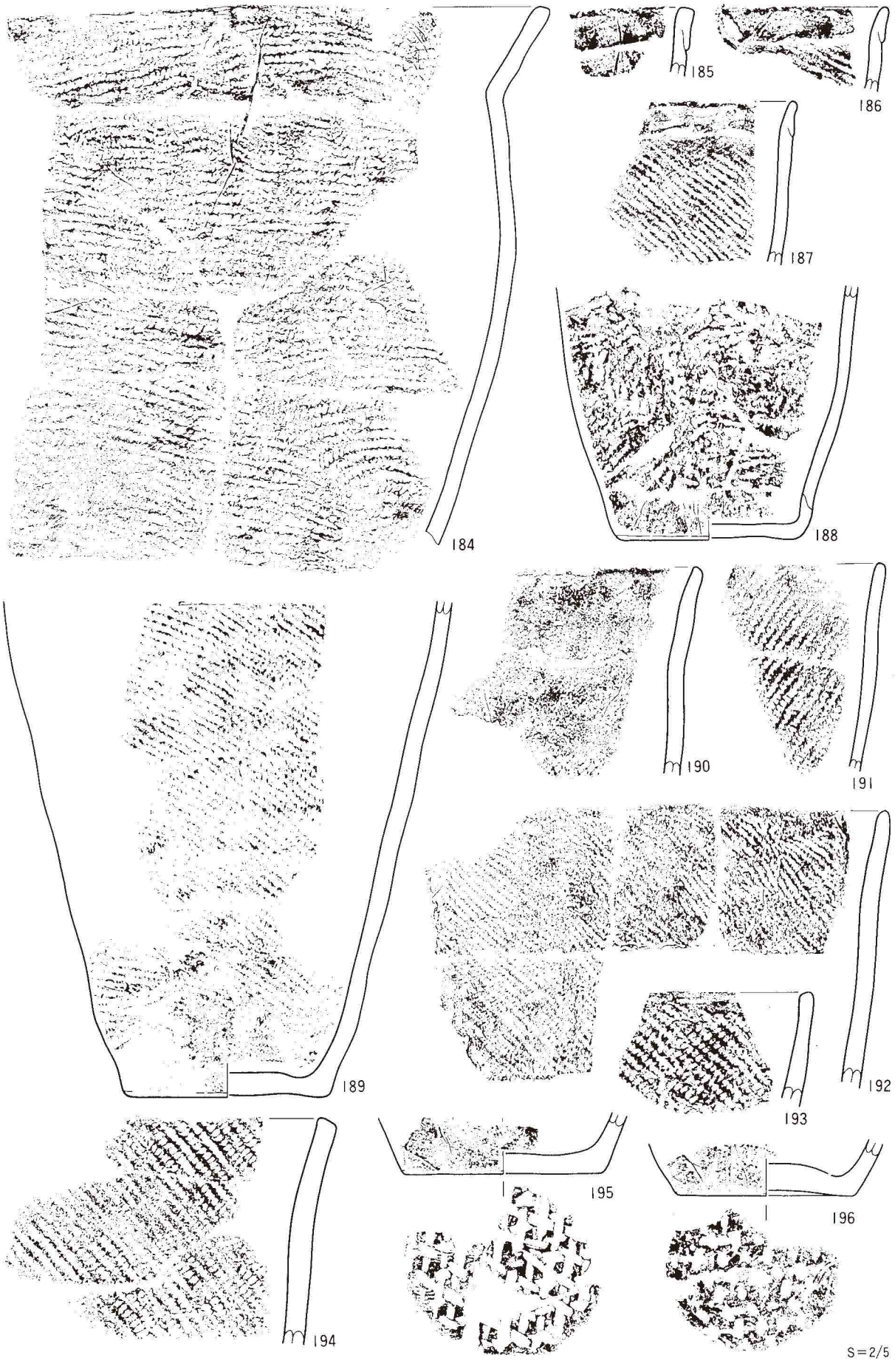


図65　遺構外出土縄文土器(8)

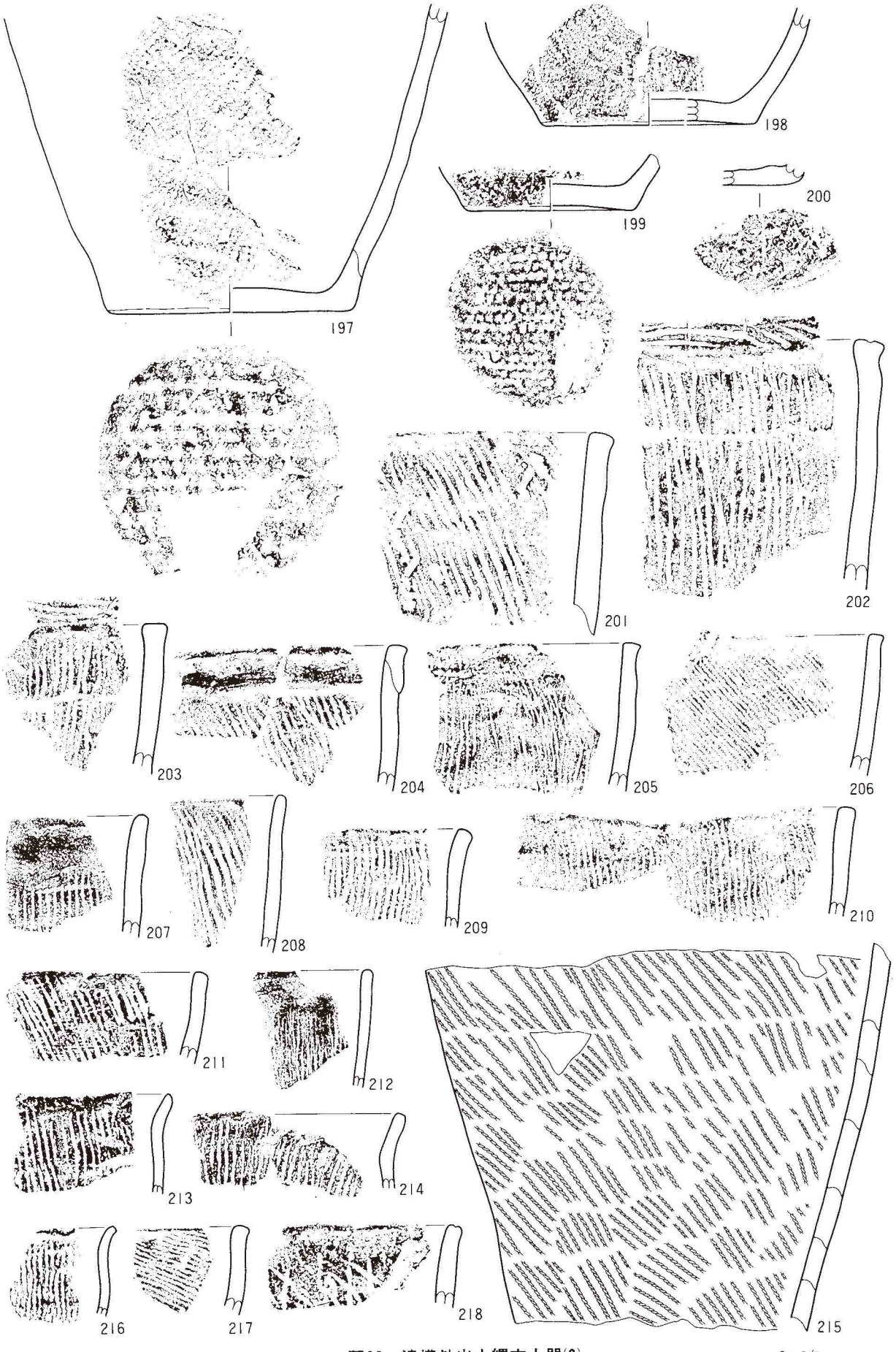


図66　遺構外出土縄文土器(9)　　S＝2/5

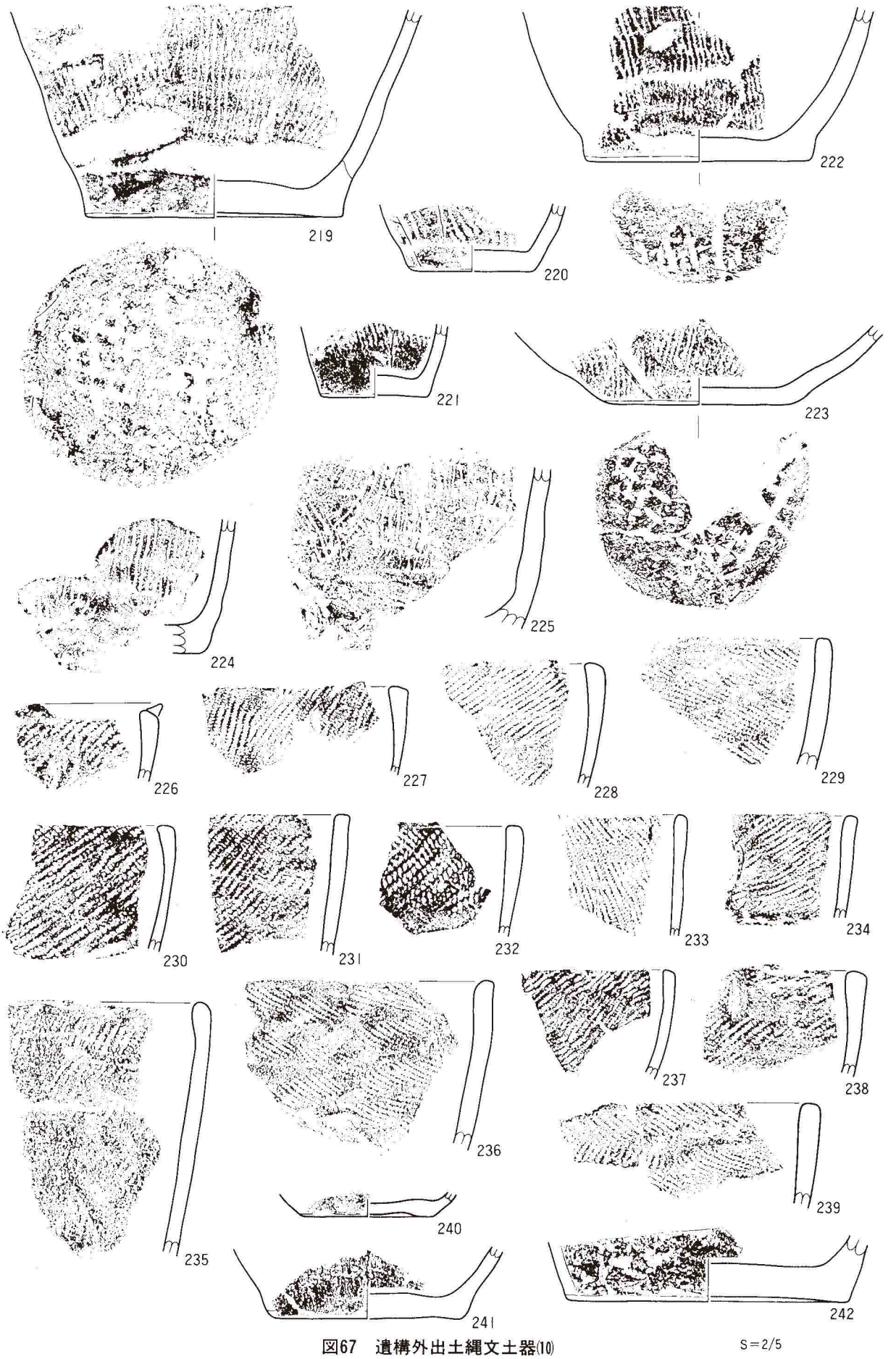


図67　遺構外出土縄文土器(10)　　S＝2/5

（2）土製品（図68、表34）

土偶1点、円盤状土製品4点など、計10点出土した。土偶は中期後半のものみられる板状土偶であるが、頭部と左腕部を欠損している。脚部は、表現されていない。乳房等は円形に貼り付けた隆起で表わし、頂部に刺突を加えている。表裏面にはやや粗雑な沈線で文様が施され、右肩から右脇の下まで長い貫通孔が穿たれている。円盤状土製品はすべて深鉢形土器の胴部片を利用したもので、中期末頃のものと思われる。

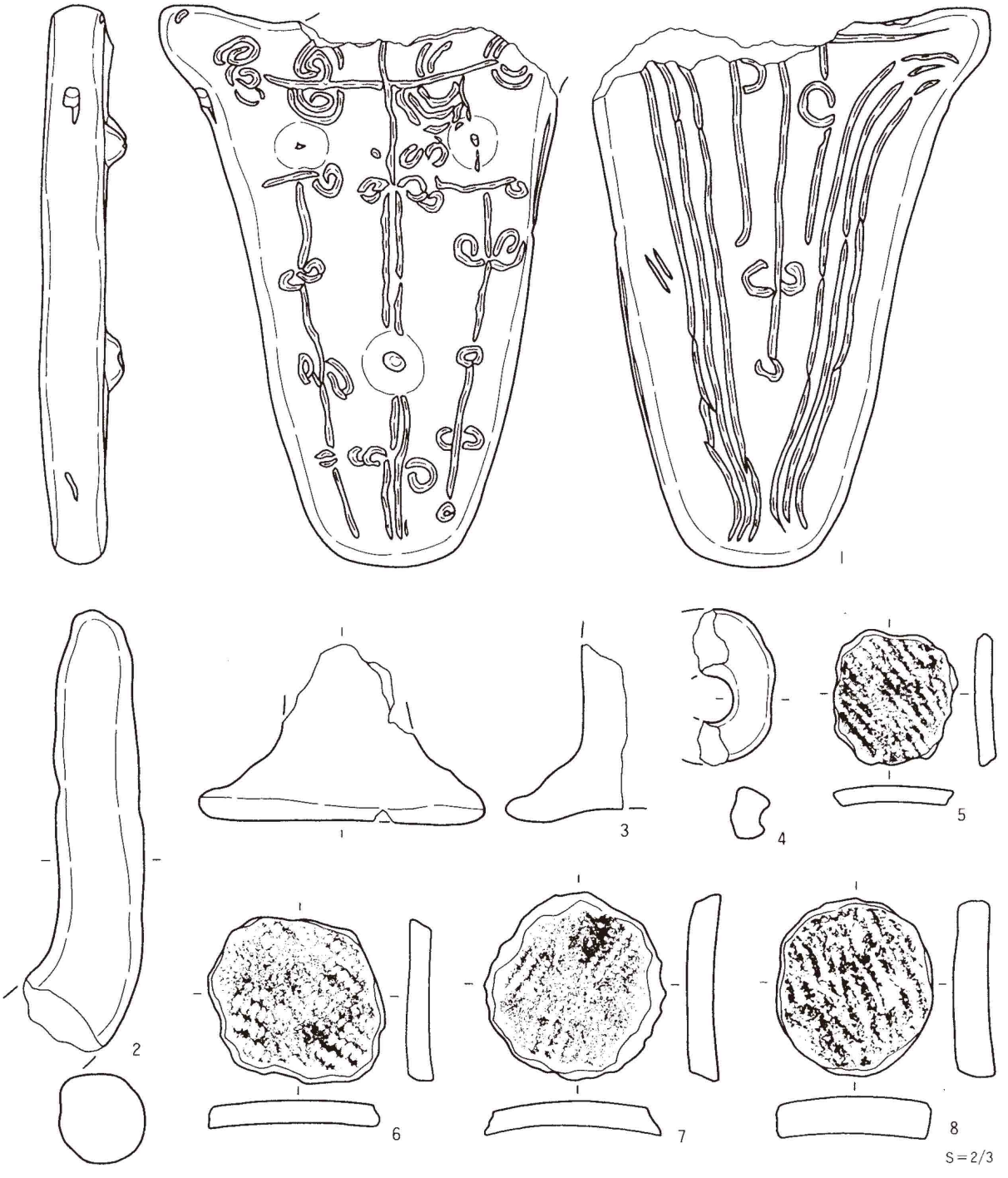


図68　遺構外出土土製品

表34　遺構外出土土製品計測表

図版番号	分　類	出土区・層	大きさ(cm)	重さ(g)	文　様　等	備　考
68－1	板状土偶	Ⅰ－48・Ⅰ	(12.9)× 8.5 ×1.5	(190.0)	円形貼付(刺突)・沈線文・穿孔	中期後半・頭部ほか欠損
68－2	－	Ⅰ－43・Ⅰ	(10.5)× 2.0 ×2.0	(50.0)	無文	棒状・欠損品
68－3	－	J－46・Ⅰ	(4.1)× 6.7 ×1.1	(40.0)	無文	支脚状・欠損品
68－4	－	Ⅰ－40・Ⅰ	3.7 ×(0.9)×0.7	(5.0)	無文	有溝・欠損品
68－5	円盤状土製品	J－41・Ⅰ	3.0 × 2.8 ×0.4	5.0	縄文(LR)縦位	中期後半～後期初頭
68－6	円盤状土製品	O－45・Ⅰ	3.8 × 4.1 ×0.5	10.0	縄文(LR)縦位	中期後半～後期初頭
68－7	円盤状土製品	J－49・Ⅰ	4.4 × 4.3 ×0.6	20.0	縄文(RL)縦位	中期後半～後期初頭
68－8	円盤状土製品	表採	4.2 × 3.8 ×0.8	20.0	縄文	

(3) 石器（図69～76、表35）

Ⅰ～Ⅲ類石器及び石核、剥片などが、計408点出土した。

Ⅰ-1類　磨製石斧（1～6）

実測図を掲載しなかった細片を含めて、10点出土した。1以外は、すべて欠損品である。1の両面及び両端には敲打痕がみられるので、未加工製品ないし再加工途中のものと思われる。2・5は斧身が薄く、片刃気味に作られている。

Ⅱ-1類　石鏃（7～27）

21点出土したが、17点は欠損品で、尖頭部の先端ないし基部を欠損したものが多い。形態は凸基（有柄）の類が大半で、凹基、平基などの類は少数である。8は、やや五角形に近い形態である。

Ⅱ-2類　石錐（28・29）

小型、棒状の類が、2点出土した。いずれも錐部の先端が摩耗し、光沢をもっている。

Ⅱ-3類　石匙（30～32）

いわゆる縦形の類が、3点出土した。いずれも縦長の剥片を素材とし、調整剥離は主として背面側に加えられている。

Ⅱ-4類　石篦（33～35）

完形品が3点出土した。いずれもややおおまかに両面加工され、34はバチ形となっている。

Ⅱ-5類　非定形的な石器（36～40）

定形的な石器の範疇に含められない類で、両面加工ないしそれに近い二次加工が加えられたものを分類した。完形品が4点、欠損品が1点出土している。

器種不明の欠損品（41・42）

2点出土しているが、42は両面ともかなり二次加工が加えられている。

Ⅱ-6類　Ｒフレイク・Ｕフレイクの類（43～98）

Ｒフレイクが48点、Ｕフレイクが27点出土した。43～86はＲフレイクで、剥片の縁辺部に連続した調整剥離を加えたものが多い。87～98はＵフレイクで、剥片の縁辺部に刃こぼれ状の微細な剥離痕がみられる。

石核・剥片（99）

石核が1点、剥片が280点出土した。99は表皮を残した黒曜石の小石核で、主に両端から加撃されている。剥片の大半は珪質頁岩で、ほかに黒曜石が3点、玉髄が9点ある。

Ⅲ-1類　半円状扁平打製石器の類（100～102）

半円状扁平打製石器、特殊すり石等、礫石器の中では比較的定形的で、幅の狭いすり面を特徴とするものを分類した。敲打などによる、整形痕が残るものもある。完形品が2点、欠損品が1点出土した。100・101は半円状扁平打製石器、102は特殊すり石（ないし三角柱状磨石）等と呼ばれる類である。

Ⅲ-3類　すり石・敲石・凹石の類（103～105）

素材の形状をほとんど変えずに利用した、非定形的な類を一括した。すり痕（すり面）、敲打痕、凹痕（敲打の集中痕）及びこれらの複合痕などがみられ、すり石、敲石、凹石等と呼ばれる類である。すり石の完形品が2点、欠損品が1点出土した。

Ⅲ-4類　石皿・台石の類（106）

石皿の完形品が1点出土した。片面だけを使用したものである。

表35　遺構外出土石器計測表

図版番号	分　類	出土区・層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
69－1	Ⅰ－1・磨製石斧	J－49・Ⅰ	10.7 × 5.2 ×2.6	213.1	安山岩	敲打痕・剥離痕
69－2	Ⅰ－1・磨製石斧	H－49・Ⅰ	(6.0)× 4.0 ×0.9	(41.0)	粘板岩	剥離痕・欠損品
69－3	Ⅰ－1・磨製石斧	K－74・Ⅰ	(6.1)×(3.6)×1.2	(38.2)	頁岩	剥離痕・欠損品
69－4	Ⅰ－1・磨製石斧	J－49・Ⅰ	(4.9)× 4.7 ×2.3	(87.7)	閃緑岩	剥離痕・欠損品
69－5	Ⅰ－1・磨製石斧	M－44・Ⅰ	(3.3)× 4.2 ×1.1	(24.6)	緑色細粒凝灰岩	欠損品
69－6	Ⅰ－1・磨製石斧	表採	(4.2)×(3.7)×2.2	(46.9)	緑色細粒凝灰岩	欠損品
69－7	Ⅱ－1・石鏃	K－58・Ⅰ	3.5 × 1.8 ×0.5	1.6	珪質頁岩	凹基・先端欠損
69－8	Ⅱ－1・石鏃	J－49・Ⅰ	(3.2)× 1.1 ×0.5	(1.6)	珪質頁岩	平基・先端欠損
69－9	Ⅱ－1・石鏃	Ⅰ－41・Ⅰ	(4.3)× 1.6 ×0.5	(2.6)	珪質頁岩	平基・先端欠損
69－10	Ⅱ－1・石鏃	J－52・Ⅰ	(2.4)× 1.8 ×0.4	(0.9)	珪質頁岩	円基・欠損品
69－11	Ⅱ－1・石鏃	Ⅰ－58・Ⅰ	2.6 × 1.1 ×0.3	0.9	珪質頁岩	凸基
69－12	Ⅱ－1・石鏃	H－52・Ⅰ	(3.0)× 1.6 ×0.7	(2.5)	珪質頁岩	凸基・先端、基部欠損
69－13	Ⅱ－1・石鏃	E－60・Ⅰ	(3.1)× 1.1 ×0.5	(1.7)	珪質頁岩	凸基・先端、基部欠損
69－14	Ⅱ－1・石鏃	M－40・Ⅰ	3.7 × 1.9 ×0.6	2.2	珪質頁岩	凸基・基部にアスファルト状の付着物
69－15	Ⅱ－1・石鏃	E－69・Ⅰ	(4.5)× 1.4 ×0.7	(3.6)	珪質頁岩	凸基・基部欠損
69－16	Ⅱ－1・石鏃	L－48・Ⅰ	(4.1)× 1.9 ×0.7	(3.4)	珪質頁岩	凸基・基部欠損
69－17	Ⅱ－1・石鏃	N－57・Ⅰ	(4.6)× 1.4 ×0.6	(3.1)	珪質頁岩	凸基
69－18	Ⅱ－1・石鏃	H－52・Ⅰ	(4.7)× 1.8 ×0.8	(5.0)	珪質頁岩	凸基・先端、基部欠損
70－19	Ⅱ－1・石鏃	N－60・Ⅰ	(4.8)× 1.7 ×0.5	(2.7)	珪質頁岩	凸基・先端欠損
70－20	Ⅱ－1・石鏃	H－52・Ⅰ	(3.6)× 1.7 ×0.6	(2.9)	珪質頁岩	凸基・先端、基部欠損
70－21	Ⅱ－1・石鏃	J－41・Ⅰ	(3.6)× 1.9 ×0.6	(2.1)	珪質頁岩	凸基・先端、基部欠損
70－22	Ⅱ－1・石鏃	J－51・Ⅰ	(3.5)× 1.5 ×0.7	(2.8)	珪質頁岩	凸基・先端欠損
70－23	Ⅱ－1・石鏃	H－52・Ⅰ	(1.5)× 0.9 ×0.4	(0.5)	珪質頁岩	凸基・先端、基部欠損
70－24	Ⅱ－1・石鏃	L－60・Ⅰ	(2.3)× 0.9 ×0.5	(0.9)	珪質頁岩	凸基・先端、基部欠損
70－25	Ⅱ－1・石鏃	H－46・Ⅰ	3.1 × 1.1 ×0.8	1.6	珪質頁岩	凸基
70－26	Ⅱ－1・石鏃	E－69・Ⅰ	(3.0)× 1.9 ×0.4	(1.3)	珪質頁岩	欠損品
70－27	Ⅱ－1・石鏃	G－59・Ⅰ	(2.4)× 1.9 ×0.5	(2.3)	珪質頁岩	欠損品
70－28	Ⅱ－2・石錐	Ⅰ－41・Ⅰ	3.8 × 1.4 ×1.0	3.7	珪質頁岩	先端磨耗
70－29	Ⅱ－2・石錐	E－60・Ⅰ	3.5 × 1.2 ×0.7	3.5	黒曜岩	先端磨耗
70－30	Ⅱ－3・石匙	J－68・Ⅰ	(4.3)× 2.5 ×0.8	(6.8)	珪質頁岩	縦形・欠損品
70－31	Ⅱ－3・石匙	M－53・Ⅰ	7.4 × 2.3 ×0.7	8.8	珪質頁岩	縦形・欠損品
70－32	Ⅱ－3・石匙	Ⅰ－59・Ⅰ	(6.3)× 3.0 ×0.8	(10.7)	珪質頁岩	縦形・欠損品
70－33	Ⅱ－4・石箆	Ⅰ－53・Ⅰ	9.1 × 4.9 ×2.0	97.7	珪質頁岩	
70－34	Ⅱ－4・石箆	G－52・Ⅰ	5.9 × 4.9 ×1.7	35.3	珪質頁岩	
70－35	Ⅱ－4・石箆	H－56・Ⅰ	6.3 × 4.0 ×1.9	49.3	珪質頁岩	
71－36	Ⅱ－5	G－54・Ⅰ	4.8 × 2.2 ×1.0	8.5	珪質頁岩	
71－37	Ⅱ－5	H－52・Ⅰ	5.6 × 2.6 ×1.0	11.6	珪質頁岩	
71－38	Ⅱ－5	F－55・Ⅰ	7.1 × 3.4 ×1.1	23.2	珪質頁岩	
71－39	Ⅱ－5	G－50・Ⅰ	(7.5)× 3.1 ×1.2	(31.0)	珪質頁岩	欠損品
71－40	Ⅱ－5	J－49・Ⅰ	4.3 × 2.5 ×1.1	9.8	珪質頁岩	
71－41	Ⅱ－5	Ⅰ－47・Ⅰ	(1.7)× 1.4 ×0.4	(0.4)	珪質頁岩	欠損品
71－42	Ⅱ－5	Ⅰ－52・Ⅰ	(3.0)× 2.5 ×0.7	(4.9)	珪質頁岩	欠損品
71－43	Ⅱ－6・Rフレイク	J－44・Ⅰ	10.1 × 5.6 ×1.1	39.6	珪質頁岩	
71－44	Ⅱ－6・Rフレイク	O－62・Ⅰ	4.9 × 5.0 ×1.1	17.9	珪質頁岩	
71－45	Ⅱ－6・Rフレイク	J－41・Ⅰ	5.0 × 3.6 ×1.3	21.1	珪質頁岩	
71－46	Ⅱ－6・Rフレイク	G－52・Ⅰ	4.1 × 3.5 ×1.3	15.9	珪質頁岩	
71－47	Ⅱ－6・Rフレイク	M－58・Ⅰ	3.0 × 2.7 ×0.6	2.9	珪質頁岩	
72－48	Ⅱ－6・Rフレイク	Ⅰ－58・Ⅰ	4.7 × 7.9 ×1.4	54.5	珪質頁岩	
72－49	Ⅱ－6・Rフレイク	G－87・Ⅰ	1.9 × 1.7 ×0.8	2.0	珪質頁岩	
72－50	Ⅱ－6・Rフレイク	K－59・Ⅰ	1.6 × 2.9 ×0.7	2.7	珪質頁岩	
72－51	Ⅱ－6・Rフレイク	F－55・Ⅰ	4.6 × 5.2 ×1.3	20.9	珪質頁岩	
72－52	Ⅱ－6・Rフレイク	K－47・Ⅰ	3.3 × 4.2 ×1.4	10.1	珪質頁岩	
72－53	Ⅱ－6・Rフレイク	Ⅰ－73・Ⅰ	5.5 × 4.9 ×1.9	41.3	珪質頁岩	
72－54	Ⅱ－6・Rフレイク	H－49・Ⅰ	2.5 × 3.2 ×1.0	6.1	珪質頁岩	
72－55	Ⅱ－6・Rフレイク	Ⅰ－47・Ⅰ	4.2 × 4.7 ×1.5	21.6	珪質頁岩	
72－56	Ⅱ－6・Rフレイク	Ⅰ－52・Ⅰ	7.7 × 3.5 ×1.4	23.0	珪質頁岩	
72－57	Ⅱ－6・Rフレイク	M－57・Ⅰ	3.5 × 5.4 ×1.3	18.3	珪質頁岩	
72－58	Ⅱ－6・Rフレイク	H－50・Ⅰ	4.9 × 3.2 ×0.8	7.8	珪質頁岩	
73－59	Ⅱ－6・Rフレイク	K－68・Ⅰ	7.1 × 5.5 ×2.2	61.7	珪質頁岩	
73－60	Ⅱ－6・Rフレイク	Ⅰ－49・Ⅰ	6.1 × 3.8 ×0.7	11.9	珪質頁岩	
73－61	Ⅱ－6・Rフレイク	F－58・Ⅰ	6.6 × 4.5 ×1.0	29.6	珪質頁岩	
73－62	Ⅱ－6・Rフレイク	J－45・Ⅰ	7.6 × 3.5 ×1.8	35.6	珪質頁岩	
73－63	Ⅱ－6・Rフレイク	N－49・Ⅰ	3.7 × 3.7 ×0.9	12.5	珪質頁岩	
73－64	Ⅱ－6・Rフレイク	M－50・Ⅰ	3.8 × 2.7 ×0.6	6.7	珪質頁岩	

図版番号	分　類	出土区・層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
73－65	Ⅱ－6・Rフレイク	J－45・Ⅰ	4.8 × 3.8 ×1.6	17.9	珪質頁岩	
73－66	Ⅱ－6・Rフレイク	I－41・Ⅰ	3.1 × 4.1 ×0.7	9.3	珪質頁岩	
73－67	Ⅱ－6・Rフレイク	O－47・Ⅰ	4.0 × 2.5 ×0.8	4.6	珪質頁岩	
73－68	Ⅱ－6・Rフレイク	G－52・Ⅰ	3.6 × 2.0 ×0.7	4.4	珪質頁岩	
73－69	Ⅱ－6・Rフレイク	F－55・Ⅰ	2.8 × 2.8 ×1.0	7.6	珪質頁岩	
73－70	Ⅱ－6・Rフレイク	K－42・Ⅰ	3.4 × 2.0 ×0.6	2.9	珪質頁岩	
73－71	Ⅱ－6・Rフレイク	J－45・Ⅰ	3.7 × 2.9 ×0.8	6.8	珪質頁岩	
74－72	Ⅱ－6・Rフレイク	I－52・Ⅰ	7.4 × 3.4 ×1.7	17.6	珪質頁岩	
74－73	Ⅱ－6・Rフレイク	G－56・Ⅰ	5.6 × 4.5 ×1.4	25.3	珪質頁岩	
74－74	Ⅱ－6・Rフレイク	L－85・Ⅰ	4.8 × 2.4 ×0.7	7.4	珪質頁岩	
74－75	Ⅱ－6・Rフレイク	I－40	3.4 × 2.7 ×1.1	7.6	珪質頁岩	
74－76	Ⅱ－6・Rフレイク	G－52・Ⅰ	7.4 × 3.2 ×1.3	19.0	珪質頁岩	
74－77	Ⅱ－6・Rフレイク	F－54･55･Ⅰ	4.0 × 3.8 ×1.6	15.0	珪質頁岩	
74－78	Ⅱ－6・Rフレイク	I－40・Ⅰ	3.8 × 4.3 ×0.7	10.6	珪質頁岩	
74－79	Ⅱ－6・Rフレイク	G－51・Ⅰ	5.8 × 3.2 ×1.7	30.7	珪質頁岩	
74－80	Ⅱ－6・Rフレイク	F－56・Ⅰ	2.8 × 2.9 ×1.1	6.4	珪質頁岩	
74－81	Ⅱ－6・Rフレイク	F－56・Ⅰ	(2.0) × 2.4×0.7	(3.2)	黒曜石	欠損品
74－82	Ⅱ－6・Rフレイク	L－48・Ⅰ	4.3 × 4.0×1.0	13.7	珪質頁岩	
74－83	Ⅱ－6・Rフレイク	E－55・Ⅰ	2.9 × 3.0×0.6	4.2	珪質頁岩	
74－84	Ⅱ－6・Rフレイク	H－52・Ⅰ	3.5 × 3.1×1.2	7.5	珪質頁岩	
74－85	Ⅱ－6・Rフレイク	G－56・Ⅰ	3.6 × 2.6×0.7	3.6	珪質頁岩	
75－86	Ⅱ－6・Rフレイク	J－45・Ⅰ	4.8 × 3.8×1.6	17.9	珪質頁岩	
75－87	Ⅱ－6・Uフレイク	I－41・Ⅰ	5.5 × 3.9×1.2	19.9	珪質頁岩	
75－88	Ⅱ－6・Uフレイク	M－48・Ⅰ	4.6 × 4.6×1.9	22.7	珪質頁岩	
75－89	Ⅱ－6・Uフレイク	I－49・Ⅰ	4.4 × 4.1×0.6	7.1	珪質頁岩	
75－90	Ⅱ－6・Uフレイク	H－55・Ⅰ	3.6 × 2.4×0.6	4.1	珪質頁岩	
75－91	Ⅱ－6・Uフレイク	M－79・Ⅰ	3.6 × 2.8×1.0	10.3	珪質頁岩	
75－92	Ⅱ－6・Uフレイク	P－42・Ⅰ	6.4 × 3.2×1.7	23.2	珪質頁岩	
75－93	Ⅱ－6・Uフレイク	G－52・Ⅰ	4.1 × 4.5×0.8	8.3	珪質頁岩	
75－94	Ⅱ－6・Uフレイク	F－55・Ⅰ	4.6 × 3.6×1.1	12.4	珪質頁岩	
75－95	Ⅱ－6・Uフレイク	H－51・Ⅰ	3.7 × 2.5×0.9	5.4	珪質頁岩	
75－96	Ⅱ－6・Uフレイク	G－51・Ⅰ	4.2 × 2.6×0.9	8.8	珪質頁岩	
75－97	Ⅱ－6・Uフレイク	G－52・Ⅰ	3.1 × 3.7×0.8	8.2	珪質頁岩	
75－98	Ⅱ－6・Uフレイク	I－52・Ⅰ	3.3 × 3.3×0.6	8.2	珪質頁岩	
76－99	石核	F－52・Ⅰ	(3.8) × 1.9×2.0	(13.5)	黒曜石	欠損品
76－100	Ⅲ－1・半円状扁平打製石器	K－73・Ⅰ	(11.2) × 6.6×2.8	(229.5)	安山岩	剥離痕・欠損品
76－101	Ⅲ－1・半円状扁平打製石器	J－46・Ⅰ	11.3 × 6.8×2.2	246.3	安山岩	すり面・剥離痕
76－102	Ⅲ－1	K－45・Ⅰ	17.2 × 8.3×4.8	813.3	凝灰岩	すり面・剥離痕
76－103	Ⅲ－3・すり石	J－40・Ⅰ	(6.9) × 8.5×5.6	(448.9)	閃緑岩	すり痕・欠損品
76－104	Ⅲ－3・すり石	J－47・Ⅰ	6.7 × 5.3×4.0	159.2	頁岩	すり面・剥離痕
76－105	Ⅲ－3・すり石	J－49・Ⅰ	8.2 × 5.0×2.9	169.0	チャート	すり面・剥離痕
76－106	Ⅲ－4・石皿	表採	18.2 ×12.4×6.3	19,000.0	安山岩	すり痕

（4）石製品（図76、表36）

石棒状の欠損品、石刀状の欠損品、円形の石製品が各１点出土した。107は中央部が欠けているので、全体の長さが分からない。108には擦り切りの痕跡が残り、109はていねいに磨かれている。

（工藤）

表36　遺構外出土石製品計測表

図版番号	分　類	出土区・層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
76－107	石棒？	表採	(12.4)× 12.8 ×11.4 (13.0)× 20.8 ×10.4	(4,800.0)	流紋岩	欠損品
76－108	石刀？	K－74・Ⅰ	(4.4)×(3.3)× 1.4	(25.9)	緑色細粒凝灰岩	擦切痕・欠損品
76－109	円形石製品	E－62・Ⅰ	(3.5)× 3.5 × 0.8	(13.7)	細粒凝灰岩	一部欠損

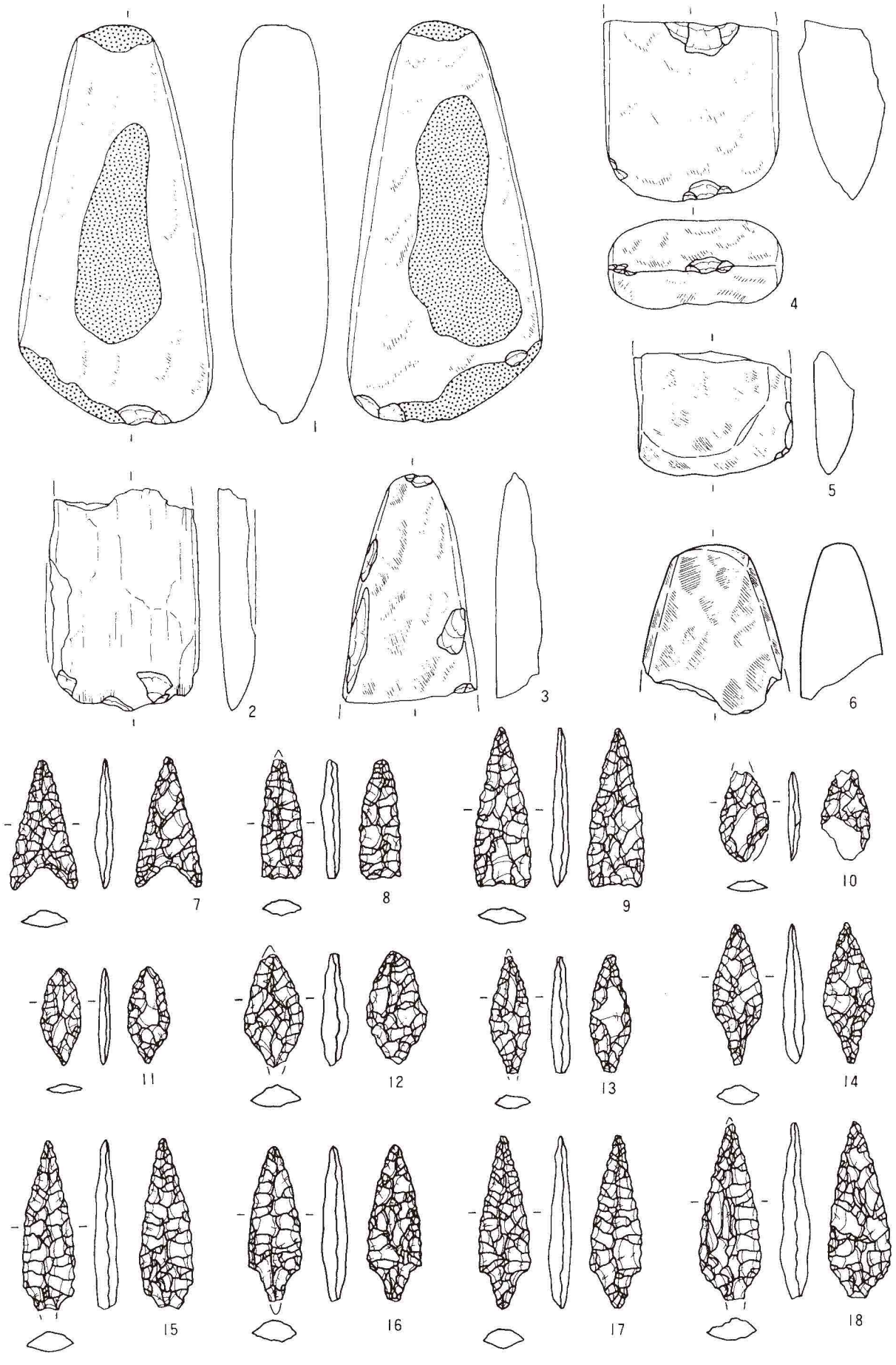


図69　遺構外出土石器(1)　　S＝2/3

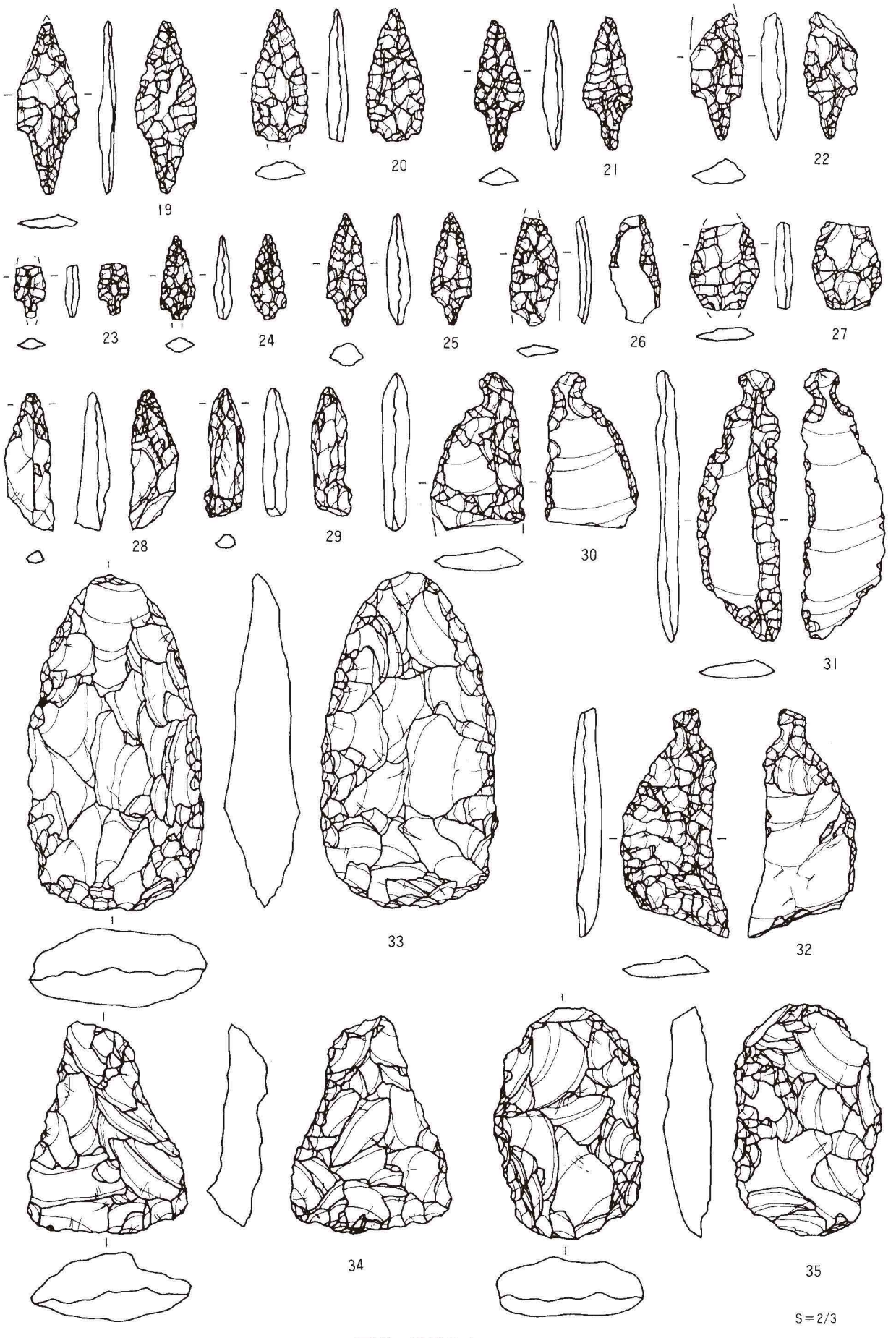


図70　遺構外出土石器(2)

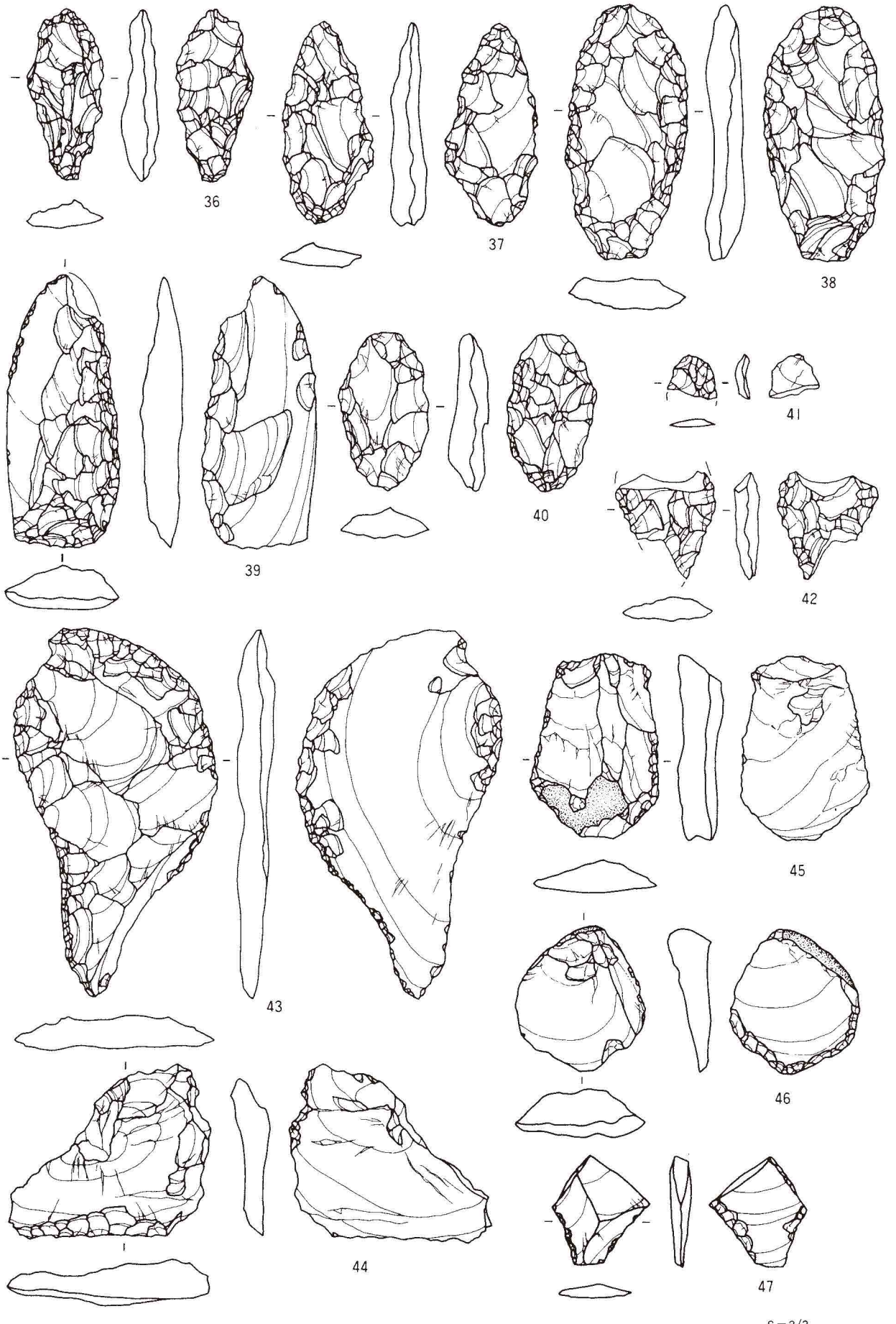


図71　遺構外出土石器(3)

S＝2/3

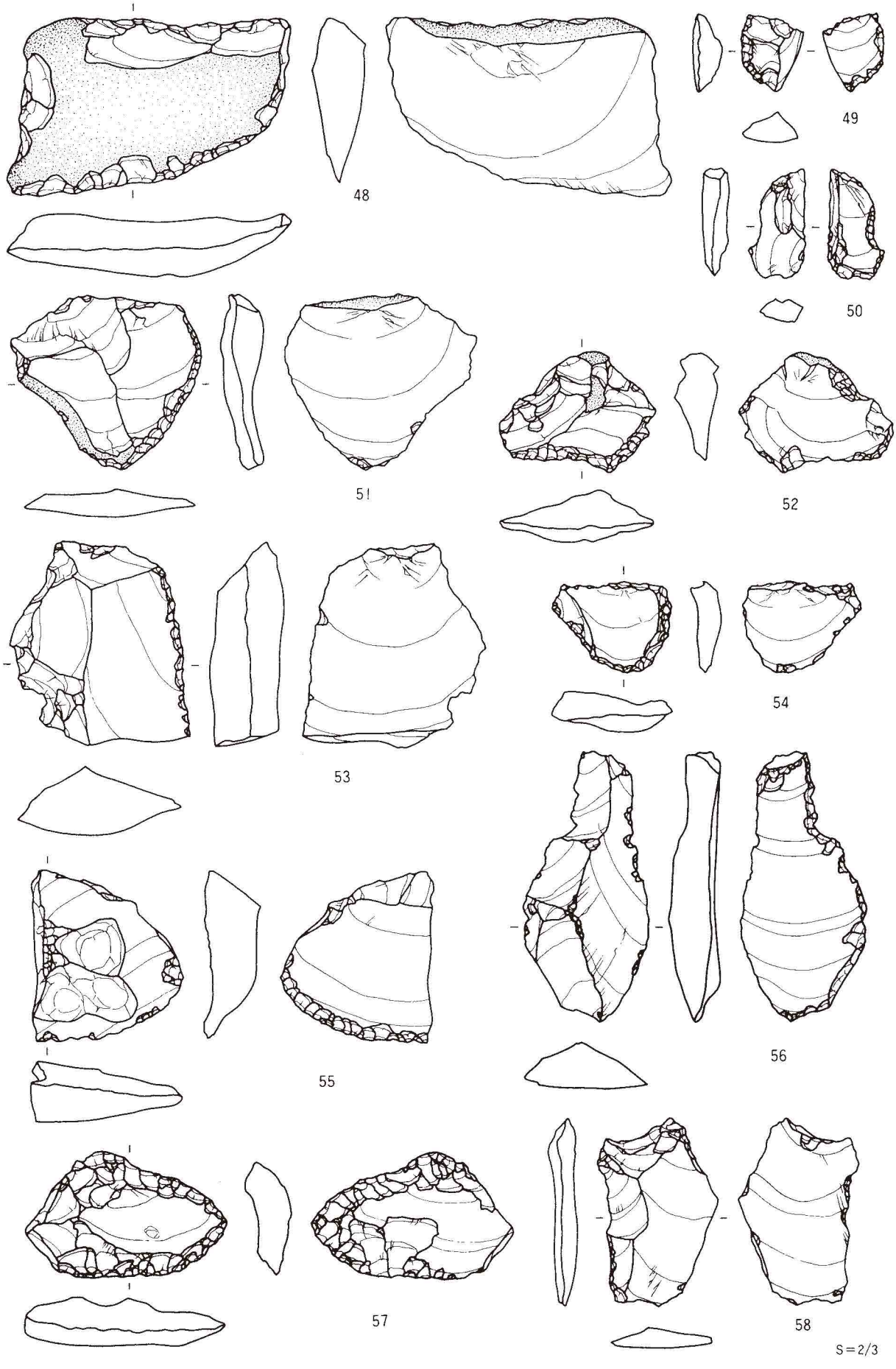


図72　遺構外出土石器(4)

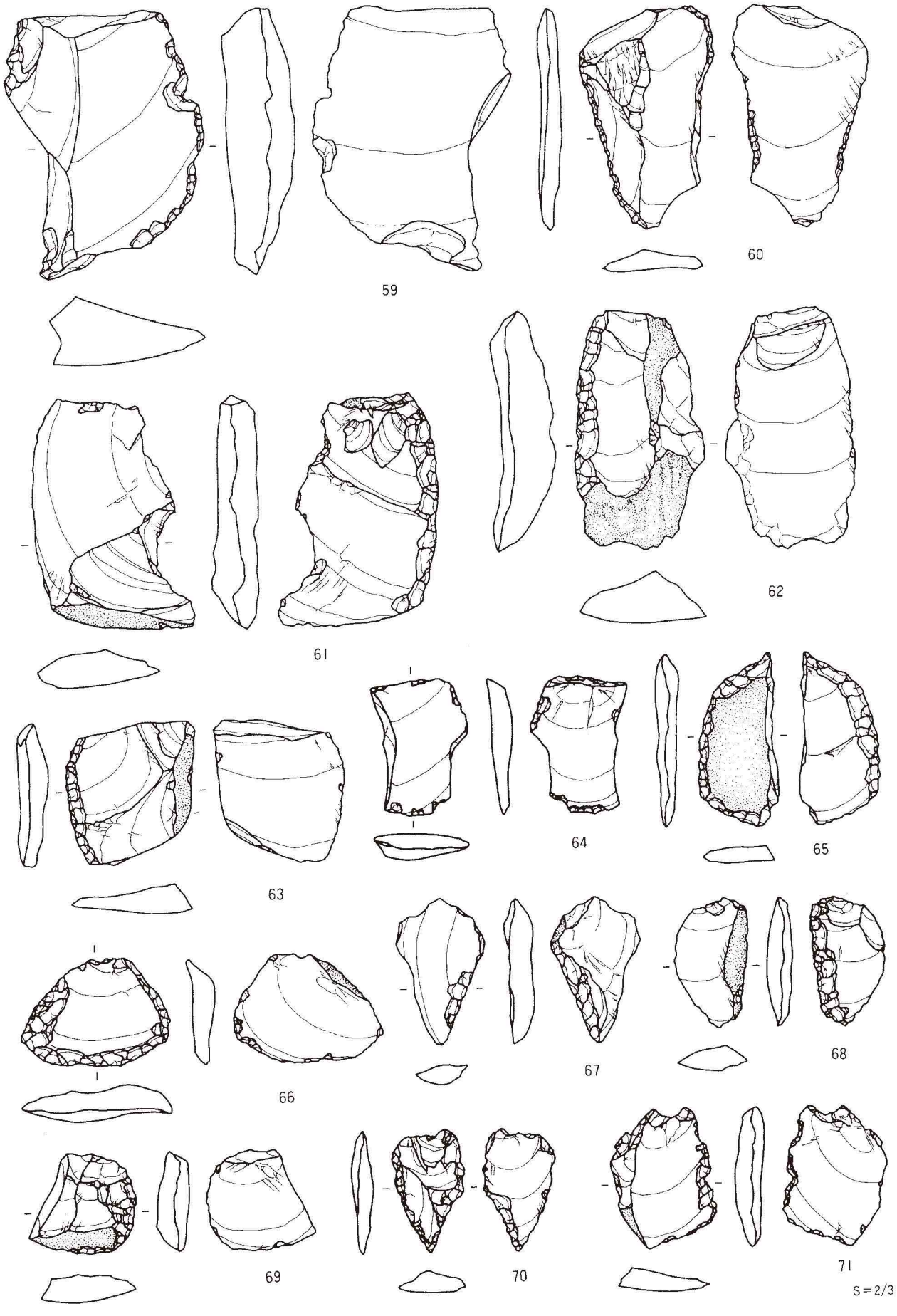


図73　遺構外出土石器(5)

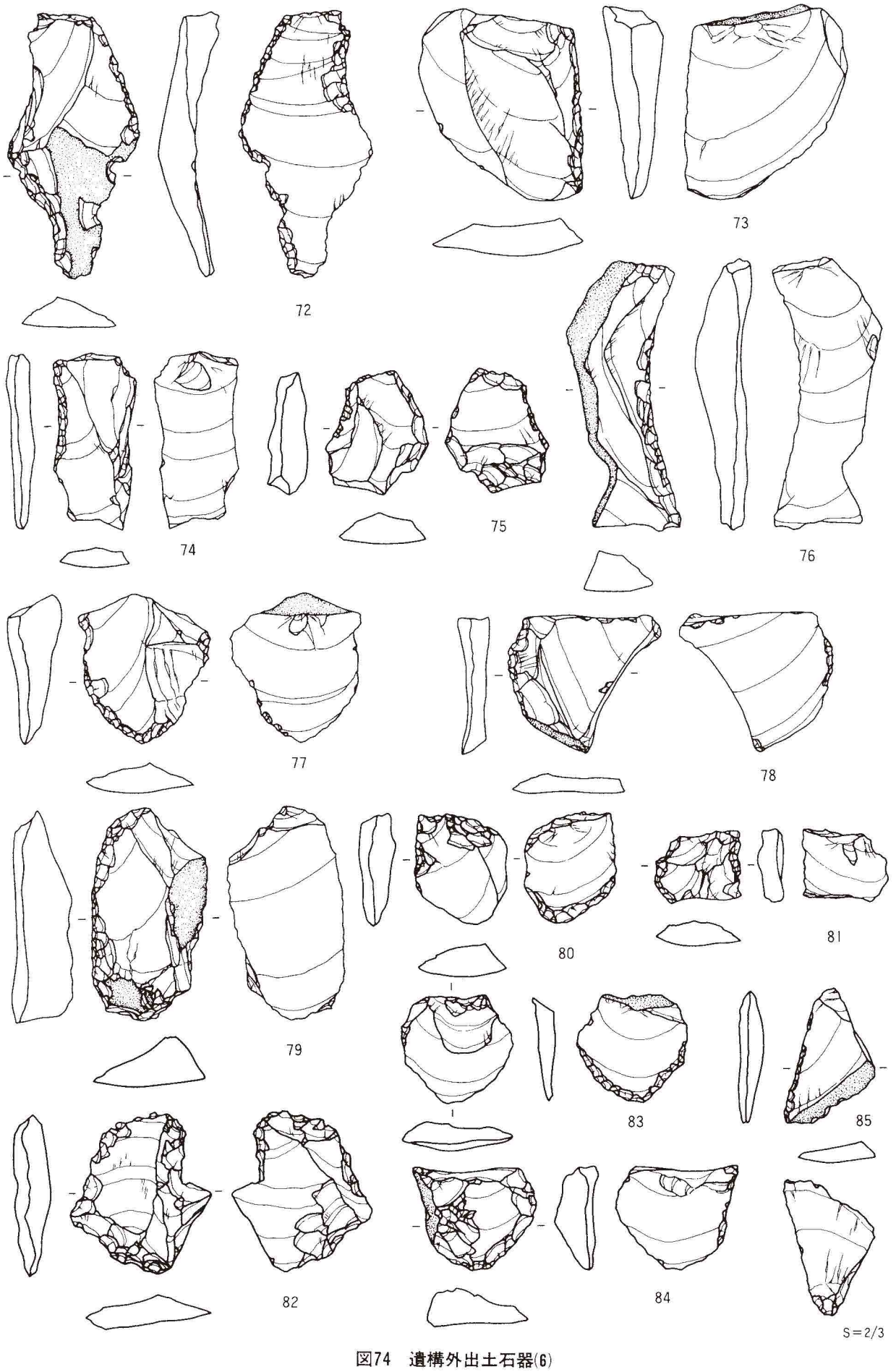


図74　遺構外出土石器(6)

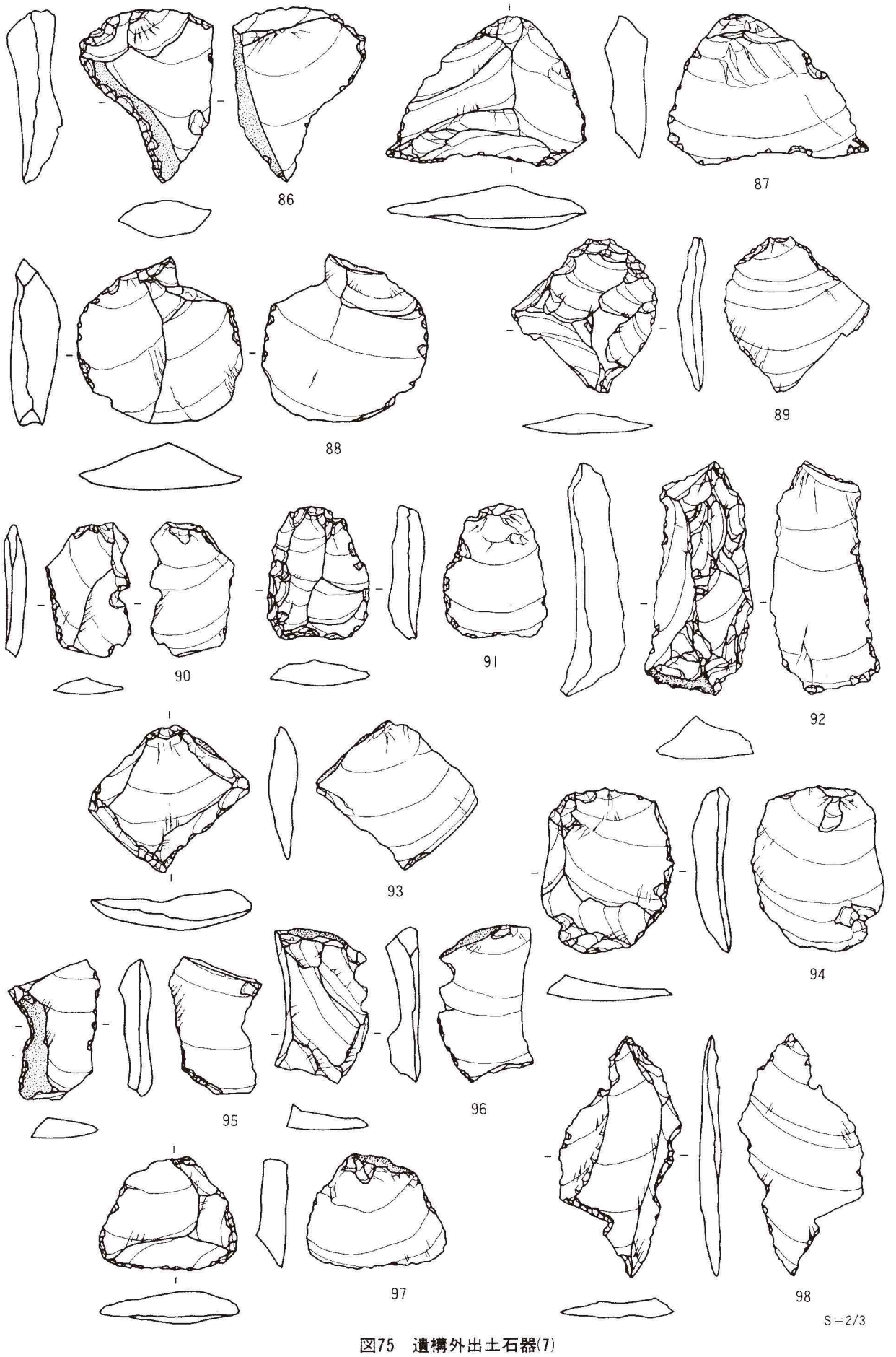


図75　遺構外出土石器(7)

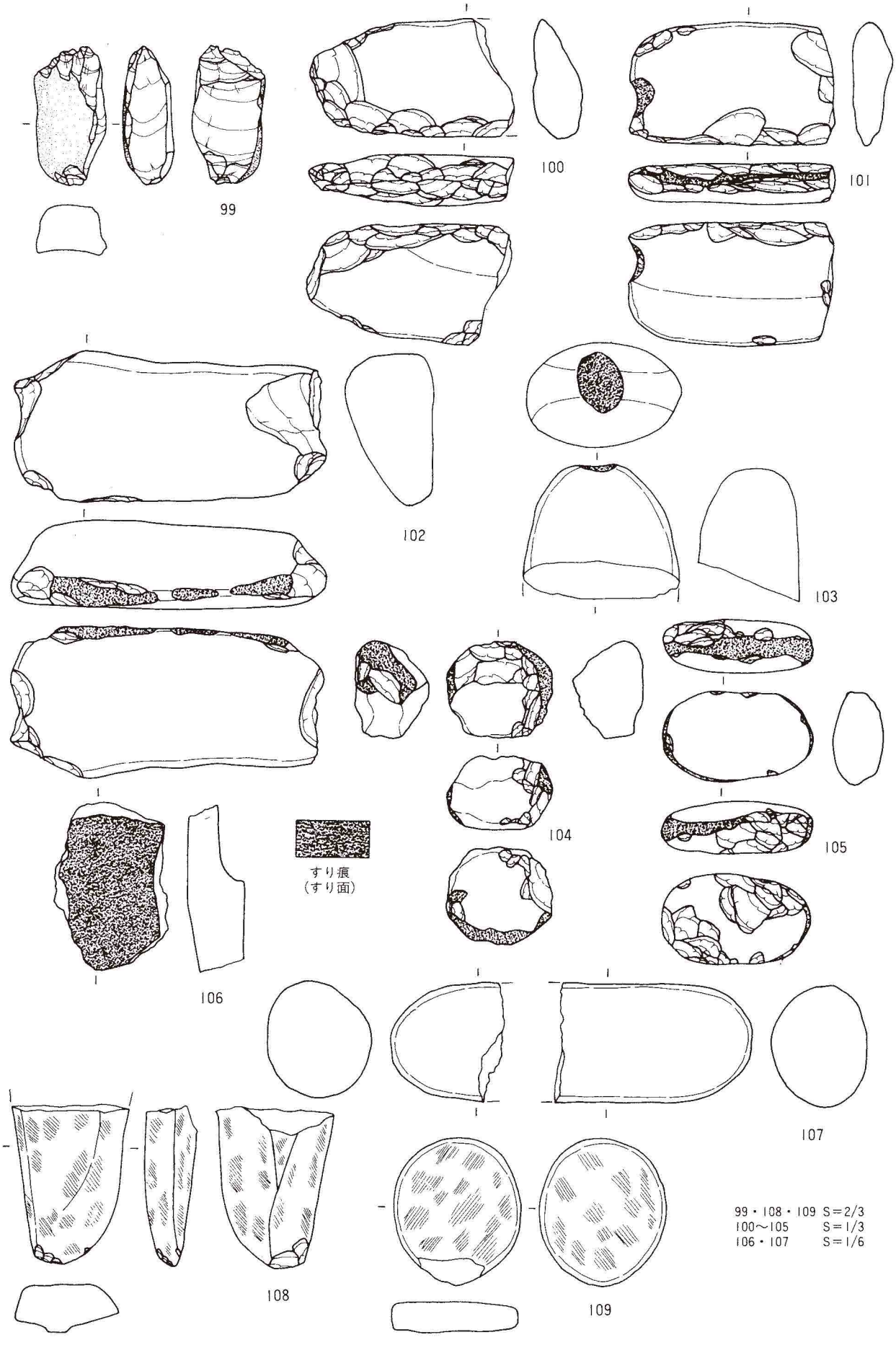


図76　遺構外出土石器(8)・石製品

2　続縄文時代の遺物（図77・78、表37）

約290点の続縄文土器が出土した。出土層位はすべて第Ⅰ層で、他遺物との共伴関係も明確にとらえることができなかった。出土位置は調査区南側の緩やかな傾斜面Ｅ～Ｊ・51～60グリッドの範囲に集中する。破片が細かく、接合できる資料は少なかったものの20個体以上の個体数が認められる。

３～８は同一個体で深鉢形土器の体部であると考えられる。胎土は若干砂粒を含むが硬く焼きしめられている。文様は微隆起線と帯縄文（０段多条のＲＬ）によりレンズ状を描き、間の無文部分には三角烈点が下方から施されている。微隆起線は丁寧に撫でつけられ、その断面は三角形を呈す。体部下半は縦走する帯縄文が間隔をあけて施されるものと考えられる。器面には煮汁の跡と思われる炭化物の付着が認められる。１、２は同一個体で深鉢形土器の口縁部である。口唇の断面形は丸く刻目が施される。口唇直下には刻目のある貼付帯が２条巡り、貼付帯が交差する突起部は山形を呈し貼付瘤となる。文様は微隆起線と帯縄文（０段多条のＲＬか）により区画されるものと考えられるが詳細は不明である。９、14は同一個体でそれぞれ体部上半、体部下半である。内面は橙色で丁寧なミガキが認められる。12、17は同一個体でそれぞれ体部下半である。縦走するＲＬ帯縄文が施文されている。10、11、15、16は同一個体で注口土器の体部であると考えられる。器厚は５㎜で胴部破片である。器面はにぶい橙色で、本来のこの土器のベース地（明黄褐色）の粘土紐によって微隆起線が化粧土的に施されている。詳細な文様は不明であるが単節ＲＬの帯縄文が微隆起線により区画され、無文部分には三角烈点が施されている。また、11、16は微隆起線の接着部分を切って三角烈点が施されてる。したがってこの土器の胴部の施文過程は、帯縄文→微隆起線→三角烈点の順序と観察される。11は口縁部で口唇部が欠損している。本来は貼付帯が２条巡ると推測される。18、32、37は同一個体で器面の磨滅が激しく機種、文様等は不明である。18の口縁部破片は口唇部に刻目、その下に貼付帯が２条巡る。13、19～26は口縁部破片である。13は磨滅が激しいものの貼付帯が２条残存し、刻目がかすかに確認できる。22～26はいずれも口唇部に刻目、口縁部に貼付帯が２条巡っている。19は突起部で山形を呈する。刻目のある貼付帯が２条巡り、貼付帯が交差し突起部を形成している。口唇部には突孔がある。20は口唇部の内面に刻目、１条の貼付帯が巡っている。27、28、29、31、33、35は体部上半に相当する破片である。27～29は深鉢土器の破片で微隆起線と帯縄文の区画によ

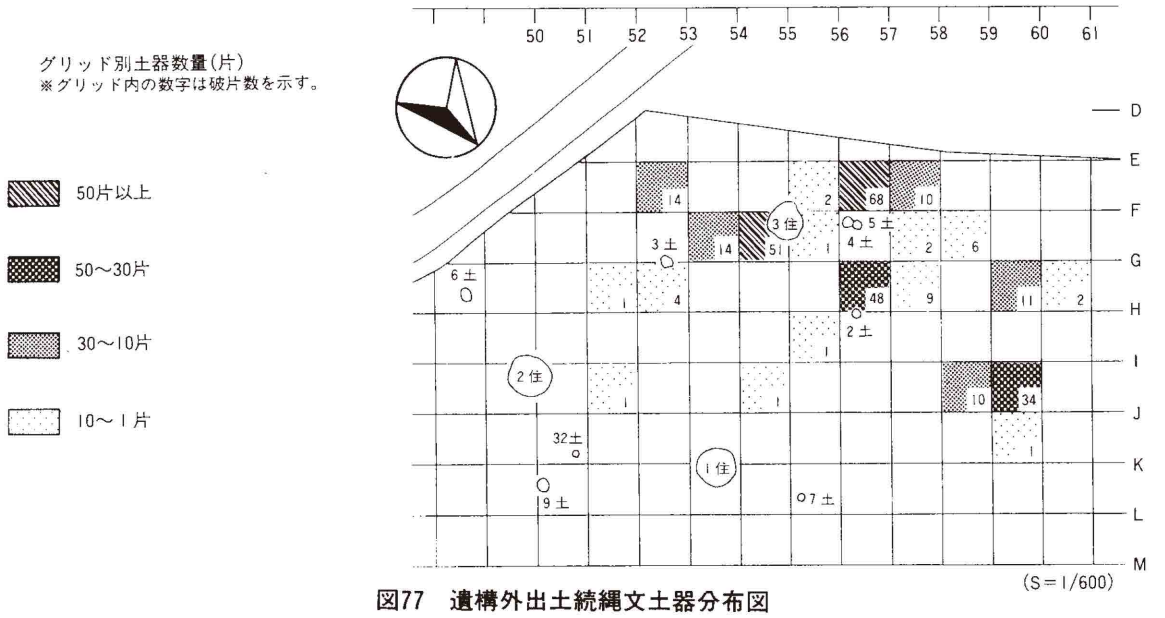


図77　遺構外出土続縄文土器分布図

り、円形あるいはレンズ状の文様を構成すると思われる。27、29は胎土が硬く、良く焼きしめられている。28は弧状に区画された微隆起線から垂下（横走）する隆起線の間隔が狭いためにその断面は尖りをもたないもの（撫でつけられている）と思われる。31、33、35は弧状の文様の端部に相当するものと思われる。36、37、38は体部下半で38は単節ＲＬの帯縄文が、36、37は０段多条のＲＬの帯縄文が縦走している。39は器厚が薄く、明褐色土で口唇部に刻目、口縁部には垂下する沈線が施されものである。詳細は不明であるが本時代の遺物の可能性も考えられよう。

本調査で出土した後北式土器は①帯縄文と微隆起線により円形、馬蹄形を呈す。②口縁部の断面形が角形、丸みを呈する。③口縁部下に２～３条の貼付帯が巡っている。以上より後北Ｃ２－Ｄ式に比定される。

青森県内での後北式土器出土遺跡は約60遺跡を数え、五所川原市においては桜ヶ峰(2)遺跡（青埋報第208集）についで２例目である。畑内遺跡（青埋報第211集）、家の前遺跡（青埋報第148集）等の後北C2－D式土器に類似すると思われる。

また、北海道教育庁生涯学習部文化課調査班主査大沼忠春氏からは、北海道内の在地の土器との違いは認められず、おおむね「一般的なC2・D式」(注)の段階のものとの所見を頂いた。　（中村）

(注)大沼忠春:1982「縄文土器大成5 続縄文」中の4段階の細分、C2式初→一般的なC2・D式→C2・D式後葉→C2・D式末の変遷による。

表37　続縄文時代の遺物観察表

図版番号	出土位・層	部　位	外　面　施　文　（地文）	胎　土	備　考
78－１	Ｆ－54・Ⅰ	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条 RL帯縄文→微隆起線貼付	良(砂少)	
78－２	Ｆ－54・Ⅰ	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条(貼付瘤) RL帯縄文→微隆起線貼付	良(砂少)	内外面炭化物付着、１と同一個体
78－３	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点	良(砂少)	内外面炭化物付着
78－４	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点	良(砂少)	内外面炭化物付着、３と同一個体
78－５	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点	良(砂少)	内外面炭化物付着、３と同一個体
78－６	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点	良(砂少)	内外面炭化物付着、３と同一個体
78－７	Ｆ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付	良(砂少)	内外面炭化物付着、３と同一個体
78－８	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点	良(砂少)	内外面炭化物付着、３と同一個体
78－９	Ｅ－56・Ⅰ	胴部	三角烈点、ミガキ	良(砂少)	
78－10	Ｅ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付	良(砂少)	微隆起線化粧土的
78－11	Ｅ－56・Ⅰ	口縁部	口縁刻目のある貼付帯２条か、RL帯縄文	良(砂少)	微隆起線化粧土的、10と同一個体
78－12	Ｉ－58・Ⅰ	胴部	RL帯縄文	粗(砂多)	
78－13	Ｇ－56・Ⅰ	口縁部	口縁刻目のある貼付帯２条か	粗(砂多)	磨滅激しい
78－14	Ｅ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文、ミガキ	良(砂少)	９と同一個体
78－15	Ｅ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点	良(砂少)	微隆起線化粧土的体、10と同一個体
78－16	Ｇ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点	良(砂少)	微隆起線化粧土的体、10と同一個体
78－17	Ｅ－57・Ⅰ	胴部	RL帯縄文	粗(砂多)	12と同一個体
78－18	Ｇ－56・Ⅰ	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条 RL帯縄文か	粗(砂多)	磨滅激しい
78－19	表採	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条、三角烈点 山形突起部突孔	粗(砂多)	
78－20	表採	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯１条、三角烈点	良(砂少)	
78－21	表採	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条	良(砂少)	
78－22	Ｆ－54・Ⅰ	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条、三角烈点	良(砂少)	
78－23	Ｈ－56・Ⅰ	口縁部	口縁刻目のある貼付帯２条か	粗(砂多)	
78－24	表採	口縁部	口縁貼付帯１(2)条か	粗(砂多)	
78－25	Ｉ－53・Ⅰ	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条、三角烈点	良(砂少)	
78－26	表採	口縁部	口唇上刻目、口縁刻目のある貼付帯２条か	粗(砂多)	
78－27	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点、ミガキ	良(砂少)	外面炭化物付着
78－28	Ｇ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文、微隆起線貼付、三角烈点	粗(砂多)	
78－29	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点、ミガキ	良(砂少)	
78－30	Ｇ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文、微隆起線貼付	粗(砂多)	
78－31	Ｇ－59・Ⅰ	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付、三角烈点、ミガキ	良(砂少)	
78－32	Ｆ－53・Ⅰ	胴部	RL帯縄文、ミガキ	良(砂少)	磨滅激しい、18と同一個体
78－33	Ｆ－54・Ⅰ	胴部	RL帯縄文か、微隆起線貼付、三角烈点、ミガキ	良(砂少)	内外面炭化物付着
78－34	Ｅ－57・Ⅰ	胴部	RL帯縄文、微隆起線貼付	粗(砂多)	
78－35	Ｅ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文、微隆起線貼付、三角烈点、外面ミガキ	良(砂少)	
78－36	Ｅ－53・Ⅰ	胴部	RL帯縄文か	粗(砂多)	
78－37	Ｆ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文か	粗(砂多)	磨滅激しい、18と同一個体
78－38	Ｅ－56・Ⅰ	胴部	RL帯縄文か	良(砂少)	
78－39	Ｇ－54・Ⅰ	口縁部	口唇部刻目、口縁部縦に沈線	良(砂少)	

図78　遺構外出土続縄文土器

3　平安時代の遺物（図79、表38）

土師器が約50点、須恵器が３点、土製品が１点出土した。ほとんどが小破片である。出土層位はすべて基本層序第Ⅰ層からの出土である。出土位置は調査区全体から散発的に出土した。遺物の器種は土師器は坏、甕、壷、須恵器は大甕である。その実年代はおおむね９世紀末から10世紀前半のもが主体を占める。以下に器種別に述べる。

(1)土師器

坏（３、５、８、９）

８、９の底部は回転糸切痕で、９の内部は黒色処理され放射状のミガキが丁寧に施されている。

甕（１、２、６、７）

１は頸部から垂直に立ち上がり、口唇部の断面形は丸い。碗形を呈するものと思われる。内外面にはミガキによる調整がされている。甕のミニチュアの可能性がある。２は口縁でヨコナデが、６、７は底部でケズリとナデがみられる。

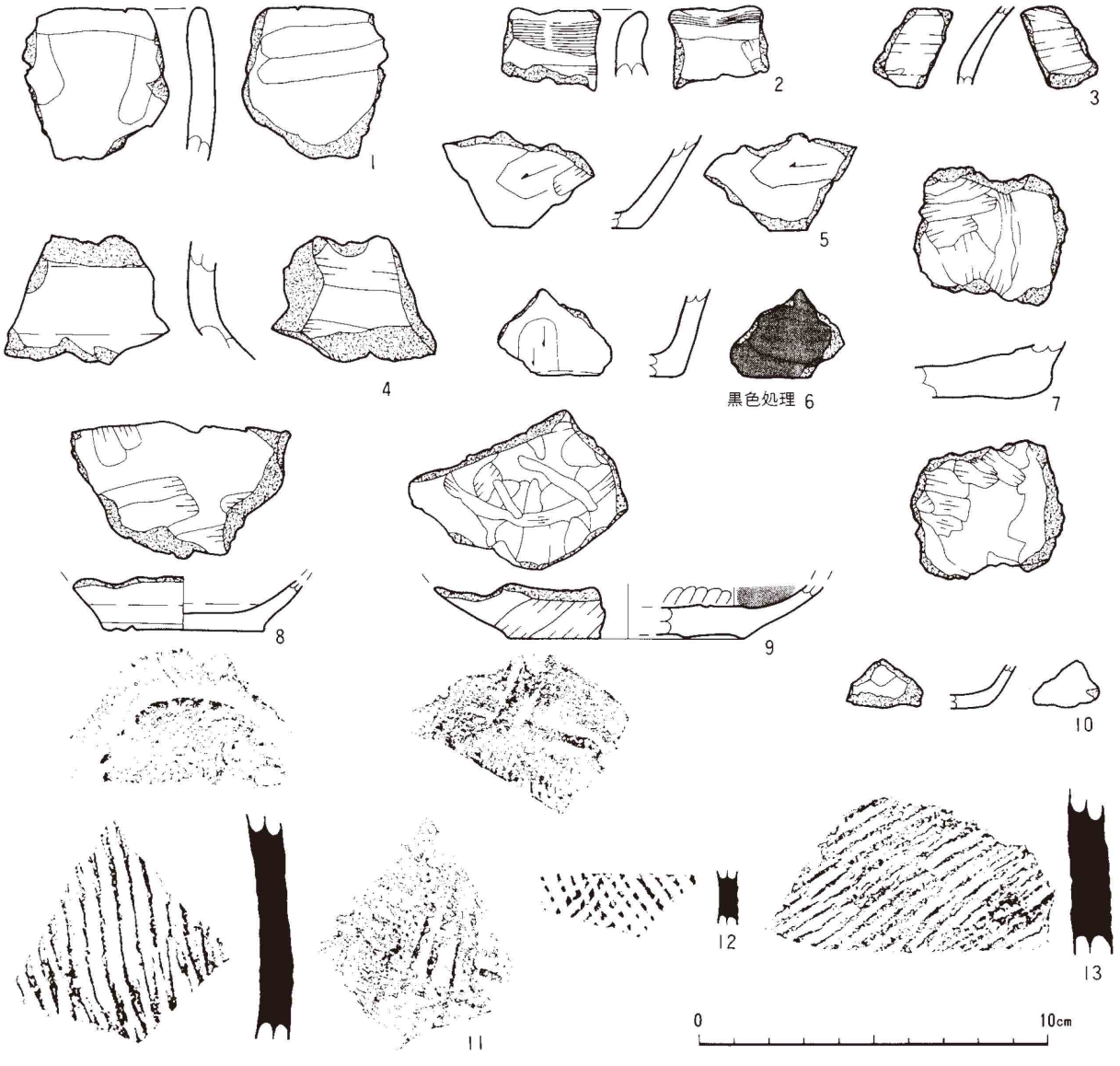


図79　平安時代の遺物

壷（4）

頚部と思われる。胎土は橙色で器面は化粧土が塗られ整形されてる。

(2)須恵器

大甕（11～13）

すべて大甕である胎土の色調は赤褐色が主体で外面は浅い平行あるいは格子状のタタキ目、内面には当具痕をもつもの（11）がある。

(3)土製品（10）　手捏で作られたミニチュアである。　（中村）

表38　平安時代の遺物観察表

図版番号	出土位・層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	底面調整
79－1	H－60・Ⅰ	土師器	杯	口縁部	－	－	－	ミガキ	ミガキ	
79－2	G－54・Ⅰ	土師器	甕か	口縁部	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	
79－3	L－85・Ⅰ	土師器	小甕か	口縁部	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	
79－4	G－59・Ⅰ	土師器	壺	頸部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	
79－5	F－54・Ⅰ	土師器	杯	底部	－	－	－	ケズリ、ナデ	ケズリ	
79－6	J－46・Ⅰ	土師器	小甕	底部	－	－	－	ケズリ	黒色処理	
79－7	F－65・Ⅰ	土師器	甕	底部	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	
79－8	M－87・Ⅰ	土師器	杯	底部	－	(5.6)	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	回転糸切
79－9	表採	土師器	杯	底部	－	(6.8)	(1.5)	ヘラナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切
79－10	表採	ミニチュア	不明	不明	－	－	－	手捏	手捏	
79－11	K－64・Ⅰ	須恵器	大甕	胴部	－	－	－	平行タタキ目	当具痕	
79－12	M－43・Ⅰ	須恵器	大甕	胴部	－	－	－	格子状タタキ目		
79－13	K－64・Ⅰ	須恵器	大甕	胴部	－	－	－	平行タタキ目		

4　近世以降の遺物（図80・81、表39）

食膳具を主とする陶磁器類をはじめ、鉄製品、石製品、銭貨が出土した。

(1)陶磁器類（図80-1～20、図81-1～10、16）

本調査で近世から現代までの陶磁器類が約200点出土した。出土層位はすべてⅠ層である。出土位置はM～P・45～50、J～M・67～72グリッドの範囲に若干集中がみられるが調査区のほぼ全域から出土している。個体数としては少なくとも100個体以上を確認できるが、破片がほとんどである。江戸時代後半から幕末期の肥前系、瀬戸美濃系、明治時代のいわゆる印版手が大半である。観察表には大橋康二氏の肥前陶磁の年代区分(1989)をもとに、廃棄年代ではなくその焼成年代を明記した。また、製作地の区分は主として技術系譜で分類したため「～系」を付し表示した。碗、皿類の機種・器形の分類については内藤町遺跡報告書(東京都建設局、新宿区内藤町遺跡調査会　1992)の「やきものの分類表」掲載の基準を転用した。以下器種ごとに述べる。

碗（図80-1～3、5～8、10～13、19、図81-1、5、7、9）

最も多く出土した器種である。図80-1～3、5、7、8、10、図81-1は江戸時代後半～幕末の飯碗である。図80-1、5、7、10は日常雑器として用いられ、俗にくらわんか碗と呼称されたものある。丸形を呈すると推定され、他の碗に比べ器に厚みをもつ。1は畳付が鉄釉で着色され、高台内に焼かれた窯を表すと思われる印をもつ。図80-2は丸形に近い形になると推定される。白色の透明釉が施釉され、見込が蛇の目釉剥ぎされている。図80-3は開口部がやや角度をもって立ち上がり、平形に近い器形になろう。図80-2の碗と同様に透明釉が施釉され、見込が蛇の目釉剥ぎされているが、胎土が灰色で均一感がないことから地方の窯で焼かれた可能性が高い。高台は削り出して作られている。図80-6は内外面に網目文が施文される。図80-8は瀬戸美濃系のと思われるもので、肥前系、波佐見・平戸系のものより高台が小さく、低い作りとなっている。図81-1は瀬戸美濃系で前述のも

のより若干時代が時代が新しいものとみられる。図80-12、図81-7、9は湯飲み碗と思われる。7、9は同器種の陶器であり、内外面に浅黄橙色の釉が施釉される。9は畳付が露呈し筒形を呈する。図80-13は猪口の口縁部と考えられ、雨降り文が描かれている。図80-5は胴部から口唇部にかけて薄くなり断面が直線的に立ち上がることから広東碗の口縁部と考えられる。

皿（図80-4、9、14、16～18、図81-2、3、8）

図80-4、14、16～18、図81-2、3、8は小皿である。図80-4は丸形を呈し、外面は薄明茶色で白濁釉がなまこ釉的に施釉されている。内面は緑釉が施釉され、見込が蛇の目釉剥ぎされている。図80-16は割と丁寧に染め付けられ、呉須の発色が良い。図80-17はの見込みの中心部で菊花が描かれ、裏銘が残る。図80-18は透明釉が施釉され、見込が蛇の目釉剥ぎされているもので、地方窯で焼かれた可能性が高い。図81-2は美濃型紙による染付皿で花が印刷されている。口唇部には鉄釉が塗られている。図81-3は型押しの手法を使ったもの正方形を呈する。外面は装飾模様が浮き彫りになっており、その上から青磁を模倣したと思われる緑釉が施釉されている。内面には人物（漁師文か）が描かれ、高台内には大明嘉？と背銘が残る。図80-8は陶器で見込に鶴が描かれている。図81-9は変形皿で楕円形を呈するものと推定される。瀬戸美濃系の手塩皿の可能性がある。

浅鉢（図81-4）

明治20年以降のもので、銅板転写紙により絵付けされている。？磁精？国製の文字が残る。

植木鉢（図81-15）

筒形を呈し、外面は浮き彫りで櫛状の文様がみられる。底部に突孔がある。

擂鉢（図81-16）

肥前系（唐津か）の擂鉢である。卸目9条である。

器種がはっきりしないもの（図80-11、19、20、図81-6、10）

図80-11は人工コバルトの発色が鮮やかで、平清水の可能性がある。図80-19、20は白色の透明釉が施釉されている。地方窯で焼かれたものと思われる。図81-6は唐津で甕の胴部の可能性がある。81図-10は外面は鉄釉が施釉され、内面は無釉である。茶入れの頸部の可能性があろう。

(2)鉄製品[注1]（図81-11、13、14、18、19）

11は峰が湾曲した外刃の刃物であるが種別は不明である。13は銅製で緑青で表面が覆われている。14は鉄釘である。18、19は銅製の煙管で緑青で表面が覆われている。18は吸口で18世紀代のものと思われる。19は首部に補強帯がなく脂返しが直線的である。火皿の端部が内湾し炭化物が付着している。18前世紀前半とみられる。

(3)石製品（図81-12、15、17）

12は碁石で表面にミガキが認められる。15は硯で石質は粘板岩である。小型で海の部分に数条の線条痕がみられる。懐中用であったものと思われる。17は砥石で石質は細粒凝灰岩である。使用面は一面の仕上げ砥石である。本時期に含めたが平安時代のものである可能性もある。

(4)銭貨[注2]（図81-20、21）

寛永通宝3枚と明治の銭貨が2枚出土した。20は波文が11波の四文銭、20、21は裏面に擦りによる加工がみられ模鋳銭であろう。（中村）

(注1)煙管の実年代は小泉弘氏の「煙管の変遷(1983)」による (注2)兵庫埋蔵銭調査会「日本出土銭総覧(1996)」参考

表39　近世以降の遺物観察表

図版番号	出土位・層	種別	計測値(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	器種　製作地 文様・装飾特徴・印・銘など	年　代	整　形	胎土色
80－1	F－72・Ⅰ	磁器	－	3.8	2.1	染付碗　波佐見・平戸系 外面一重圏線　裏銘あり	17C末～18C後半	ロクロ	灰白色
80－2	N－84・Ⅰ	磁器	－	(4.8)	(2.0)	染付碗　肥前系 見込蛇の目釉剥ぎ　畳付鉄釉着色	17C末～18C後半	ロクロ	灰白色
80－3	M－49・Ⅰ	磁器	－	(4.5)	(2.2)	碗　肥前系か 見込の目釉剥ぎ　削り出し高台	17C末～18C後半か	ロクロ	灰白色
80－4	Ⅰ－40・Ⅰ	磁器	－	－	－	皿　肥前系 見込蛇の目釉剥ぎ　外面緑釉	17C末～18C後半	ロクロ	灰色
80－5	K－69・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　波佐見・平戸系 花弁文	17C末～18C後半	ロクロ	灰白色
80－6	L－45・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系 外面一重網目文　内面二重網目文	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－7	M－46・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　波佐見・平戸系 花弁文	17C末～18C後半	ロクロ	灰白色
80－8	H－86・Ⅰ	磁器	－	(3.8)	1.5	染付碗？　瀬戸美濃系 見込蛇の目釉剥ぎ	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－9	H－86・Ⅰ	磁器	－	－	1.2	染付皿　瀬戸美濃系か 文様不明	18C後半～19C中か	型押し	白色
80－10	K－43・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系か 草花文　見込一重圏線	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－11	P－44・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　平清水系か 文様不明	17C末～18C初か	ロクロ	白色
80－12	N－49・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系 蔓草文	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－13	M－79・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系 雨降り文	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－14	K－72・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系か	18C後半～19C中	ロクロ	白色
80－15	N－66・Ⅰ	磁器	－	(6.8)	(1.3)	植木鉢か　肥前系か 底部に突孔あり	18C後半～19C中か	ロクロ	白色
80－16	Ⅰ－33・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付皿　肥前系 見込蛇の目釉剥ぎ	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－17	G－59・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付皿　肥前系 見込菊花文　裏銘あり	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－18	L－53・Ⅰ	磁器	－	－	－	皿　肥前系 見込蛇の目釉剥ぎ　透明釉	17C末～18C後半	ロクロ	白色
80－19	Ⅰ－68・Ⅰ	磁器	－	－	－	碗？　製作地不明 白色透明釉	17C末～18C初か	ロクロ	灰白色
80－20	G－59・Ⅰ	陶器	－	－	－	器種不明　製作地不明 白色透明釉	18C後半～19C中か	ロクロ	灰白色
81－1	P－46・Ⅰ	磁器	－	(3.6)	(4.7)	染付碗　瀬戸美濃系 笹文か　畳付着色	18C後半～19C中か	ロクロ	白色
81－2	Ⅰ－33・Ⅰ	磁器	11.2	(8.4)	1.8	染付皿　瀬戸美濃系 紙摺りによる花文か	18C後半～19C中	ロクロ	白色
81－3	M－69・Ⅰ	磁器	(10.2)	(4.4)	(2.1)	染付皿　瀬戸美濃系 大明嘉？の裏銘	18C後半～19C中	型押し	白色
81－4	K－72・Ⅰ	磁器	(14.4)	(8.4)	5.6	浅鉢　瀬戸美濃系 銅板印刷による花文、？磁積？国製の裏銘	18C後半～19C中	ロクロ	白色
81－5	L－70・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　瀬戸美濃系 広東碗か	18C後半～19C中	ロクロ	白色
81－6	L－45・Ⅰ	陶器	－	－	－	甕？　肥前系か(唐津か)	18C後半～19C中	ロクロ	褐色
81－7	H－58・Ⅰ	陶器	－	－	－	碗　製作地不明 二彩手	不明	ロクロ	浅黄橙色
81－8	F－70・Ⅰ	陶器	－	－	－	皿　製作地不明 見込に鶴	18C後半～19C中	ロクロ	浅黄橙色
81－9	M－88・Ⅰ	陶器	－	(5.8)	(1.2)	碗　製作地不明 削り出し高台	不明	ロクロ	浅黄橙色
81－10	F－54・Ⅰ	陶器	－	－	－	茶入？　製作地不明 外面鉄釉施釉	18C後半～19C中か	ロクロ	浅黄橙色
81－16	P－46・Ⅰ	陶器	－	－	－	擂鉢　肥前系 卸目９条	18C後半～19C中	ロクロ	褐色

図版番号	出土位・層	種別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備　考	年　代
81－11	H－58・Ⅰ	鉄製品	(19.8)	3.8	0.6	277.3	表面錆、外刃、両端部欠損	不明
81－12	J－46・Ⅰ	土製品	1.8	1.7	0.6	1.5	碁石？、表面ミガキ	19Cか
81－13	Ⅰ－54・Ⅰ	鉄製品	(2.3)	0.8	0.6	10.8	表面緑青、端部欠損	不明
81－14	Ⅰ－50・Ⅰ	鉄釘	2.8	2.0	0.4	4.1	表面錆	19Cか
81－15	Ⅰ－69・Ⅰ	硯	(4.8)	(4.1)	0.9	17.9	粘版岩、一部欠損	19Cか
81－17	J－88・Ⅰ	砥石	(6.6)	2.2	5.9	120.9	細粒凝灰岩、使用面１面	平安時代以降
81－18	表採	煙管	4.8	0.8	0.7	4.5	銅製、吸口	18C代
81－19	H－54・Ⅰ	煙管	3.7	1.1	1.1	3.1	銅製首部、炭化物付着	18C前半
81－20	H－72・Ⅰ	銭貨	2.7	－	0.1	4.0	四文銭、波紋11波	1768～
81－21	N－81・Ⅰ	銭貨	2.3	－	0.1	2.4	模鋳銭、裏面擦り加工	不明
81－22	L－55・Ⅰ	銭貨	2.2	－	0.1	1.7	模鋳銭、裏面擦り加工	不明

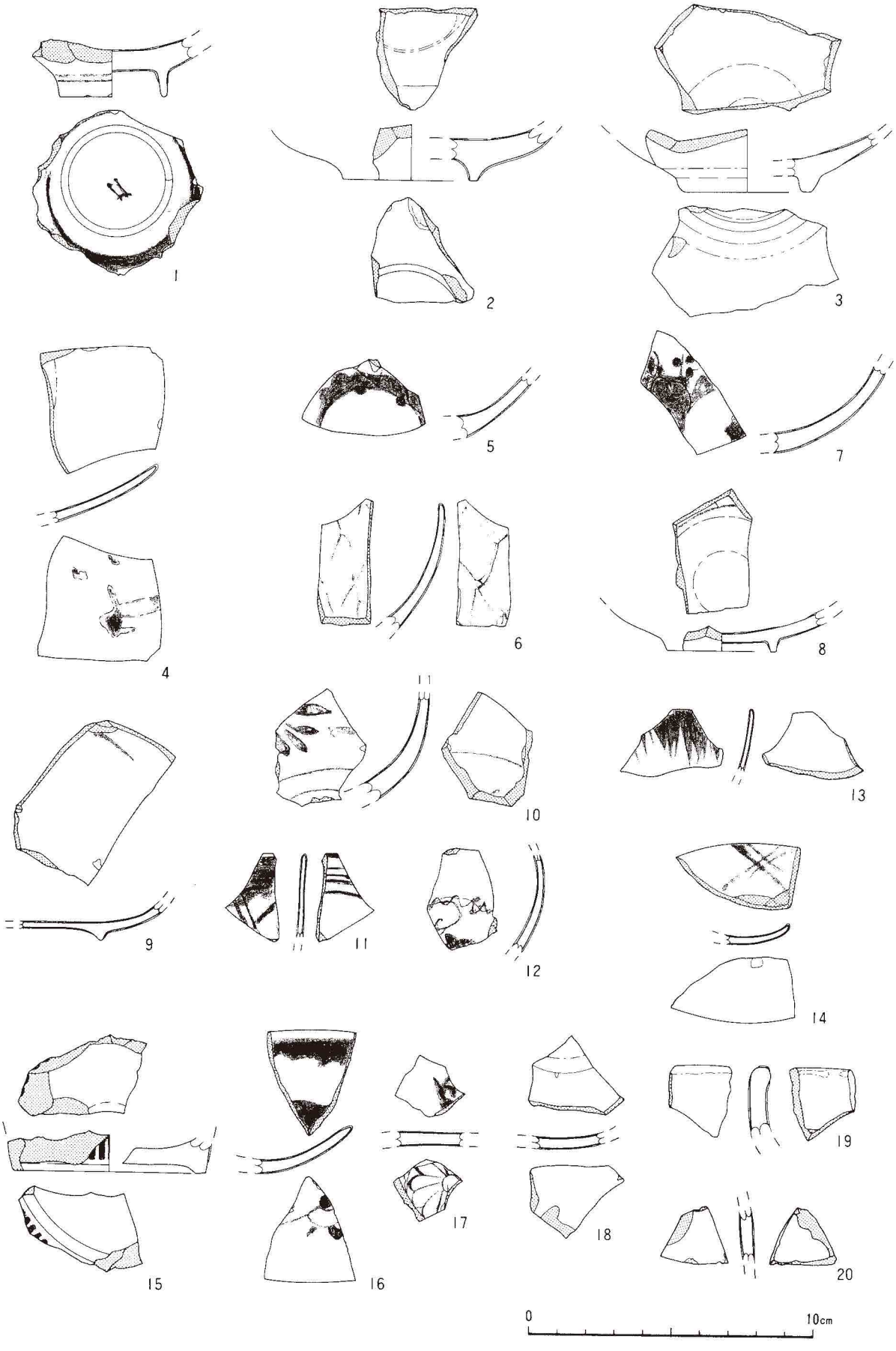


図80　近世以降の遺物(1)

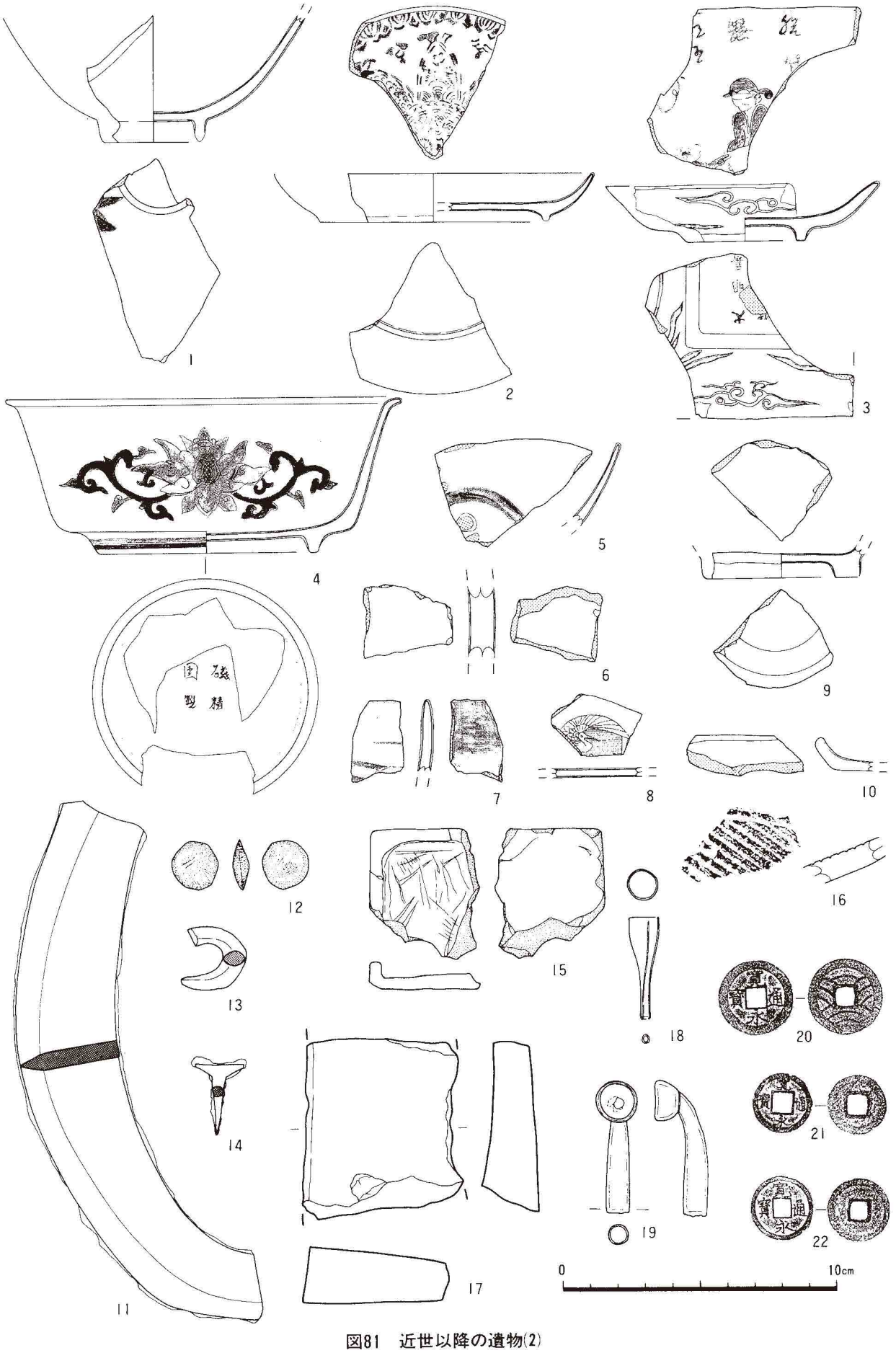


図81　近世以降の遺物(2)

第Ⅳ章　　隈無（２）遺跡

第１節　基本序層（82図）

本遺跡調査区の原地形はほとんどが平坦地で西側は沢地となっていた。そこで土層観察用に調査区中央部のG－352～353グリッドにトレンチ、Gラインと349ラインにはベルトを設定した。G－352～353グリッドのトレンチでは堆積状況を把握するため深堀りを行った。西壁の状況は以下の通りである。

第Ⅰa層(暗褐色土・10YR3/3)耕作土。耕作による堅さはあるがしまりがなく、崩れやすい。粘性、しまりなし。乾くとぼそぼそし灰色となる。

第Ⅰb層(黒褐色土・10YR2/3)表土層。シルト質黒褐色土が主体を占める。堅さはあるが粘性、保湿性に欠ける。木の根等多量に混入する。

第Ⅲ 層(黒色土・10YR2/1)シルト質黒色土が主体を占める。黒色腐植土。やや堅さ、しまりがあり、粘性、保湿性がある。軽石、粘土粒が混入する。

第Ⅳa層(黒褐色土・10YR3/1と明黄褐色土・10YR6/8の互層)漸移層。腐植土質でⅤ層軽石粒、Ⅵ層粘土粒が混入する。

第Ⅳb層(黒褐色土・10YR3/1と明黄褐色土・10YR6/8の互層)漸移層。色調が明るく第Ⅳａ層と比較しⅤ層軽石粒、Ⅵ層粘土粒が混入が多い。

第Ⅴ 層(明黄褐色土・10YR6/8)明黄褐色軽石層。浮石質。粒子が緻密で堅さがある。水の影響で灰白色凝灰質粘土に移化している部分もある。

第Ⅵa層(にぶい黄橙色粘土・10YR6/3)黄灰色粘土層。やや砂質で塊状に広がる。

第Ⅵb層(にぶい黄橙色粘土・10YR7/3)黄灰色粘土層。やや砂質で、黄灰色粘土との互層がみられる。

第Ⅶ層(灰白色粘土・10ＹＲ7/1) 淡青の白色粘土層。最上部に褐鉄鉱が１～２cmでみられる。

以上第Ⅰa層～第Ⅶ層に区分された。また、Gライン沢部分では第Ⅰ層と第Ⅲ層間にG－352～353グリッドのトレンチにみられなかった層があり第Ⅱ層とした。

第Ⅱ 層(暗褐色土・10YR3/4)シルト質黒褐色土が主体を占める。やや堅さ、しまりがはある。ブロック状に苫小牧火山灰を含むこともあり、この部分は細粒砂質である。

平坦地ではほぼ基本層序通り第Ⅰ～第Ⅴ層の堆積状況を示したが、第Ⅱ層の堆積は西側沢部分でしかみられなかった。

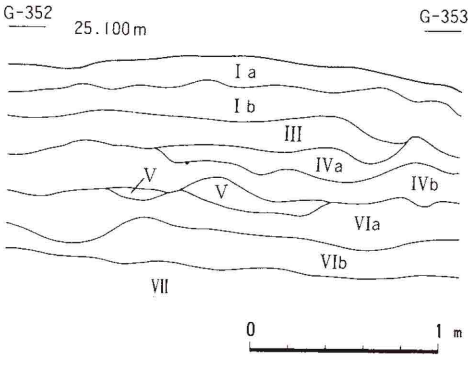
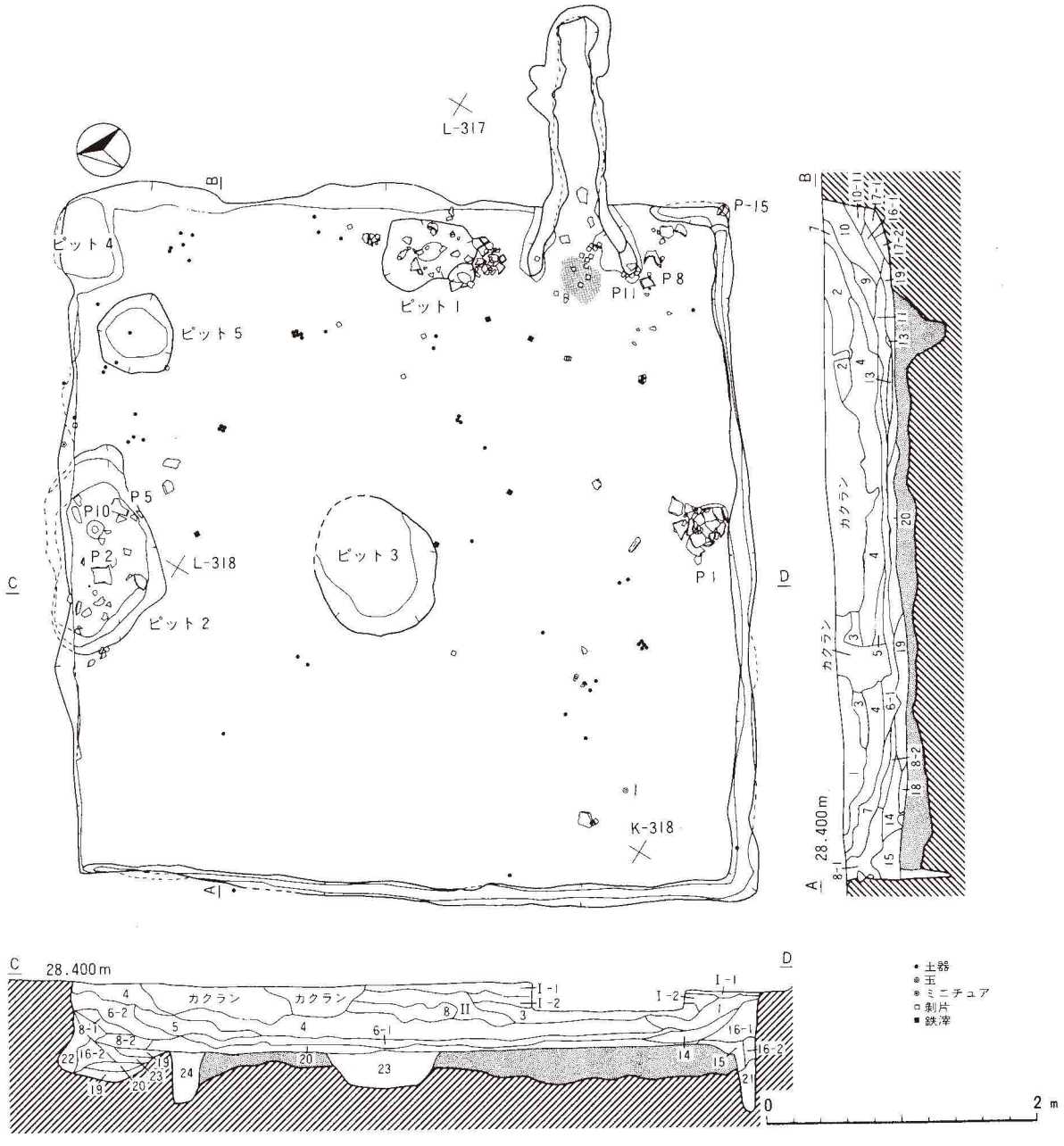


図82　隅無(2)遺跡基本土層

（中村）

第２節　検出遺構

隈無（２）遺跡では、平安時代の竪穴住居跡１軒のほか、土坑５基、溝跡１本、近世の火葬場跡１基、柱穴状ピット１群を検出した。



第1号竪穴住居跡土層注記（A—B）（C—D）

1	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームϕ～5mm1%以下中心部にϕ～50mm大ブロック1つ有。しまり無。粘性無。シルト。
2	層	黒色土	10YR1.7/1	ローム中～1mm1%以下炭化物1%以下。しまり無。粘性無。シルト。
3	層	黒色土	10YR1.7/1	ロームϕ～1mm1%。しまりやや有。粘性無。シルト。
4	層	黒色土	10YR2/1	ロームϕ～0.5mm1%以下しまり無。粘性無。シルト。
5	層	黒色土	10YR1.7/1	ロームϕ～2mm2%。しまり無。粘性無。シルト。
6—1	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームϕ～1mm1%以下しまりやや有。粘性無。火山灰1%混入。シルト。
6—2	層	黒色土	10YR2/1	ロームϕ～2mm1%。しまり有。粘性無。シルト、火山灰含む。
7	層	黒褐色土	10YR2/3	ロームϕ～2mm5%。左半しまり無。右半しまりやや有。粘性無。シルト。
8—1	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームϕ～2mm1%。炭化物1%以下。しまり有。粘性無。シルト。
8—2	層	黒色土	10YR2/1	ロームϕ～1mm1%以下。しまり粘性無。シルト。
9	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームϕ～3mm1%炭化物1%未満しまりやや有。粘性無。シルト。
10	層	暗褐色土	10YR3/3	ロームϕ～1mm1%以下。炭化物1%以下。火山灰1%含む。しまり、粘性無。シルト。
11	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームϕ～1mm層状に1%含む。しまり有。粘性無。シルト。
12	層	黒色土	10YR1.7/1	ロームϕ～0.1mm1%以下。しまり有。粘性無。シルト。
13	層	黒色土	10YR1.7/1	ロームϕ～1mm1%以下。火山灰1%以下。しまり有。粘性無。シルト。
14	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームϕ～2mm1%。焼土ϕ～1mm1%以下。火山灰ブロック状しまり有。粘性無。シルト。
15	層	黒褐色土	10YR2/3	ロームϕ～50mm20%。しまり、粘性無。シルト。
16-1	層	黒褐色土	10YR2/3	ロームϕ～1mm1%以下。炭化物1%以下。しまり、粘性無。シルト。
16-2	層	暗褐色土	10YR3/3	ロームϕ～1mm以下。しまり無。シルト。
17-1	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームϕ～3mm5%。焼土ϕ～0.1mm1%以下。しまり無、粘性無。シルト。
17-2	層	黒褐色土	10YR2/3	ロームϕ～3mm1%。炭化物2%。焼土ϕ～1mm1%以下。しまり有。粘性無。シルト。
18	層	暗褐色土	10YR3/4	ロームϕ～30mm10%。粘土ブロックϕ20mm1つ混入。しまり有。粘性無。シルト。
19	層	黒褐色土	10YR	ロームϕ～15mm1%。粘土ブロックϕ～10mm1%以下。しまり有。粘性無。シルト。
20	層	黒色土	10YR1.7/1	ロームϕ～2mm1%。しまり無。粘性無。シルト。
21	層	暗褐色土	10YR3/4	ロームϕ～25mm40%。しまり無、粘性無。シルト。
22	層	黒褐色土	10YR2/2	ロームまだら状10%。しまり、粘性無。シルト。
23	層	黒褐色土	10YR2/1	ロームϕ～1mm1%以下。しまり無。粘性無。シルト。
24	層	黒褐色土	10YR2/3	ロームϕ～5mm1%。しまり非常に有。粘性無。シルト。

図83　第1a号住居跡

1　竪穴住居跡

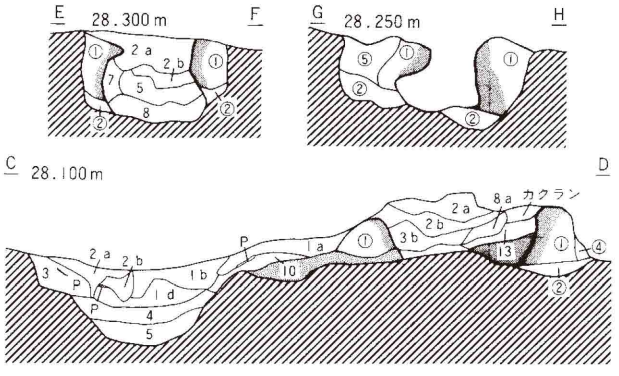
第１号住居跡（図84～87、表40・41）

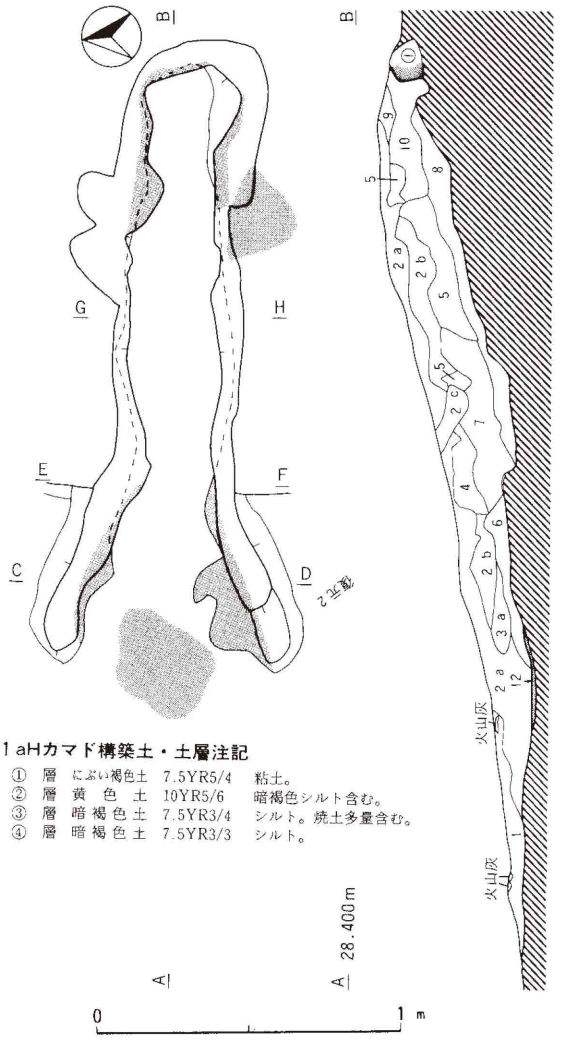
{第１ａ号住居跡}

［位置・確認］本住居跡（以下、１ａＨと呼称）は、グリッドＫ－317他の平坦地に位置する。漸移層上面において確認した。内部には土坑５基（１Ｈピット１～５）が検出された。外部附属施設は無い。１ａＨは、後述する第１ｂ号住居跡（１ｂＨ）の北壁と東壁を拡張したものである。

［重複関係］北東部分に大型の撹乱が認められるが、被撹乱部は住居の覆土のみにとどまるため、住居の構造自体に影響はない。

［形態・規模］規模は東壁4.92m、南壁5.12m、西壁4.98m、北壁4.98mを測り、南壁が若干長いものの、ほぼ方形の平面形を呈す。床は、下層にある１ｂＨと重複する部分では１ｂＨの床をそのまま再利用している。拡張部分の床に床構築土は貼り付けられておらず、ロームをそのまま床面とし、あまり硬化していない。また、全体に若干の凹凸を持ちながらも、ほぼ平坦でありほとんど傾斜は無い。壁は良好に検出され、四壁とも約40cm前後残存しており、竪穴式の構造である。壁溝は南壁と西壁、そして東壁の南端の一部（カマドの南側）にのみ存在し、全周していない。柱穴は全く検出さ





１aHカマド土層注記（A―B）～（G―H）

1	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。ローム(φ～5mm)3％、焼土(5mm)1％未満、火山灰1％混入。
2a	層	黒褐色土	10YR2/3	しまり有。ローム(1mm～20mm)7％。炭化物(1mm)1％。焼土(1mm)2％混入。
2b	層	黒褐色土	10YR2/3	しまり有。ローム(2mm～1cm)2％、炭化物(1mm)1％、焼土(2mm)2％混入。
2c	層	暗褐色土	10YR3/4	しまり有。ローム(1mm～1cm)2％、焼土(1mm)3％、炭化物(1mm)1％未満混入。
3a	層	暗褐色土	10YR4/4	しまり有。ローム(1mm～1cm)2％、焼土(1mm)1％未満、炭化物(1mm)1％未満混入。
3b	層	暗褐色土	10YR3/3	しまり有。焼土(1mm～5cm)25％、ローム(5mm)1％未満混入。
4	層	褐色土	7.5YR4/6	しまり有。ローム(5mm)1％未満、焼土(1mm～3cm)20％、粘土(1～2cm)10％混入。
5	層	褐色土	7.5YR4/6	しまり有。焼土層。ローム(5mm)1％、炭化物(1mm)1％未満混入。
6	層	褐色土	7.5YR4/4	しまり有。ローム(5mm)1％、焼土(2mm～1cm)5％、炭化物(1mm)1％未満混入。
7	層	暗褐色土	10YR3/4	しまり有。ローム(5mm)2％、焼土(5mm)3％、炭化物(2mm)1％未満混入。
8	層	暗褐色土	10YR3/4	ローム(1mm～5mm)5％、焼土(1mm～1cm)2％混入。
9	層	暗褐色土	7.5YR3/3	しまり有。ローム(1～2mm)3％、焼土(1mm～5mm)2％混入。
10	層	暗褐色土	7.5YR3/4	しまり有。ローム(1mm～1cm)1％、焼土(1mm～2cm)15％、炭化物(1mm)1％未満混入。
11	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。焼土(2mm)1％混入。炭化物(1mm)1％未満混入。
12	層	褐色土	10YR4/4	しまり有。焼土層。
13	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。ローム(1mm～2cm)10％、炭化物(2mm)1％混入。

１aHピット１土層注記（C―D）

1a	層	暗褐色土	10YR3/4	しまり有。ローム(1mm)1％、焼土(2～5mm)3％、炭化物(2mm)1％混入。
1b	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。焼土(1mm～5mm)3％、炭化物(1mm～1cm)1％、ローム(1mm)1％未満混入。
1c	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。ローム(1mm～1cm)1％、炭化物(1mm～1cm)3％混入。焼土(1mm)1％未満混入。
1d	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。焼土(1mm～5mm)5％、炭化物(2mm～1cm)7％、ローム(1mm～3mm)1％混入。炭化物多い。
2a	層	黒褐色土	10YR2/3	しまり有。焼土(1mm～3cm)10％、炭化物(1mm)1％未満。ローム(1mm)1％未満混入。
2b	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。焼土(1mm～5mm)2％、ローム(2mm)1％未満混入。
3	層	暗褐色土	10YR3/3	しまり有。焼土(1mm～3cm)10％、炭化物(1mm)1％、ローム(1mm)1％未満混入。焼土多い。
4	層	暗褐色土	10YR3/3	しまり有。焼土(1mm)1％以下、炭化物(1mm～2mm)1％、ローム(1mm～2cm)20％混入。
5	層	黒色土	10YR2/1	しまり有。焼土(1mm)2％、炭化物(2mm)2％、ローム(1mm～2cm)2％混入。

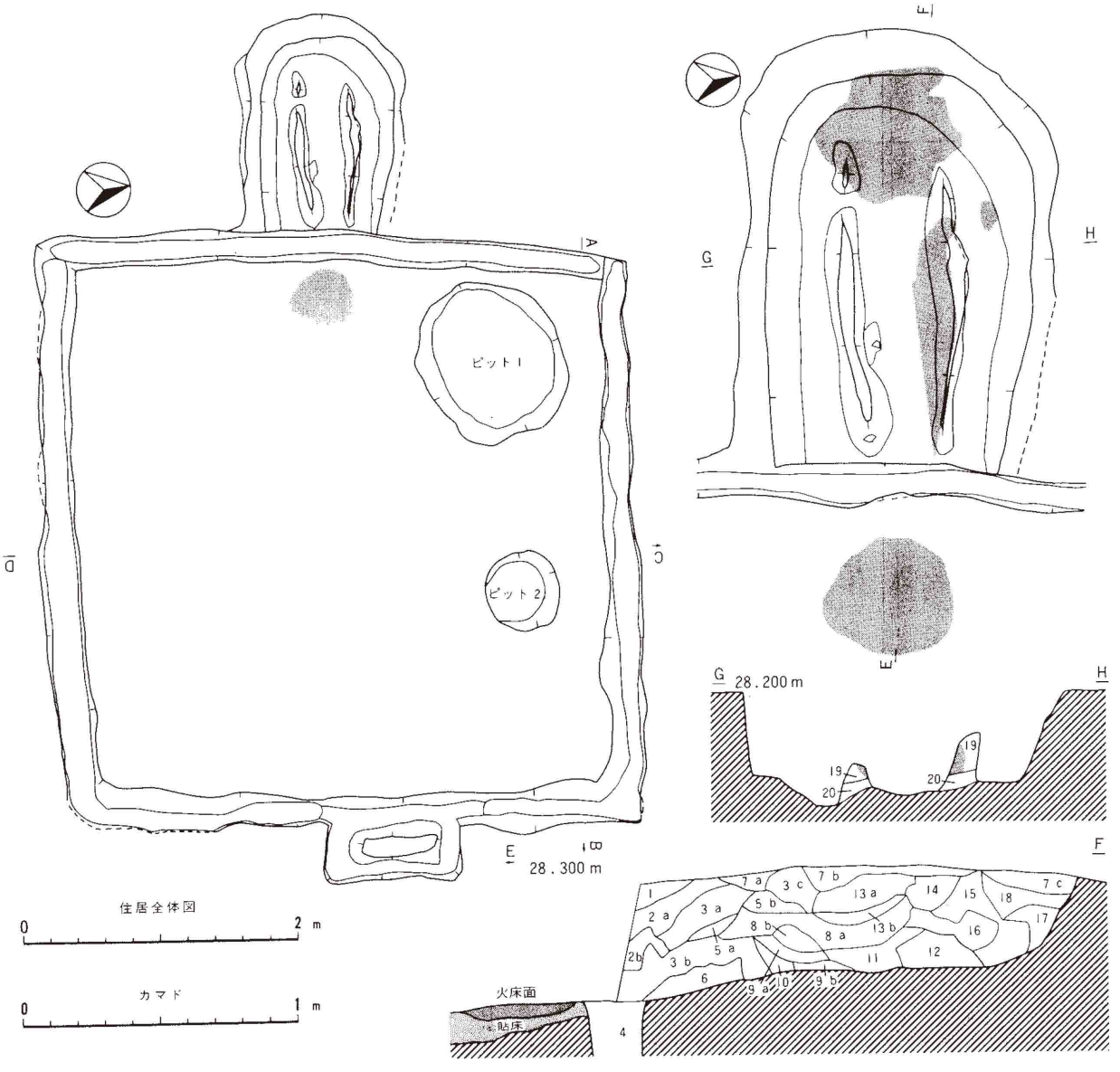
１aHカマド構築土・土層注記

①	層	にぶい褐色土	7.5YR5/4	粘土。
②	層	黄色土	10YR5/6	暗褐色シルト含む。
③	層	暗褐色土	7.5YR3/4	シルト。焼土多量含む。
④	層	暗褐色土	7.5YR3/3	シルト。

図84　第１ａ号住居跡カマド・ピット１セクション

れなかった。

［堆積土］24層に分層された。全層シルト質で、１ｂＨの壁溝部分（24層）と１ａＨピット２部分（16-２、20、22、23層）、１ａＨピット３部分（23層）を除いて全て自然堆積と考えられる。床面上には薄く数層の水平堆積層がみられるが、上層になるにつれて土層ラインは皿状を呈すようになる。13、14層は、黒色と黒褐色を基調とする土壌で、白頭山苫小牧火山灰と考えられる粒子～ブロック



１bHカマド土層注記（A―B）

1	層	黒褐色土	10YR2/3	しまり有。ローム７％混入。ロームブロック（２cm大）含む。
2 a	層	褐色土	10YR4/4	黒土が縞状に入る。ローム50％混入。ロームブロック（５cm）大含む。焼土粒１％未満混入。
2 b	層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	しまり有。ローム10％。粘土１％混入。粘性有。
3 a	層	黒褐色土	10YR2/3	ローム40％、粘土粒１％未満、ロームブロック（５mm以下）１％未満混入。
3 b	層	黒褐色土	10YR3/2	しまり無。ロームブロック（１cm大）多量混入、粘性無。
4	層	暗褐色土	10YR3/3	しまり無。ローム40％。粘性無。砂質。
5 a	層	褐色土	10YR4/6	しまり大変良い。ローム20％、粘土質。黒色土20％含む。
5 b	層	暗褐色土	10YR3/4	しまり大変良い。ローム20％。ロームブロック（１cm大）含む。粘土（10YR4/6）30％混入。黒色土15％含む。
6	層	暗褐色土	10YR3/3	しまり大変良い。粘土20％含む。黒色土30％含む。焼土10％未満。
7 a	層	黒褐色土	10YR2/3	粘土（10YR4/6）10％。粘土ブロック（６cm大）含む。
7 b	層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム40％縞状に入る。ロームブロック（１cm大）１％未満含む。
8 a	層	黒褐色土	10YR2/3	ローム（１mm～２mm大）50％、炭化物１％未満含む。
8 b	層	黒褐色土	10YR2/3	ローム（５mm大）１％含む。
9 a	層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	しまり有。粘土ブロック（３cm大）含む。黒色土30％含む。
9 b	層	褐色土	10YR4/6	しまり大変良い。粘土質。黒色土10％含む。焼土粒１％未満。
10	層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	しまり無。黒色土50％含む。砂質。
11	層	暗褐色土	10YR3/4	しまり大変良い。ロームブロック（２cm大）１個。炭化物１％未満。黒色土20％含む。焼土30％
12	層	赤色土	10YR4/6	しまり大変良い。ローム１％、炭化物１％含む。黒色土20％、粘土30％含む。
13 a	層	黒褐色土	10YR2/2	しまり有。ローム20％。ロームブロック（６cm大）１個。粘性有。
13 b	層	黒褐色土	10YR2/3	ローム20％。ロームブロック（５mm大）１％含む。粘性無。砂質。
14	層	赤褐色土	5YR4/8	しまり有。ローム３％。黒色土５％。焼土（１cm大）含む。粘性有。
15	層	褐色土	10YR4/6	しまり大変良い。ローム１％未満。ロームブロック（１cm大）含む。粘性有。炭化物１％。
16	層	赤褐色土	5YR4/6	しまり有。ローム１％、黒色土３％混入。炭化物１％未満。焼土と粘土のまじりで構成。粘性有。
17	層	黒褐色土	10YR2/3	しまり有。ローム50％、ロームブロック（１cm大）１個、焼土10％混入。
18	層	暗褐色土	10YR3/4	しまり有。ローム10％、焼土７％、粘土１％混入。炭化物１％未満。
19	層	褐色土	10YR4/6	粘土。
20	層	褐色土	10YR4/6	粘土。黒褐色シルト（10YR3/1）混入。

図85　第１ｂ号住居跡・カマド

を混入する。16-2、20、22、23層は、１ａＨピット２の覆土であり、22層が腰板を差し込んだ部分に相当し、それ以外の層は人為的に埋め戻され、23層の上面は床として利用されている。24層は１ｂＨの北壁の壁溝の抜き取り後の人為的な埋土である。

［カマド］東壁に作りつけられており、壁の右側に位置する。天井部は残存していないが、全般に遺存状態は良好で、燃焼部～排煙部まで検出されている。煙道部は住居外に1.4mほど伸びている。燃焼部～排煙部を平面的に見ると、構築土としての白色の粘土を火鋏状に固定させる構造によってつくられている。構築過程は、一旦溝状に掘った後に白色粘土を溝状の掘り込みのやや内側に盛り、裏込め土を入れ、固定させるという手法を採っている（土層断面図Ｃ－Ｄ）。燃焼部と排煙部の内壁はよく焼け、焼土化している。火床面はロームをそのまま利用しており、焼土化している。煙道部底面の勾配は約10度である。土層を見ると、人為的に埋められた状況は呈しておらず、自然堆積であると考えられる。カマドを通る軸方位はN-97.5°-Eをさす。

［内部施設］土坑５基（１ａＨピット１～５）が検出された。ピット１は、カマド左ソデの北側に位置する。平面形は不整の楕円形で、断面形は皿状を呈す。土層の全てに焼土粒が混入していることから、カマドと強い関連を有していることがうかがえる。上面を床構築土でパックしていないことと、土師器片が集中して出土していることから、本土坑は、常時窪んだ状態で機能していて、カマド使用に伴う排出物を廃棄するための施設であった可能性がある。ピット２は、北壁中央に位置する。平面形は歪んだ長方形で、断面形は皿形である。土層断面（住居跡土層断面図Ｃ－Ｄ）で見ると、床面と考えられる水平ライン（19層上面ライン）の下位に本土坑が存在していることから、床下に埋まっていたことが分かる。多数の土師器片や、略完形の土師器坏が出土しているが、浮いているものが多い。土層は薄い何枚もの層で構成されていることから、一気に埋め戻したものではなく、何回かに分けて土器とともに埋められたか、あるいは数人によって土器と土を一緒に投棄するようにして埋められたような状況がうかがえる。ピット３は、住居のほぼ中央に位置し、この土坑もピット２と同様、床面と考えられる水平ラインの下位に本土坑が存在していることから、床下に埋まっていたことが分かる。平面形は楕円形であるが、東側の一部には立ち上がりが認められない。断面形は皿状で、覆土は単層であり、人為的な一括埋戻しの土と考えられる。遺物は出土していない。ピット４は、北東コーナーに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は皿状を呈す。土層断面図は作成していないが、住居跡構築時に一時的に掘り込まれた穴である可能性がある。ピット５は、４のやや西側に位置する。平面形は不整円形で、断面形は皿状を呈す。本土坑も一時的に掘り込まれた穴であった可能性がある。ピット４、５はその平面形、断面形より柱穴ではないと考えられるが、強く否定できるものではない。

［備考］13、14層は、床面に非常に近い位置の堆積層であるが、13、14層に含まれる火山灰が白頭山苫小牧火山灰であるとすれば、本住居跡の廃絶は、10世紀初頭あたりかと想定される。

{第１ｂ号住居跡}

［位置・確認］本住居跡は、グリッドＫ－317他の平坦地に位置する。第１号住居跡の床面において確認した。内部付属施設として土坑２基（１ｂＨピット１、２）と、方形の張り出し部が検出された。外部附属施設は無い。１ｂＨは、前述した第１ａ号住居跡（図83）の拡張前の住居である。

［形態・規模］規模は、東壁4.20m、南壁4.28m、西壁4.28m、北壁4.08mを測り、北壁が若干短いものの、ほぼ方形の平面形を呈す。床は、一旦ある深さまでロームを掘り込んだ後に床構築土をか

ぶせ、平坦にならして完成させている。ロームをそのまま床として利用しているところはない。全体に若干の凹凸を有しながらも、ほぼ平坦であり、傾斜はほとんど無い。拡張した側の壁は当然残っていないが、南壁と西壁は１ａＨ同様、約40cm前後残存しており、竪穴式の構造である。壁溝は全周している。壁溝の中に腰板痕のような土層は観察されなかった。柱穴も全く検出されなかった。

［堆積土］床構築土と壁溝内の埋土のみ残存する。全層シルト質でロームを多く含む人為堆積土である。

［カマド］西壁に作りつけられており、壁のほぼ中央に位置する。１ａＨのカマドとは正反対の壁につくられている。住居を拡張する際にソデは完全に除去され、また、煙道部に関しても大部分が破壊されており、全般に遺存状態は不良である。ただし、火床面のみは残存している。残存する部位のみで推定すれば、煙道部は住居外に1.3mほど伸びていたものと思われる。１ａＨの燃焼部～排煙部は平面的に見た場合、構築土としての白色の粘土を火鋏状に固定させる構造を採っているが、本住居もほぼ同様の構造を有していたと思われる。一旦土坑状に掘った後に、白色粘土をその土坑状の掘り込みのやや内側に盛り縦２条の棒状の粘土を配し、粘土の外側に裏込め土を入れ、固定させる手法がうかがえる。燃焼部と排煙部の内壁はよく焼け、焼土化している。火床面は床構築土の上面を利用しており、焼土化している。煙道部底面の勾配は不明である。土層を見ると、カマド構築材としての粘土等を除去した後に人為的に埋められた状況を呈している。本カマドの廃絶は、１ａＨの構築と同時であったと考えられる。カマドを通る軸方位はN-87°-Wをさす。

［内部施設］土坑２基（１ｂＨピット１、２）が検出された。ピット１は、北西コーナーに位置する。平面形は不整の円形で、断面形は皿状を呈す。ピット２は、北壁の中央付近に位置する。平面形は円形で、断面形は皿状であるが、南側の立ち上がりは垂直である。ピット１、２は、その平面形、断面形より柱穴ではないと考えられるが、強く否定できるものではない。東壁のほぼ中央には、壁溝が長方形に張り出す部分が見られ、その中央部には、棒状の掘り残し部分がある。全てロームで構成されている。用途などについては全く不明である。

［出土遺物］第１ａ号住居跡出土遺物のほとんどは土師器破片であり、住居の東半分の床面上に分布する傾向がある。南壁中央の床面上には土師器甕１個体（１）がつぶれた状態で出土している。須恵器は、長頸壷の頸部（15）が南東コーナーの壁溝内より出土している。前述のようにピット１と２は土師器片（２・３・６・９）が集中して出土しており、２の底面には略完形の土師器坏（10）も出土している。カマドの両ソデの左右床面上にも破片が集中している。（８、11）土玉(25)は南西コーナー付近の床面上に１点出土している。カマドの火床面には被熱によって破裂した頁岩の剥片が集中して出土している。第１ｂ号住居跡からは土師器破片が、床構築土の中より出土した。

土器片は、第１ａ号・第１ｂ号住居跡から、土師器353点、須恵器14点、土玉１点、鉄滓４点、縄文土器98片が出土した。第１ａ号住居からは土師器の坏・甕・小甕・須恵器の長頸壷、土玉、鉄滓等が出土し、１ｂ号住居跡からは土師器の坏、甕、小甕が出土した。第１ａ号住居跡では甕の出土点数が多く、第１ｂ号住居出土の遺物は坏の出土点数が多い傾向にある。出土した須恵器・土師器から、１ａ・１ｂ号住居跡に大きな時期差はないと思われ、９世紀末から10世紀初頭の時期に比定される。

（土師器）坏　完形のものは１点のみで、他は全て破片資料である。成形は全てロクロが使用される。器形は口縁部が肥厚するもの（10、12）と、口縁部付近で器壁が薄くなるもの（11・17・18）に分

図86　第1号住居跡出土遺物(1)

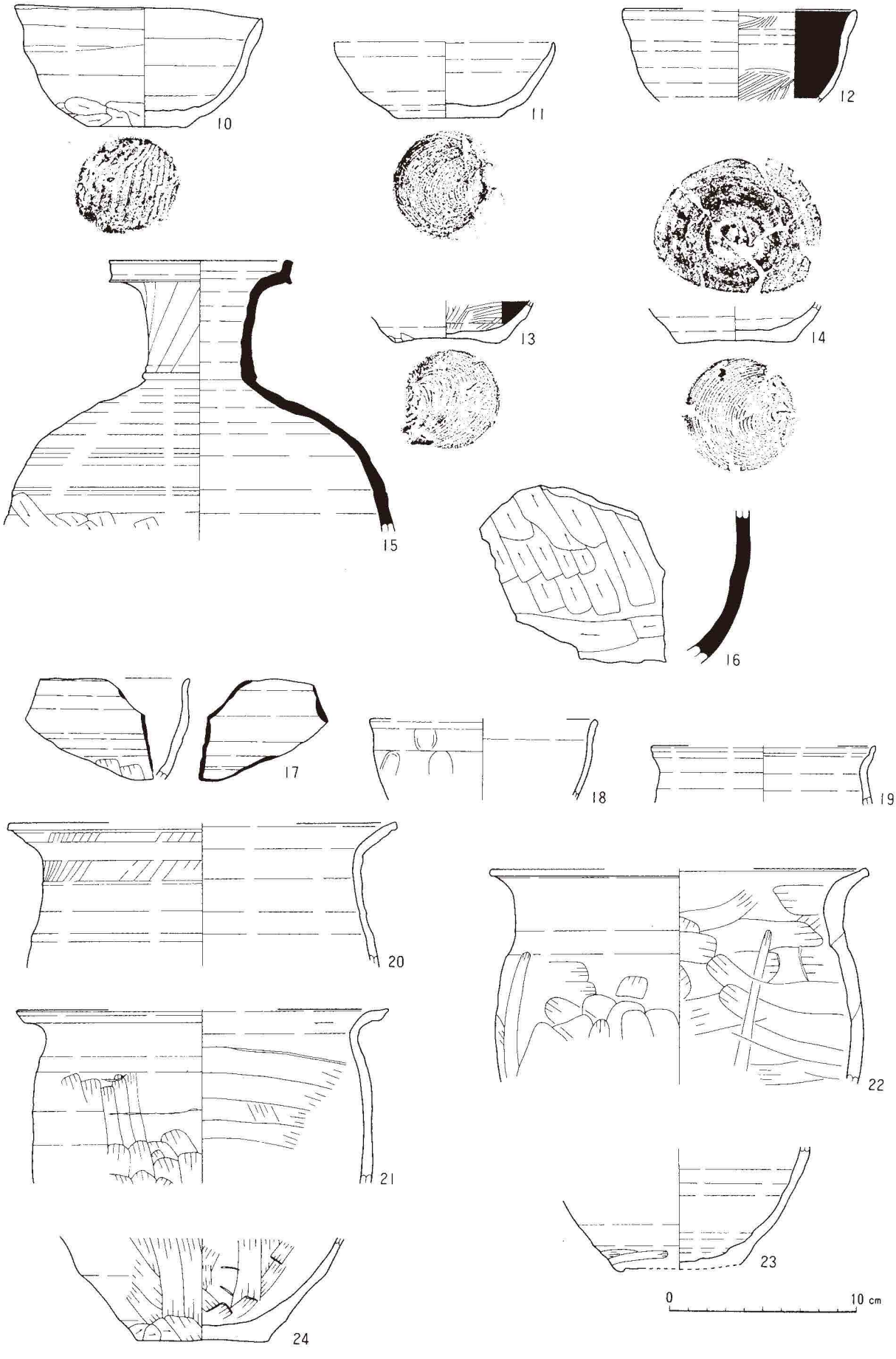


図87　第１号住居跡出土遺物(2)

けられる。外面調整にもロクロが使用され、その中で底部付近にケズリを入れるのは１点のみである。内面は、黒色処理を施したものが２点あり、いずれもヘラミガキ調整である。（12、13）底部は10のみがケズリで、その他は全て回転糸切である。

小甕　完形のものが２点出土した。他１点は破片資料である。ロクロによる成形が行われる。いずれも口縁部が緩やかに外反する。口唇は軽くつまみ出すような形である。外面は体部から底部に縦位にケズリを入れる。内面はヘラナデによる調整が見られる。９は底外面が石英・砂粒を多く付着した砂底である。

甕　完形のものは１点のみである。甕の個体数は８個前後推定される。口縁部形態は、緩く外反するもの（１・３・４）、ほぼ強く外傾するもの（２・20・21）、等に分類される。また、口唇部をつまみ出すようにするものや、口唇部を丸めるもの、等が見られる。器壁は厚いもの（22、４）から薄いもの（２・３）までバラエテイに富む。外面調整はすべてロクロ成形のもので、粘土の積み上げ痕が見られるものもある。その後ナデ・ケズリを施すものなどがみられる。１はロクロ成形の後、外面を下から上の方向に向かって、ケズリ調整をしている。内面は幅２cm程度の工具でハケメ調整を行う。ハケメ調整を行うのはこの１点のみである。２・５は外面に頚部下から体部にかけて縦位にケズリを行う。内面は口縁部下から体部にかけてヘラナデ調整が見られる。他に比べて器壁が薄く胎土に砂粒を多く含む。３は口縁部のみの資料である。口縁部は緩く外反し、口唇部外面は横方向につまみ出す形をしている。調整はすべてロクロナデによるものである。21は口縁部から体部にかけての資料である。体部がほぼ垂直に立ち上がり、頚部付近で軽く内側に入り、口縁部が外側に開くような形で外傾する。口縁部自体は少し丸味を帯びる。内外面ともヘラナデ調整が行われる。口縁部付近には成形時についたと思われるケズリ痕が見られる。20も21と同様に口縁部が外傾する器形である。口縁部は直線的で口端も方形状である。口縁部から頚部にかけて、成形時についたと思われるケズリが見られる。ロクロによるナデ調整のため、明確な痕跡としては残っていない。他は全てロクロによる調整である。22は口縁部から体部にかけての資料である。器形は頚部が長く、直線的に立ち上がる。口縁部で外傾する。器壁は他に比べて厚く、胎土にも砂粒などの混入が少ない。内外面ともヘラナデ調整が行われる。４は口縁部のみの資料である。22と同様器壁が厚い。口縁部はやや外反する器形である。口端は丸味を帯びる。基本的に内外面ともロクロによる調整が行われるが、内面にヘラナデ痕も見られる。６・24・23はすべて底部付近の破片である。底部から緩やかに立ち上がるもの（24・23）、底部直上までやや内側にはいり、そこから緩やかに立ち上がるもの（６）がある。23はロクロによる調整の後、外面を幅の狭い工具でヘラナデしている。24は内外面をヘラナデした後、底部付近を横方向に削る。６は内外面とも多方向に削った後、底外面を横方向になでている。

（須恵器）　土師器の破片数に比べて、須恵器の破片数は30分の１程度である。図示した長頚壺の破片の他に、坏と思われる小破片も１片出土している。15は長頚壺である。頚部と胴部の屈曲部には隆帯がつく。体部下半にはケズリ痕が見られる。16は胴部破片である。外面にはケズリが行われる。断面が赤褐色を呈しており、同市内に点在する須恵器窯で製作されたものである可能性が高い。

（土玉）　直径1.5cm程度である。粘土を丸めた後、切っ先の細い工具で２条の筋を施す。

（鉄滓）　床面から１点、堆積土から３点出土した。赤褐色を呈している。　（木村・坂本）

表40　第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	出土位置	層位	種類	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	口縁部(外)	体部(外)	口縁部(内)	体部(内)	底面調整	胎土	焼成	備考
86－1	1a号住居	フク土	土師器	甕	完形	21.0	8.4	32.6	10YR6/4	ロクロナデ	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	ハケメ	砂底	砂粒	堅緻	スス付着
86－2	1a号住居ピット2	フク土	土師器	甕	口縁～体	20.0		(15.5)	10YR5/8	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ			堅緻	
86－3	1a号住居ピット2	フク土	土師器	甕	口縁	22.2		(3.0)	7.5YR6/8	ロクロナデ		ロクロナデ				堅緻	
86－4	1a号住居	フク土	土師器	甕	口縁	18.8		(4.4)	10YR6/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			堅緻	図103-5と接合
86－5	1a号住居	底面	土師器	甕	口縁～体	21.0		(16)	10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ→ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ			堅緻	
86－6	1a号住居ピット1	フク土	土師器	甕	底		7.4	(3.5)	10YR7/3		ケズリ、ナデ		ナデ	ケズリ	砂・石英	堅緻	被熱痕
86－7	1a号住居	フク土	土師器	小甕	口縁		(5.7)		10YR7/3	ナデ	ケズリ→ナデ	ロクロナデ	ヘラナデ		砂	堅緻	ケズリ痕
86－8	1a号住居カマド	崩落土上面	土師器	小甕	完形	13.3	6.6	12.7	5YR5/6	ロクロナデ	ケズリ→ナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			堅緻	
86－9	1a号住居ピット1	フク土	土師器	小甕	完形	14.4	6.8	14.1	10YR7/3	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	砂底		堅緻	
87－10	1a号住居	フク土	土師器	坏	完形	13.2	5.2	6.3	10YR7/4	ナデ(ヨコ)	ロクロナデ			ケズリ		堅緻	
87－11	1a号住居カマド	崩落土上面	土師器	坏	略完形		5.4	(4.0)	2.5Y6/2	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	雲母・砂粒	堅緻	被熱痕
87－12	1a号住居	貼床中	土師器	坏	口縁～体	12.4		(5.0)	10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラミガキ			堅緻	内面黒色
87－13	1a号住居周溝	フク土	土師器	坏	底		5.6	(2.2)	7.5YR6/8		ロクロナデ		ヘラミガキ	回転糸切		堅緻	内面黒色
87－14	1a号住居	床上	土師器	坏	底		6.1	(2.0)	7.5YR5/6		ロクロナデ		ロクロナデ	回転糸切	砂粒	堅緻	
87－15	1a号住居カマド・周溝	フク土	須恵器	長頸壺	口縁～体	9.8		(14.5)	N5/0	ロクロナデ	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ			堅緻	断面灰色
87－16	1a号住居ピット2	フク土	須恵器	壺	体			(8.0)	10YR2/1		ケズリ		ロクロナデ		砂粒	堅緻	断面赤褐色
87－17	1b号住居	貼床中	土師器	坏	口縁		(5.4)		10YR7/3	ロクロナデ	ロクロ→ヘラ(ナデ)	ロクロナデ	ロクロナデ			堅緻	
87－18	1b号住居	貼床中	土師器	坏	口縁	12.2	(4.2)		10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			堅緻	指頭圧痕
87－19	1b号住居	貼床中	土師器	小甕	口縁～体	12.0		(3.1)	10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			堅緻	
87－20	1b号住居	フク土	土師器	甕	口縁	20.8		(7.7)	7.5YR6/6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			堅緻	ケズリ痕
87－21	1b号住居	貼床中	土師器	甕	口縁	20.0		(9.3)	10YR7/3	ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ	ヘラナデ			堅緻	
87－22	1b号住居	貼床中	土師器	甕	口縁～体	20.2		(11.4)	10YR7/6	ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			堅緻	
87－23	1b号住居	貼床中	土師器	甕	体～底		6.6	(6.6)	2.5Y6/2		ヘラナデ		ロクロナデ	ケズリ	雲母・砂粒	堅緻	被熱痕
87－24	1b号住居	貼床中	土師器	甕	体～底		7.0	(5.5)	2.5Y6/3		ケズリ→ヘラナデ		ヘラナデ	砂底		堅緻	

表41　第１号住居跡出土土製品計測表

図版番号	出土位置	出土層	種類	名称	径(cm)	重さ(g)	特徴
86－25	1a号住居	フク土	土製品	土玉	1.5		工具による２条の筋

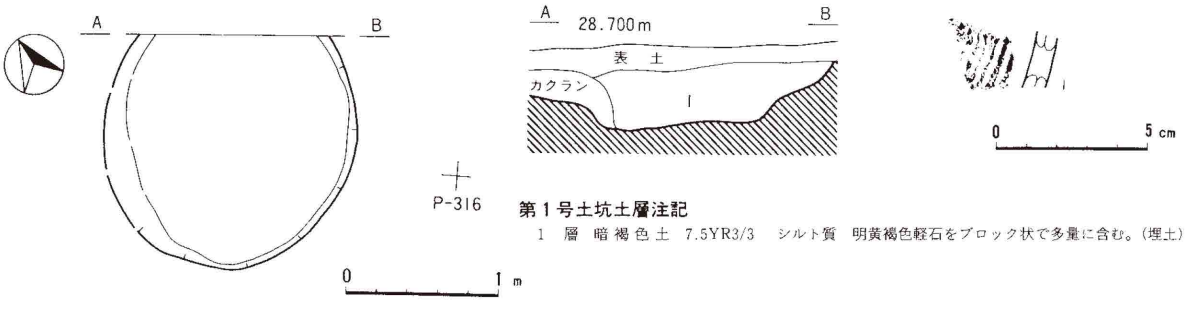
２　土坑

第１号土坑（図88・89、表42・43）

［位置・確認］Ｏ・Ｐ－316グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっているが、遺構の北東側は調査区域から外れているため未精査である。大きさ（現存値）は確認面で長径1.80m、短径1.66m、底面で長径1.65m、短径1.50mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は27～13cmであるが、北東側では表土下から40cmほど掘り込まれている。この部分では壁面の上部が崩れて、壁が大きく開く形態となっている。底面には大きな凹凸があり、全体として少し北西に傾斜している。

［堆積土］暗褐色土を主体とし、全体に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）のブロックがかなり多く混入している。堆積土は人為的に埋めたものと思われる。



第１号土坑土層注記
1　層　暗褐色土　7.5YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石をブロック状で多量に含む。（埋土）

図88　第１号土坑・出土土器

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－３～Ⅳ－１類かとみられる深鉢形土器が１片（約10ｇ）、安山岩の荒砥石が１点出土した。

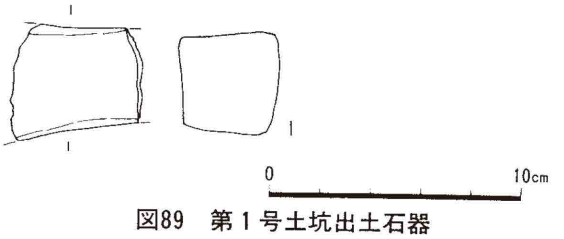


図89　第１号土坑出土石器

表42　第１号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
88－１	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・胴部	単軸絡条体第１類(R)縦位	

表43　第１号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
89－１	荒砥石	フク土	(4.0)×(5.2)×4.0	(125.0)	安山岩	平安時代以降

第２号土坑（図90）

［位置・確認］Ｏ－342・343グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面で不整楕円形、底面ではほぼ円形となっている。大きさは確認面で長径1.78m、短径1.20m、底面で長径1.07m、短径1.04mである。遺構は第Ｖ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は54～46cmである。比較的遺存状態の良い南東側の壁は、かなり急角度で掘り込まれているが、北東側では部分的に壁の上部が張り出したようになっている。底面には大きな凹凸があり、全体として北西に傾斜している。

［堆積土］遺構の北東側から流れ込んだように堆積する暗褐色土（４層）を挟んで、上部は明黄褐色軽石（第Ｖ層）、下部は灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を主体とする。４層には炭化物、腐食があまり進んでいないと思われる枝、草等を含む。また、５層には木材（板状や角状に加工されたもの）が廃棄されたように混入している。かなり不自然な堆積状態で、人為的に埋められた可能性がある。

［出土遺物］出土しなかった。

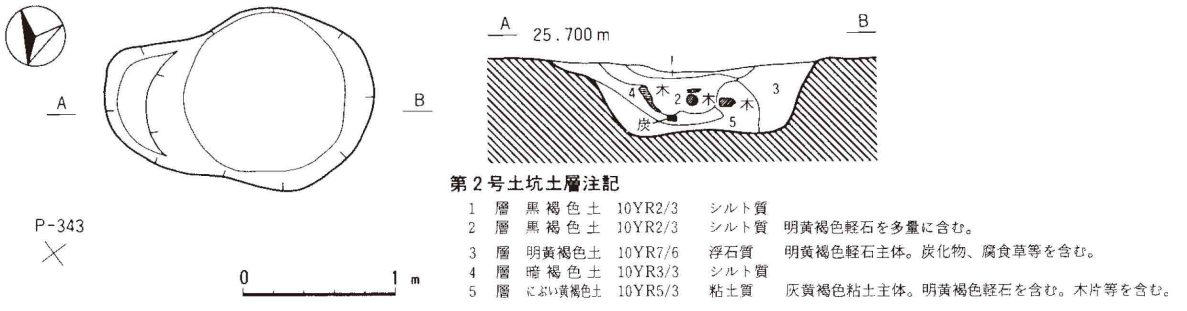


図90　第２号土坑

第３号土坑（図91）

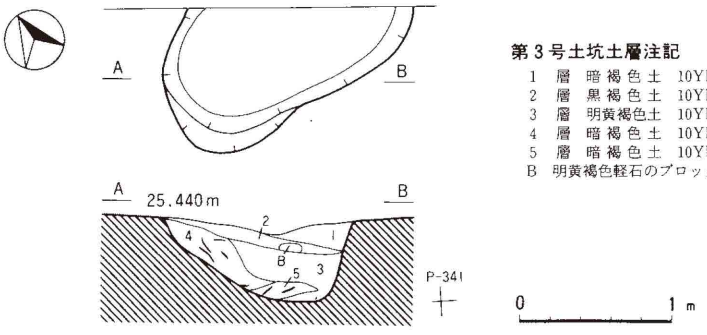
［位置・確認］Ｐ－341グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］遺構の東側は調査区域から外れているため未精査であるが、平面形は確認面、底面とも楕円形に近い形態になるようである。大きさ（現存値）は確認面で長径1.72m、短径0.98m、底面で長径1.50m、短径0.78mである。遺構は第Ｖ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ｖ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は55～20cmである。精査した部分の壁は、南東側ではかなり急角度で掘り込まれているが、北西側では傾斜が緩くなっている。底面は、南東に大きく傾斜している。

［堆積土］遺構の北西側から流れ込んだように堆積する、黒褐色土（２層）と暗褐色土（４・５層）を除いて、全体的には明黄褐色軽石（第Ｖ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を主体とする。２層、４層、５層にはあまり腐食が進んでいないと思われる小枝、草、竹ひご状に加工された木等が混入して

いる。かなり不自然な堆積状態で、人為的に埋められた可能性がある。

［出土遺物］出土しなかった。



第３号土坑土層注記

1	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を多量に含む。
2	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石のブロック、焼土、小枝等を含む。
3	層	明黄褐色土	10YR7/6	粘土質　明黄褐色軽石主体。灰黄褐色粘土を多量に含む。
4	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　小枝等を含む。
5	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　小枝等を含む。
B	明黄褐色軽石のブロック			

図91　第３号土坑

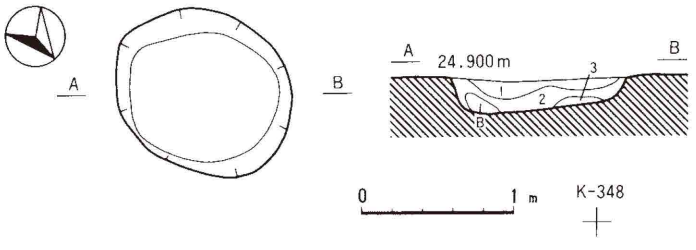
第４号土坑（図92）

［位置・確認］Ｊ－347グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.26m、短径1.05m、底面で長径1.00m、短径0.87mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの壁高は22～14cmで、比較的遺存状態の良い北東側の壁はやや急角度で掘り込まれている。底面には凹凸があり、全体として東に傾斜している。

［堆積土］黒色土と黒褐色土を主体とし、下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）とそのブロックが少し混入している。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］出土しなかった。　（工藤・中村）



第４号土坑土層注記

1	層	黒色土	10YR2/1	シルト質
2	層	黒褐色土	10YR2/3	シルト質
3	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を含む。
B		明黄褐色軽石のブロック		

図92　第４号土坑

第５号土坑（図93、表44）

［位置・確認］Ｋ－330グリッドの平坦地に位置する。土器片の集中により確認した。

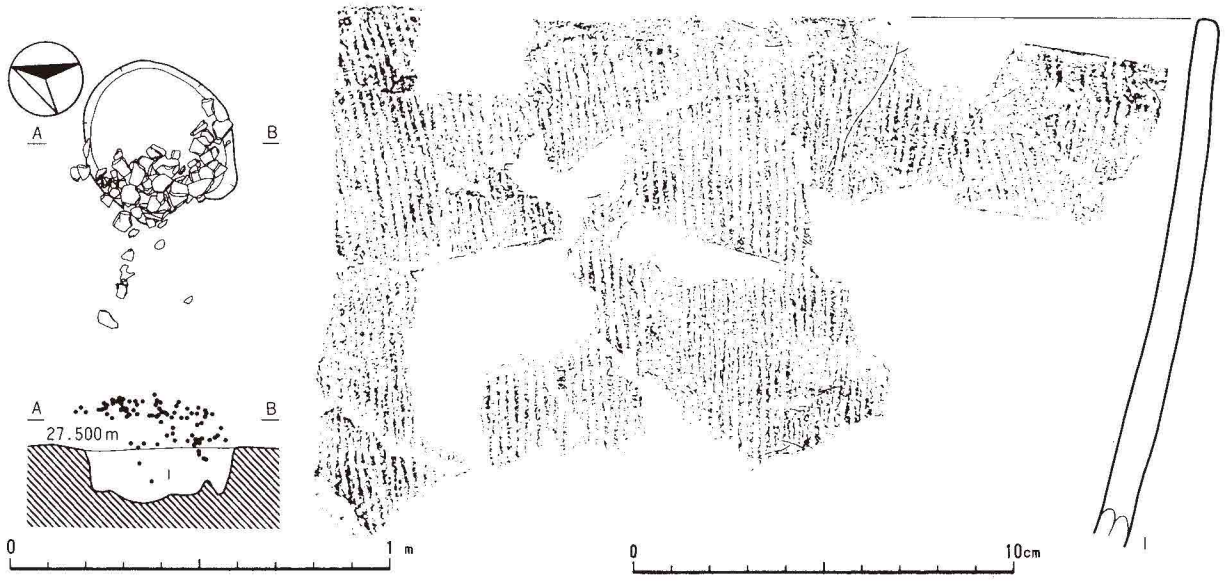
［形態・規模］平面形は不整円形を呈し、規模は約40×40cmである。確認面からの深さは最深部で14cmであるが、土器の垂直分布より見て、深さは25cmくらいはあったものと思われる。底面には凹凸がみられ、壁の立ち上がりは急である。

［堆積土］堆積土は分層されず、黒褐色土にローム粒子が微量に混入している。１層のみで埋没していることと混入物の状況より見て、堆積土は人為的に埋め戻されていると考えられ、土器は上面に置かれた（埋められた？）ものかと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－３～Ⅳ－１類に属する縄文土器が、１個体分（約１kg）が出土した。

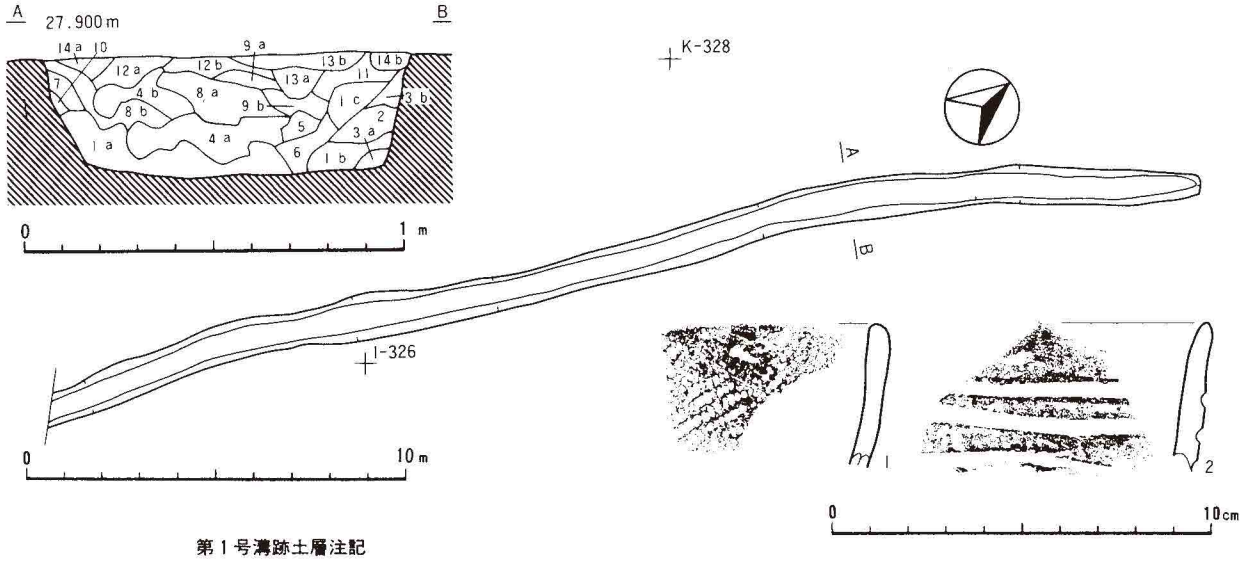
表44　第５号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
93－１	Ⅲ－３～Ⅳ－１	フク土	深鉢・口縁～胴部	単軸絡条体第１類(R)縦位	



第５号土坑土層注記
1　層　黒褐色土　10YR2/2　ローム(φ～５mm)５%混入。しまりあり。粘性なし。シルト。

図93　第５号土坑・出土土器



第１号溝跡土層注記

1ａ層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム(φ～20mm)５%。しまりあり。粘性なし。シルト。
1ｂ層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム(φ～２mm)２%。しまりあり。粘性なし。シルト。
2　層　暗褐色土　10YR3/3　ローム(φ～３mm)１%一部まだら状。しまりあり。粘性なし。シルト。
3ａ層　黒褐色土　10YR2/3　ローム(φ～１mm)１%以下まだら状。しまりあり。粘性なし。シルト。
3ｂ層　黒褐色土　10YR2/3　ローム(φ～２mm)１%まだら状。しまりなし。粘性なし。シルト。
4ａ層　黒　色　土　10YR2/1　ローム(φ～0.1mm)0.1以下。しまりあり。粘性なし。シルト。
4ｂ層　黒　色　土　10YR2/1　混入物なし。しまりあり。粘性なし。シルト。
5　層　黒褐色土　10YR2/2　ローム(φ～１mm)φ30mm１個１%。しまりなし。粘性なし。シルト。
6　層　黒　色　土　10YR2/1　ローム(φ～２mm)φ50mm２個１%。しまりなし。粘性なし。シルト。
7　層　黒褐色土　10YR2/2　ローム(φ～0.1mm)１%以下。しまりなし。粘性なし。シルト。
8ａ層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム(φ～５mm)１%一部まだら状。しまりあり。粘性なし。シルト。
8ｂ層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム(φ～５mm)２%、しまりあり。粘性なし。シルト。
9ａ層　黒　色　土　10YR2/1　ローム１%以下まだら状。しまりあり。粘性なし。シルト。
9ｂ層　黒　色　土　10YR2/1　ローム(φ～１mm)１%。しまりなし。粘性なし。シルト。
10　層　黒褐色土　10YR2/3　ローム(φ～２mm)１%以下。しまりなし。粘性なし。シルト。
11　層　黒褐色土　10YR3/1　ローム(φ～１mm)１%。しまりあり。粘性なし。シルト。
12ａ層　黒　色　土　10YR2/1　ローム(φ～１mm)一部まだら状１%。しまりなし。粘性なし。シルト。
12ｂ層　黒　色　土　10YR2/1　ローム１%以下まだら状。しまりあり。粘性なし。シルト。
13ａ層　黒　色　土　10YR2/1　ローム(φ～１mm)１%以下。しまりなし。粘性なし。シルト。
13ｂ層　黒　色　土　10YR2/1　ローム(φ～10mm)２%。しまりなし。粘性なし。シルト。
14ａ層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム(φ～１mm)２%。しまりあり。粘性なし。シルト。
14ｂ層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム(φ～１mm)１%以下。しまりあり。粘性なし。シルト。

図94　第１号溝跡・出土土器

3　溝跡

第１号溝跡（図94、表45）

［位置・確認］Ｉ－326他の平坦地に位置する。漸移層上面で確認した。調査区外にも伸びている。

［形態・規模］長さは検出長の直線長で31.0m、幅は約0.9～1.2mである。確認面からの深さは30cm前後で、ロームを底面としており、底面は凹凸が激しい。

［堆積土］黒色土と黒褐色土を主体とし、ローム粒子の全体的な混入と、層序のラインの乱れより、人為堆積の状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅳ－１～２類に属する縄文土器が、２片（約30ｇ）出土した。　（木村）

表45　第１号溝出土土器観察表

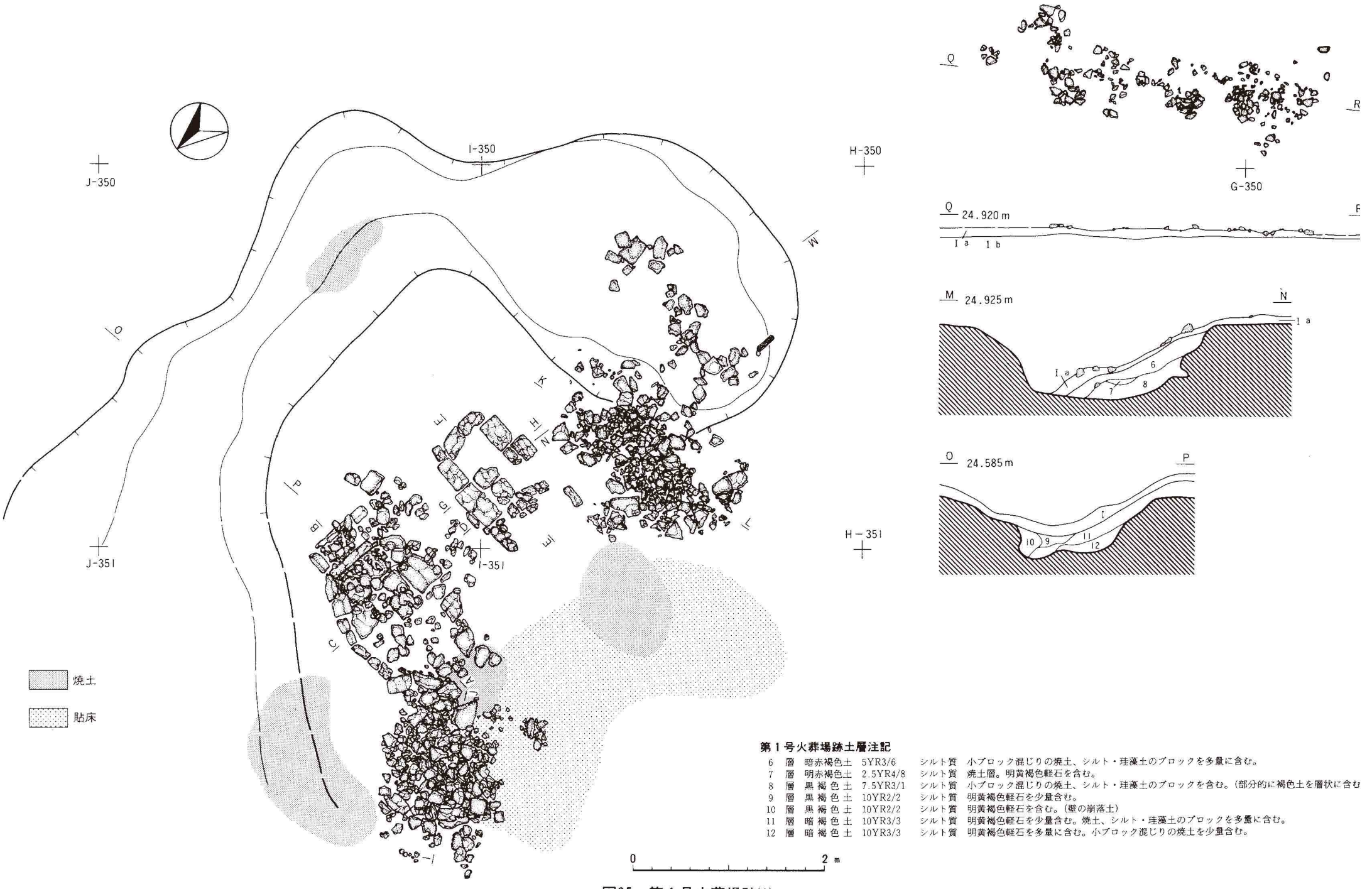
図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
94－１	Ⅳ－１～２	フク土	鉢・口縁部	山形突起・平行沈線	
94－２	Ⅳ－１～２	フク土	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	

4　火葬場跡

第１号火葬場跡（図95～97、表46）

［位置・確認］Ｈ～Ｊ－349～351グリッドに位置する。石組の上部が地表に露出・散乱し、埋まり切らない溝が凹んだ状態で残っていた。石組（焼き場）等は基本土層の第Ｉｂ層上に作られており、溝は第Ｉｂ層～第Ⅵ層まで掘り込まれている。

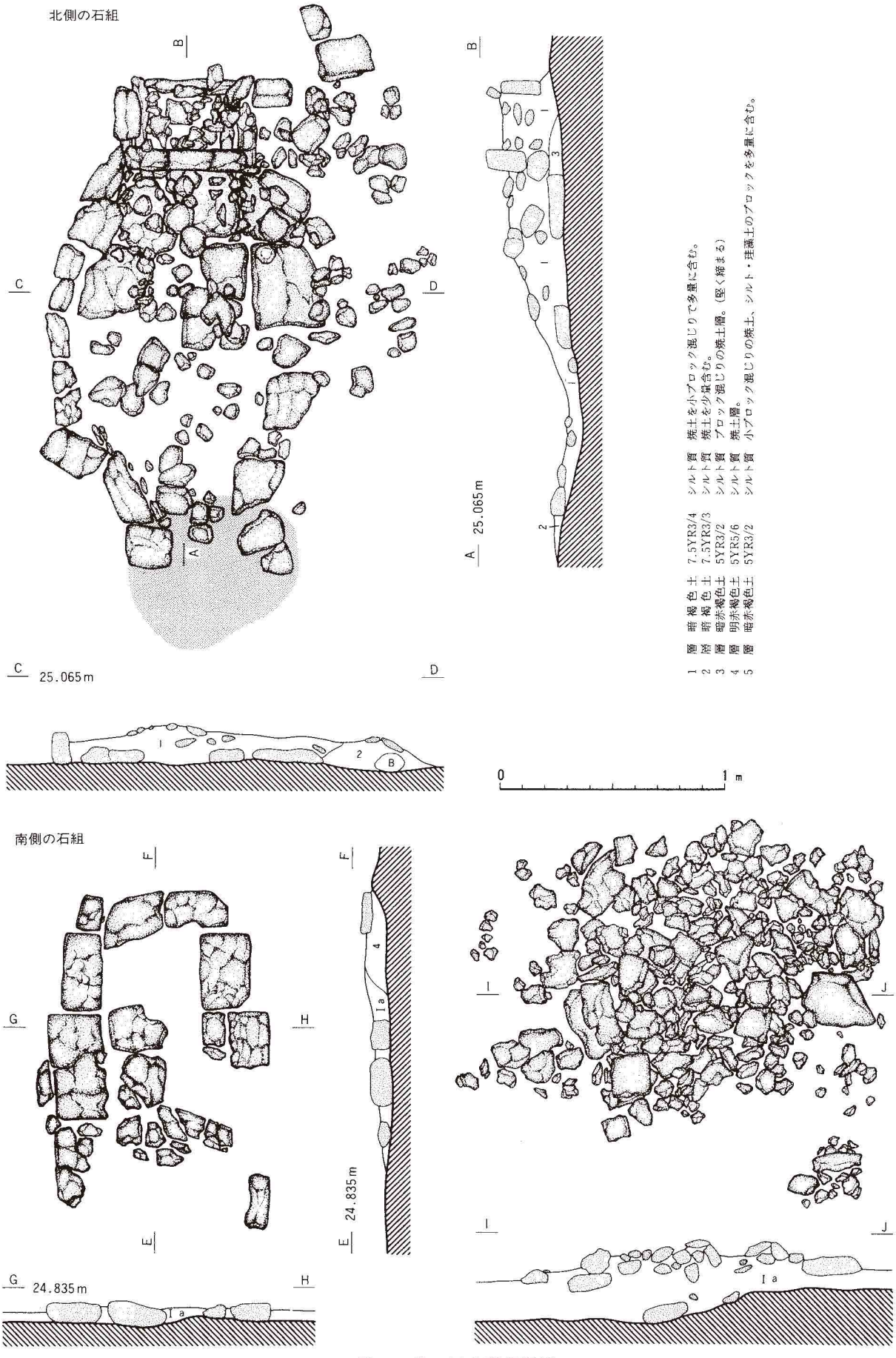
［形態・規模］石を組んで作られた焼き場２基が残る本体部分と、これを囲む溝からなっている。溝に囲まれた本体部分は約５～６ｍ四方の広さがあり、底面には緩い凹凸がみられる。西側は上部が貼床状に堅く締まっていた。焼き場は本体部分の東側にあり、南北方向に約１ｍ離れて並んでいる。石組はシルト及び珪藻土を板状ないしレンガ状に切り出したブロックを組み上げたものであるが、上部は取り壊されてしまっている。北側の石組の北西側及び南側の石組の南西側には、各々の取り壊したブロック片がまとめられていたが、南側のブロック片はかなり溝の中に崩れ落ちている。この他溝の外側、南に約４ｍ離れた箇所（Ｆ・Ｇ－349グリッド）にも同様のブロック片が集まっていた。石組のブロック及び取り壊されたブロック片の大半には、火熱を受けた痕跡がある。北側の石組は長径約1.6m、短径約1.3mの楕円形にブロックを組んだ部分と、この東側に接して長さ約80cm、幅約40cmの長方形に組んだ部分が残っており、楕円形の石組の内部には板状のブロックを敷いている。石組の特に西～南側はかなり崩れて欠けているが、北東側の遺りが良い箇所では、ブロックが２段に積まれた部分もみられた。石組は小ブロック混じりの焼土を多量に含む暗褐色土で覆われていたが、長方形の石組下西寄りには、底面直上に最厚約６センチの堅く締まった焼土層が残っている。また石組の西側に接して、長径76cm、短径67cmの不整円形の範囲で底面がかなり焼けていた。北側に残る石組の全長は約２ｍ、底面の焼けた部分まで含めた全長は約2.5mである。南側の石組は長さ約1.5m、幅約１ｍの長方形の範囲に敷かれた、板状のブロックが部分的に残っているだけである（石組の西側には大きな木根があり、この木根によっても壊されている）。石組は基本土層の第Ｉａ層に覆われていたが、石組下東寄りには、底面直上に最厚10cmの焼土層が残っていた。この石組から西側に約１ｍ離れた箇所には、長径1.24m、短径0.95mの不整楕円形の範囲で底面の焼けた部分がみられた。南側に残る石組の、底面の焼けた箇所まで含めた全長は約３ｍである。また南側の石組の南に隣接した箇所では、取り壊してまとめられたブロック片の下から、不整円形のピットを検出した。ピットの大きさは長径



第１号火葬場跡土層注記

6	層	暗赤褐色土	5YR3/6	シルト質　小ブロック混じりの焼土、シルト・珪藻土のブロックを多量に含む。
7	層	明赤褐色土	2.5YR4/8	シルト質　焼土層。明黄褐色軽石を含む。
8	層	黒褐色土	7.5YR3/1	シルト質　小ブロック混じりの焼土、シルト・珪藻土のブロックを含む。(部分的に褐色土を層状に含む
9	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
10	層	黒褐色土	10YR2/2	シルト質　明黄褐色軽石を含む。(壁の崩落土)
11	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。焼土、シルト・珪藻土のブロックを多量に含む。
12	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を多量に含む。小ブロック混じりの焼土を少量含む。

図95　第１号火葬場跡(1)



1 層	暗褐色土	7.5YR3/4	シルト質　焼土を小ブロック混じりで多量に含む。
2 層	暗褐色土	7.5YR3/3	シルト質　焼土を少量含む。
3 層	暗赤褐色土	5YR3/2	シルト質　ブロック混じりの焼土層。（堅く締まる）
4 層	明赤褐色土	5YR5/6	シルト質　焼土層。
5 層	暗赤褐色土	5YR3/2	シルト質　小ブロック混じりの焼土、シルト・珪藻土のブロックを多量に含む。

図96　第1号火葬場跡(2)

77cm、短径67cmで、深さは約30cmである。ピット内には、小ブロック混じりの焼土と石組の小ブロック片が多量に入っていた。溝は本体の南～ 北側（斜面上方）を巡っており、南側では膨らみながら閉じているが、北側では北西方向（斜面下方）に大きく開いて立ち消えになっている。溝の延長線上にあたる北西側斜面下方には、（図示していないが）地山に水の流れた痕跡が認められた。溝はかなり不整形に掘られており、大きさは確認面で幅2.62～1.15m、底面で2.15～0.40mである。底面には凹凸が著しく、最深部で約80cmの深さとなっている。

［堆積土］焼き場の本体部分は、大半が基本土層の第Ⅰａ層に覆われていた。溝の堆積土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、自然埋没の過程にあるとみられる。この過程で、主に壁面の崩れによって明黄褐色軽石（第Ⅴ層）が全体的に混入している。また部分的には、小ブロック混じりの焼土やシルト・珪藻土のブロック片が、上部の本体側から多量に崩れ落ちた箇所もある。

［出土遺物］北側の石組の長方形に組まれた部分の覆土から、炭化していない小豆が数個出土した。また、南側のブロック片集中箇所で検出したピットの覆土から、シルトで作られたボルト形ないし男根形の石製品が１点出土した。

表46　第１号火葬場跡出土石製品計測表

図版番号	分　類	出　土　層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
97－1	－	ピットフク土	(11.2)×8.4×6.1	(224.2)	シルト	明治時代以降

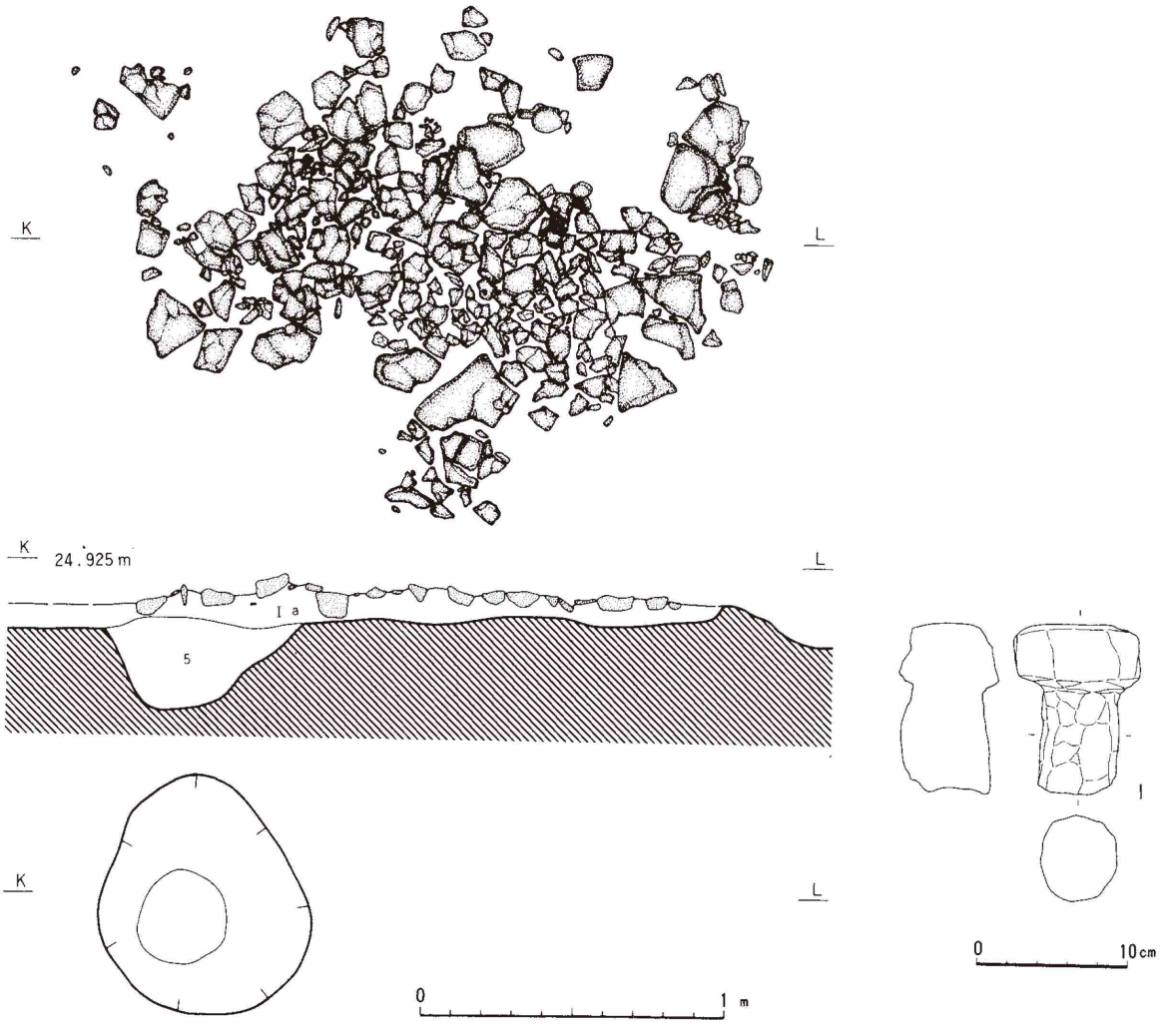


図97　第１号火葬場跡(3)・出土石製品

5　柱穴状ピット群

第１号柱穴状ピット群（図98）

［位置・確認］Ｍ～Ｐ・338～344グリッドに位置する。第Ｖ層上面で黒褐色土、暗褐色土、灰黄褐色土の落ち込み（不整楕円）を確認した。

［形態・規模］総数35個検出された。調査区の北側にも何個かあると思われる。これらピットはおおむね同規模で、現存地で径30～40cm、深さ30～40cmのものが多い。ピットの配置は同一方向、ほぼ等間隔の配列としてが認められる。また、断面形にも柱を抜き取った痕跡があることから柱穴として機能したものと推定される。柱列は北東方向から南東方向へ３列認められ、最長のＡ列でP19～P23間で約25mに及ぶ。柱間寸法は平均でＡ列1.82m、Ｂ列2.05m、Ｃ列1.76mである。また、Ｄ列、Ｅ列のようにこれらの柱列と直交する柱列の柱間寸法は平均で2.45m前後である。したがって、柱穴の規模や深さ、間隔には若干のばらつきがあるものの、柱列は建物や施設等を構成したものと思われる。復元できる建物、施設跡は南北棟で軸方向はＮ－23°－Ｓを示す。さらに柱穴の規模や深さ、その配置からＥ列を含まない北西側の柱穴の配置（北西よりＡ列Ｐ19～Ｐ９の９個の柱穴、同様にＢ列Ｐ７～Ｐ11の４個の柱穴、同様にＣ列Ｐ20～Ｐ15の５個の柱穴）とＥ列を含む南東側の柱穴の配置（北西よりＡ列Ｐ14～Ｐ23の６個の柱穴、同様にＢ列Ｐ16～Ｐ35の７個の柱穴、同様にＣ列Ｐ29～Ｐ32の５個の柱穴）に違いが見られる。Ｅ列を含まない北西側の柱穴の配置で構成される部分はＰ１とＰ７、Ｐ３とＰ６、Ｐ４とＰ５とＰ12、Ｐ８とＰ11とＰ14、Ｐ９とＰ15がそれぞれ対応する。柱間寸法は平均でＡ列2.12m、Ｂ列2.30m、Ｃ列2.36mとなり、またそれらと直交するＤ列の柱間寸法はＰ８とＰ11間で2.58m、Ｐ11とＰ14間で2.22mとほぼ等間隔である。柱穴の深さは異形であるＰ２、Ｐ13、Ｐ20を除けば32～54cmでほぼ一定している。したがって、この部分は検出部分で桁行約15m以上、梁行約５ｍの建物を構成していたものと考えられる（図98復元１）。一方、Ｅ列を含む南東側の柱穴の配置で構成される部分は、Ｅ列を含まない北西側の柱穴と比較し、径が小規模で深さも浅いものが多い。さらにＥ列のＰ10とＰ16とＰ29、Ｐ21とＰ33とＰ31、Ｐ22とＰ26とＰ32とそれぞれ対応したものと考えられるが、それ以外の対応する柱穴の配置はなく、前述した建物跡を構成したものとは違いがみられる。したがって、この部分は別棟のもう一棟、あるいはＥ列を含まない北西側の柱穴の配置により構成された建物と連続していて、この建物の付け足した部分や作り替えが行われた建物と思われる（復元２）。さらに、南東端部は柵として機能した可能性も考えられる（復元３）。復元した建物、施設等は２間を基本とした単純な作りで、単に床面積を増大させるための構造を作り出しているように思われる。さらに北側の調査区外に伸びて大型であった可能性もある。また、柱穴の規模が小さく、家屋風な間仕切りがみられないことから、簡易な建物で一定期間常住したというよりは一時的あるいは短期間利用されたものと思われる。

［堆積土］暗褐色土、黒褐色土、灰黄褐色土を主体とし、明黄褐色軽石ブロックが混入するものもみられる。基本層序第Ｖ層、第Ⅵ層が遺構の堆積土上部にみられるもの（Ｐ11、Ｐ34）や木材を抜き取った跡の堆積（Ｐ20、Ｐ30）を示すものがあり、人為堆積の状況を示すものが多い。暗褐色土や黒褐色土が単一層として堆積しているＰ13、Ｐ14、Ｐ20、Ｐ24、Ｐ26、Ｐ29、Ｐ32は自然堆積の状況を示すものと思われる。

［出土遺物］図示しなかったが、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ８、Ｐ９、Ｐ10、Ｐ15、Ｐ17、Ｐ18、Ｐ19、Ｐ

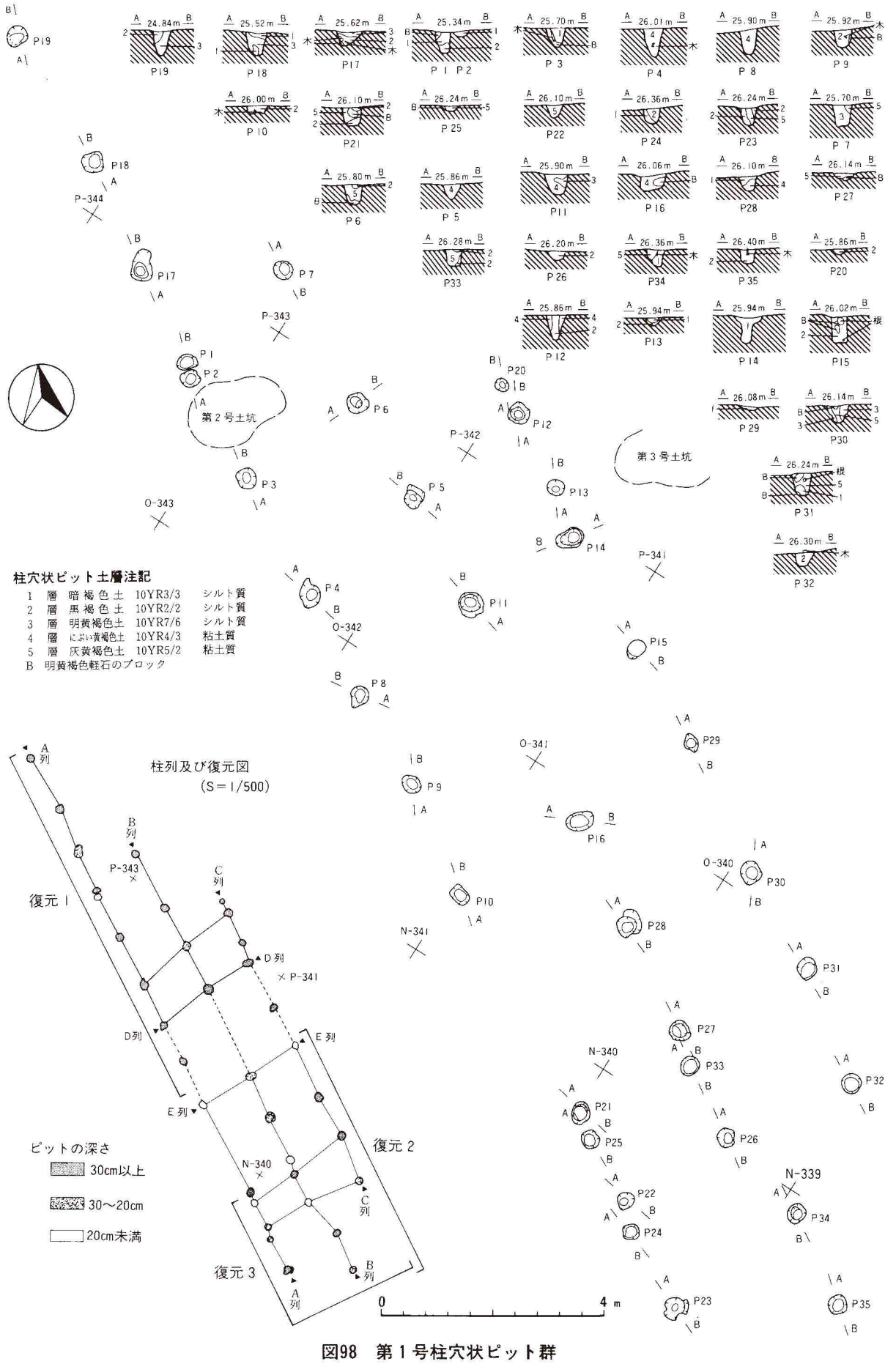


図98　第1号柱穴状ピット群

23、Ｐ32、Ｐ34から木材（腐食があまり進んでいない板状や角状に加工されたもの）、Ｐ８、Ｐ10、Ｐ18から針金状の鉄製品、Ｐ21から木材の炭化したものが出土した。いずれも近世、近代期のものと思われる。（工藤・中村）

第３節　出土遺物

遺構外から、縄文土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、銭貨などが出土した。

1　縄文時代の遺物

遺構外から、縄文土器、石器などが、約30ℓの段ボールで3箱分出土した。縄文土器は沢に面した調査区域の南東側に多く、北西側では南西部から少量出土しただけである。

(1) 縄文土器（図99～101、表47）

Ⅰ～Ⅴ群土器（早期中頃から晩期まで）が、復元土器1個体分を含めて約1.400片出土した。比較的出土量が多いのは、Ⅲ-3～Ⅳ-2類位の土器である。

Ⅰ-1類　貝殻文系の土器（1）

貝殻腹縁文と思われる文様が斜位に連続施文された、深鉢形土器の胴部片が1片だけ出土した。

Ⅱ-1類　円筒下層ａ・ｂ式（3～6）

前期中頃の円筒下層ａ式又はｂ式に含まれる、深鉢形土器がごく少量出土した。いずれも胴部～底部片で、型式は不明である。6の底面に施文された縄文は、磨滅して原体がはっきりしない。

Ⅱ-2類　円筒下層ｃ・ｄ式（2）

前期後半の円筒下層ｄ1式に含まれる、深鉢形土器の口縁部片が1片だけ出土した。縄の側面圧痕は、2本単位で施文されている。胴部の縄文は斜位方向に回転されており、条が縦走する。

Ⅲ-1類　円筒上層ａ～ｃ式（7～9）

中期前半の円筒上層ｂ式に含まれる、深鉢形土器が少量出土した。縄の側面圧痕が、連続してＣ字形に刻まれている。胴部に施文された縄文は、磨滅しているが結束第1種羽状縄文と思われる。

Ⅲ-2類　円筒上層ｄ・ｅ式（10・11・16）

中期中頃の円筒上層ｄ式及びｅ式に含まれる、深鉢形土器がごく少量出土した。

Ⅲ-3類　大木系の土器（18～21）

中期後半の大木10式併行の土器が出土した。沈線は21を除いて、概ねきっちりと加えられている。なお、沈線文を施文した土器（22～27）、縄の側面圧痕を施文した土器（28・29）、無文の復元土器（33）などは、Ⅲ-3～Ⅳ-1類辺りとみられる。

Ⅳ-2類　十腰内Ⅰ式（41～52）

後期前半の十腰内Ⅰ式に含まれる土器が、比較的多めに出土した。この他、Ⅳ-1～2類とした土器の中で、平行沈線を施文した35もこの時期になるかと思われる。

Ⅴ-1類　大洞Ｂ・BC式（56・57）

晩期前半の大洞BC式ほかの土器が、ごく少量出土した。57の刻目は、羊歯状文の一部とみられる。

表47　遺構外出土縄文土器観察表

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文　様　等	備　考
99－1	Ⅰ－1	Ⅰ－345・Ⅰ	深鉢・胴部	貝殻腹縁文？	
99－2	Ⅱ－2・円筒下層d1	J－320・Ⅱ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(R)・結節回転文・縄文(LR)斜位	
99－3	Ⅱ－1	N－316・Ⅰ	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	胎土に繊維含
99－4	Ⅱ－1	O-316～317・Ⅰ	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	胎土に繊維含
99－5	Ⅱ－1	Q－335・Ⅱ	深鉢・胴部	縄文(RL？)横位・補修孔	胎土に繊維含
99－6	Ⅱ－1	K－330・Ⅰ	深鉢・底部	底面に縄文	胎土に繊維含
99－7	Ⅲ－1・円筒上層b	H－329・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	隆線(縄側面圧痕)・縄側面圧痕(L)・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)？	
99－8	Ⅲ－1・円筒上層b	H－329・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕)・縄側面圧痕(L)・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)？	
99－9	Ⅲ－1・円筒上層b	H－329・Ⅰ	深鉢・口縁部	隆線(縄側面圧痕)・縄側面圧痕(L)・結束第1種羽状縄文(LR＋RL)？	
99－10	Ⅲ－2・円筒上層d	L－320・Ⅱ	深鉢・口縁部	隆線	
99－11	Ⅲ－2	K－321・Ⅰ	深鉢・口縁部	隆線・縄側面圧痕(R)・縄文(LR)横位	
99－12	Ⅲ	J－338・Ⅱ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	折返し状口縁
99－13	Ⅲ	N－324・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
99－14	Ⅲ	G－335・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・縄文(LR)斜位	
99－15	Ⅲ	K－321・Ⅰ	深鉢・口縁部	突起・沈線・縄文(RL)横位	
99－16	Ⅲ－2・円筒上層e	K－321・Ⅱ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(RL？)・平行沈線・縄文(RL)縦位	
99－17	Ⅲ	K－321・Ⅰ	深鉢・胴部	円形貼付・沈線・縄文(RL)横位	
99－18	Ⅲ－3・大木10併行	H－353・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・沈線・縄文(LR)横位	
99－19	Ⅲ－3・大木10併行	G～H－356・Ⅱ	深鉢・胴部	磨消縄文(LR)	
99－20	Ⅲ－3・大木10併行	M-316～317・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(LR)横位	
99－21	Ⅲ－3・大木10併行	M-316～317・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線・縄文(LR)横位	
99－22	Ⅲ－3～Ⅳ－1	N－323・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・沈線・単軸絡条体第1類(R)縦位	
99－23	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－325・Ⅱ	深鉢・胴部	沈線・単軸絡条体第1類(R)縦位	
99－24	Ⅲ－3～Ⅳ－1	O－323・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(RL？)	
99－25	Ⅲ－3～Ⅳ－1	N－324・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線	
99－26	Ⅲ－3～Ⅳ－1	O－324・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線・縄文(RL？)	
99－27	Ⅲ－3～Ⅳ－1	M－318・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線・縄文(RL)横位	
99－28	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－325・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(LR)・縄文(LR)斜位	
99－29	Ⅲ－3～Ⅳ－1	Ⅰ－354・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(LR)	
99－30	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－347・Ⅰb	深鉢・胴部	縄文(LR)縦位	
99－31	Ⅲ－3～Ⅳ－1	G－335・Ⅰ	深鉢・低部	底面に網代痕	
99－32	Ⅲ－3～Ⅳ－1	G～H－356・Ⅱ	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	
100－33	Ⅲ－3～Ⅳ－1	G～H-347～348・Ⅰb	深鉢・口縁～底部	無文	復元土器
100－34	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－325・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体(R)横位(口端)、縦位(口頸部)	
100－35	Ⅳ－1～2	表採	深鉢・口縁部	平行沈線	
100－36	Ⅴ？	表採	深鉢・口縁部	無文(条線)	
100－37	Ⅲ－3～Ⅳ－1	H－325・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体(R)斜位	
100－38	Ⅲ－3～Ⅳ－1	G－347・Ⅰ	深鉢・胴部	縄文(RL)斜位	
100－39	Ⅲ－3～Ⅳ－1	G～H－356・Ⅱ	深鉢・口縁～胴部	縄文(LR)横位、縦位、斜位	かなり磨滅
100－40	Ⅲ－3～Ⅳ－1	M－323・Ⅰ	深鉢・底部	単軸絡条体(R)斜位・底面に網代痕	
100－41	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Ⅰ－334・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・磨消縄文(RL)	
100－42	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－331・Ⅰ	鉢類・口縁部	磨消縄文(RL)	折返し状口縁
101－43	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－336・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(RL)	
101－44	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	G－354・Ⅰ	鉢・口縁～胴部	波状口縁・刺突・磨消縄文(RL)	口縁部肥厚
101－45	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－335・Ⅰ G～H－356	鉢類・口縁～胴部	磨消縄文(RL)	
101－46	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	H－334・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(RL)	
101－47	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	G～H－356	鉢類・胴部	磨消縄文(RL)	
101－48	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－326・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(LR)	
101－49	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	N－321・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(RL)	
101－50	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Ⅰ－326・Ⅰ	鉢類・口縁部	平行沈線	
101－51	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	J－335・Ⅰ	鉢類・口縁部	平行沈線	
101－52	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	H－305・Ⅱ	鉢類・胴部	沈線文	
101－53	Ⅳ－1～2	M－318・Ⅰ	鉢類・口縁部	平行沈線・縄文(RL)横位	
101－54	Ⅳ－1～2	K－321・Ⅰ	鉢類・口縁部	平行沈線・縄文(RL)横位	
101－55	Ⅳ－1～2	L－317・Ⅰ	鉢類・口縁部	平行沈線・縄文(RL)横位	
101－56	Ⅴ－1	H－319・Ⅰ	鉢類・口縁部	B突起・沈線	
101－57	Ⅴ－1・大洞BC	Ⅰ－327・Ⅰ	鉢類・胴部	連続刻目文	
101－58	Ⅴ－2～3	M-316～317・Ⅰ	鉢類・胴部	平行沈線・縄文(LR)横位	
101－59	Ⅴ	M-316～317・Ⅰ	鉢類・口縁部	無文	
101－60	Ⅴ	M-316～317・Ⅰ	鉢類・口縁部	無文	
101－61	Ⅳ～Ⅴ	G－326・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位、縦位	
101－62	Ⅳ～Ⅴ	K－336・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
101－63	Ⅳ～Ⅴ	G－338・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
101－64	Ⅳ～Ⅴ	表採	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
101－65	Ⅳ～Ⅴ	H－325・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)斜位	
101－66	Ⅳ～Ⅴ	表採	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
101－67	Ⅳ～Ⅴ	M-316～317・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
101－68	Ⅳ～Ⅴ	M－319・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
101－69	Ⅳ～Ⅴ	J－296・Ⅰ	鉢・底部	縄文(RL)横位	

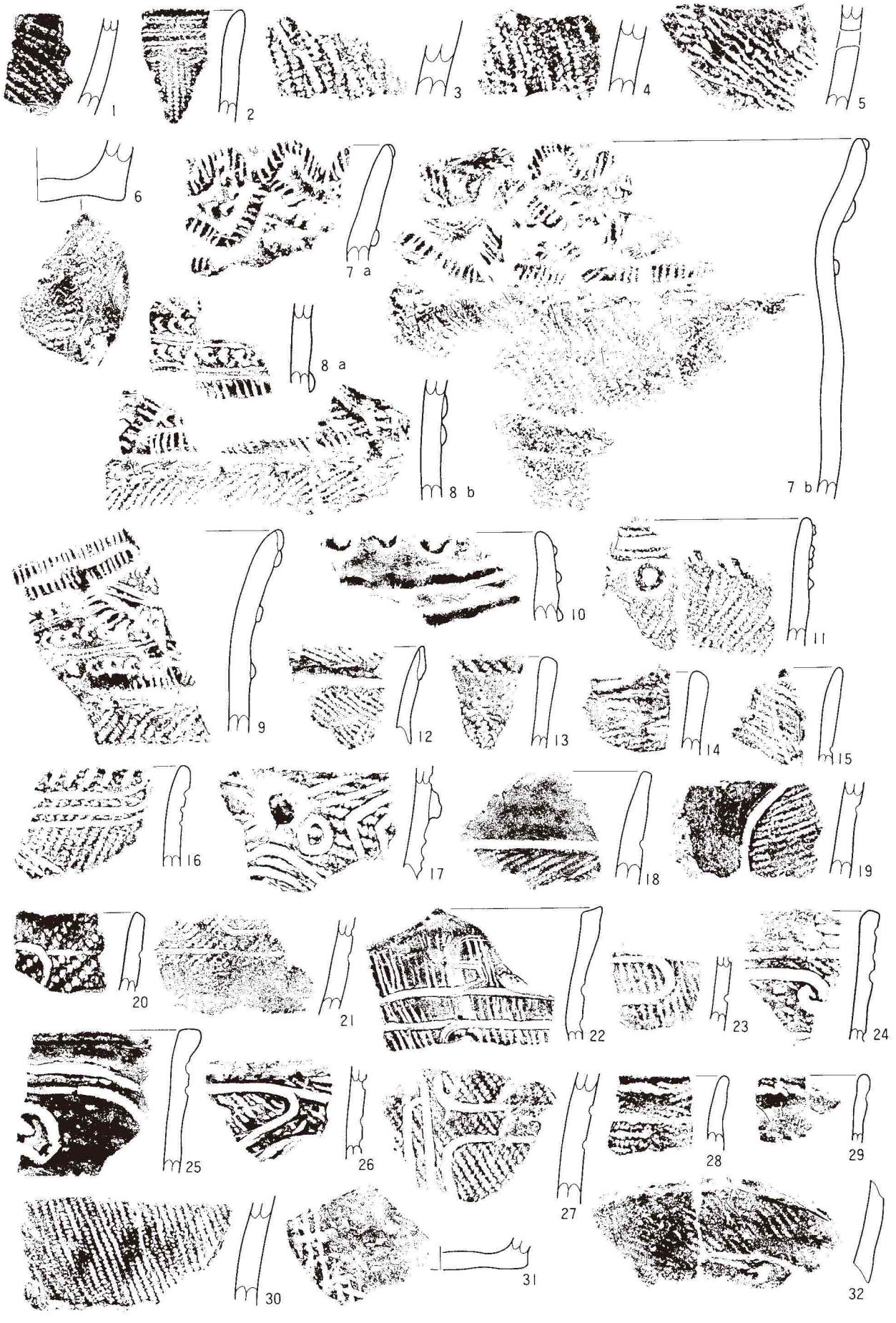


図99　遺構外出土縄文土器(1)　S＝2/5

図100　遺構外出土縄文土器(2)

S＝2/5

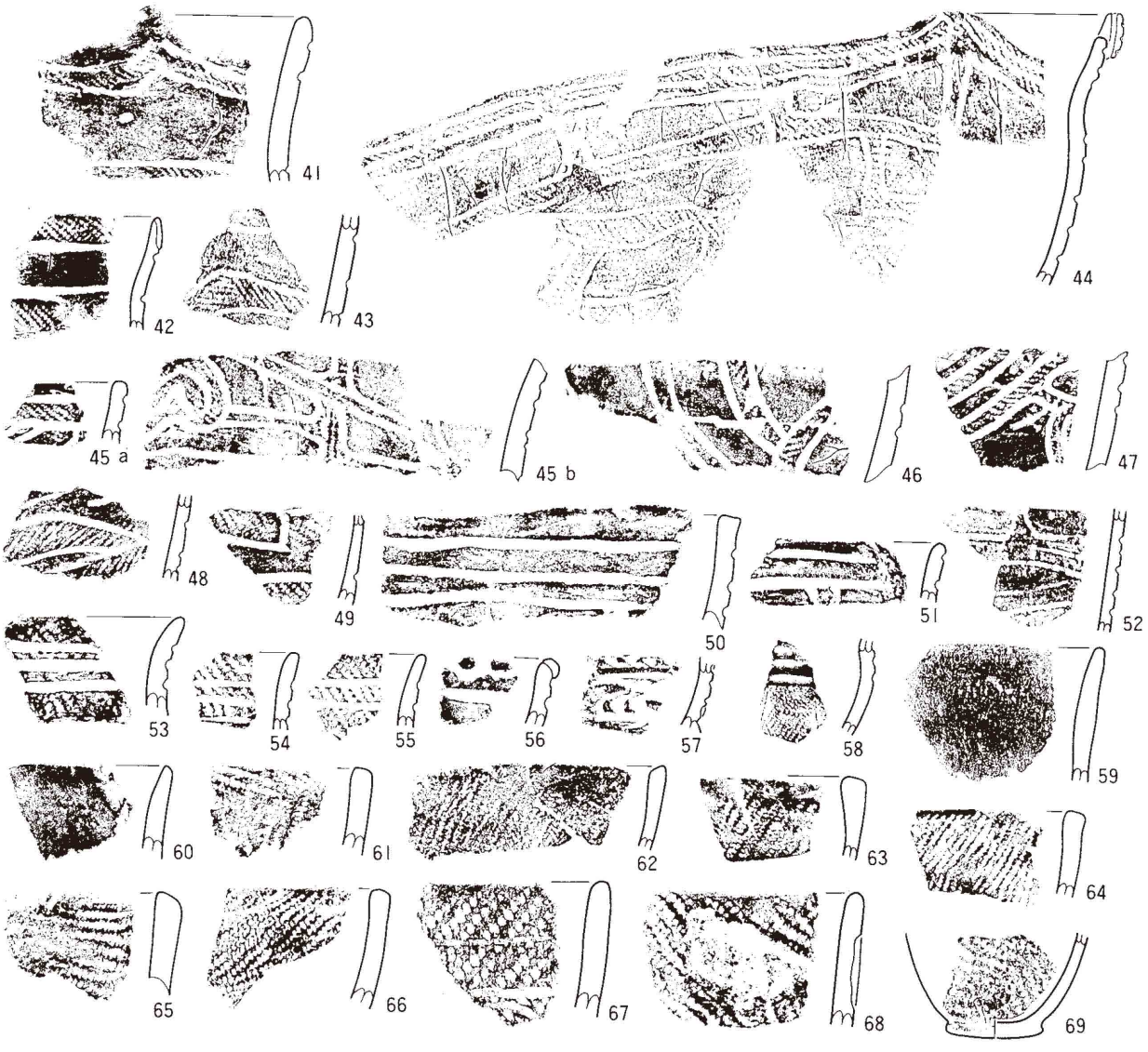


図101　遺構外出土縄文土器(3)　　S＝2/5

(2) 石器（図102、表48）

Ⅱ・Ⅲ類石器及び剥片類などが、計30点出土した。

Ⅱ-1類　石鏃（1・2）

欠損品が２点出土した。１は抉りの深い凹基、２は凸基（有柄）で、いずれも基部を欠いている。

Ⅱ-3類　石匙（3）

欠損品が１点出土した。縦形の石匙で、刃部の下半部を欠いている。

器種不明の欠損品（4）

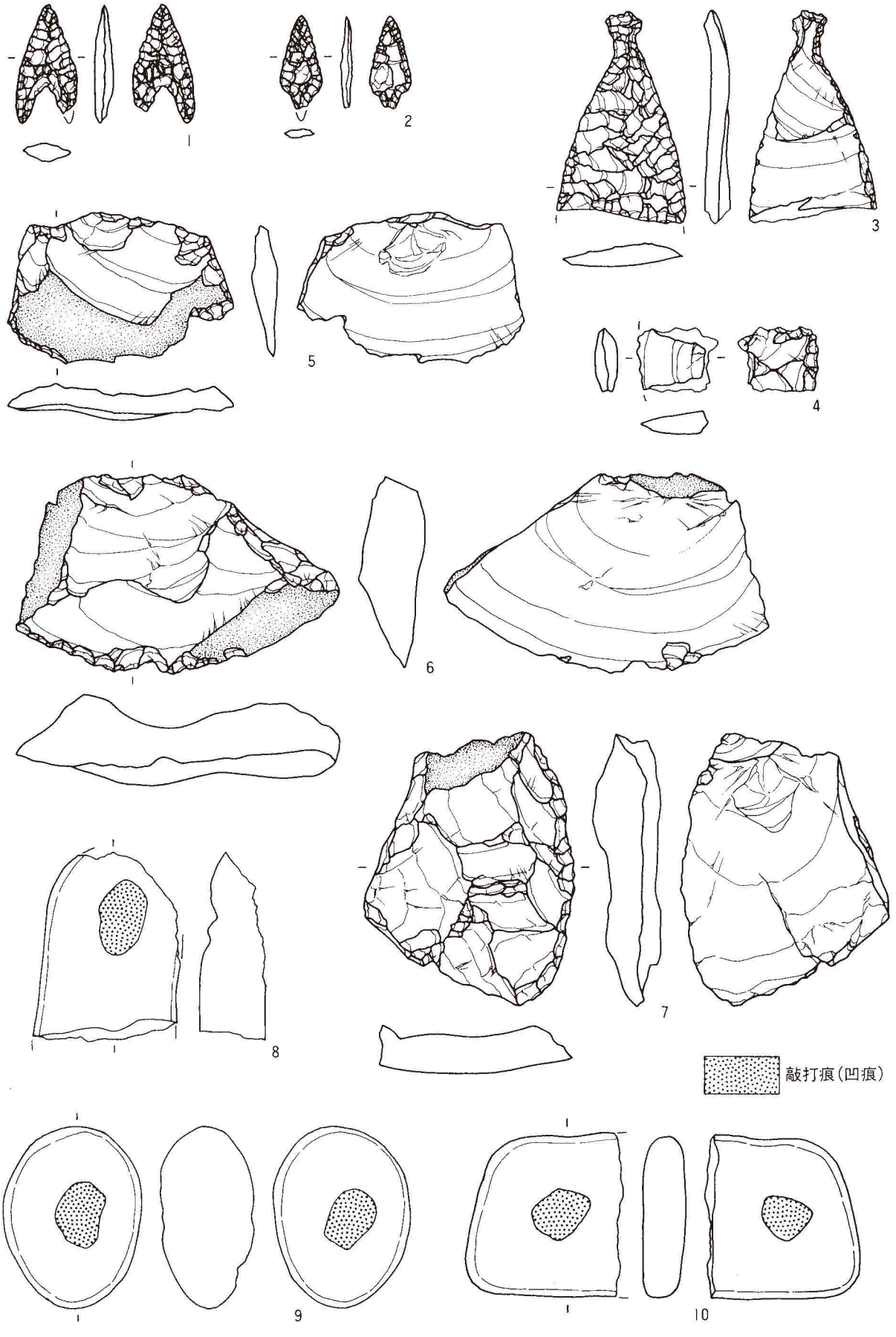
１点出土している。片面に調整剥離が加えられたものである。

Ⅱ-6類　Ｒフレイク・Ｕフレイクの類（5～7）

Ｒフレイクが３点出土した。５・６は横長の剥片、７は縦長の剥片をを素材としている。

剥片・砕片類

20点出土したが、剥片よりむしろ砕片が多い。珪質頁岩が大半で、ほかには玉髄が１点ある。



1～7．S＝2/3
8～1．S＝1/3

図102　遺構外出土石器

Ⅲ-３類　すり石・敲石・凹石の類（８～10）

凹石の完形品が１点、欠損品が２点出土した。８は片面、９・10は両面に、敲打による凹痕がみられる。

（工藤）

表48　遺構外出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層・層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
102－１	Ⅱ－１・石鏃	Ｈ－323・Ⅰ	(3.2)×1.6×0.5	(1.7)	珪質頁岩	凹基・基部欠損
102－２	Ⅱ－１・石鏃	Ｈ－326・Ⅰ	(2.5)×1.1×0.3	(0.6)	珪質頁岩	凸基・基部欠損
102－３	Ⅱ－３・石匙	Ｊ－335・Ⅰ	(5.7)×3.5×0.7	(8.2)	珪質頁岩	縦形・欠損品
102－４	―	Ｈ－327・Ⅱ	(1.7)×2.2×0.6	(2.7)	珪質頁岩	欠損品
102－５	Ⅱ－６・Ｒフレイク	Ｈ－330・Ⅰ	4.8 ×6.0×0.7	14.9	珪質頁岩	
102－６	Ⅱ－６・Ｒフレイク	Ｇ－320・Ⅰ	(8.6)×5.8×1.8	(83.7)	珪質頁岩	
102－７	Ⅱ－６・Ｒフレイク	Ｋ－326・Ⅱ	(7.2)×5.1×1.8	(63.3)	珪質頁岩	
102－８	Ⅲ－３・凹石	Ｋ－336・Ⅰ	(10.0)×7.8×3.5	(248.7)	凝灰岩	敲打痕（凹）・欠損品
102－９	Ⅲ－３・凹石	Ｍ-316～317・Ⅰ	9.6 ×7.3×5.0	407.9	安山岩	敲打痕（凹）
102－10	Ⅲ－３・凹石	Ｇ－335・Ⅰ	(8.4)×8.7×2.3	(223.0)	凝灰岩	敲打痕（凹）・欠損品

２　平安時代の遺物（図103、表49）

土師器が約70点、須恵器が１点出土した。ほとんどが小破片である。出土層位はすべて基本層序第Ⅰ層からの出土である。出土位置は調査区西側の第１号住居跡のあるＬ－317グリッド、Ｈ－335グリッドに集中する。遺物の機種は土師器は坏、甕、須恵器は甕である。その実年代はおおむね９世紀末～10世紀前半が主体を占める。以下に器種別に述べる。

⑴土師器

甕（１～７、９、10）

１、５、７、８は長胴形を呈する。調整はロクロ整形である。１は外面頸部に白化粧土が塗られ、内面にナデがみられる。５は輪積痕が残る。９は外面と内面口縁部に化粧土が塗られミガキによる調整が顕著で７～８世紀代の可能性がある。10はカキメ？がみられる。２～４、６は頸部から垂直に立ち上がると考えられ、小甕あるいは小壷である。口縁部の作りからいずれも在地のものとは考え難く主体を占める時期のものより古手の可能性がある。

坏（11～13）

すべてロクロ整形である。13は回転糸切痕が残こり、内面は黒色処理されている。

⑵須恵器

甕（14）　胎土は灰色で、ロクロ整形である。　（中村）

表49　平安時代の遺物観察表

図版番号	出土位・層	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	底面調整
103－１	Ⅰ－325・Ⅰ	土師器	甕	口縁部	(20.1)	－	－	ロクロナデ、化粧土	ロクロナデ、ヘラナデ	
103－２	Ｍ－316・Ⅰ	土師器	小甕か	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	
103－３	Ｋ－317・Ⅰ	土師器	小甕か	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	
103－４	Ｍ－316・Ⅰ	土師器	小甕か	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ、黒色処理	
103－５	Ｎ－323・Ⅰ	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ、輪積痕	
103－６	Ｋ－316・Ⅰ	土師器	小甕か	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ、黒色処理	
103－７	Ｇ－339・Ⅰ	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	
103－８	表採	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	
103－９	Ｍ－316・Ⅰ	土師器	甕か壺	口縁部	－	－	－	ヘラナデ、ミガキ	ヘラナデ、ミガキ	
103－10	Ｍ－316・Ⅰ	土師器	甕	胴部	－	－	－	カキメ？、ヘラナデ	ロクロナデ	
103－11	Ｍ－316・Ⅰ	土師器	杯	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	
103－12	Ｆ－338・Ⅰ	土師器	杯	口縁部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	
103－13	Ｋ－317・Ⅰ	土師器	杯	底部	－	(5.0)	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
103－14	Ｏ－316・Ⅰ	須恵器	甕か	胴部	－	－	－	ロクロナデ、ヘラナデ	ロクロナデ	

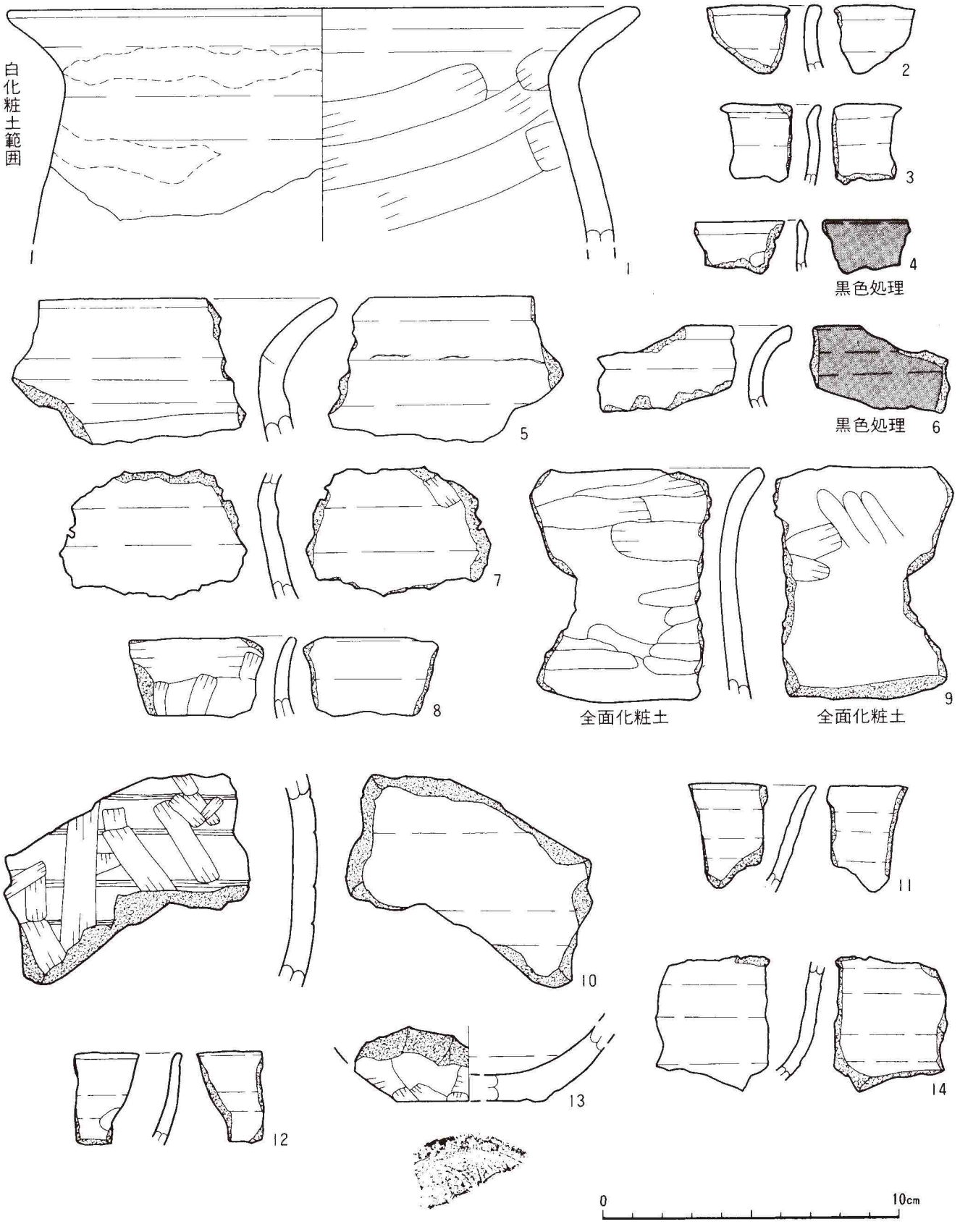


図103　平安時代の遺物

3　近世以降の遺物（図104、表50）

陶磁器類をはじめ、鉄製品、石製品、土製品、銭貨が出土した。陶磁器類の焼成年代及び分類の基準、煙管、銭貨の分類は隈無(1)遺跡出土のものと同様に行った。

(1)陶磁器類（1～14）

近世から現代までの陶磁器類が約30点出土した。出土層位はすべてⅠ層である。出土位置調査区のほぼ全域から散発的に出土している。以下器種別に述べる。

碗（2～5、8～10、12）

2、12は飯碗である。それぞれ丸形、平形を呈すると思われる。2は外面一重網目文、外面二重網目文が施文される。12は内面に施文されている。5は腰張形を呈すると推定され湯飲み碗と思われる。外面に桐がコンニャク印判の手法によりプリントされている。8は断面が直立気味に立ち上がり、口径でほぼ8cm程度と推定される。そば猪口の可能性もあろう。3、4、9、10は器類も漠然としないが内面にも施釉されていることから碗の形態をもつと考えられる。3は口唇部で外反し、端反り碗の可能性がある。9、10の高台はともにやや高く、無釉で削りだして作られている。見込みは蛇の目釉剥ぎされている。

皿（1、6、11、14）

1、6、13は小皿である。1は丸形を呈する。外面は無釉で薄明茶色の釉がなまこ釉的に施釉されいる。内面は緑釉が施釉され、見込が蛇の目釉剥ぎされている。高台はなく底部は彫具で調整されている。6は透明釉が施釉されている。13は美濃型紙による染付皿で人物と亀がプリントされている。11は底部である。見込の部分で五弁花文がプリントされ、高台内には文字が残る。

瓶（7、14）

7は口頸部で内面にも施釉されている。髪油壷の可能性がある。14は青磁で内面無釉である。系統は不明である。花器の可能性も考えられる。

(2)鉄製品（15）

15は先端が欠損し、鉈の可能性が高い。16はやや細身の吸口である。銅製で緑青で表面が覆われ、ラウの欠損したと思われる木片が内部に残る。実年代は18世紀前半とみられる。

(3)石製品（17、18）

砥石でが出土した。17は使用面1面の仕上げ砥石で、石質は細粒凝灰岩である。18は使用面1面の荒砥石で石質は砂岩である。本時期に含めたが平安時代のものである可能性もある。

(4)土製品（19、20）

19は土製人形である。手捏で作られている可能性が高い。外面を整形している。20は小碗状で手捏で作られている。外面に圧痕がみられる。時期は不明である。

(5)銭貨（21）

寛永通宝が1枚出土した。新寛永で裏面が擦りにより加工される模鋳銭である。　（中村）

表50　近世以降の遺物観察表

図版番号	出土位・層	種別	計測値(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	器種　製作地 文様・装飾特徴・印・銘など	年　代	整　形	胎土色
104－1	Ⅰ－345・Ⅰ	磁器	(15.6)	(9.0)	(2.2)	染付皿　肥前系 見込蛇の目釉剥ぎ　高台削りによる調整	17C末～18C後半	ロクロ	灰褐色
104－2	J－348・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系 外面二重網目文　内面一重網目文	17C末～18C後半	ロクロ	白色
104－3	H－336・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　地方窯か 染付碗	18C後半～19C中か	ロクロ	灰色
104－4	L－319・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　瀬戸美濃系 染付皿	18C後半～19C中か	ロクロ	白色
104－5	J－335・Ⅰ	陶器	－	－	－	染付瓶　肥前系 桐文　コンニャク印判	17C末～18C後半	ロクロ	白色
104－6	H－330・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　瀬戸美濃系	18C後半～19C中か	ロクロ	白色
104－7	M－316・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系	17C末～18C後半	ロクロ	白色
104－8	H－335・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系	17C末～18C後半	ロクロ	白色
104－9	J－333・Ⅰ	磁器	－	－	(1.6)	染付碗　肥前系 見込蛇の目釉剥ぎ削り出し高台	17C末～18C後半	ロクロ	灰褐色
104－10	H－331・Ⅰ	磁器	－	(5.4)	(1.8)	染付碗　肥前系 見込蛇の目釉剥ぎ削り出し高台	17C末～18C後半	ロクロ	灰褐色
104－11	N－343・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系 見込コンニャク印判による五弁花文　裏銘あり	17C末～18C後半	ロクロ	白色
104－12	M－330・Ⅰ	磁器	－	－	－	染付碗　肥前系	17C末～18C後半か	ロクロ	灰色
104－13	J－331・Ⅰ	磁器	－	－	－	瓶か　系統不明 青磁　内面無釉	18C後半～19C中か	ロクロ	白色
104－14	Ⅰ－353・Ⅰ	磁器	(10.6)	(7.0)	(1.8)	染付皿　瀬戸美濃系 印判手　見込鶴と亀	18C後半～19C中か	ロクロ	白色
104－19	N－333・Ⅰ	土製品	(3.6)	2.2	1.0	人形 手捏→整形	18C後半～19C中か	手捏	褐色
104－20	L－317・Ⅰ	土製品	2.7	5.0	3.7	碗状土製品 圧痕	平安時代以降	手捏	褐色

図版番号	出土位・層	種別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備　考	年　代
104－15	G－332・Ⅰ	鉄製品	9.8	5.9	1.1	250.9	鉈か、先端欠損	不明
104－16	G－350・Ⅰ	煙管	8.5	1.1	1.0	21.6	吸口、真鍮	18C前半
104－17	L－327・Ⅰ	砥石	(5.7)	4.2	2.8	106.5	細粒凝灰岩、使用面１面	平安時代以降
104－18	G－334・Ⅰ	砥石	(5.2)	3.7	2.3	107.0	砂岩、使用面１面	平安時代以降
104－21	K－317・Ⅰ	銭貨	2.3	—	0.1	2.4	裏面擦り加工、模鋳銭	不明

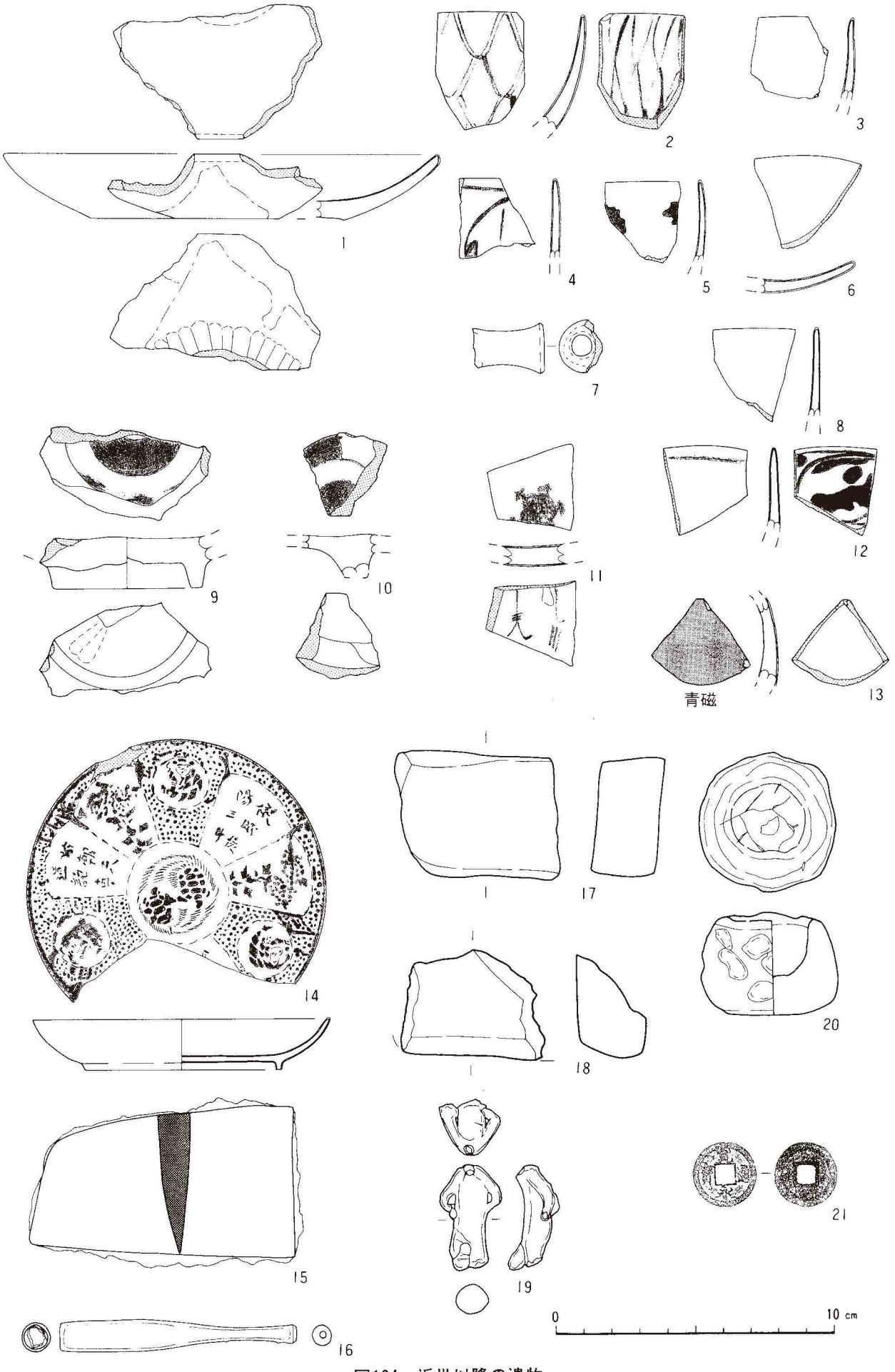


図104　近世以降の遺物

第Ⅴ章　　隈無（6）遺跡

第１節　基本層序（図105）

本遺跡調査区の原地形は南西の沢に向かって標高が低くなる傾斜地であった。土層観察用に調査区西側のＰ－26～27グリッドにトレンチ、Ｐラインと31ラインにはベルトを設定した。Ｐ－26～27グリッドのトレンチでは堆積状況を把握するため深堀りを行った。西壁の状況は以下の通りである。

第Ｉａ層(暗褐色土・10YR3/4)耕作土。耕作による堅さはある。旧沢地形のため、水が溜まると考えられ、粘性、しまりがある。乾くとぼそぼそし灰色となる

第Ｉｂ層(黒褐色土・10YR3/2)表土層。シルト質黒褐色土が主体を占める。粘性、しまりがある。

第Ⅱ 層(褐色土・7・5YR4/3)シルト質黒褐色土が主体を占める。堅さ、しまりがある。ブロック状に苫小牧火山灰を含み、この部分は細粒砂質である。

第Ⅲ 層(黒褐色土・10YR3/2)シルト質黒色土が主体を占める。黒色腐植土。堅さ、しまりがあり、粘性、保湿性がある。軽石、粘土粒が混入する。

第Ⅳa層(暗褐色土・10YR3/4)漸移層。腐植土質でⅤ層軽石粒、Ⅵ層粘土粒が混入する。

第Ⅳb層(黄褐色土・10YR5/6)漸移層。色調が明るく第Ⅳａ層と比較しⅤ層軽石粒、Ⅵ層粘土粒が混入が多い。

以上第Ｉａ層～第Ⅳb層に区分された。調査区東端部は旧沢の谷部分であるため第Ｉa層～第Ⅳb層まで約1、2mあり、緩斜面地とはやや堆積状況が異なる。Ⅱ層が最厚約70cmでみられ、上部に苫小牧火山灰が確認された。また、第Ⅱ層下位、第Ⅲ層中位、第Ⅵ層上位にはそれぞれ独立した焼土層(橙色土・7.5YR6/6)がみられ旧沢の埋没過程で少なくとも３回以上にわたり焼土が流れこんだ事になるが、その起因ははっきりしない。また、旧沢地以外の緩斜面では地山である第Ⅴ層が確認された。

第Ⅴ 層(明黄褐色土・10YR6/8)明黄褐色軽石層。浮石質。粒子が緻密で堅さがある。水の影響で灰白色凝灰質粘土に移化している部分もある。

31ラインの緩斜面では基本層序通りの堆積状況を示し、第Ｉ層～第Ⅴ層面までおおむね50cmである。第Ⅱ層、第Ⅲ層が後世の撹乱により欠層している部分が多い。　　（中村）

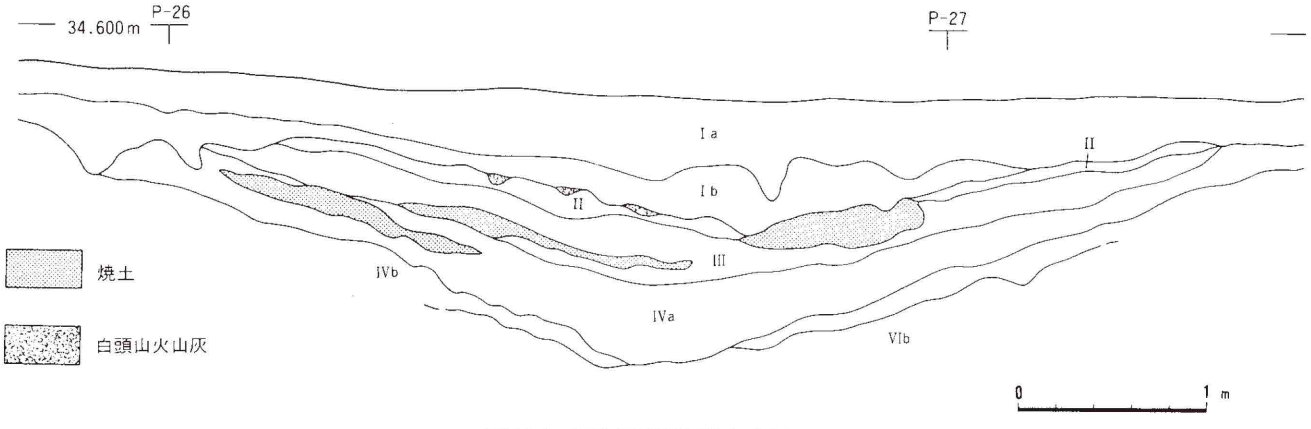


図105　隅無(6)遺跡基本土層

第２節　検出遺構

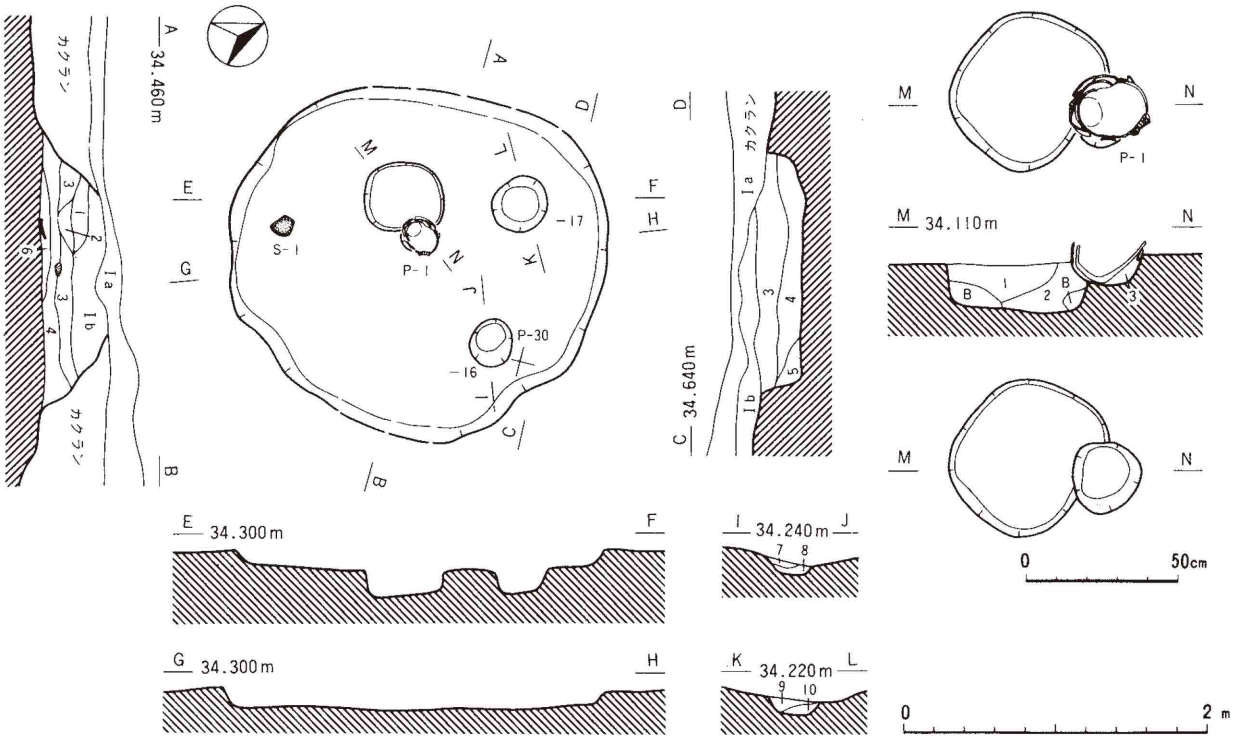
隈無（６）遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡２軒、土坑４基、焼土４基を検出した。

１　竪穴住居跡

第１号住居跡（図106～108、表51・52）

［位置・確認］Ｏ・Ｐ－29・30グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で、黒褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］北西壁と南東壁は部分的に撹乱を受けてはっきりしないが、平面形は確認面、床面ともかなり不整な円形となっている。大きさ（現存値）は確認面で長径2.49m、短径2.35m、床面で



第１号住居跡土層注記（住居跡）

1	層	赤褐色土	YR4/8	シルト質　焼土層。暗褐色土を含む。
2	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質　焼土を少量含む。
3	層	黒褐色土	10YR3/1	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
4	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質　明黄褐色軽石を含む。
5	層	黒褐色土	10YR3/2	シルト質　明黄褐色軽石をブロック状で含む。（壁の崩落土）
6	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を含む。（上面に炭化物の薄層が分布する）
7	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を含む。焼土を微量に含む。炭化物を多量に含む。
8	層	明黄褐色土	10YR6/8	浮石質　明黄褐色軽石主体。灰黄褐色粘土を含む。焼土を多量に含む。炭化物を微量に含む。
9	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。焼土を微量に含む。
10	層	明黄褐色土	10YR6/6	浮石質　明黄褐色軽石主体。灰黄褐色粘土を微量に含む。焼土を微量に含む。

第１号住居跡土層注記（炉）

1	層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質　明黄褐色軽石、焼土を微量に含む。炭化物を少量含む。
2	層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質　明黄褐色軽石を多量に含む。焼土、炭化物を微量に含む。
3	層	黄褐色土	10YR5/6	浮石質　明黄褐色軽石主体。焼土、炭化物を微量に含む。
B		明黄褐色軽石のブロック		

図106　第１号住居跡

長径2.40m、短径2.26mである。遺構は基本土層の第Ⅳ～Ⅴ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ層を直接床面としている。貼床等の痕跡は認められない。確認面からの壁高は25～9cmである。壁面には全体的に崩れがみられ、比較的遺存状態の良い北東側でもやや壁の傾斜が緩くなっている。床面には部分的な凹凸があり、全体として西に傾斜している。床面積は約3.91㎡である。

［柱穴等］床面の北東側で柱穴状の小ピットを２個検出したが、どちらも約16cmほどの深さに掘り込まれている。この他に柱穴は認められないので、主柱穴の配置等についてははっきりしない。

［付属施設］床面の中央からやや西寄りに、土器埋設炉が設けられている。炉跡は、直径約23cmの不整円形で床面から10cmほど掘り込み、深鉢形土器を正立状態で埋設したものである。埋設された土器は口頸～胴上部を欠き、北東に傾いた状態で出土したが、これは後世の撹乱によるものと考えられる。土器内部の堆積土には焼土等は含まれていなかったが、土器周囲の床面直上層（５層、最厚約７cm）の上面には炭化物の薄い層が拡がっている。また埋設された土器の西側に接して、長径約50cm、短径約45cm、深さ17cmほどの、隅丸長方形ないし楕円形のピットが掘り込まれていた。炉跡に伴うピットなのかはっきりしないが、このピットの堆積土には焼土や炭化物が混入している。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、北東側の壁寄りには明黄褐色軽石（第Ⅴ層）とそのブロックが多く混入している。明黄褐色軽石の混入は主に壁面の崩落によるものと考えられ、床面中央部の直上層（５層）を除いて、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。なお堆積土上部の焼土層（１層）

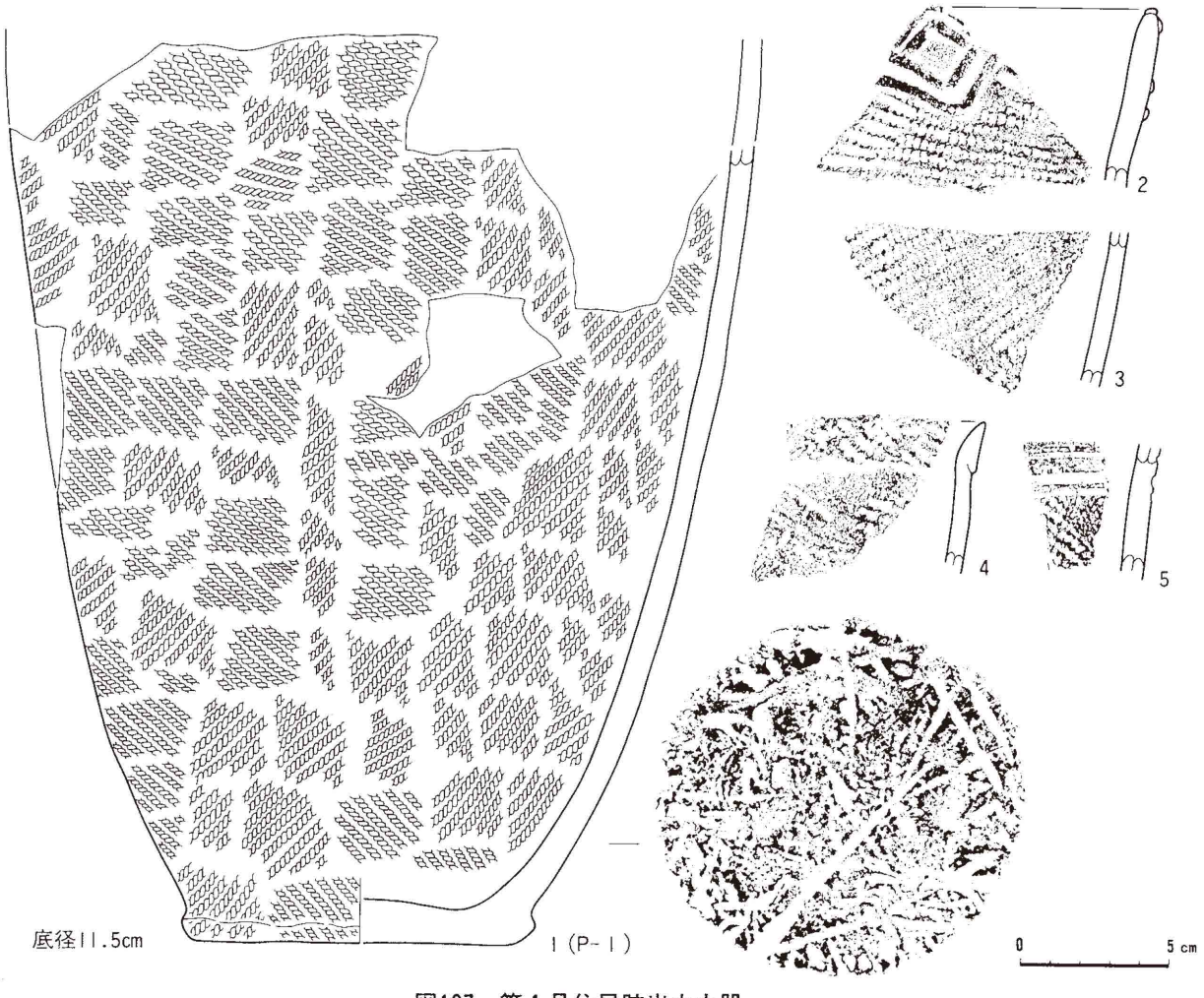


図107　第１号住居跡出土土器

は、この遺構の埋没後に堆積したもので、焼土はその下部（２層）にも混入している。

［出土遺物］炉跡から、埋設されたⅢ－１～２類の深鉢形土器胴下半部が１個体（Ｐ－１）出土した。また南西側の床面から、石英安山岩のⅢ－４類石器（石皿、Ｓ－１）が１点出土した。覆土からは、Ⅲ－２類（円筒上層ｅ式）及びⅢ－１～２類土器が16片（約240ｇ）出土した。

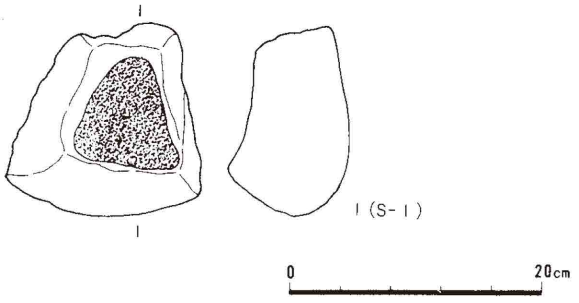


図108　第１号住居跡出土石器

表51　第１号住居跡出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
107－1	Ⅲ－１～２	炉埋設	深鉢・胴～底部	縄文(LR)横位、縦位・底面に木葉状痕、編物状の圧痕	復元土器
107－2	Ⅲ－２・円筒上層e？	フク土	深鉢・口縁部	山形突起・隆線・口端部に短沈線・縄文(RL)横位	
107－3	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	縄文(LR)横位	
107－4	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	折返し状口縁
107－5	Ⅲ－２・円筒上層e	フク土	深鉢・胴部	平行沈線・縄文(RL)横位	

表52　第１号住居跡出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備考
108－1	Ⅲ－４・石皿	床面	(15.5)×15.4×9.9	(2,100.0)	石英安山岩	すり痕

第２号竪穴住居跡（図109～111、表53・54）

［位置・確認］Ｒ－33グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で、暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

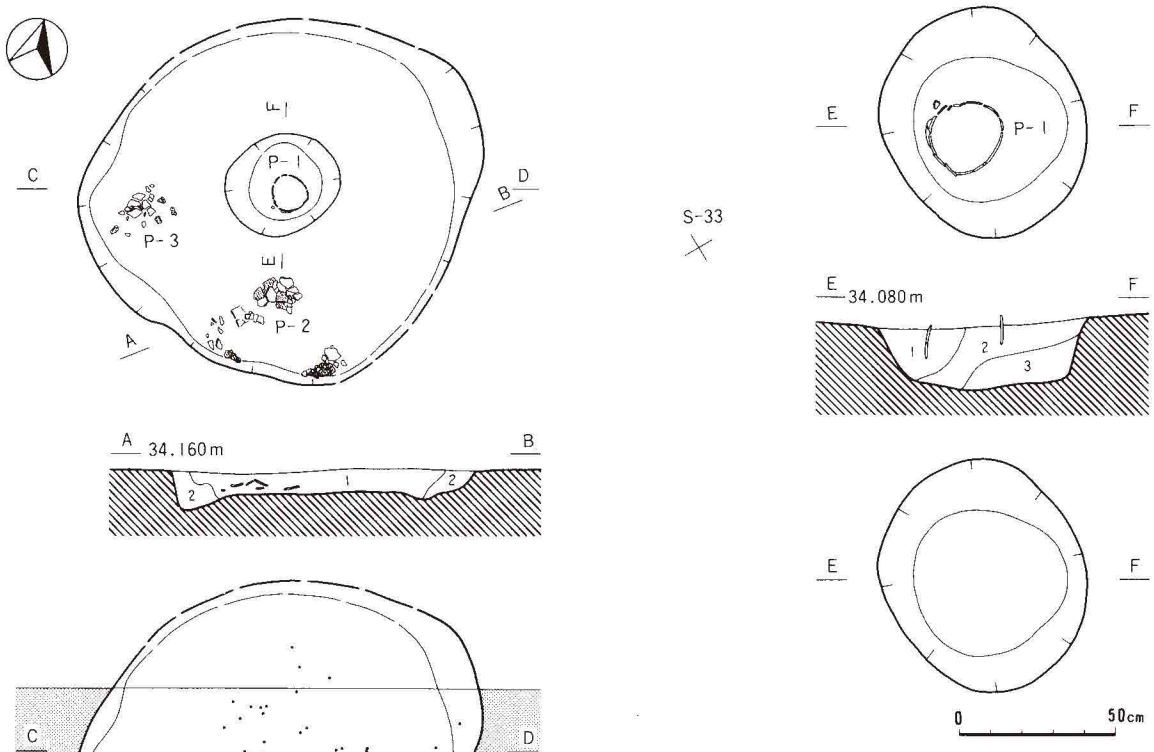
［形態・規模］北西壁と東壁は部分的に撹乱を受けてはっきりしないが、平面形は確認面、床面ともかなり不整な円形ないし楕円形となっている。大きさ（現存値）は確認面で長径2.62m、短径2.37m、床面で長径2.31m、短径2.24mである。遺構は基本土層の第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を直接床面としている。貼床等の痕跡は認められない。確認面からの壁高は26～5cmで、比較的遺存状態の良い南西側の壁は、やや急傾斜で掘り込まれている。床面の中央部には緩い凹凸があり、全体として北東に傾斜している。壁寄りで少し凹む部分もみられたが、壁溝等は確認されなかった。床面積は約3.82㎡である。

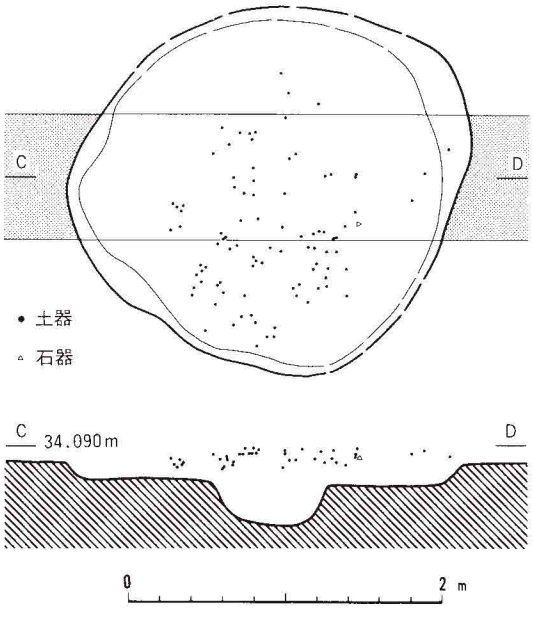
［柱穴等］柱穴ないし小ピット等は検出されなかった。

［付属施設］床面のほぼ中央に、土器埋設炉が設けられている。炉跡は、長径約75cm、短径約65cmの不整円形で床面から20cmほど掘り込み、口頸部と底部を欠いた深鉢形土器を正立状態で埋設したものである。埋設された土器及び掘り込み内部の堆積土には焼土は含まれていなかったが、炭化物は少し混じっていた。

［堆積土］暗褐色土を主体とし、壁寄りには明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）がやや多く混入している。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるものと考えられ、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

［出土遺物］炉跡から、埋設されたⅢ－１～２類の深鉢形土器胴部が１個体（Ｐ－１）出土した。覆土からは、まとまった破片２個体分（Ｐ－２・３）を含む、Ⅲ－２類（円筒上層ｄ式・円筒上層ｅ式）及びⅢ－１～２類土器が307片（約5,480ｇ）、鉄石英のⅡ－６類石器（Ｒフレイク）が１点、安山岩のⅢ－２類石器（石冠）が１点出土した。





第２号住居跡土層注記（住居跡）

1	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。炭化物を微量に含む。
2	層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘土質　灰黄褐色粘土主体。明黄褐色軽石を含む。

第２号住居跡炉土層注記（炉）

1	層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質　明黄褐色軽石を少量含む。
2	層	褐色土	10YR4/4	シルト質　明黄褐色軽石、炭化物を微量に含む。
3	層	褐色土	10YR4/4	シルト質　明黄褐色軽石を多量に含む。

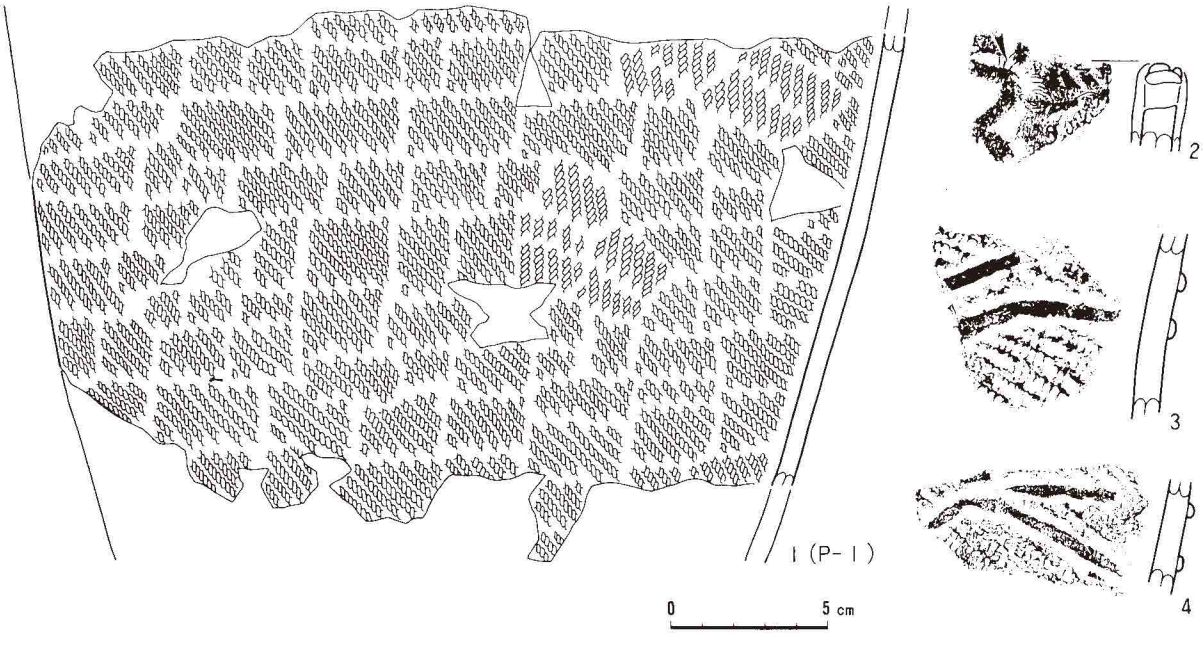


図109　第２号住居跡・出土土器(1)

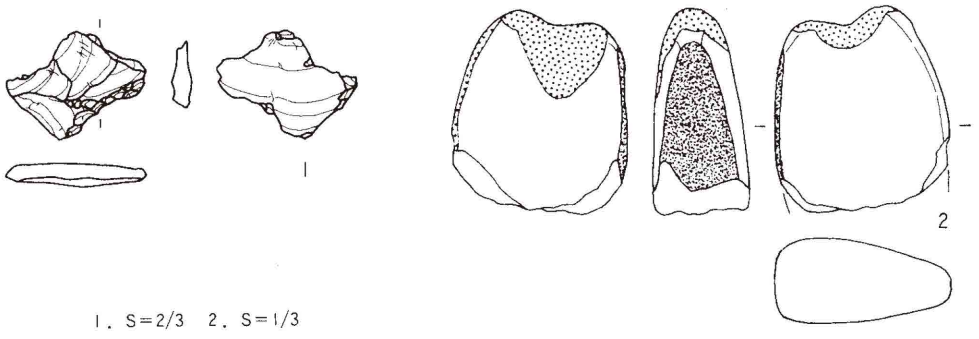
図110　第2号住居跡出土土器(2)

表53　第２号住居跡出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
109－1	Ⅲ－1～2	炉埋設	深鉢・胴部	縄文(RL)横位、一部斜位	復元土器
109－2	Ⅲ－2・円筒上層d	フク土	深鉢・口縁部	突起(孔付)・隆線・短沈線・縄文(RL？)	
109－3	Ⅲ－2・円筒上層d	フク土	深鉢・胴部	隆線・縄文(RL)横位	
109－4	Ⅲ－2・円筒上層d	フク土	深鉢・胴部	隆線・縄文(RL)横位	
109－5	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・胴～底部	縄文(RL)横位、一部縦、斜位・底面に編物状の圧痕	復元土器
110－6	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・口縁部	口端に短沈線・平行沈線・縄文(RL)斜位	
110－7	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・口縁部	波状口縁・口端に短沈線・沈線・縄文(RL)横位	
110－8	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・口縁部	口端に縄文(RL？)・平行沈線・縄文(RL)横位	
110－9	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・口縁部	口端に縄文？・平行沈線・縄文(RL)横位	補修孔
110－10	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・胴部	平行沈線・縄文(RL)横位	
110－11	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・胴部	平行沈線・縄文(RL)横位	
110－12	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・胴部	平行沈線・縄文(RL)横位	
110－13	Ⅲ－1～2	フク土	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
110－14	Ⅲ	フク土	深鉢・胴部	曲沈線・縄文(RL)横位	
110－15	Ⅲ－2・円筒上層e	フク土	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)横位、斜位	

表54　第２号住居跡出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
111－1	Ⅱ－6・Rフレイク	フク土	2.2×2.8×0.4	2.1	鉄石英	
111－2	Ⅲ－2・石冠	フク土	(8.1)×6.9×3.8	(324.8)	安山岩	すり面・敲打痕・欠損品



1．S＝2/3　2．S＝1/3

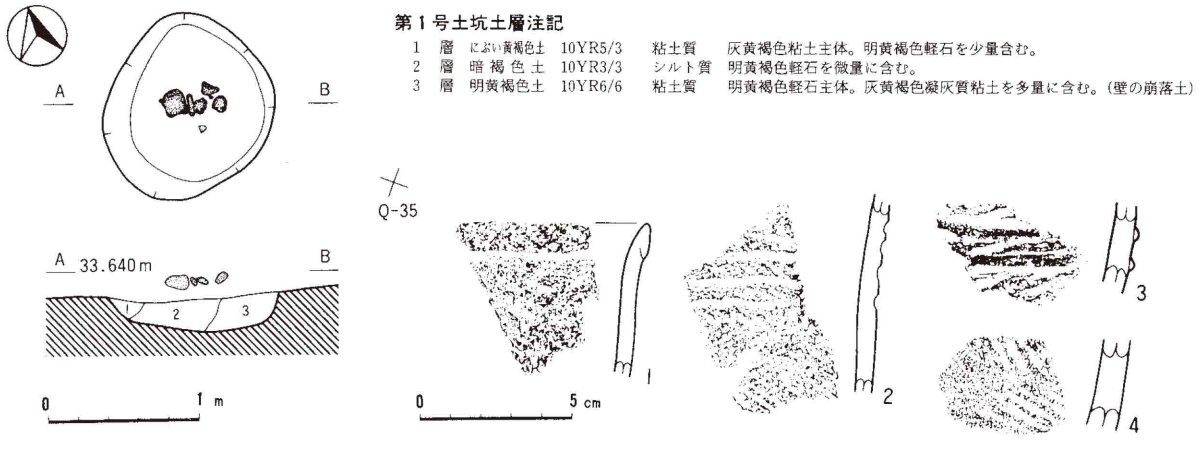
図111　第２号住居跡出土石器

2　土坑

第１号土坑（図112・113、表55・56）

［位置・確認］Ｐ・Ｑ－35グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整形）として確認した。確認面の上部には、長径15～5cmほどの礫が数個集まっていた。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.22m、短径1.10m、底面で長径1.03m、短径0.90mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第



第１号土坑土層注記

1　層　にぶい黄褐色土　10YR5/3　粘土質　灰黄褐色粘土主体。明黄褐色軽石を少量含む。
2　層　暗褐色土　10YR3/3　シルト質　明黄褐色軽石を微量に含む。
3　層　明黄褐色土　10YR6/6　粘土質　明黄褐色軽石主体。灰黄褐色凝灰質粘土を多量に含む。（壁の崩落土）

図112　第１号土坑・出土土器

Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は21～7cmである。西側では壁面の崩れが目立ち、壁の傾斜が緩くなった部分もある。底面は、中央部が少し凹んだ状態になっている。

［堆積土］暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）が相当量混入している。地山の土を多く含む層（１・３層）は、遺構の東側から流入した状態で堆積しており、人為的に埋めたように思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－２類土器（円筒上層ｄ式・円筒上層ｅ式）などが５片（約60ｇ）、凝灰岩のⅢ－２類石器（石冠）が１点出土した。また遺構確認面の上部では、大小５個の礫がまとまって検出されている。

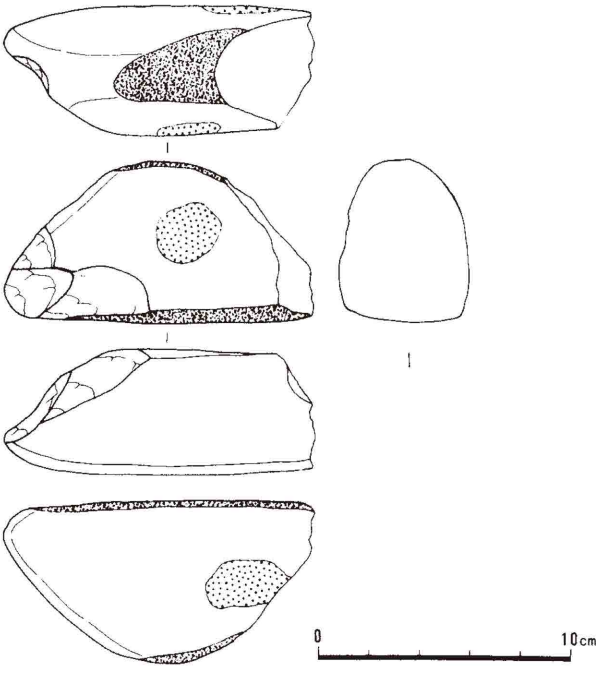


図113　第１号土坑出土石器

表55　第１号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
112－１	Ⅲ－２～Ⅳ－１	フク土	深鉢・口縁部	縄文（RL）横位	折返し状口縁
112－２	Ⅲ－２・円筒上層e	フク土	深鉢・胴部	平行沈線・縄文（RL）横位	
112－３	Ⅲ－２・円筒上層d	フク土	深鉢・胴部	隆線・縄文（RL？）	
112－４	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	縄文（RL）横位	

表56　第１号土坑出土石器計測表

図版番号	分　類	出土層	大きさ（cm）	重さ（g）	石　質	備　考
113－１	Ⅲ－２・石冠	フク土	(12.3)×6.9×5.0	(472.6)	凝灰岩	すり面・剥離痕・敲打痕・欠損品

第２号土坑（図114、表57）

［位置・確認］Ｐ－33・34グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.26m、短径1.24m、底面で長径1.15m、短径1.13mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ層を底面としそいる。確認面からの壁高は20～13cmで、部分的に壁面の崩れがみられ、壁の傾斜が緩くなっている。底面には大きな凹凸があり、全体として北西に傾斜している。

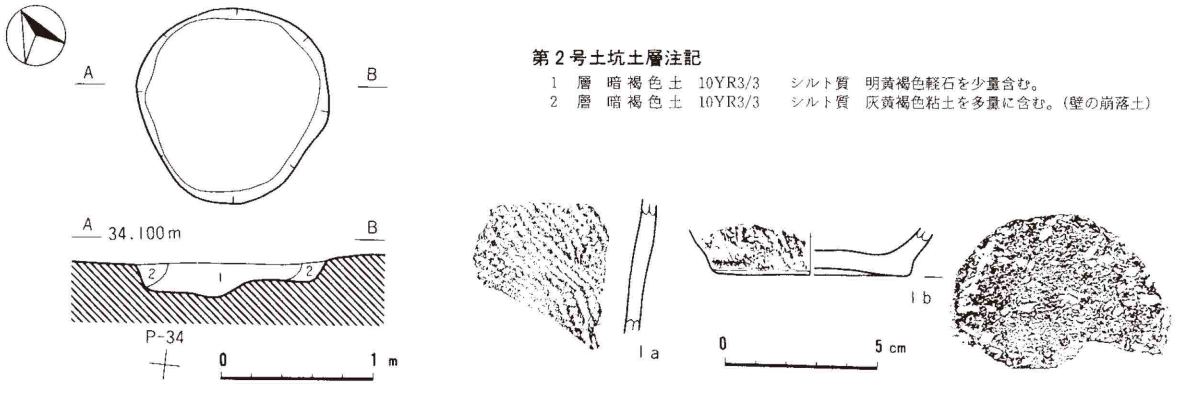


図114　第２号土坑・出土土器

［堆積土］暗褐色土を主体とし、壁寄りに（水の影響により明黄褐色軽石が変化した）灰黄褐色凝灰質粘土（第Ⅴ層）が多く混入している。灰黄褐色凝灰質粘土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示すと思われる。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－１～２類土器が４片（約70ｇ）出土した。

表57　第２号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
114－1	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴～底部	縄文（RL）横位・底面に編物状の圧痕	

第３号土坑（図115、表58）

［位置・確認］Ｑ・Ｒ－32グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.88m、短径1.86m、底面で長径1.34m、短径1.30mである。遺構は第Ⅴ層を掘り込んで作られ、同層を底面

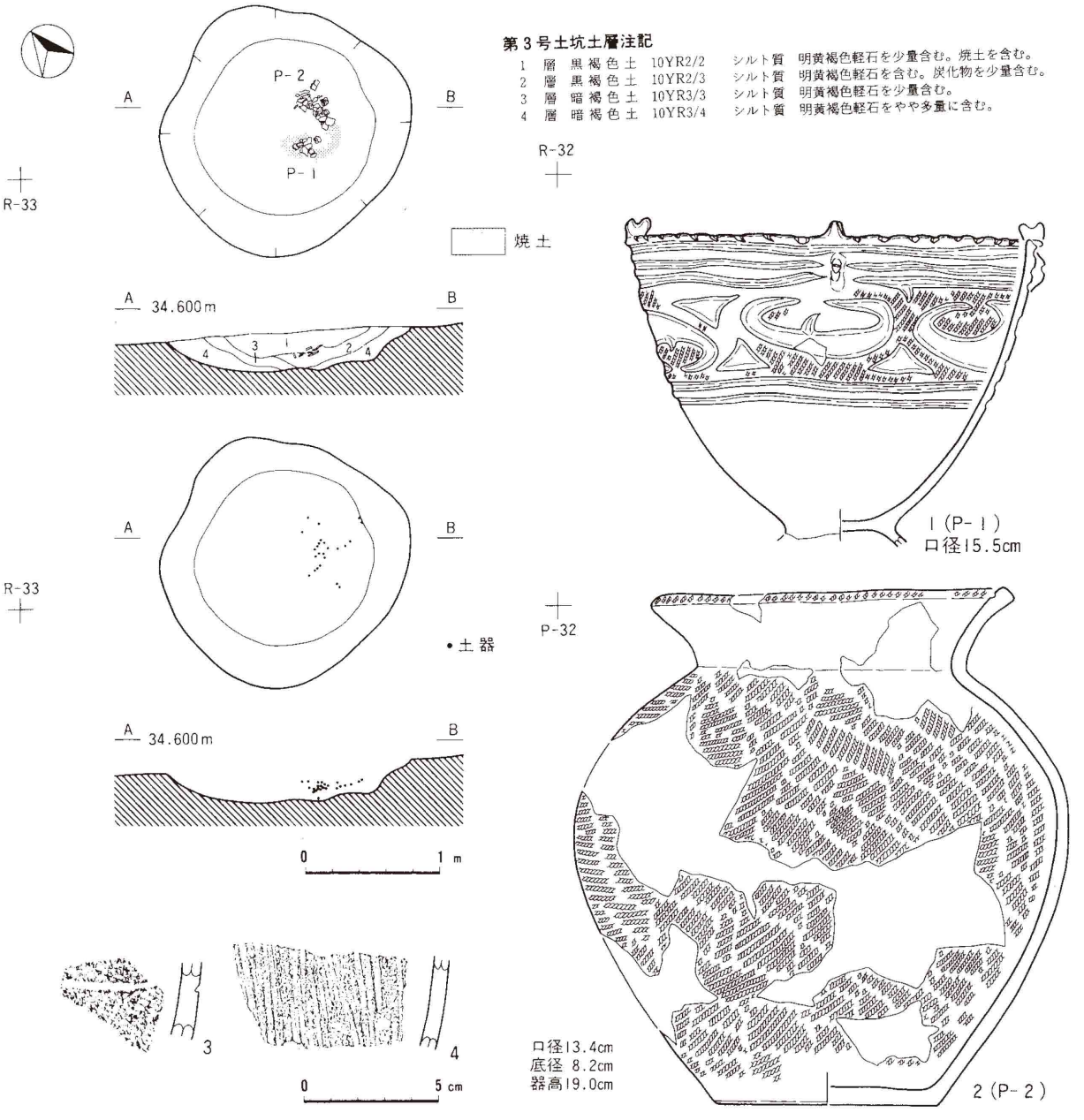


図115　第３号土坑・出土土器

としている。確認面からの壁高は26～18cmで、全体的に壁の傾斜がかなり緩くなっている。底面には凹凸が著しく、全体として少し西に傾斜している。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りから下部に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）がやや多く混入している。堆積土は自然堆積した状態を示すと思われるが、中央部には焼土や炭化物を含む層（１・２）がみられる。

［出土遺物］覆土から、復元土器２個体分を含むⅤ－２類土器（大洞Ｃ１式ほか）などが112片（約1,140ｇ）が出土した。

表58　第３号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
115－1	Ⅴ－２・大洞C1	フク土	台付鉢・口縁～胴部	口端、頸部にB突起・平行沈線・x字状磨消縄文(LR)	復元土器
115－2	Ⅴ－２・大洞C1？	フク土	壺・略完形	無文帯・縄文(LR)横位、斜位・沈線(内面)・朱塗り痕	復元土器
115－3	Ⅳ～Ⅴ	フク土	鉢類・胴部	沈線・縄文	
115－4	Ⅴ－３	フク土	深鉢・胴部	条線文(縦位)	

第４号土坑（図116、表59）

［位置・確認］Ｑ・Ｒ－34・35グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込み（不整楕円

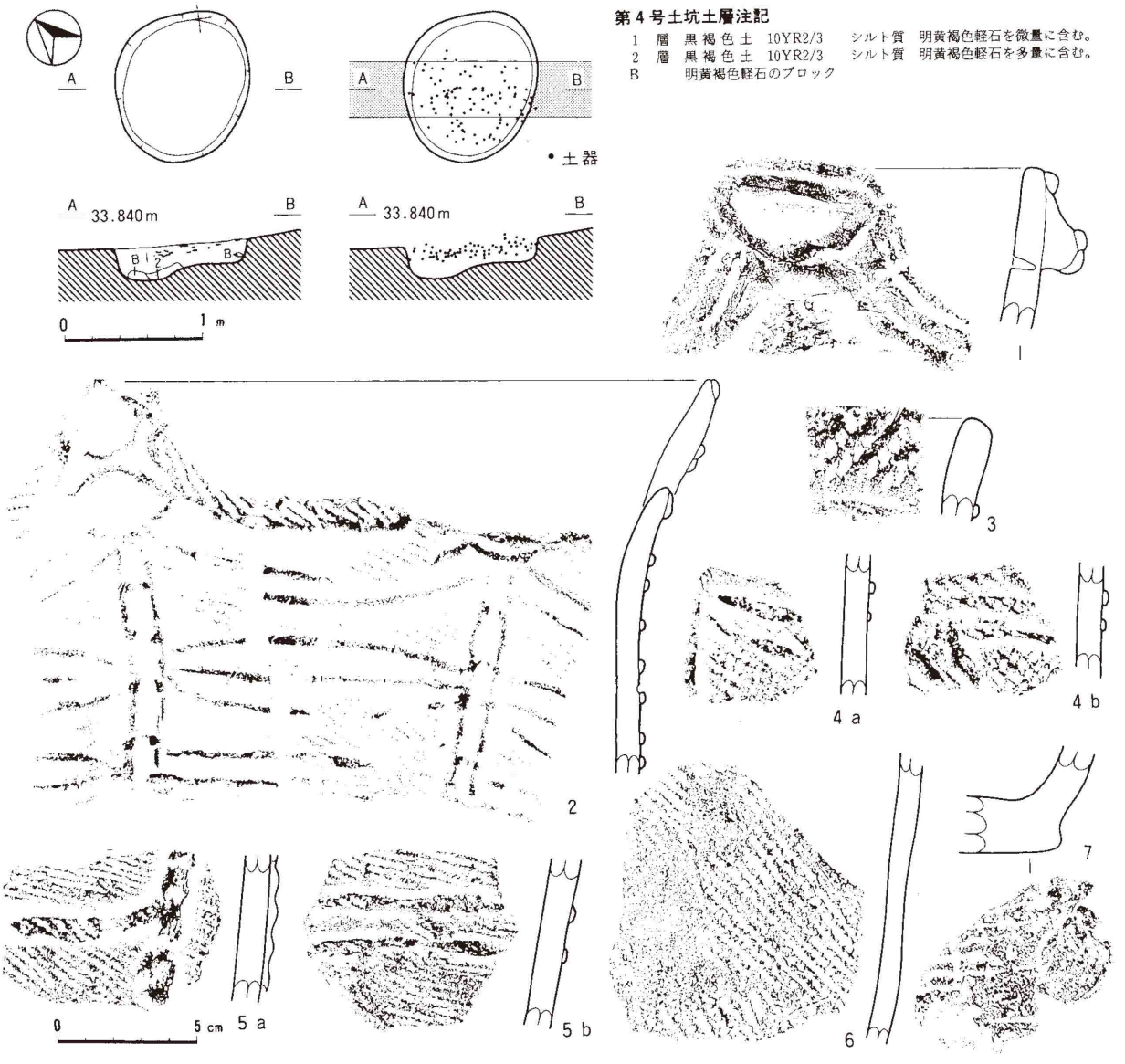


図116　第４号土坑・出土土器

形）として確認した。

［形態・規模］平面形は確認面、底面ともやや不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径1.12m、短径0.96m、底面で長径0.99m、短径0.84mである。遺構は第Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで作られ、第Ⅴ・Ⅵ層を底面としている。確認面からの壁高は21～10cmで、全体的に壁は急傾斜で掘り込まれている。底面は、北西側が大きく凹んでいる。

［堆積土］黒褐色土を主体とし、北西側下部の凹んだ箇所に明黄褐色軽石（第Ⅴ層）とそのブロックが多く混入している。

［出土遺物］覆土から、Ⅲ－２類土器（円筒上層ｄ式）及びⅢ－１～２類土器が114片（約3,200ｇ）出土した。

表59　第４号土坑出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
116－１	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・突起部	隆線・口端部に縄側面圧痕(RL)・縄文	折返し状口縁・盲孔
116－２	Ⅲ－２・円筒上層d	フク土	深鉢・口縁部	扇状突起・隆線・口端、頸部に縄文(RL)横位	
116－３	Ⅲ－２・円筒上層d	フク土	深鉢・口縁部	隆線(縄文)・縄文(LRL)横位	
116－４	Ⅲ－２・円筒上層d	フク土	深鉢・胴部	隆線(縄文)・縄文(RL)横位	
116－５	Ⅲ－２・円筒上層d	フク土	深鉢・胴部	隆線(指頭状圧痕、縄文)・縄文(RL)横位	
116－６	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	
116－７	Ⅲ－１～２	フク土	深鉢・底部	底面に編物状の圧痕	

３　焼土

第１号焼土（図117、表60）

［位置・確認］Ｐ－33グリッドに位置する。第Ⅳ層上部で検出した。

［形態・規模］不整形の焼土が、長径1.32m、短径0.75mほどの範囲に拡がっている。第Ⅳ層上部に最厚約20cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった（３層は第Ⅳ層に上部の焼土等が混入したもの）。焼土は上下２層（１・２層）に分かれ、下層には炭化物を少し含んでいる。

［出土遺物］焼土の上面から、Ⅳ群かとみられる深鉢形土器が１片（約20ｇ）出土した。

表60　第１号焼土出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
117－１	Ⅳ？	上面	深鉢・胴部	縄文？	

第２号焼土（図117、表61）

［位置・確認］Ｐ－32グリッドに位置する。第Ⅳ層上部で検出した。

［形態・規模］不整円形の焼土が、長径0.65m、短径0.60mほどの範囲に拡がっている。第Ⅳ層上部に最厚約10cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった。焼土中には、炭化物が少し含まれている。

［出土遺物］焼土の上面から、Ⅲ－１～２類土器が２片（約50ｇ）出土した。

表61　第２号焼土出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文様等	備考
117－２	Ⅲ－１～２	上面	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	
117－３	Ⅲ－１～２	上面	深鉢・胴部	縄文(RL)横位	

第３号焼土（図117、表62）

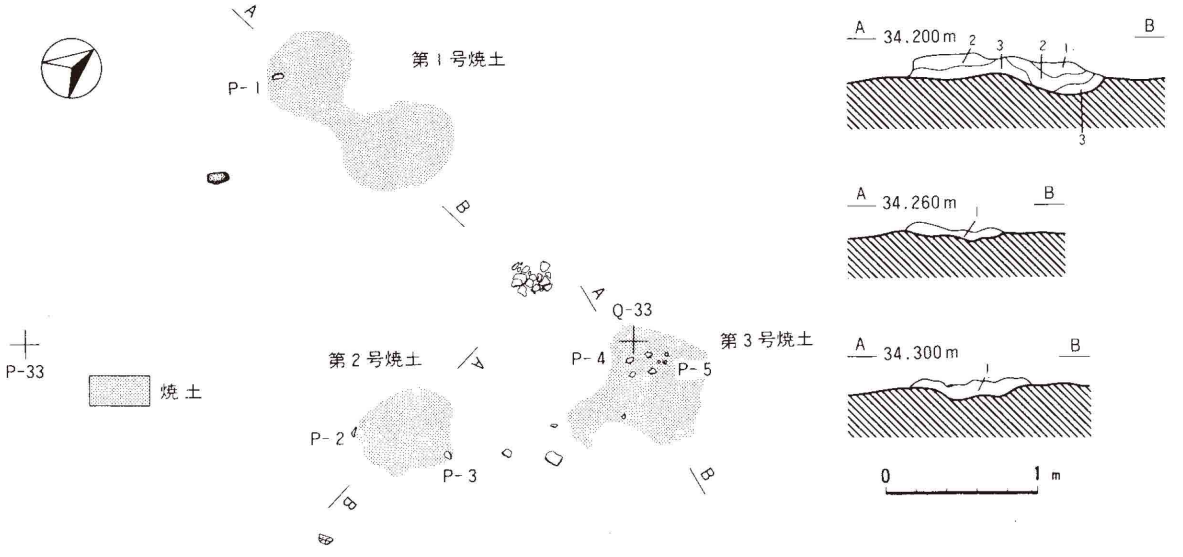
［位置・確認］Ｐ・Ｑ－32・33グリッドに位置する。第Ⅳ層上部で検出した。

［形態・規模］不整形の焼土が、長径1.08m、短径0.86mほどの範囲に拡がっている。第Ⅳ層上部に最厚約12cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった。焼土中には、炭化物が少し含まれている。

［出土遺物］焼土の上面及び周辺から、Ⅲ－２～Ⅳ－１類土器などが11片（約140ｇ）出土した。

表62　第３号焼土出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
117－４	Ⅲ－２～Ⅳ－１	上面	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	折返し状口縁
117－５	Ⅲ－２～Ⅳ－１	上面	深鉢・口縁部	無文	折返し状口縁



第１号焼土土層注記

1　層　にぶい赤褐色土　5YR5/3　シルト質　焼土層。暗褐色土を含む。
2　層　赤褐色土　5YR4/8　シルト質　焼土層。暗褐色土、炭化物を少量含む。
3　層　暗赤褐色土　5YR3/2　シルト質　暗褐色土主体。焼土を含む。炭化物を少量含む。

第２号焼土土層注記

1　層　赤褐色土　5YR4/8　シルト質　焼土層。暗褐色土、炭化物を少量含む。

第３号焼土土層注記

1　層　赤褐色土　5YR4/8　シルト質　焼土層。暗褐色土、炭化物を少量含む。

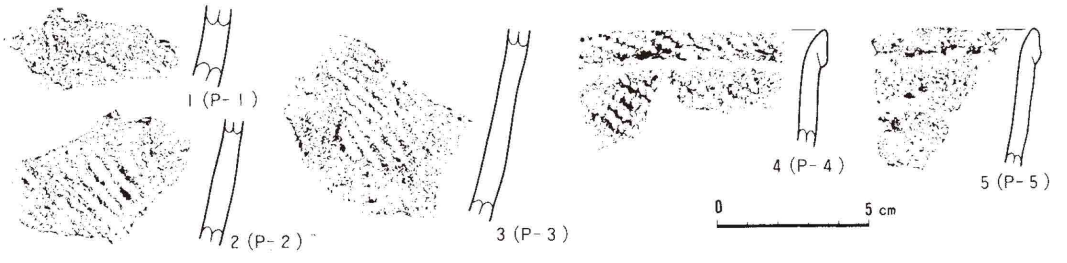


図117　第１～３号焼土・出土土器

第４号焼土（図118、表63）

［位置・確認］M－31グリッドに位置する。第Ⅳ層上部で検出した。

［形態・規模］不整形の薄い焼土が、長径0.64m、短径0.52mほどの範囲に拡がっている。第Ⅳ層上部に最厚約３cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった（３層は第Ⅳ層に上部の炭化物が混入したもの）。焼土の下部から周囲には、炭化物を少し含む暗褐色土が拡がっていた。

［出土遺物］焼土の上面から、Ⅳ－３類（十腰内Ⅲ式）の復元土器１個体を含めて、Ⅲ－３～Ⅳ－１類土器、Ⅳ－３類土器などが30片（約520ｇ）出土した。復元土器は略完形の広口壺で、底部近くに補修痕と思われるアスファルト状の付着物（スクリーントーンの部分）がみられる。（工藤・中村）

表63　第４号焼土出土土器観察表

図版番号	分　類	出土層	器形等	文　様　等	備　考
118－１	Ⅲ－３～Ⅳ－１	上面	深鉢・胴部	縄文(LR)縦位	
118－２	Ⅳ－３・十腰内Ⅲ	上面	広口壺・略完形	連続刻目文・磨消縄文（０段多条RL－異方向）	アスファルト状補修痕・復元土器

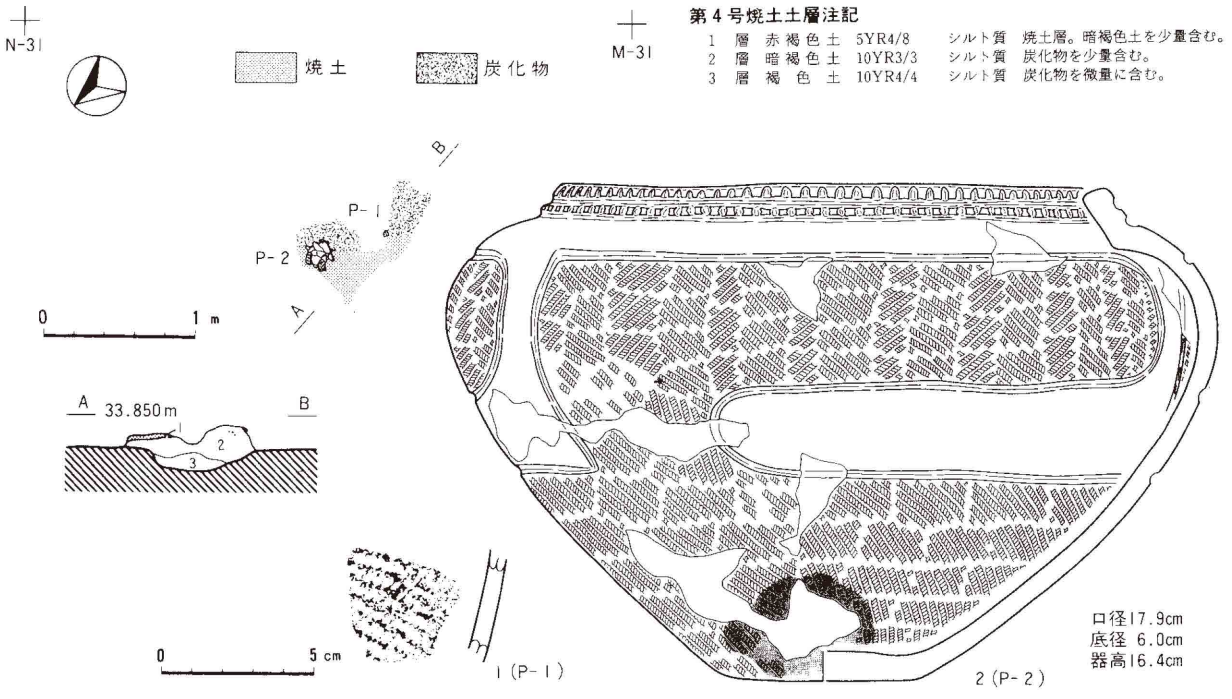


図118　第4号焼土・出土土器

第3節　出土遺跡

遺構外から、縄文土器、土製品、石器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、銭貨などが出土した。

1　縄文時代の遺物

遺構外から、縄文土器、土製品、石器などが、約30ℓの段ボールで29箱分出土した。出土遺物の大半は縄文土器と石器であるが、調査区域の中央から東側は、隈無（1）遺跡と同様リンゴ畑になっていたので、表土（第Ⅰ層）から概ね散在的に出土した。しかしそれほど削平されていない、南側と北西側の沢に面した部分では出土量が多く、第Ⅲ～Ⅳ層から出土したものもかなりある。特に南側の沢に下る斜面では、第Ⅳ層以下の湧水層まで遺物が出土し、縄文土器の全出土量の約70％（重量比）が集中している。この区域から出土した土器の大半は晩期末のもので、この時期の小規模な「捨て場」と言えるような出土状態である。

（1）縄文土器（図119～131、表64）

Ⅰ～Ⅴ群土器（早期中頃から晩期末まで）が、復元土器4個体分を含めて約28.700片（約210kg）出土した。1片の平均は約7ｇで、隈無（1）遺跡よりさらに細片化されている。出土量が特に多いのは、南側の「捨て場」から集中的に出土したⅤ-3類土器であるが、湧水等の影響による摩耗が著しく、ほとんど接合や復元ができなかった。この他では、Ⅲ-2類土器が比較的多く出土した。

Ⅰ-1類　貝殻文系の土器（1）

横位の貝殻条痕文が付けられた、深鉢形土器の胴下半部片が１片出土した。焼成の良い土器である。

Ⅱ-1類　円筒下層ａ・ｂ式（２～26）

前期中頃の円筒下層ａ式ほかの土器が出土した。口頸部文様帯をもたない類や胴～底部片が多いの

で、必ずしも型式ははっきりしないが、概ね円筒下層ａ式に含まれると思われる。

Ⅱ-2類　円筒下層ｃ・ｄ式（27～32）

前期後半の円筒下層ｄ1式～ｄ2式土器が少量出土した。胎土には、植物性繊維をほとんど含まない。

Ⅲ-1類　円筒上層ａ～ｃ式（33）

中期前半の円筒上層ｃ式に含まれる土器が、ごく少量（おそらく1個体分）出土した。

Ⅲ-2類　円筒上層ｄ・ｅ式（34～99・156～158・172～176）

中期中頃の円筒上層ｄ・ｅ式に含まれる土器が、比較的多く出土した。突起や刻目以外に口頸部文様帯をもたない類など、型式のはっきりしない土器もかなりあるが、量的には円筒上層ｅ式の方が多いように思われる。円筒上層ｄ式の隆線には、縄の側面圧痕や刻目を加えることがある。円筒上層ｅ式の沈線には、断面が丸みをもつ類とやや鋭角的な類がある。地文の縄文には、横位の斜行縄文、結束第1種羽状縄文のほか、横位の結節回転文が少数みられる。なお、156～158・172～176の縄文施文土器や底部片は、Ⅲ-1類がごく少量しか出土していないので、Ⅲ-2類に含めた。中央がやや凹んだ底面の、周縁部に付けられた編物状の圧痕は、この時期の特徴となるようである。

Ⅲ-3類　大木系の土器（108～133）

中期後半の榎林式、大木10式併行などの土器が出土した。109は榎林式に含まれ、108も同様と思われるがはっきりしない。110～133は大木10式併行の土器である。113の隆線は、ヒレ状の貼付けになるらしい。沈線はやや粗雑に加えられたものが多く、途中で途切れることもある。地文は縦位の斜行く縄文がほとんどで、単節のほか無節（L）も使われている。

なお、折返し状口縁の土器（100～107）、幅の広い沈線が施文された土器（145～152）、縄文や単軸絡条体第1類を縦位に施文した土器（159～171）、底面に網代痕が付いた土器（177～182）などはⅢ-3～Ⅳ-1類辺りのものとみられる。

Ⅳ-1類　後期初頭の土器（134～144）

後期初頭に含まれる土器が少数出土した。ただし、134～138の口縁部に縄の側面圧痕を施文した土器は、中期末に含まれることも考えられる。

Ⅳ-2類　十腰内Ⅰ式（183～194）

後期前半の十腰内Ⅰ式ほかの土器が少量出土した。183～189は十腰内Ⅰ式、190～194の無文やミニチュアなどの土器もこれに伴う類とみられる。

Ⅳ-3類　十腰内Ⅱ式以降（195～202）

後期中頃の十腰内Ⅲ式ほかの土器が少量出土した。0段多条の単節による異方向施文等を特徴とした、198～202の土器は十腰内Ⅲ式、195から197もこの時期のものとみられる。

Ⅴ-1類　大洞Ｂ・BC式（203・204）

晩期前半の大洞Ｂ式の鉢形土器が、ごく少量出土した。入組状の三叉文が施文されている。

Ⅴ-2類　大洞C1・C2式（205～211）

晩期中頃の大洞C1式ほかの土器が少量出土した。205～207は大洞C1式、208～211もこれに近い時期のものとみられる。なお、Ⅴ-2～3類とした土器の中で、213～215は大洞C2式～Ａ式位のものと思われる。また212の復元土器は、Ⅴ-3類に分類した他の鉢形土器と口縁部の形態が少し異なるものの、Ⅴ-3類に含まれることも考えられる。

Ⅴ-3類　大洞Ａ・Ａ´式（216～258・283）

晩期後半の大洞Ａ・Ａ´式土器が、南側の「捨て場」から多量に出土した。土器の焼き締まりは概して良い方であるが、器表面の摩耗・剥離が激しく、特に細かい砂粒を胎土に多く含むものは、文様が分からないほどになっている。比較的遺存状態の良い土器では、内外面とも平滑にナデられている。型式的には216・223・226～236が大洞Ａ式、218・237が大洞Ａ´式に含まれ、大洞Ａ式主体の包含層であるが、出土状態は渾然としていた。器形は216～219が浅鉢形、220～238が台付を含む鉢形、237が壷形、238～258が深鉢形で、浅鉢形と237の壷形が精製土器、鉢形が半精製土器、深鉢形が粗製土器に相当するとみなされる。口縁部ないし口頸部片からみた概数は、壷形土器が２～３個体、浅鉢形土器が数個体、鉢形土器が20数個体、深鉢形土器が数10個体以上とみられる。精製の浅鉢形土器は、無文面上に文様を施文しているが、半精製の鉢形土器には、大抵口頸部文様帯の地文として縄文が施文される。縄文は横位の斜行縄文（ＬＲ）が大半である。精製土器と半精製土器の一部には、幅の広い凹線というより、幅が狭くむしろ沈線と言えるようなものがある。精製及び半精製土器の口端上面～内面側には、必ず沈線ないし凹線を施文しているが、粗製土器はそれを欠き、口頸部外面の平行凹線も２～３条に限定される。粗製土器の地文には、横位の斜行縄文（ＬＲ）ないし縦位の条線が施文されている。なお259～276・288～295の粗製深鉢形土器も、この時期に含まれるものが多いと思われる。

表64　遺構外出土縄文土器観察表

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文　様　等	備　考
119－1	Ⅰ－1	Ｊ－28・Ⅰ	深鉢・胴部	貝殻条痕文・横位	
119－2	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｌ－29・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄文(前々段反撚RLL？)横位	胎土に繊維含
119－3	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｐ－21・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RLR)横位	胎土に繊維含
119－4	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｋ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄文(RLR)横位	胎土に繊維含
119－5	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｑ－23・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RLR)横位	胎土に繊維含
119－6	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｑ－25・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端部に縄文(RLR)・縄文(RLR)横位	胎土に繊維含
119－7	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｐ－21・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RLR)横位？	胎土に繊維含
119－8	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｏ－20・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に縄文・縄側面圧痕(RLR)・縄文(RLR)横位	胎土に繊維含
119－9	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｑ－23・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(RLR)・縄文(RLR)横位・内面に条痕	胎土に繊維含
119－10	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｋ－29・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(RLR)・縄文(RLR)横位、斜位	胎土に繊維含
119－11	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｑ－28・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(RLR)・縄文(RLR)横位	胎土に繊維含
119－12	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｑ－25・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(RLR)・縄文(RLR)横位	胎土に繊維含
119－13	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｑ－28・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に縄文・隆帯(縄文)・縄文(LRL)横位	胎土に繊維含
119－14	Ⅱ－1・円筒下層ａ	K-30・Ⅰ～Ⅲ	深鉢・口縁部	隆帯・縄文(RL？)横位	胎土に繊維含
119－15	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｋ－30・Ⅲ	深鉢・口縁部	隆帯・縄文(RL)横位	胎土に繊維含
119－16	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｌ－29・Ⅰ	深鉢・胴部	縄文(RLR)横位、斜位・補修孔	胎土に繊維含
120－17	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｐ－26・Ⅲ	深鉢・胴部	結節回転文(R)横位	胎土に繊維含
120－18	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｏ－26・Ⅰ	深鉢・胴部	結節回転文(R)横位	胎土に繊維含
120－19	Ⅱ－1・円筒下層ａ	K-30・Ⅰ～Ⅲ	深鉢・底部	縄文(RL？)横位	胎土に繊維含
120－20	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｑ－20・Ⅰ	深鉢・底部	縄文(RLR)横位・底面に縄文(RLR？)	胎土に繊維含
120－21	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｌ－29・Ⅰ	深鉢・底辺部	縄文(RLR)横位・底面に縄文？	胎土に繊維含
120－22	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｏ－29・Ⅰ	深鉢・底部	底面に単軸絡条体第１類(L)	胎土に繊維含
120－23	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｌ－29・Ⅰ	深鉢・底部	底面に縄文	胎土に繊維含
120－24	Ⅱ－1・円筒下層ａ	K-30・Ⅰ～Ⅲ	深鉢・底部	底面に条痕	胎土に繊維含
120－25	Ⅱ－1・円筒下層ａ	K-30・Ⅰ～Ⅲ	深鉢・底部	底面に細沈線(交差)	胎土に繊維含
120－26	Ⅱ－1・円筒下層ａ	Ｌ－29・Ⅲ	深鉢・底部	底面に沈線(交差)	胎土に繊維含
120－27	Ⅱ－2・円筒下層ｄ	Ⅰ－36・Ⅰ	深鉢・胴部	縄側面圧痕(L)・単軸絡条体第１類(R)斜位	
120－28	Ⅱ－2・円筒下層ｄ	Ｐ－33・Ⅳ	深鉢・口縁部	口端に刺突・縄側面圧痕(L)、刺突・多軸絡条体	
120－29	Ⅱ－2・円筒下層ｄ	Ｊ－33・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・縄側面圧痕(L)	
120－30	Ⅱ－2・円筒下層ｄ	Ｊ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端、口頸部に単軸絡条体圧痕(R)	
120－31	Ⅱ－2・円筒下層ｄ	Ｊ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端、口頸部に単軸絡条体圧痕(R)・刺突	
120－32	Ⅱ－2・円筒下層ｄ2	Ｋ－32・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	波状口縁・円形突起・口端、頸部に縄側面圧痕(R)、刺突・多軸絡条体	
121－33	Ⅲ－1・円筒上層ｃ	Ｋ－32・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	扇状突起(孔付)・隆線(縄側面圧痕R)・刺突・結束第１種羽状縄文	
121－34	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｌ－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端、頸部に隆線(刻目)	
121－35	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｋ－32・Ⅲ	深鉢・胴部	隆線(縄側面圧痕L)・結束第１種羽状縄文(LR＋RL)	
121－36	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｎ－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	隆線(刻目？)・縄文(LR)横位	
121－37	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ⅰ－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端、頸部に隆線・縄文(RL)横位	折返し状口縁
121－38	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｐ－36・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起(肥厚)・口端に縄側面圧痕(RL)・隆線(縄文)・縄文(RL)横位	
121－39	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｌ－30・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	二叉突起・把手状貼付・口端に縄側面圧痕(RL)・隆線・縄文(RL)横位	
121－40	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｊ－27・Ⅰ	深鉢・突起部	隆線・円形貼付・縄文？	
121－41	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｊ－27・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	口端に縄側面圧痕(RL)・隆線・結束第１種羽状縄文？	折返し状口縁
121－42	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｌ－29・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に隆線、縄側面圧痕(RL)・縄文(RL)横位	折返し状口縁
121－43	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｊ－27・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	口端に縄側面圧痕(RL)・隆線・縄文(RL)横位	補修孔
122－44	Ⅲ－2・円筒上層ｄ	Ｎ－35・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	三叉突起・把手状貼付・口端、頸部に隆線・縄文(LR)横位	折返し状口縁

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文　様　等	備　考
122－45	Ⅲ－2・円筒上層d	O－26・Ⅲ	深鉢・胴部	隆線・縄文(LR)横位	
122－46	Ⅲ－2・円筒上層d	K－29・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端部に隆線・縄文(LR)横位	折返し状口縁
122－47	Ⅲ－2・円筒上層d	N－34・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端部に隆線・縄文(LR)横位	
122－48	Ⅲ－2・円筒上層d	M－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端部に隆線・縄文(RL)横位	折返し状口縁
122－49	Ⅲ－2・円筒上層d	Ⅰ－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端部に隆線、縄文・縄文	折返し状口縁
122－50	Ⅲ－2	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	扇状突起・口端に縄側面圧痕(RL)・隆線・結束第1種羽状縄文	折返し状口縁
122－51	Ⅲ－2	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	扇状突起・口端に縄側面圧痕(RL)・隆線・結束第1種羽状縄文	折返し状口縁
122－52	Ⅲ－2	N－35・Ⅰ	深鉢・突起部	口端に縄文？・隆線	
122－53	Ⅲ－2	N－35・Ⅰ	深鉢・突起部	二叉突起・隆線・内面側に盲孔	
122－54	Ⅲ－2	N－35・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	突起・口端に短沈線(刻目)・隆線・縄文(LR)横位	折返し状口縁
123－55	Ⅲ－2	L－28・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	三叉扇状突起・口端に縄側面圧痕(L、R)・縄文(LR)横位、縦位	
123－56	Ⅲ－2	表採	深鉢・突起部	二叉突起・隆線・縄文(LR)横位	
123－57	Ⅲ－2	J－31・Ⅰ	深鉢・突起部	扇状突起・隆線・縄文(LR)横位	
123－58	Ⅲ－2	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	山形突起・口端に短沈線(刻目)・隆線・縄文(RL)横位	
123－59	Ⅲ－2	M－27・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	扇状突起・口端に短沈線(刻目)・隆線・縄文(RL)横位	
123－60	Ⅲ－2	L－29・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	二叉突起・隆線・縄文(LR)横位	
123－61	Ⅲ－2	N－35・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	扇状突起・口端に縄側面圧痕(RL)・円形貼付・縄文(RL)横位	
123－62	Ⅲ－2	M－35・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	山形突起・口端に縄側面圧痕(RL)・円形貼付・縄文(RL)横位・結節回転文(R)	
123－63	Ⅲ－2	N－35・Ⅰ	深鉢・突起部	二叉突起・縄文(RL)横位、斜位	
123－64	Ⅲ－2	M－27・Ⅲ	深鉢・突起部	二叉突起・隆線・縄文(LR)横位？	
123－65	Ⅲ－2	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	山形突起・口端に縄文(RL)・隆線・縄文(RL)横位	
123－66	Ⅲ－2	L－29・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	山形突起・口端に刻目・縄文(RL)横位	
123－67	Ⅲ－2	J－31・Ⅰ	深鉢・突起部	山形突起・口端に刻目・隆線・縄文(RL)横位	
123－68	Ⅲ－2	J－32・Ⅲ	深鉢・突起部	山形突起・口端に縄文(RL)・隆線・縄文(RL)斜位	
123－69	Ⅲ－2・円筒上層e	K－31・Ⅲ	深鉢・口縁部	二叉突起・口端に刻目・隆線・平行沈線・縄文(RL)横位	
123－70	Ⅲ－2・円筒上層e	L－28・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起・平行沈線・縄文(LR)横位	
123－71	Ⅲ－2・円筒上層e	O－33・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起・口端に縄文(L)・沈線・縄文(L)斜位	折返し状口縁
123－72	Ⅲ－2・円筒上層e	M－34・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起・隆線・沈線文・縄文(RL)横位	
124－73	Ⅲ－2・円筒上層e	P－18・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起・口端に縄側面圧痕(L)・隆線(縄側面圧痕)・平行沈線・縄文(RL)横位	
124－74	Ⅲ－2・円筒上層e	O－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起・口端に刻目・隆線・沈線文・縄文(LR)横位	
124－75	Ⅲ－2・円筒上層e	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	山形突起・口端に刻目・隆線・沈線文・縄文(RL)横位	
124－76	Ⅲ－2・円筒上層e	K－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	山形突起・口端に短沈線・沈線文・縄文(LR)横位	
124－77	Ⅲ－2・円筒上層e	M－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・平行沈線・縄文(LR)横位	
124－78	Ⅲ－2・円筒上層e	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に縄側面圧痕(RL)・沈線文・縄文(RL)横位	
124－79	Ⅲ－2・円筒上層e	L－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・平行沈線・縄文(RL)斜位	
124－80	Ⅲ－2・円筒上層e	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に刻目・平行沈線・縄文(LR)横位	
124－81	Ⅲ－2・円筒上層e	J－31・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・隆線・平行沈線・縄文(RL)横位	
124－82	Ⅲ－2・円筒上層e	K－29・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に縄文(RL)・平行沈線・縄文(RL)横位	
124－83	Ⅲ－2・円筒上層e	N－35・Ⅰ	深鉢・口縁～胴部	口端に縄文(RL)・沈線文・縄文(RL)横位	復元土器
124－84	Ⅲ－2・円筒上層e	K－29・Ⅲ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)横位	
124－85	Ⅲ－2・円筒上層e	Q－36・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)横位	
124－86	Ⅲ－2・円筒上層e	P－29・Ⅰ	深鉢・胴部	平行沈線・縄文(RL)横位	
125－87	Ⅲ－2・円筒上層e	K－32・Ⅰ～Ⅲ	深鉢・口縁～胴部	口端に縄側面圧痕・隆線・沈線文・縄文(RL)横位、斜位	
125－88	Ⅲ－2	N－34・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に縄側面圧痕(RL)・縄文(RL)横位	折返し状口縁
125－89	Ⅲ－2	L－29・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・沈線？・縄文(RL)横位	
125－90	Ⅲ－2	M－27・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に縄側面圧痕(RL)・縄文(RL)横位	折返し状口縁
125－91	Ⅲ－2	G－28・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に縄側面圧痕(RL)・文(RL)横位	折返し状口縁
125－92	Ⅲ－2	L－29・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に縄側面圧痕(RL)・縄文(RL)横位	折返し状口縁
125－93	Ⅲ－2	L－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・縄文(RL)横位	
125－94	Ⅲ－2	N－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	突起・口端に短沈線・縄文(RL)横位	
125－95	Ⅲ－2	L－36・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・縄文(RL)横位	
125－96	Ⅲ－2	L－28・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・縄文(RL)横位	
125－97	Ⅲ－2	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に刻目・縄文(RL)横位	
125－98	Ⅲ－2	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に刻目・縄文(RL)横位	
125－99	Ⅲ－2	N－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に短沈線・縄文(RL)横位	
125－100	Ⅲ－2～Ⅳ－1	N－26・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	折返し状口縁
125－101	Ⅲ－2～Ⅳ－1	O－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に縄文(RL)・縄文(RL)横位	折返し状口縁
125－102	Ⅲ－2～Ⅳ－1	K－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	折返し状口縁
125－103	Ⅲ－2～Ⅳ－1	L－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	折返し状口縁
125－104	Ⅲ－2～Ⅳ－1	J－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に短沈線・縄文(LR)横位	折返し状口縁
125－105	Ⅲ－2～Ⅳ－1	J－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(LR)縦位	
125－106	Ⅲ－2～Ⅳ－1	J－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・縄文(RL)横位	折返し状口縁
125－107	Ⅲ－2～Ⅳ－1	L－31・Ⅰ	深鉢・口縁部	爪形状細刻目	折返し状口縁
125－108	Ⅲ－3	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端部に沈線、隆線・縄文(RL？)	
125－109	Ⅲ－3・榎林	N－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・口端部に凹線・沈線・縄文(LR)横位	口縁部肥厚
125－110	Ⅲ－3・大木10併行	M－36・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・円形貼付・刺突	
125－111	Ⅲ－3・大木10併行	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	波状口縁・円形貼付・刺突・短沈線・縄文	
125－112	Ⅲ－3・大木10併行	M－35・Ⅰ	深鉢・胴部	円形貼付・刺突・沈線・縄文(LR)縦位	
125－113	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	波状口縁・無文帯・隆線・縄文(LR)縦位	
125－114	Ⅲ－3・大木10併行	J－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・無文帯・刺突・沈線	
125－115	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－33・Ⅲ	深鉢・口縁部	波状口縁・短沈線	
125－116	Ⅲ－3・大木10併行	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	無文帯・刺突・縄文(LR)縦位	
125－117	Ⅲ－3・大木10併行	J－32・Ⅲ	深鉢・胴部	沈線・刺突(短沈線)・縄文(L)縦位	
125－118	Ⅲ－3・大木10併行	表採	深鉢・胴部	沈線・刺突(短沈線)・縄文(L)縦位	
125－119	Ⅲ－3・大木10併行	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(RL)斜位	
125－120	Ⅲ－3・大木10併行	O－33・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(RL)斜位	
125－121	Ⅲ－3・大木10併行	O－31・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・沈線・縄文(LR)縦位	
126－122	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(LR)縦位	
126－123	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(L)縦位	
126－124	Ⅲ－3・大木10併行	J－33・Ⅰ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(L)縦位	
126－125	Ⅲ－3・大木10併行	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	沈線・縄文(LR)縦位	
126－126	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に沈線・沈線・縄文(LR)縦位	
126－127	Ⅲ－3・大木10併行	M－34・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線・縄文	
126－128	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・胴部	沈線・縄文(RL)縦位	

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文様等	備考
126－129	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－33・Ⅲ	深鉢・胴部	沈線・縄文(L)縦位	
126－130	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－33・Ⅲ	深鉢・胴部	沈線・縄文(L)縦位、斜位	
126－131	Ⅲ－3・大木10併行	J－32・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線・縄文(RL)縦位	
126－132	Ⅲ－3・大木10併行	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・胴部	沈線・縄文(RL)縦位	
126－133	Ⅲ－3・大木10併行	M－34・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線・縄文(RL)縦位	
126－134	Ⅳ－1	J－33・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(RL)・縄文(RL)縦位	
126－135	Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(LR)	
126－136	Ⅳ－1	K－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(LR)・縄文(LR？)	折返し状口縁
126－137	Ⅳ－1	K－29・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(LR)・縄文(LR？)	折返し状口縁
126－138	Ⅳ－1	J－33・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄側面圧痕(LR)	
126－139	Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・胴部	隆線(指頭圧痕)・磨消縄文(RL)	
126－140	Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・胴部	隆線(指頭圧痕)・磨消縄文(LR)	
126－141	Ⅳ－1	J－33・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線(指頭圧痕)	
126－142	Ⅳ－1	M－35・Ⅲ	深鉢・胴部	沈線・縄文(RL)縦位	
126－143	Ⅳ－1	N－34～36・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・隆線・縄文(RL)縦位	
126－144	Ⅳ－1	O－26・Ⅰ	深鉢・胴部	隆線・縄文	
126－145	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・口縁部	沈線・縄文(RL)縦位	
126－146	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)縦位	
126－147	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)縦位	
126－148	Ⅲ－3～Ⅳ－1	Ⅰ－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	波状口縁・沈線文・縄文	
126－149	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・胴部	沈線文・縄文	
126－150	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－31・Ⅰ	深鉢・胴部	沈線文・縄文	
126－151	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・胴部	沈線文・縄文(RL)縦位	
126－152	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・胴部	平行沈線・単軸絡条体第1類(R)縦位	
126－153	Ⅲ	K－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
126－154	Ⅲ	L－29・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
126－155	Ⅲ	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
126－156	Ⅲ－2	N－31・Ⅰ	深鉢・口縁部	口端に刻目・無文帯・縄文(RL)横位	
126－157	Ⅲ－2	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に縄文(RL)・縄文(RL)横位	
127－158	Ⅲ－2	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	口端に縄文(RL)・縄文(RL)横位	
127－159	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	無文帯・縄文(LR)縦位	
127－160	Ⅲ－3～Ⅳ－1	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄文(LR)縦位	
127－161	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・口縁部	口端に単軸絡条体？・単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－162	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	縄文(LR)縦位	折返し状口縁
127－163	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－32・Ⅰ	深鉢・口縁部	縄文(LR)縦位	
127－164	Ⅲ－3～Ⅳ－1	M－22・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－165	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－166	Ⅲ－3～Ⅳ－1	表採	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－167	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－168	Ⅲ－3～Ⅳ－1	M－22・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－169	Ⅲ－3～Ⅳ－1	P－27・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－170	Ⅲ－3～Ⅳ－1	N－26・Ⅲ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－171	Ⅲ－3～Ⅳ－1	N－35・Ⅰ	深鉢・口縁部	単軸絡条体第1類(R)縦位	
127－172	Ⅲ－2	N－34・Ⅰ	深鉢・胴～底部	縄文(RL)横位、一部横位	復元土器
127－173	Ⅲ－2	K－32・Ⅲ	深鉢・底部	縄文(RL)横位	
127－174	Ⅲ－2	K－32・Ⅲ	深鉢・底部	縄文(RL)横位	
127－175	Ⅲ－2	O－32・Ⅰ	深鉢・底部	縄文(RL)横位・底面に編物状の圧痕	
128－176	Ⅲ－2	P－28～29・Ⅰ Q～R－27・Ⅰ	深鉢・口縁～底部	縄文(LR)横位、一部斜位・補修孔一対	復元土器
128－177	Ⅲ－3～Ⅳ－1	L－29・Ⅲ	深鉢・底部	底面に網代痕	
128－178	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・底部	底面に網代痕	
128－179	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・底部	底面に網代痕	
128－180	Ⅲ－3～Ⅳ－1	J－32・Ⅲ	深鉢・底部	底面に網代痕	
128－181	Ⅲ－3～Ⅳ－1	L－31・Ⅰ	深鉢・底部	底面に網代痕	
128－182	Ⅲ－3～Ⅳ－1	Ⅰ－32・Ⅲ	深鉢・底部	底面に笹葉状の圧痕	
128－183	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Ⅰ－29・Ⅲ	鉢類・口縁部	口端部に沈線・平行沈線	
128－184	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Ⅰ－32・Ⅲ	鉢類・口縁部	平行沈線	
128－185	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Ⅰ－32・Ⅰ	鉢類・口縁部	沈線文	
128－186	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Ⅰ－32・Ⅲ	鉢類・胴部	沈線文	
128－187	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	Ⅰ－32・Ⅲ	鉢類・胴部	沈線文	
128－188	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－29・Ⅲ	鉢類・口縁部	波状口縁・磨消縄文(RL)	
128－189	Ⅳ－2・十腰内Ⅰ	K－35・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(LR)	
128－190	Ⅳ－2	Ⅰ－32・Ⅰ	鉢類・口縁部	無文	
128－191	Ⅳ－2	L－35・Ⅰ	鉢類・口縁部	無文	内外面ミガキ
128－192	Ⅳ－2	L－35・Ⅰ	鉢類・口縁～胴部	無文	ミニチュア
128－193	Ⅳ－2	K－32・Ⅲ	鉢類・口縁～胴部	無文	
128－194	Ⅳ－2	N－26・Ⅲ	深鉢・胴部	単軸絡条体第5類(R)縦位	
128－195	Ⅳ－3？	K－32・Ⅰ	鉢類・口縁部	口端部に短沈線・無文	
128－196	Ⅳ－3	Ⅰ－32・Ⅰ	鉢類・口縁部	連続刻目(短沈線)・沈線	
128－197	Ⅳ－3	K－24・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・磨消縄文(LR)	
128－198	Ⅳ－3・十腰内Ⅲ	K－32・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(0段多条RL、異方向施文)	
128－199	Ⅳ－3・十腰内Ⅲ	L－31・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(0段多条RL)	
128－200	Ⅳ－3・十腰内Ⅲ	K－29・Ⅲ	鉢類・胴部	磨消縄文(0段多条？LR)	
128－201	Ⅳ－3・十腰内Ⅲ	J－33・Ⅰ	鉢類・胴部	磨消縄文(0段多条RL、異方向施文)	
128－202	Ⅳ－3・十腰内Ⅲ	Ⅰ－32・Ⅲ M－35・Ⅳ	鉢類・口縁～底部	非結束羽状縄文(0段多条LR、RL)	
129－203	Ⅴ－1・大洞B	Ⅰ－29・Ⅰ	鉢類・口縁部	波状口縁・入組三叉文	
129－204	Ⅴ－1・大洞B	K－24・Ⅰ	鉢類・口縁部	入組三叉文	
129－205	Ⅴ－2・大洞C_1	Ⅰ－24・Ⅲ Ⅰ－28・Ⅳ	鉢類・口縁部	連続B突起・連刻目文・縄文(LR)横位・内面に凹線	
129－206	Ⅴ－2・大洞C_1	M－29・Ⅰ	鉢類・口縁部	突起・連続刻目文・縄文(LR)横位	
129－207	Ⅴ－2・大洞C_1	Ⅰ－28・Ⅲ	鉢類・口縁部	無文帯・縄文(LR)横位	
129－208	Ⅴ－2	L－35・Ⅰ	鉢類・口縁部	口端に沈線・無文帯・縄文(LR)横位	内外面ミガキ
129－209	Ⅴ－2	Ⅰ－28・Ⅳ	鉢類・口縁部	突起？・凹線・縄文？・内面に凹線	
129－210	Ⅴ－2	H－28・Ⅲ	鉢類・口縁部	B突起・無文帯	
129－211	Ⅴ－2	Ⅰ－27・Ⅳ	壺・口縁部	無文帯・B突起	朱塗りの痕跡
129－212	Ⅴ－2～3	H－28・Ⅲ	鉢・略完形	無文帯・縄文(LR)横位・内面に沈線	復元土器

図版番号	分　類	出土区・層	器形等	文　様　等	備　考
129－213	V－2～3	I－28・IV	鉢類・口縁部	口端に縄文・無文帯・突起・沈線・内面に凹線	
129－214	V－2～3	I－29・I	鉢類・口縁部	大形突起・B突起・無文帯・工字文・内面に凹線	
129－215	V－2～3	L－36・I	鉢類・口縁部	A突起・工字文・内面に凹線	
129－216	V－3・大洞A	H－29・I	鉢類・口縁部	B状突起・平行凹線・内面に沈線	
129－217	V－3	H－29・I	鉢類・口縁部	突起・平行凹線・内面に凹線	
129－218	V－3・大洞A′	K－30・I～III	鉢類・口縁部	口端に沈線・無文帯・変形工字文	
129－219	V－3・大洞A′	I－29・I	鉢類・口縁部	変形工字文・内面に沈線	
129－220	V－3・大洞A′	I－29・I	鉢類・口縁部	変形工字文	
129－221	V－3	I－28・IV	鉢類・口縁部	口端に沈線・平行凹線・突起	
129－222	V－3	M－35・I	鉢類・口縁部	口端に沈線・平行凹線	
129－223	V－3・大洞A	J－29・I	鉢類・口縁部	口端に沈線・工字文・縄文(LR？)	
129－224	V－3	J－27・III	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文？・内面に凹線	
129－225	V－3	K－30・I～III	鉢類・口縁部	平行凹線・突起・縄文(LR)横位・内面に沈線	
129－226	V－3・大洞A	M－29・I	鉢類・口縁部	口端に凹線・工字文	
129－227	V－3・大洞A	I－27・III	鉢類・口縁部	口端に凹線・工字文・縄文？	
129－228	V－3・大洞A	I－28・III	鉢類・口縁部	口端に凹線・工字文・縄文	
129－229	V－3・大洞A	J－28・III	鉢類・口縁部	工字文・縄文(LR？)・内面に凹線	
129－230	V－3・大洞A	K－30・I～III	鉢類・口縁部	工字文・縄文(LR)横位・内面に凹線	
129－231	V－3・大洞A	K－29・III	鉢類・口縁部	複合突起・工字文・縄文(LR)横位・内面に沈線	
129－232	V－3・大洞A	I－28・III	鉢類・口縁部	口端に凹線・工字文・縄文(LR)横位	
129－233	V－3・大洞A	J－30・I	鉢類・口縁部	工字文・縄文(LR)横位・内面に沈線	
129－234	V－3・大洞A	I－27・III	鉢類・口縁部	工字文・縄文(LR)横位・内面に凹線	
129－235	V－3・大洞A	K－36・I	鉢類・口縁部	口端に沈線・工字文・縄文(LR)横位	
129－236	V－3・大洞A	H－29・I	鉢類・口縁部	口端に凹線・工字文・縄文(LR)横位	
129－237	V－3・大洞A′	I－29・III	壺・胴部	変形工字文・縄文(LR)横位	
129－238	V－3	I－28・IV	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)横位	
129－239	V－3	N－36・I	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)横位	
129－240	V－3	L－35・I	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)横位	
129－241	V－3	L－35・I	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)横位	
130－242	V－3	K－35・I	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)横位	
130－243	V－3	K－36・I	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文	
130－244	V－3	H－28・III	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文	
130－245	V－3	I－28・III	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)横位	
130－246	V－3	H－28・III	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)横位	
130－247	V－3	I－28・III	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文(LR)斜位	
130－248	V－3	L－36・I	鉢類・口縁部	平行凹線・縄文	
130－249	V－3	K－30・I～III	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－250	V－3	M－28・I	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－251	V－3	J－30・I	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－252	V－3	I－28・III	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－253	V－3	H－28・III	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	補修孔
130－254	V－3	K－35・I	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－255	V－3	I－29・I～III	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－256	V－3	K－31・III	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－257	V－3	I－28・III	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－258	V－3	I－29・III	鉢類・口縁部	平行凹線・条線文、縦位	
130－259	V	H－28・IV	壺・口縁～胴部	無文帯・縄文(LR)横位	
130－260	V	N－36・I	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
130－261	V	I－28・IV	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
130－262	V	N－36・I	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
130－263	V	N－36・I	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
130－264	V	I－28・IV	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
130－265	V	I－29・III	深鉢・口縁部	縄文(LR)斜位	
130－266	V	N－36・I	深鉢・口縁部	縄文？	
130－267	V	N－36・I	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
130－268	V	I－28・III	深鉢・口縁部	縄文(LR)横位	
130－269	V	I－29・III	深鉢・口縁部	無文	
131－270	V	N－36・I	深鉢・口縁部	縄文(RL)横位	
131－271	V	I－28・I	深鉢・口縁部	条線文、縦位	
131－272	V	J－33・I	深鉢・口縁部	条線文、縦位	
131－273	V	H－28・III	深鉢・口縁部	条線文、縦位	
131－274	V	H－28・IV	深鉢・口縁部	条線文、縦位	
131－275	V	L－35・I	深鉢・口縁部	条線文、縦位	
131－276	V	M－35・I	深鉢・口縁部	条線文？	
131－277	V	I－29・III	鉢類・底部	沈線・縄文(LR)斜位	
131－278	V	I－28・IV	鉢類・底部	沈線・縄文(LR)斜位	
131－279	V	I－27・III	鉢類・底部	沈線・縄文(LR)横位	
131－280	V	K－32・III	鉢類・底部	磨消縄文？	
131－281	V	I－29・I	鉢類・底部	沈線・縄文	
131－282	V	H－28・IV	台付鉢・底部	隆帯	
131－283	V－3	K－29・III	台付鉢・底部	平行凹線・縄文(LR)横位	
131－284	V	I－29・I	台付鉢・底部		
131－285	V	H－28・I	台付鉢・底部		
131－286	V	H－29・III	台付鉢・底部		
131－287	V	I－36・I	壺？底部	脚付	
131－288	V	K－29・I	深鉢・底部	縄文(RL)横位	
131－289	V	表採	深鉢・底部	縄文	
131－290	V	K－36・I	深鉢・底部	縄文(LR)横位	
131－291	V	H－29・I	深鉢・底部	縄文(LR)横位	
131－292	V	M－35・I	深鉢・底部	縄文(RL)横位	
131－293	V	H－29・I	深鉢・底部	縄文(LR)横位	
131－294	V	N－31・I	深鉢・底部	縄文(RL)横位	
131－295	V	J－32・III	深鉢・底部	縄文	